

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 6

ながれやま うしろひら いなかどおり
- 流山市後平井中通遺跡 -



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第37集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市後平井中通遺跡の発掘調査報告書です。

これまでに行われた調査では、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代前期及び後期の集落跡、古代の竪穴住居跡、中・近世の塚・土塁など、地域の歴史を知る上での貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月

千葉県教育委員会
文化財課長 田中文昭

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県流山市後平井字中通に所在する後平井中通遺跡（遺跡コード 220-032）の第1次から第35次までの成果を取録している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載した。
- 5 本書の執筆は以下の通りで、編集は安井が行った。
第1章・第3章・第5章・第6章第2～4節 安井健一
第2章・第6章第1節 落合章雄
第4章 齋藤修佑
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力を得た。
千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、上守秀明、栗田則久、小林清隆、齋藤弘道、津田芳男、橋本勝雄
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第1・2・17・39・213・220図 流山市発行 1/2,500 流山市都市計画地図
第15図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「流山村」
第16図 国土地理院発行 1:25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1) 平成17年発行
- 9 図版1で使用した航空写真（遺跡周辺航空写真）は、昭和48年に京業測量株式会社が撮影したものである。

【遺構種別記号】

SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構、区画整形遺構 SE：井戸 SF：炉跡 SH：ピット・柱穴群
SI：竪穴住居跡 SK：土坑、陥穴、地下式坑、方形竪穴状遺構 SM：塚
SX：台地整形区画、蔵骨器、土塁

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と調査概要	1
第2節	遺跡の位置と環境	15
1	遺跡の地理的環境	15
2	周辺の遺跡と歴史的環境	16
第2章	旧石器時代の遺構と遺物	35
第1節	概要	35
第2節	遺構と遺物	35
1	第1ブロック	35
2	第2ブロック	35
3	第3ブロック	38
4	第4ブロック	38
5	第5ブロック	45
6	単独出土遺物	54
第3章	縄文時代の遺構と遺物	61
第1節	概要	61
第2節	遺構と遺物	61
1	北側調査区の遺構群	61
(1)	竪穴住居跡と関連する土坑・ピット	63
(2)	その他の土坑・ピットなど	158
2	南側調査区の遺構群	212
3	遺構外出土遺物	240
(1)	縄文土器	240
(2)	縄文時代土製品	261
(3)	縄文時代石器	269
4	貝層	271
(1)	貝サンプルの採取地点と分析方法	271
(2)	分析結果	271
第4章	奈良・平安時代の遺構と遺物	279
第1節	概要	279
第2節	遺構と遺物	279
1	竪穴住居跡	279

2	土坑・埋設土器	287
第5章	中・近世の遺構と遺物	291
第1節	概要	291
第2節	遺構と遺物	291
1	南側調査区の遺構群	291
(1)	(12)調査区	291
(2)	(21)調査区	301
(3)	(3)南側・(8)調査区	304
(4)	(16)・(17)・(29)調査区	304
2	西側調査区の遺構群	310
(1)	(25)調査区東側	310
(2)	(25)西側・(30)・(34)・(24)調査区	312
3	北側調査区の遺構	322
(1)	(27)調査区	322
(2)	(31)調査区	326
(3)	その他の調査区	327
第6章	まとめ	342
第1節	旧石器時代	342
第2節	縄文時代	343
1	時期ごとの様相について	343
2	竪穴住居跡について	346
3	出土遺物について	347
第3節	奈良・平安時代	347
第4節	中・近世	348

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	流山運動公園周辺地区土地区画整理事業 地内遺跡……………	2	第32図	第5ブロック出土遺物(1)……………	50
第2図	後平井中通遺跡全体図と地形……………	3	第33図	第5ブロック出土遺物(2)……………	51
第3図	上層確認調査トレンチ配置及びグリッド 配置……………	4	第34図	第5ブロック出土遺物(3)……………	52
第4図	下層確認調査グリッド配置……………	5	第35図	第5ブロック出土遺物(4)……………	53
第5図	上層本調査範囲及び遺構全体図の図郭割 付……………	6	第36図	第5ブロック出土遺物(5)……………	54
第6図	上層遺構全体図(1)……………	7	第37図	単独出土遺物(1)……………	55
第7図	上層遺構全体図(2)……………	8	第38図	単独出土遺物(2)……………	56
第8図	上層遺構全体図(3)……………	9	第39図	縄文時代遺構全体図……………	62
第9図	上層遺構全体図(4)……………	10	第40図	(3)SI003住居跡、出土遺物……………	64
第10図	上層遺構全体図(5)……………	11	第41図	(3)SI012住居跡……………	65
第11図	上層遺構全体図(6)……………	12	第42図	(3)SI012住居跡出入口施設、(3)SK011 土坑……………	66
第12図	上層遺構全体図(7)……………	13	第43図	(3)SI012住居跡出土遺物(1)……………	67
第13図	上層遺構全体図(8)……………	14	第44図	(3)SI012住居跡出土遺物(2)、(3)SK011 土坑出土遺物……………	68
第14図	上層遺構全体図(9)……………	15	第45図	(3)SI031住居跡、出土遺物……………	69
第15図	遺跡の立地と周辺の地形……………	24	第46図	(3)SI032住居跡……………	71
第16図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	25	第47図	(3)SK026～028・033・034・036～039 土坑……………	72
第17図	旧石器時代ブロック分布全体図……………	36	第48図	(3)SI032住居跡、(3)SK027土坑出土遺物 ……………	73
第18図	第1ブロック器種別・石材別分布……………	37	第49図	(3)SK026～028・033・034・036～ 038土坑出土遺物……………	74
第19図	第1ブロック出土遺物……………	38	第50図	(3)SI035住居跡、出土遺物……………	77
第20図	第2ブロック器種別・石材別分布……………	39	第51図	(3)SI045・046住居跡、(3)SK076・077 土坑……………	79
第21図	第2ブロック出土遺物……………	40	第52図	(3)SI045住居跡、(3)SK076・077土坑 出土遺物……………	80
第22図	第3ブロック器種別・石材別分布……………	41	第53図	(3)SI046住居跡出土遺物……………	81
第23図	第3ブロック出土遺物(1)……………	42	第54図	(3)SI048住居跡、出土遺物……………	82
第24図	第3ブロック出土遺物(2)……………	43	第55図	(3)SI072・073竪穴状遺構、出土遺物……………	82
第25図	第3ブロック出土遺物(3)……………	44	第56図	(3)SI078～081住居跡、(3)SK082～ 085・087土坑……………	84
第26図	第3ブロック出土遺物(4)……………	45	第57図	(3)SK082～084・087土坑……………	85
第27図	第4ブロック器種別分布……………	46			
第28図	第4ブロック石材別分布……………	47			
第29図	第4ブロック出土遺物……………	47			
第30図	第5ブロック器種別分布……………	48			
第31図	第5ブロック石材別分布……………	49			

第58図	(3)SI078・079・081住居跡出土遺物……86	第86図	(3)SI177住居跡、(3)SK176土坑、出土遺物……121
第59図	(3)SI079・081住居跡出土遺物……87	第87図	(3)SI179住居跡、出土遺物……122
第60図	(3)SI079～081住居跡、(3)SK082・083・087土坑出土遺物……88	第88図	(3)SI181住居跡、(3)SK182土坑……122
第61図	(3)SI104住居跡、出土遺物(1)……90	第89図	(3)SI180住居跡、出土遺物……123
第62図	(3)SI104住居跡出土遺物(2)……91	第90図	(6)SI006・007住居跡、(6)SK008土坑、出土遺物……124
第63図	(3)SI104住居跡出土遺物(3)……92	第91図	(13)SI001住居跡、出土遺物……126
第64図	(3)SI104住居跡出土遺物(4)……93	第92図	(13)SI002住居跡、出土遺物……127
第65図	(3)SI118住居跡、(3)SK115土坑、出土遺物……94	第93図	(13)SI003住居跡……128
第66図	(3)SI136住居跡、出土遺物、(3)SK098・099土坑……96	第94図	(13)SI003住居跡出土遺物……129
第67図	(3)SK093～097土坑……97	第95図	(13)SI004住居跡、出土遺物……130
第68図	(3)SK093～095・099土坑出土遺物……98	第96図	(13)SI005住居跡、出土遺物……131
第69図	(3)SI139住居跡……100	第97図	(13)SI006住居跡、出土遺物……133
第70図	(3)SK141～144・184・185土坑……101	第98図	(13)SI007・008住居跡(1)……134
第71図	(3)SI139住居跡出土遺物(1)……102	第99図	(13)SI007・008住居跡(2)……135
第72図	(3)SI139住居跡出土遺物(2)、(3)SK183土坑出土遺物……103	第100図	(13)SI007住居跡出土遺物……136
第73図	(3)SI140住居跡、出土遺物(1)……105	第101図	(13)SI008住居跡出土遺物……137
第74図	(3)SI140住居跡出土遺物(2)……106	第102図	(13)SI009住居跡、出土遺物(1)……138
第75図	(3)SI140住居跡出土遺物(3)……107	第103図	(13)SI009住居跡出土遺物(2)……139
第76図	(3)SI140住居跡出土遺物(4)……108	第104図	(13)SI012～014住居跡(1)……140
第77図	(3)SI147住居跡……109	第105図	(13)SI012～014住居跡(2)、(13)SI012住居跡出土遺物(1)……141
第78図	(3)SI147住居跡出土遺物……110	第106図	(13)SI012～014住居跡遺物分布……142
第79図	(3)SI161住居跡、(3)SK162土坑、出土遺物……111	第107図	(13)SI012住居跡出土遺物(2)……143
第80図	(3)SI161住居跡出土遺物……112	第108図	(13)SI012住居跡出土遺物(3)、(13)SI013住居跡出土遺物(1)……144
第81図	(3)SI163住居跡、(3)SK164・173・174土坑……114	第109図	(13)SI013住居跡出土遺物(2)……145
第82図	(3)SI163住居跡出土遺物(1)……115	第110図	(13)SI013住居跡出土遺物(3)……146
第83図	(3)SI163住居跡出土遺物(2)、(3)SK164・173土坑出土遺物……116	第111図	(13)SI013住居跡出土遺物(4)……147
第84図	(3)SI165住居跡、(3)SK126～130土坑……118	第112図	(13)SI014住居跡出土遺物(1)……148
第85図	(3)SI165住居跡、(3)SK126～130土坑出土遺物……119	第113図	(13)SI014住居跡出土遺物(2)……149
		第114図	(13)SI014住居跡出土遺物(3)……150
		第115図	(13)SI014住居跡出土遺物(4)……151
		第116図	(13)SI014住居跡出土遺物(5)……152
		第117図	(15)SI127住居跡、出土遺物……153
		第118図	(19)SI001～004住居跡……154

第119図	(19)SI001～004住居跡出土遺物……	155	第140図	(3)SK102・103・106～108・110・112 土坑、(3)SH105ピット群、(3)SH109 ピット……………	185
第120図	(19)SK005～008土坑、出土遺物……	157	第141図	(3)SK116・117・119土坑、(3)SH132 ピット群……………	186
第121図	(35)SF001伊跡、(26)SK001、(35)SK 001～006土坑、出土遺物……………	158	第142図	(3)SK120・122～125土坑、 (3)SH178ピット群……………	188
第122図	(13)SK010・011・015、(22)SK001・ 002土坑……………	160	第143図	(3)SK102・103・106・109・116・117・ 120～122・124土坑、(3)SH105・132・ 178ピット群、(3)SH109ピット出土 遺物……………	189
第123図	(13)SK015土坑出土遺物(1)……………	161	第144図	(3)SK131・133～135・137・145・ 146・175土坑……………	191
第124図	(13)SK015土坑出土遺物(2)……………	162	第145図	(3)SK131・134・137・145土坑出土 遺物……………	192
第125図	(13)SK015土坑出土遺物(3)、(13)SK 010・011、(22)SK001・002土坑出土 遺物……………	163	第146図	(3)SK166～172、(5)SK210土坑、 (3)SH186ピット(埋設土器)……………	194
第126図	(6)SK001・002・004・005・009土坑	164	第147図	(3)SK167～170土坑出土遺物……………	195
第127図	(6)SK003・010・011土坑、(6)SH001 ピット……………	165	第148図	(3)SK171・172、(5)SK210土坑、 (3)SH186ピット出土遺物……………	196
第128図	(6)SK002・003・009・011土坑出土遺 物……………	167	第149図	(5)SK208・209・211～216・218土坑	198
第129図	(15)SK101～113土坑……………	169	第150図	(5)SK217・219・220、(6)SK027～ 029土坑……………	199
第130図	(15)SK101・102・104・106・113土坑 出土遺物……………	170	第151図	(6)SK015・018・019・021・023～ 025土坑、(6)SH016・017・020・022 ・026ピット……………	200
第131図	(3)SK004・005・010・014・015土坑、 (3)SH013・018ピット……………	171	第152図	(5)SK208・209・211～215・219土 坑出土遺物……………	201
第132図	(3)SK019～022・029・030土坑……	173	第153図	(5)SK213・217土坑、(6)SH016・023・ 026・029ピット出土遺物……………	203
第133図	(3)SK004・005・010・014・015・020・ 022・029・030土坑、(3)SH013・018 ピット出土遺物……………	174	第154図	(15)南側調査区土坑・ピット……………	205
第134図	(3)SK023・024・040～044土坑、 (3)SH025ピット……………	177	第155図	(15)SK114～125土坑……………	206
第135図	(3)SK068～071・074・075土坑、 (3)SH047・062・067ピット……………	178	第156図	(15)SK114～122土坑出土遺物……	207
第136図	(3)SK023・024・040・041・043・044・ 068～071土坑、(3)SH047・062・067 ピット出土遺物……………	179	第157図	(15)SK123・125・126・136・137・144・ 145・147・148・150土坑出土遺物…	209
第137図	(3)SK074・075土坑出土遺物……………	180	第158図	(15)SK146土坑、(15)SH161・165・ 168・174～176・181・183・186・198	
第138図	(3)SK086・088～092・113・114土坑、 (3)SH138ピット群……………	182			
第139図	(3)SK086・089～092・113・114土坑、 (3)SH138ピット群出土遺物……………	183			

	ピット出土遺物	211	第187図	遺構外出土縄文土器(6)	246
第159図	(21)SI001住居跡	213	第188図	遺構外出土縄文土器(7)	247
第160図	(21)SI001住居跡出土遺物(1)	214	第189図	遺構外出土縄文土器(8)	248
第161図	(21)SI001住居跡出土遺物(2)	215	第190図	遺構外出土縄文土器(9)	249
第162図	(21)SI003住居跡	216	第191図	遺構外出土縄文土器(10)	250
第163図	(21)SI003住居跡出土遺物(1)	217	第192図	遺構外出土縄文土器(11)	251
第164図	(21)SI003住居跡出土遺物(2)	218	第193図	遺構外出土縄文土器(12)	252
第165図	(3)SI156住居跡、出土遺物	219	第194図	遺構外出土縄文土器(13)	253
第166図	(3)SI159住居跡	219	第195図	遺構外出土縄文土器(14)	254
第167図	(3)SI159住居跡出土遺物	220	第196図	遺構外出土縄文土器(15)	255
第168図	(3)SI160住居跡、(3)SK189・190土坑	222	第197図	遺構外出土縄文土器(16)	256
第169図	(3)SI160住居跡、(3)SK190土坑出土遺物	223	第198図	遺構外出土縄文土器(注口土器1)	257
第170図	(3)SI191住居跡	224	第199図	遺構外出土縄文土器(注口土器2)	258
第171図	(3)SI192住居跡、(3)SK201土坑	225	第200図	遺構外出土縄文土器(注口土器3)	259
第172図	(3)SI191・192住居跡出土遺物	226	第201図	遺構外出土縄文時代土製品(1)、石製品	260
第173図	(3)SI195住居跡、(3)SK199土坑	228	第202図	遺構外出土縄文時代土製品(2)	261
第174図	(3)SI195住居跡、(3)SK199土坑出土遺物	229	第203図	遺構外出土縄文時代石器(1)	262
第175図	(3)SK151・155・157・158・202土坑	231	第204図	遺構外出土縄文時代石器(2)	263
第176図	(3)SK196・198・200・203・204土坑	233	第205図	遺構外出土縄文時代石器(3)	264
第177図	(3)SK188・194・205土坑、(21)SK006土坑	234	第206図	遺構外出土縄文時代石器(4)	265
第178図	(21)SK002・004・005土坑	235	第207図	遺構外出土縄文時代石器(5)	266
第179図	(3)SK154・157・158・188・194・196・198・204・205土坑出土遺物	236	第208図	遺構外出土縄文時代石器(6)	267
第180図	(21)SK002・004・006土坑出土遺物	238	第209図	遺構外出土縄文時代石器(7)	268
第181図	(12)SK006・008・010土坑、出土遺物	239	第210図	遺構外出土縄文時代石器(8)	269
第182図	遺構外出土縄文土器(1)	241	第211図	遺構外出土縄文時代石器(9)	270
第183図	遺構外出土縄文土器(2)	242	第212図	貝種組成グラフ	276
第184図	遺構外出土縄文土器(3)	243	第213図	奈良・平安時代遺構全体図	280
第185図	遺構外出土縄文土器(4)	244	第214図	(26)SI001住居跡	281
第186図	遺構外出土縄文土器(5)	245	第215図	(26)SI001住居跡出土遺物	282
			第216図	(26)SI002住居跡、出土遺物	283
			第217図	(6)SI030住居跡、出土遺物	285
			第218図	(34)SI001住居跡、出土遺物	286
			第219図	(3)SK193土坑、(7)SX003埋設土器、出土遺物	288
			第220図	中・近世遺構全体図	292
			第221図	(12)SM001塚、(12)SX002土壘、	

	(12)SD003溝状遺構(1) ……………	294	第238図	(25)SK001・003地下式坑……………	314
第222図	(12)SM001塚、(12)SX002土塁、 (12)SD003溝状遺構(2) ……………	295	第239図	(25)SK002・004～006土坑……………	315
第223図	(12)SK005・007・009土坑、(12)SE 012井戸状遺構……………	296	第240図	(30)SK001～003土坑……………	316
第224図	(12)SK004土坑群……………	298	第241図	(30)SK004～006・008・012～014 土坑……………	317
第225図	(12)調査区出土中・近世遺物(1) ……	298	第242図	(30)SD003、(34)SD001・002溝状遺構 ……………	318
第226図	(12)調査区出土中・近世遺物(2) ……	299	第243図	(30)SK015土坑、(25)(30)調査区出 土遺物……………	319
第227図	(12)調査区出土中・近世遺物(3) ……	300	第244図	(24)SD001溝状遺構、(24)調査区出土 遺物……………	321
第228図	(21)SX001土塁、(21)SD001～004溝 状遺構(1)……………	302	第245図	(27)調査区遺構群、出土遺物……………	323
第229図	(21)SX001土塁、(21)SD001～004溝 状遺構(2)、出土遺物……………	303	第246図	(31)調査区遺構群、出土遺物……………	324
第230図	(3)SD206・207溝状遺構……………	305	第247図	(15)SD201～203溝状遺構、出土遺物 ……………	325
第231図	(8)SD001・002、(16)SD001、(17) SD001・002、(29)SD001溝状遺構 ……	306	第248図	(3)SD002、(6)SD001、(7)SD001溝状 遺構、出土遺物……………	326
第232図	(3)(8)調査区出土中・近世遺物 ……	307	第249図	(10)SK222、(22)SK003・004土坑、 出土遺物……………	327
第233図	(3)(8)(12)(21)以外の南側調査区出土 中・近世遺物……………	307	第250図	(9)SD001・002、(10)SD220・221、 (19)SD001～003、(35)SD001溝状 遺構……………	328
第234図	(25)SX001柱穴群、(25)SX011台地整 形、(25)SK009土坑(1)……………	308	第251図	北側調査区出土中・近世遺物……………	330
第235図	(25)SX001柱穴群、(25)SX011台地整 形、(25)SK009土坑(2)、出土遺物、 (25)SK010土坑……………	309	第252図	出土銭貨(1)……………	331
第236図	(25)SK007地下式坑、(25)SK008方形 堅穴遺構……………	311	第253図	出土銭貨(2)……………	332
第237図	(25)SD001～003、(30)SD001・002 溝状遺構……………	313	第254図	北側調査区縄文時代遺構……………	344
			第255図	南側調査区縄文時代遺構……………	345
			第256図	出入口施設を持つ堅穴式住居……………	346

表 目 次

第1表	後平井中通遺跡(1)～(35)調査一覧……………	26	第8表	縄文時代貝サンプル一覧……………	276
第2表	後平井中通遺跡上層遺構一覧……………	28	第9表	出土貝類種名一覧……………	276
第3表	周辺遺跡一覧……………	34	第10表	出土貝類同定結果……………	277
第4表	旧石器時代出土石器属性表……………	57	第11表	奈良・平安時代遺物観察表……………	289
第5表	旧石器ブロック別組成表……………	60	第12表	中・近世土器・陶磁器観察表……………	333
第6表	縄文時代土製品属性表……………	273	第13表	中・近世遺物(石製品等)観察表……………	336
第7表	縄文時代石器属性表……………	274	第14表	中・近世銭貨一覧表……………	340

図版目次

- 巻頭図版1 後平井中通遺跡縄文時代集落航空写真 (3)SI147南から
- 巻頭図版2 (3)SI160竪穴住居跡 (2)SI003竪穴住居跡貝層検出状況 図版5 (3)SI161、(3)SK162南西から (3)SI163、(3)SK164・171～174南東から (3)SI163北から (7次調査区) (3)SI165、(3)SK126～130・134・137・172東から (3)SI177、(3)SK175・176西から (3)SI179南東から (3)SI180南東から (3)SI181、(3)SK182西から (6)SI006・007南西から
- 巻頭図版3 (3)SI104竪穴住居跡 (3)SI147竪穴住居跡 図版6 (6)SK008南から (13)SI001北から (13)SI002西から (南側) (13)SI002西から (北側) (13)SI003東から (13)SI004北西から (13)SI005北から (13)SI006北東から
- 図版1 遺跡周辺航空写真 図版7 (13)SI007東から (13)SI007埋設土器 (13)SI008北東から (13)SI008炉と埋設土器 (13)SI009東から (13)SI012～014北西から (13)SI013北東から (13)SI014南東から
- 図版2 第2ブロック遺物出土状況 (3)SI003北西から (3)SI012、(3)SK005・011・014・015、 (3)SH013南東から (3)SI012出入口施設南東から (3)SI031真上から 図版8 (15)SI127ほか15次調査区土坑・ピット群西から (19)SI001～004東から (19)SK005・006南東から (19)SK007南西から (19)SK008東から (35)SF001南から (13)SK010東から
- 第3ブロック遺物出土状況 第5ブロック遺物出土状況 3次調査区縄文時代包含層調査状況 (3)SI003北西から (3)SI012、(3)SK005・011・014・015、 (3)SH013南東から (3)SI012出入口施設南東から (3)SI031真上から
- 図版3 (3)SI032・035、(3)SK026・028・033・034・039真上から (3)SI032南から (15次調査区) (3)SK026・027・036遺物出土状況西から (3)SK027・036・038北から (3)SI045・046、(3)SK068・088～092北から (3)SK076・077北から (3)SI048、(3)SK029・030・040～044・086・113・114、(3)SH025・047・062真上から (3)SI072・073北から
- 図版4 (3)SI078～081、(3)SK082～085・087真上から (3)SI104、(3)SH109東から (3)SI118、(3)SK112・115・131東から (3)SI136、(3)SK093～099・108・110南東から (3)SI139、(3)SK125・141～145・183～185南東から (3)SI140、(3)SK146東から

	(13)SK011東から	(5)SK210南から	
図版9	(13)SK015遺物出土状況南から	(5)SK211南から	
	(13)SK015東から	(5)SK212東から	
	(22)SK001南から	(5)SK213東から	
	(22)SK002南から	図版14 (5)SK214南東から	
	(6)SK001南東から	(5)SK215西から	
	(6)SK002東から	(5)SK216西から	
	(6)SK003南西から	(5)SK217西から	
	(6)SK004北東から	(5)SK218南から	
図版10	(6)SK005北西から	(5)SK219東から	
	(6)SK009南から	(6)SK015西から	
	(6)SK011南から	(6)SH016・017西から	
	15次調査区M34-88・89・98・99グリッド	図版15 (6)SK018・019西から	
	遺構群	(6)SH020・022西から	
	(15)SK101遺物出土状況南から	(6)SK021南西から	
	(15)SK101南から	(6)SK023西から	
	(15)SK102南から	(6)SK024西から	
	(15)SK103～105南から	(6)SK025北から	
図版11	(15)SK106南西から	(6)SH026西から	
	(15)SK108・110～113南東から	(15)SK114・115西から	
	(3)SK004北東から	図版16 (15)SK116・144、(15)SH186～189南から	
	(3)SK010北東から	(15)SK117～120・172・173、(15)SH184南	
	(3)SK019南から	から	
	(3)SK020～022南西から	(15)SK120遺物出土状況	
	(3)SK023南から	(15)SK122南から	
	(3)SK024南から	(15)SK123・145・148南から	
図版12	(3)SK069～071南西から	(15)SK141西から	
	(3)SK074遺物出土状況	(21)SI001貝層検出状況北から	
	(3)SK102・103・106・107真上から	(21)SI001貝層断面	
	(3)SK116・117南西から	図版17 (21)SI001北から	
	(3)SK122南から	(21)SI003貝層検出状況北東から	
	(3)SK123南西から	(21)SI003北東から	
	(3)SK166～170、(3)SH186真上から	(3)SI156北から	
	(3)SK170遺物出土状況	(3)SI159南から	
図版13	(3)SH186西から(土器検出状況)	(3)SI159炉と埋設土器	
	(3)SH186断面	(3)SI160、(3)SK189・190南西から	
	(5)SK208南から	(3)SI160炉と埋設土器	
	(5)SK209北から	図版18 (3)SI160貝ブロック検出状況	

	(3)SI191南東から	(12)SD003東端部南から
	(3)SI192、(3)SK201東から	図版23 (21)SX001調査前全景東から
	(3)SI195、(3)SK199北から	(21)SX001南北ベルト東から
	(3)SK152南から	(3)SD206西から
	(3)SK153北西から	(30)SK001東から
	(3)SK154南から	(30)SK002南東から
	(3)SK155南から	(30)SK003南から
図版19	(3)SK157北東から	(30)SK008北から
	(3)SK158南東から	(30)SK014南西から
	(3)SK188東から	図版24 (30)SD001西から
	(3)SK194南西から	(30)SD002南東から
	(3)SK196北から	(30)SD003西から
	(3)SK197北東から	(30)SK015南から
	(3)SK198北東から	(24)SD001西から
	(3)SK200北から	(31)SB001北西から
図版20	(3)SK202南から	(15)SD201・202南から
	(3)SK203・204南東から	(15)SD203南から
	(3)SK205南から (遺物出土状況)	図版25 旧石器時代石器 (1)
	(21)SK002貝ブロック検出状況	図版26 旧石器時代石器 (2)
	(21)SK002・004・005北東から	図版27 旧石器時代石器 (3)
	(21)SK006東から	図版28 旧石器時代石器 (4)
	(12)SK006北西から	図版29 旧石器時代石器 (5)
	(12)SK008東から	図版30 旧石器時代石器 (6)
図版21	(6)SI030西から (6次調査区)	図版31 旧石器時代石器 (7)
	(6)SI030南から (7次調査区)	図版32 旧石器時代石器 (8)
	(34)SI001南から	図版33 遺構出土縄文土器 (1)
	(3)SK193北西から	図版34 遺構出土縄文土器 (2)
	(7)SX003南から	図版35 遺構出土縄文土器 (3)
	(12)SM001調査前全景南から	図版36 遺構出土縄文土器 (4)
	(12)SM001東西ベルト南から	図版37 遺構出土縄文土器 (5)
	(12)SM001、(12)SD003南北ベルト東から	図版38 遺構出土縄文土器 (6)
図版22	(12)SM001頂上部遺物出土状況	図版39 遺構出土縄文土器 (7)
	(12)SX002調査前全景南西から	図版40 遺構出土縄文土器 (8)
	(12)SX002南北ベルト西から	図版41 遺構出土縄文土器 (9)
	(12)SK007西から	図版42 遺構出土縄文土器 (10)
	(12)SK009北東から	図版43 遺構出土縄文土器 (11)
	(12)SE011北から	図版44 遺構出土縄文土器 (12)
	(12)SD003西側東から	図版45 遺構出土縄文土器 (13)

- 図版46 遺構出土縄文土器 (14)
- 図版47 遺構出土縄文土器 (15)
- 図版48 遺構出土縄文土器 (16)
- 図版49 遺構出土縄文土器 (17)
- 図版50 遺構出土縄文土器 (18)
- 図版51 遺構出土縄文土器 (19)
- 図版52 遺構出土縄文土器 (20)
- 図版53 遺構出土縄文土器 (21)
- 図版54 遺構出土縄文土器 (22)
- 図版55 遺構出土縄文土器 (23)
- 図版56 遺構出土縄文土器 (24)
- 図版57 遺構出土縄文土器 (25)
- 図版58 遺構出土縄文土器 (26)
- 図版59 遺構出土縄文土器 (27)
- 図版60 遺構出土縄文土器 (28)
- 図版61 遺構出土縄文土器 (29)
- 図版62 遺構出土縄文土器 (30)
- 図版63 遺構出土縄文土器 (31)
- 図版64 遺構出土縄文土器 (32)
- 図版65 遺構出土縄文土器 (33)
- 図版66 遺構出土縄文土器 (34)
- 図版67 遺構出土縄文土器 (35)
- 図版68 遺構出土縄文土器 (36)
- 図版69 遺構出土縄文土器 (37)
- 図版70 遺構出土縄文土器 (38)
- 図版71 遺構出土縄文土器 (39)
- 図版72 遺構出土縄文土器 (40)
- 図版73 遺構出土縄文土器 (41)
- 図版74 遺構出土縄文土器 (42)
- 図版75 遺構出土縄文土器 (43)
- 図版76 遺構出土縄文土器 (44)
- 図版77 遺構出土縄文土器 (45)
- 図版78 遺構出土縄文土器 (46)
- 図版79 遺構出土縄文土器 (47)
- 図版80 遺構出土縄文土器 (48)
- 図版81 遺構出土縄文土器 (49)
- 図版82 遺構出土縄文土器 (50)
- 図版83 遺構外出土縄文土器 (1)
- 図版84 遺構外出土縄文土器 (2)
- 図版85 遺構外出土縄文土器 (3)
- 図版86 遺構外出土縄文土器 (4)
- 図版87 遺構外出土縄文土器 (5)
- 図版88 遺構外出土縄文土器 (6)
- 図版89 遺構外出土縄文土器 (7)
- 図版90 遺構外出土縄文土器 (8)
- 図版91 遺構外出土縄文土器 (9)
- 図版92 遺構外出土縄文土器 (10)
- 図版93 遺構外出土縄文土器 (11)、縄文時代土製品 (1)
- 図版94 縄文時代土製品 (2)
- 図版95 縄文時代石器 (1、剥片石器)
- 図版96 縄文時代石器 (2、遺構出土石斧類)
- 図版97 縄文時代石器 (3、遺構出土石棒・磨石類)
- 図版98 縄文時代石器 (4、遺構出土軽石製品)
- 図版99 縄文時代石器 (5、遺構出土石皿)
- 図版100 縄文時代石器 (6、遺構出土石斧類①)
- 図版101 縄文時代石器 (7、遺構出土石斧類②)
- 図版102 縄文時代石器 (8、遺構出土磨石類①)
- 図版103 縄文時代石器 (9、遺構出土磨石類②・石棒類)
- 図版104 縄文時代石器 (10、遺構出土軽石製品・石皿)
- 図版105 奈良・平安時代遺物 (1)
- 図版106 奈良・平安時代遺物 (2)
- 図版107 中・近世遺物 (1)
- 図版108 中・近世遺物 (2)
- 図版109 中・近世遺物 (3)
- 図版110 中・近世遺物 (4)
- 図版111 中・近世遺物 (5)
- 図版112 中・近世遺物 (錢貨1)
- 図版113 中・近世遺物 (錢貨2)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第1図）。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとした。記録保存のための発掘調査は、財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成9年度から発掘調査が開始された（平成18年度から千葉県県土整備部が事業を引き継ぐ）。

後平井中通遺跡は、流山市後平井字中通ほかに所在し、面積は約84,000㎡を測る。このうち約92%にあたる77,412㎡について、平成9年度から平成29年度まで、準備が整った地点から35次にわたって発掘調査を行った（第2図）。

発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第1表のとおりである。上層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し10%程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期と広がりを確認した。その結果、合わせて15か所の地点の計10,774㎡が本調査となった（第3・5図）。それ以外の調査区についてはトレンチの拡張等で対応した。

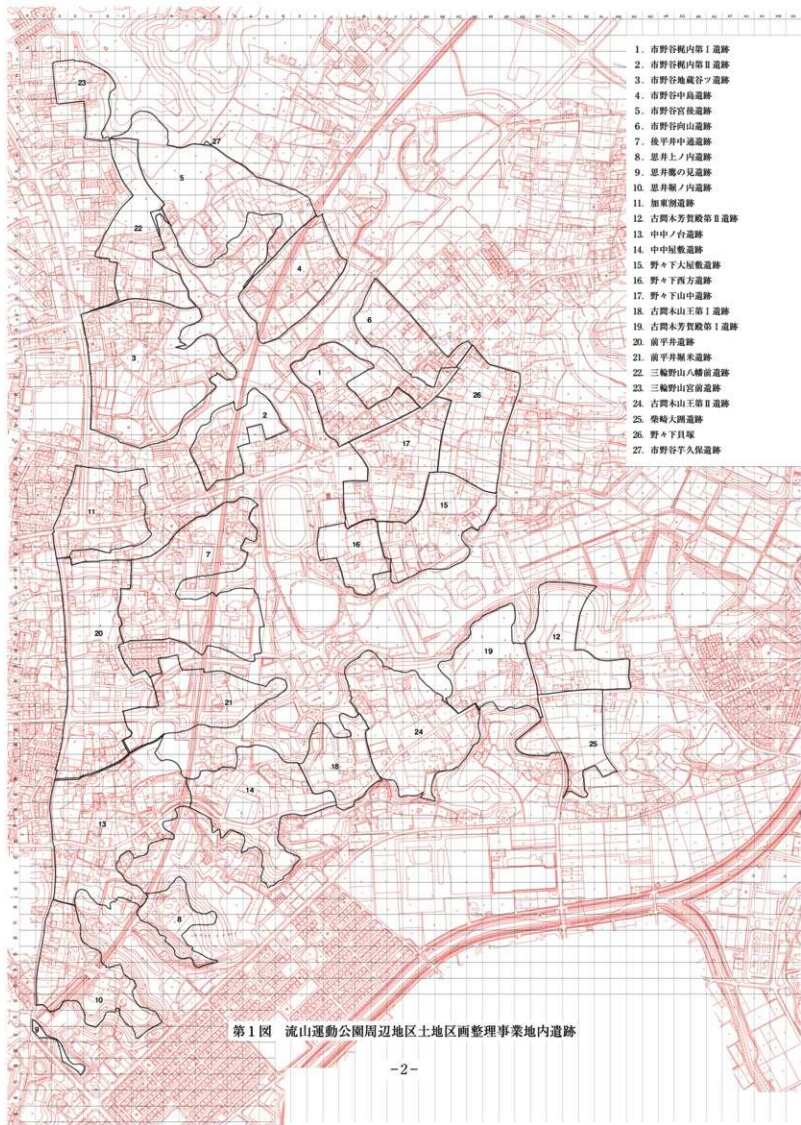
下層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し4%程度の確認グリッドを設定し、石器出土地点の層位と広がりを確認した。その結果、合わせて2か所の地点の計558㎡が本調査となった（第4図）。それ以外の石器出土地点についてはグリッドの拡張等で対応した。なお、遺跡の外縁部付近では立川ローム層が流失している場所が多く、確認調査を全面もしくは部分的に省略している。

事業地内における遺跡の調査成果としては、これまでに思井堀ノ内遺跡について、中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の2冊の報告書が財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）により刊行され¹⁾²⁾、思井上ノ内遺跡と中屋敷遺跡、前平井堀米遺跡の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている³⁾⁴⁾⁵⁾。本書は本事業にかかる発掘調査報告書の6冊目となる。

後平井中通遺跡の整理作業は、平成24年度に公益財団法人千葉県教育振興財団が、更に平成25年度から令和2年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、令和2年度に報告書刊行に至った。

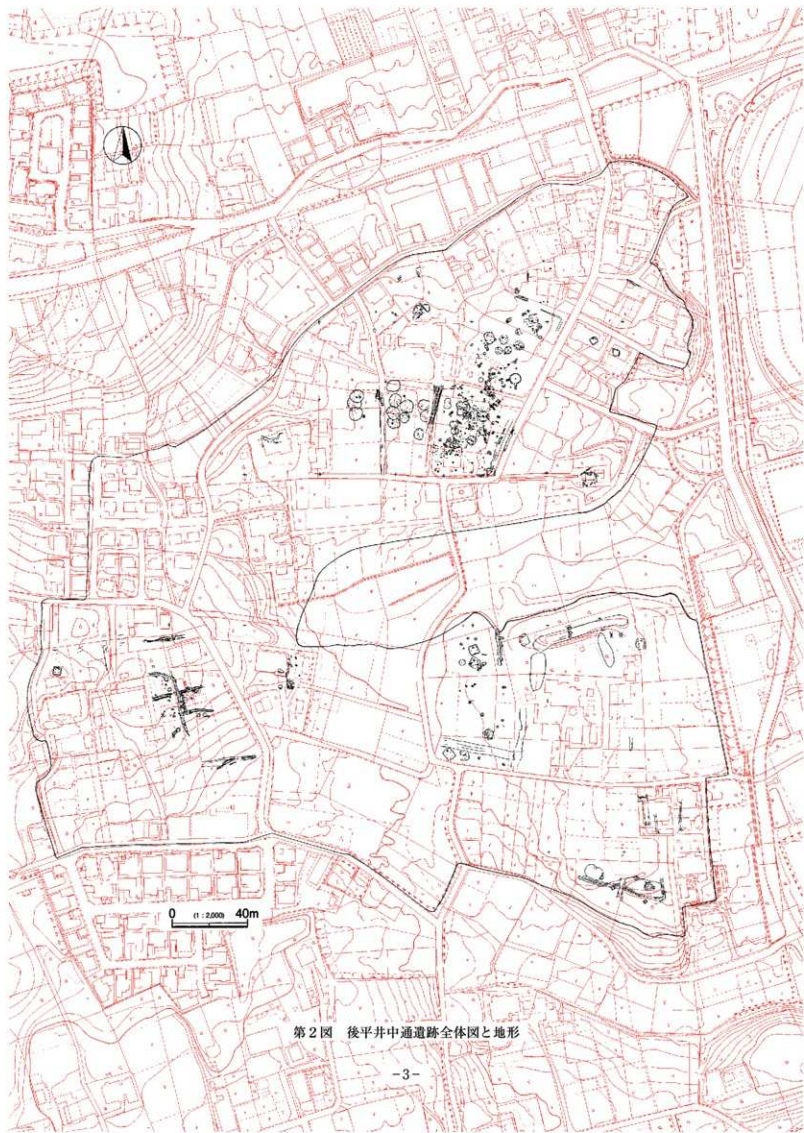
2 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。X = -14,800m、Y = +7,600mを起点とする40m×40mの方眼を大グリッドとし、北から南へ1～67、西から東へA～Z及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「C2」



1. 市野谷町内部Ⅰ道路
2. 市野谷町内部Ⅱ道路
3. 市野谷地蔵谷ツ道路
4. 市野谷中島道路
5. 市野谷宮後道路
6. 市野谷向山道路
7. 後平井中道道路
8. 思井上ノ内道路
9. 思井郷ノ見道路
10. 思井郷ノ内道路
11. 加東園道路
12. 古岡木方敷段第Ⅱ道路
13. 中中ノ台道路
14. 中中屋敷道路
15. 野々下大屋敷道路
16. 野々下西方道路
17. 野々下山中道道路
18. 古岡木山王第Ⅰ道路
19. 古岡木方敷段第Ⅰ道路
20. 前平井道路
21. 前平井無米道路
22. 三輪野山八幡前道路
23. 三輪野山宮前道路
24. 古岡木山王第Ⅱ道路
25. 榮崎大園道路
26. 野々下具塚
27. 市野谷字久保道路

第1図 流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内道路



H I J K L M N O P Q

30



31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42



第3図 上層確認調査トレンチ配置及びグリッド配置

H I J K L M N O P Q

30

31

32

33

34

35

36

37

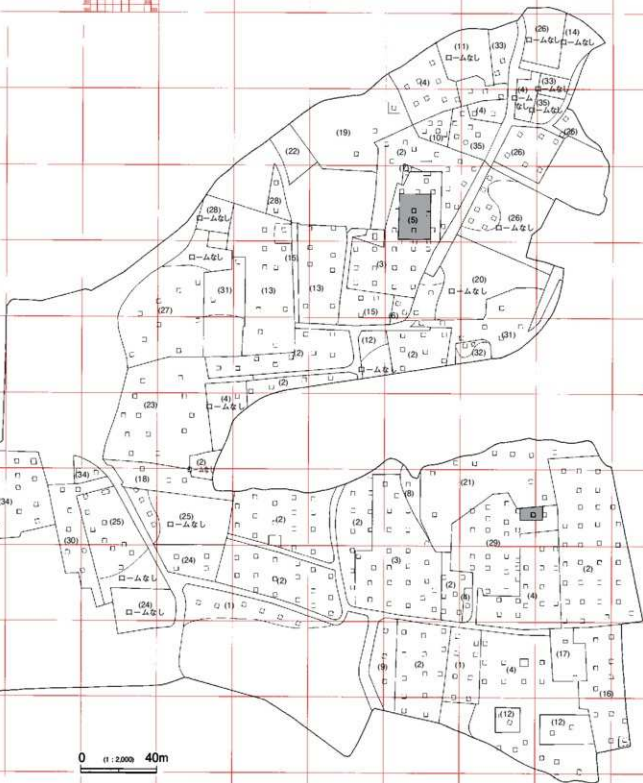
38

39

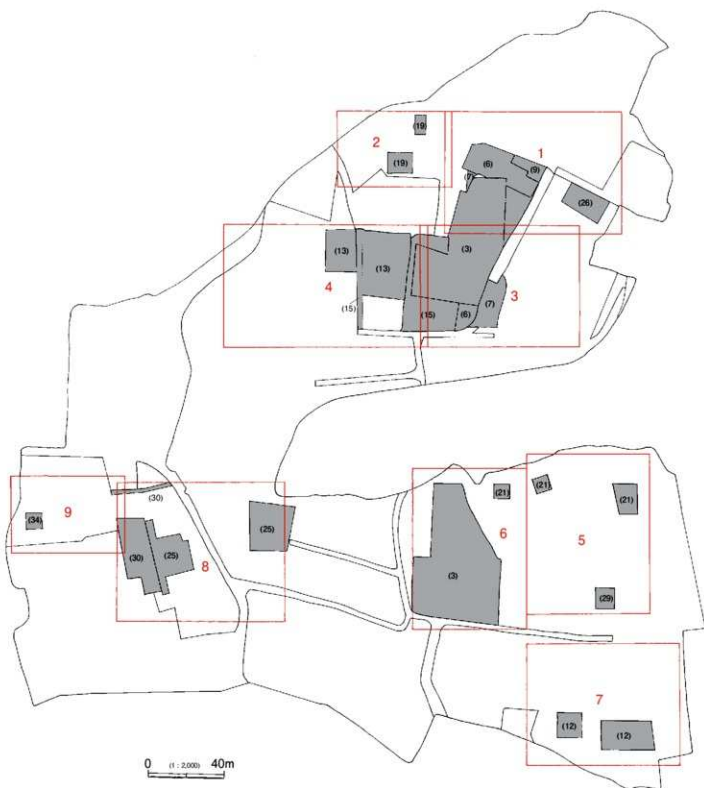
40

41

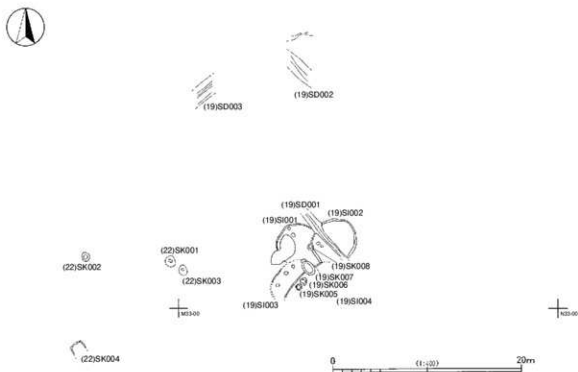
42



第4図 下層確認調査グリッド配置



第5図 上層本調査範囲及び遺構全体図の図郭割付

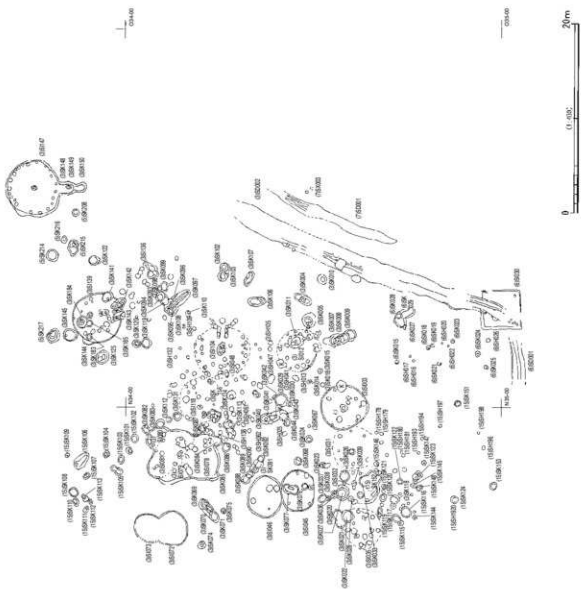


第7図 上層遺構全体図(2)

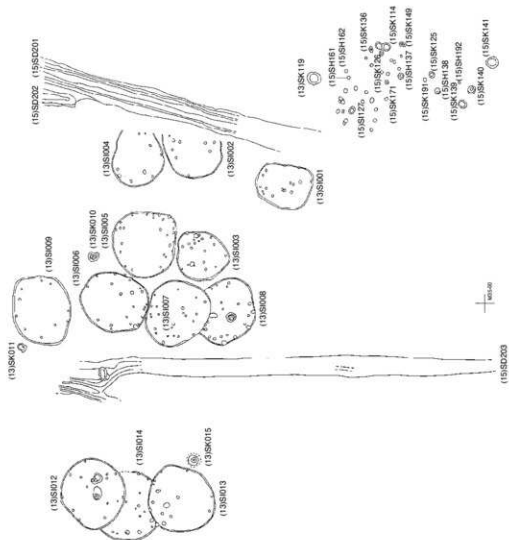
「K11」のように表示することとした。今回報告する後平井中通遺跡(1)～(35)は、大グリッドで示すとN30～P30・L31～P31・K32～P32・J33～P33・H34～P34・H35～P35・H36～P36・H37～Q37・H38～Q38・H39～Q39・L40～Q40グリッドの範囲にあたる。大グリッドの中は、更に4m×4mの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「N49-25」などのように小地区名を表示することとした(第3図)。

遺構名については、24次調査までは遺構の時代や種別に関係なく3桁の数字の連番とし、25次調査以降は遺構種別記号と3桁の数字とを組み合わせた遺構名を付している(6～9次調査では記号ではなく遺構種別そのものと3桁数字が組み合わされている)。遺物への注記は原則調査時の遺構名で行ったが、整理作業を進める中で検出された遺構の検証を行った結果、各調査次に付された遺構名をそのまま報告書に掲載すると混乱を招く一方で、新たな通し番号を付け直すことは大きな労力を要すると判断された。そのため、基本的に調査時の番号を踏襲し、遺構種別記号の前に0で調査次の番号を付すことで区別することとした。その上で24次調査までの遺構については調査次と遺構種別記号、3桁の数字とを組み合わせた遺構名を付け直した。遺構種別記号は凡例に示したとおりであり、調査時と本報告における遺構名対照表は第2表のとおりである。

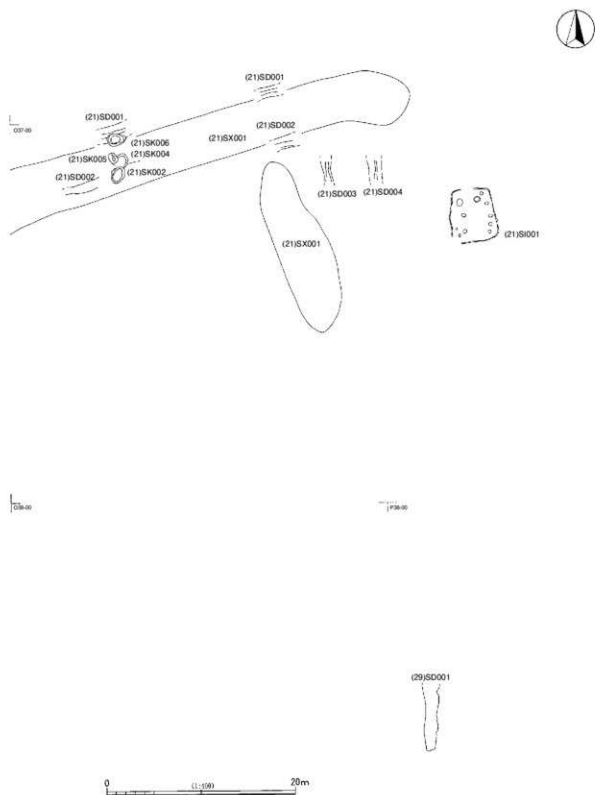
調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器集中地点5か所、縄文時代竪穴住居跡もしくは竪穴状遺構57軒、炉跡の可能性が強い焼土遺構1基、土坑224基、柱穴状ピット54基、ピット群5群、陥穴4基、奈良・平安時代竪穴住居跡4軒、土坑1基、埋設土器1基、中・近世塚1か所、土塁2条、台地整形区画



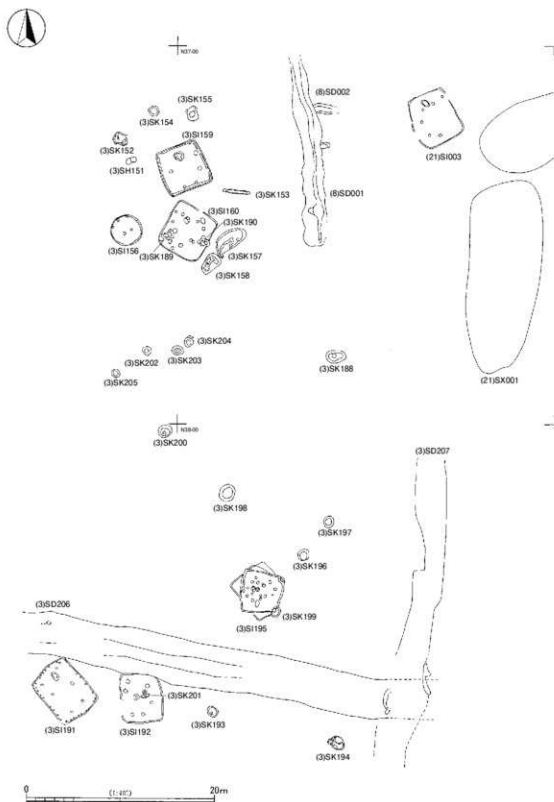
第8図 上層遺構全体図 (3)



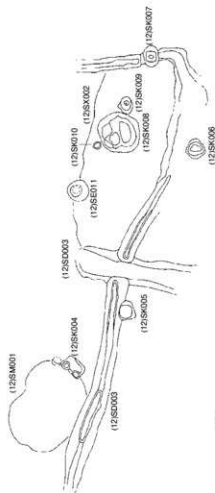
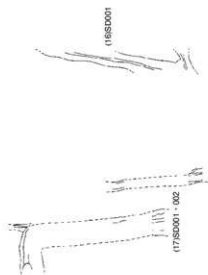
第9圖 上層遺精全体図 (4)



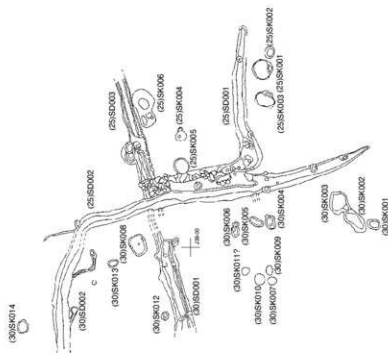
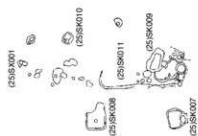
第10図 上層遺構全体図(5)



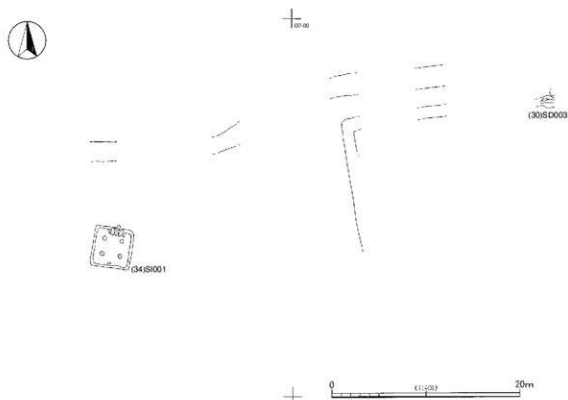
第11图 上層遺構全体図(6)



第 12 図 上層遺跡全体図 (7)



第13圖 上層遺構全体図(8)



第14図 上層遺構全体図(9)

1か所、地下式坑3基、方形竅穴遺構1基、土坑28基(うち土坑墓1基)、井戸状遺構2基、溝状遺構38条、礎石建物跡1棟、ビット群1群、単独ビット4基である(第6～14図)。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の地理的環境

後平井中通遺跡は、流山市後平井字中通ほかに所在している。流山市は千葉県北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡はこの流山市の南西部、標高23.5mの下総台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地を間析して江戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出す形状を呈しており、更に両河川に注ぐ小支谷によって複雑に間析された舌状台地が連なる。これらの舌状台地上はほぼ全て埋蔵文化財包蔵地であることが確認されており、後平井中通遺跡は坂川の支流に面した東向き舌状台地上に立地する。背面の台地西側は同様の舌状台地を介して江戸川を望める地形にあり、当遺跡は西側の江戸川と南東側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言ってもよい。遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ約3.5kmの地点で江戸川へと合流する小河川であるが、沿岸の坂川低地はこの地域では最大規模の間析谷であり、東側に広がる下総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このためその谷頭は遺跡の北東側約7.5kmにある手賀沼と、そこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに後平井中通遺跡から東側そして北側の台地へと入り込

む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなし、台地の幅がわずかに300m～500mである。手賀沼は利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にあり、その意味では坂川上流にある本遺跡周辺は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ結節点のような位置と言える（第15図）。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は高度経済成長期から首都圏のベッドタウンとして開発が進められ、数多くの遺跡が調査されている。それらの調査歴を全て網羅すると膨大なものとなることから、ここでは運動公園の事業地とその周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい（第16図、第3表）。ただし運動公園事業地の発掘調査は未だ継続中であり未報告資料も多いため、あくまで暫定的なものであることをお断りしておく。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、運動公園事業地及び隣接する流山新市街地地区土地区画整理事業地内（以下、新市街地地区と略す）において著しく資料が増加している。思井堀ノ内遺跡（5）^②、思井上ノ内遺跡（16）^②、中中屋敷遺跡（29）^④、前平井堀米遺跡（15）^⑤、三輪野山北浦（旧三輪野山第Ⅱ）遺跡（56）^{⑥-17}、西初石五丁目遺跡（63）^{⑦-11-12-15-16}、市野谷入台遺跡（61）^{⑧-11}、市野谷二反田遺跡（58）^⑨、大久保遺跡（60）^{⑩-15}、市野谷向山遺跡（52）^{⑩-11-13-16}、東初石六丁目第Ⅰ遺跡（79）^⑩、東初石六丁目第Ⅱ遺跡（77）^⑩、市野谷中島遺跡（51）^{⑪-13-15}、市野谷芋久保遺跡（57）^⑫、市野谷立野遺跡（59）^{⑫-13-16}、地図の外になるが十太夫第Ⅱ遺跡^⑬、桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割（上貝塚）遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅧ層にかけて11ブロック、思井上ノ内遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて3ブロック、中中屋敷遺跡ではⅢ層からⅧ層にかけて4ブロック、前平井堀米遺跡ではⅥ層からⅧ層にかけて2ブロック（内1ブロックは裸群）、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて6ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅧ層にかけて6ブロック、大久保遺跡ではⅢ～Ⅳ層とⅧ層で44ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて3ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて5ブロック、十太夫第Ⅱ遺跡ではⅤ層からⅥ層にかけて1ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて1ブロック、市野谷芋久保遺跡ではⅢ層からⅧ層にかけて46ブロック、市野谷立野遺跡ではⅢ層からⅣ層にかけて5ブロックがそれぞれ調査されている。その他、上層遺構覆土中からの遺物出土事例は数多く報告されている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡（116）^⑭で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると特に後半の条痕文期において遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡では野島式から縄が島台式期を中心とする堅穴住居跡2軒、炉穴35基などが検出され、思井上ノ内遺跡では縄が島台式を中心とする早期後葉の堅穴住居跡2軒、土坑2基、炉穴25基などが検出されている。三輪野山第Ⅲ遺跡（55）^⑮では縄が島台式期の堅穴住居跡1軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出数は数多く、三輪野山道六神遺跡（53）^⑯や大原神社遺跡（12）^⑰、平和台遺跡（11）^{⑱-22}、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡（42）^⑲、三輪野山八重塚遺跡（43）^{⑲-25}、加北谷津第Ⅱ遺跡（39）^⑳、西平井二階畑遺跡（3）^㉑、市野谷立野

遺跡、名都借宮ノ脇遺跡(名都借第Ⅱ遺跡)(129)⁹¹⁻⁹²などで報告されている。市野谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な環状集落が検出されている。これらの遺跡は野島式期から茅山下層式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。その中で中屋敷遺跡では早期末から前期初頭を中心とする竪穴住居跡3軒、炉穴7基、土坑4基などが検出されているほか、三輪野山八重塚遺跡、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡で同時期の遺物が出土している。前期は初頭の花積下層式期では遺跡数の少ない状況が続くが、坂川を隔てた対岸にあたる松戸市の幸田貝塚(83)⁹³は、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の竪穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では同時期の遺構は少なく、加町畑遺跡(26)⁹⁷⁻⁹⁸⁻⁹⁹で関山式期の竪穴住居跡が検出されている程度であるが、黒浜式期に至ると多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡の検出事例では、思井堀ノ内遺跡、市野谷半久保遺跡、市野谷向山遺跡¹¹²、市野谷立野遺跡、西初石五丁目遺跡、下花輪荒井前(旧下花輪第Ⅱ)遺跡(69)⁹⁴、三輪野山八幡前遺跡(旧下屋敷遺跡)(46)⁹⁷⁻⁹⁸、加北谷津第Ⅰ遺跡(40)⁹⁶、加北谷津第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡⁹⁶⁻⁹⁷⁻⁹⁸、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大野西割遺跡(66)⁹⁹、三輪野山宮前遺跡(54)⁹⁷⁻⁹⁸などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯Ⅱ式ないしは浮島Ⅱ式までの竪穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。諸磯・浮島式期ではほかに長崎遺跡で貝層を伴う竪穴住居跡から良好な資料が出土しており、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡では竪穴住居跡が検出されている。なお、新市街地地区でも同時期の遺構が検出されており、市野谷半久保遺跡や市野谷立野遺跡、市野谷向山遺跡などで竪穴住居跡が確認されているが、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台・勝坂式期までは遺跡が少ないが、中葉から後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡(119)¹⁴¹⁻⁴²と向下遺跡(121)¹⁴³は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの竪穴住居跡と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡では中期中葉の竪穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中峠式期から加曾利Ⅱ式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。一方で中期後葉以降になると、台地奥の分水嶺に近い地域で少数の竪穴住居跡もしくは土坑が散在する事例もみられ、十太夫第Ⅲ遺跡(80)¹⁰²⁻¹⁰³や大久保遺跡¹¹²などが代表的である。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、その中で市野谷向山遺跡は中期後葉から後期初頭にかけての集落が形成されており、運動公園事業地側は現在調査進行中であるが多くの成果が上がっている。後期前葉の堀之内Ⅰ式以降になると多くの遺跡が存在する。思井上ノ内遺跡では堀之内Ⅰ式から加曾利ⅡⅠ式にかけての竪穴住居跡11軒、土坑14基、貝ブロック8か所、埋葬人骨などが検出されている。後半期中通遺跡が立地する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端(先端)部には鱈ヶ崎(前ヶ崎)貝塚(10)が存在する¹⁴⁴。1952年に酒詰伸男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曾利Ⅱ式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡では後期初頭の称名寺式期を中心とする竪穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡¹¹²ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う竪穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木栗美木谷遺跡(37)¹⁴⁵では部分的な調査ではあるが後期の竪穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚(45)¹⁴⁶⁻⁴⁷⁻⁴⁸では後期から晩期にかけて100軒を超える竪穴住居跡、5か所の貝層、20基余りの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水溝遺構、埋葬人骨などが検出

されているほか、環状に構築された堅穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央窪地と一体になっていると思われる窪地が続いていて、それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての堅穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の堅穴住居跡や掘立柱建物も検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚 (33)⁶⁹⁻⁷⁰、上貝塚貝塚 (139)⁶⁶、地図の外になるが上新宿貝塚は大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている。加村台遺跡 (25)⁶³⁻⁶²では中期から後期の堅穴住居跡のほか、環濠と推測されるV字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡 (84)、道六神遺跡 (85)、原の山遺跡 (88) があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡等が、また坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡 (62)⁶³、市野谷入台遺跡、市野谷山遺跡等が各々集落群を形成している。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出土しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の堅穴住居跡が90軒検出され、そのうちの1軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての堅穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の堅穴住居跡が20軒検出されており、そのうち1軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の堅穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の堅穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期には市野谷向山遺跡などで集落が形成されるものの、全体としては遺構数の減少が認められるが、後期になると集落規模は再度拡大し、遺跡も更に増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、江戸川に近接する加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡、加町細遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ加町細遺跡は後期の堅穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の堅穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟が検出されており、拠点集落の一つである。加村台遺跡は台地西端に位置し、やはり後期に多数の堅穴住居が構築される。太日川 (現江戸川) を通じた河川交易の拠点としての性格が想定される。一方古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳 (64) が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳 (鬮ヶ崎塚の越遺跡内) が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳 (加北谷津第Ⅱ遺跡内) が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡（14）や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは8世紀後半から10世紀初頭にかけての竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡6棟、土器焼成遺構や鍛冶遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書土器40点以上や緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期荘園であった可能性が高い。思井上ノ内遺跡からは8世紀前半から10世紀にかけての竪穴住居跡16軒、掘立柱建物10棟、土器焼成遺構4基などが検出され、前平井遺跡は調査継続中であるが、70軒を超える竪穴住居跡が検出されている。前平井地区の北側は加地区となるが、ここは特に集落遺跡の発達が目覚ましく、既に古墳時代から多数の竪穴住居跡が作られるが、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に増大する。加町畑遺跡では竪穴住居のほか掘立柱建物も多数構築され、武蔵国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的位置を占めていたと推測される。更に目を北に転じると、三輪野山地区には式内社比定社の茂侶神社が存在するが、神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約150mの地点で9世紀前半以前と考えられる掘立柱建物群が検出されたほか、近接する8世紀後半の竪穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、9世紀初頭の竪穴住居跡からは下総国分寺と同範の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的位置に当たると考えられる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、9世紀後半の竪穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平水寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺（138）⁶⁴が、鱒ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺（10、鱒ヶ崎貝塚と同位置）が立地しているが、茂侶神社を含めたこれらの3寺社は下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられており、奈良・平安時代の集落も3寺社の間に集中する。一方でより東側の中地区や市野谷地区では、前平井堀米遺跡や市野谷中島遺跡⁶²などで集落が形成されるものの、規模は小さく短期間で終息する。坂川の上流域に当たる地区は遺構密度も相対的に低くなることから、古道とともに太日川を利用した水運も重要な役割を果たしていたと考えられる。これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もされている⁶⁵。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡の多くは戦国期以降の遺跡であり、地下式坑や土坑墓そして屋敷跡と考えられている台地整形区画等が検出されている。鎌倉時代から室町時代前半の遺跡は千葉県内の他地域と同様少ないが、注目されるのは思井堀ノ内遺跡⁶⁶で、13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などに加え、出土品としては他に例を見ない掛幅装束着色面が副葬された成人女性骨が出土している⁶⁶。時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀台と考えられる方形竪穴建物群が検出されている。戦国期になると多くの城郭が築かれるようになる。江戸川流域では本遺跡北方2.3kmの花輪城跡（67）、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡（94）、同東1.7kmと2.2kmにある名部借城跡（124）、前ヶ崎城跡（122）があるが、これらは戦国期に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。更に本遺跡周辺をみると中中ノ台遺跡（4）、中屋敷遺跡⁶⁷、前平井遺跡、前平井堀米遺跡、加東割遺跡（28）

08-39、加町畑遺跡、西平井根郷遺跡(2)⁰⁹、西平井二階畑遺跡、三輪野山宮前遺跡⁰⁹、三輪野山道六神遺跡⁰⁹、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことが想定される。

近世になると下総台地には軍用馬育成のため、徳川幕府によって牧が設けられた。流山市周辺は小金牧の一つ、上野牧の範囲に当たる。ただし運動公園事業地はほとんどが牧の範囲の外になるため、遺構としては三輪野山野馬土手(140)が存在する程度である。新市街地地区においては駒木野馬土手(141)⁰⁴、市野谷駒木野馬土手(142)⁰⁴⁻¹⁶、十太夫野馬土手(143)⁰⁶の調査が行われている。事業地外にはその他、大野野馬土手(144)、市野谷・野々下野馬土手(145)、長崎一丁目野馬土手(146)、野々下野馬土手(147)などが所在するが、これらは多くが牧の外縁部に沿って構築されている。明治以降の農地開拓や軍用地造成、そして戦後の宅地開発によりこれらは大部分が姿を消し、周辺にわずかに残されるのみとなっている。

注

- 1 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1-流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 2 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器-奈良・平安時代編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 3 千葉県教育委員会 2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市思井上ノ内遺跡-』千葉県教育委員会
- 4 千葉県教育委員会 2017『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書4-流山市中屋敷遺跡-』千葉県教育委員会
- 5 千葉県教育委員会 2020『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書5-流山市前平井堀米遺跡-』千葉県教育委員会
- 6 (財)千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書-流山市南朝遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡-』(財)千葉県文化財センター
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の2遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。
- 7 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市西初石五丁目遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 8 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市市野谷入台遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 9 (財)千葉県教育振興財団 2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4-流山市市野谷二反田遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 10 (財)千葉県教育振興財団 2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5-流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 11 (公財)千葉県教育振興財団 2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6-流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡-旧石器時代編』(公財)千葉県教育振興財団
- 12 (公財)千葉県教育振興財団 2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7-流山市市野谷平久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ

- 遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡-」（公財）千葉県教育振興財団
- 13 (公財)千葉県教育振興財団 2016「流山市新市街地地区埋蔵文化財調査報告書8-流山市市野谷平久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡-」（公財）千葉県教育振興財団
- 14 (公財)千葉県教育振興財団 2017「流山市新市街地地区埋蔵文化財調査報告書9-流山市十太夫野馬土手、流山市・柏山市野谷胸木野馬土手、流山市胸木野馬土手-」（公財）千葉県教育振興財団
- 15 (公財)千葉県教育振興財団 2017「流山市新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10-流山市市野谷平久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡-」（公財）千葉県教育振興財団
- 16 (公財)千葉県教育振興財団 2019「流山市新市街地地区埋蔵文化財調査報告書11-流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・市野谷胸木野馬土手・十太夫野馬土手-」（公財）千葉県教育振興財団
- 17 流山市教育委員会 2015「流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書」流山市教育委員会
- 18 流山市遺跡調査会 1985「千葉県流山市長崎遺跡」流山市遺跡調査会
- 19 流山市教育委員会 1988「千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡」流山市教育委員会
- 20 山武考古学研究所 1982「大原神社遺跡」山武考古学研究所
- 21 流山市教育委員会 1993「千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報」流山市教育委員会
- 22 流山市教育委員会 2003「Ⅰ、平和台遺跡②」「平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 23 流山市教育委員会 1985「千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡」流山市教育委員会
- 24 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡」三輪野山八重塚遺跡調査会
- 25 流山市遺跡調査会 1985「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡B地点」流山市遺跡調査会
- 26 流山市教育委員会 1989「加地区遺跡群Ⅰ」流山市教育委員会
- 27 流山市教育委員会 1991「加地区遺跡群Ⅱ」流山市教育委員会
- 28 流山市教育委員会 1994「加地区遺跡群Ⅲ」流山市教育委員会
- 29 流山市教育委員会 2000「加地区遺跡群Ⅳ」流山市教育委員会
- 30 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 2004「流山市西平井・幡ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室
- 31 流山市教育委員会 1989「千葉県流山市名都借第Ⅱ遺跡発掘調査概報」流山市教育委員会
- 32 (有)均玉工房Mogi 2015「流山市名都借宮ノ脇遺跡-特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査-」流山市教育委員会
- 33 古里節夫 2000「幸田貝塚」〔千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）〕千葉県
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概ねも多数
刊行されている。
- 34 (財)千葉県教育振興財団 2010「流山市下花輪荒井前遺跡-高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書-」
(財)千葉県教育振興財団
- 35 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会 1986「流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 36 流山市教育委員会 1991「Ⅲ、三輪野山八重塚遺跡F地点」「平成二年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 37 流山市教育委員会 2002「Ⅰ、三輪野山八重塚遺跡Ⅰ・J地点」「平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 38 (株)東京航業研究所 2015「流山市三輪野山八重塚遺跡K地点-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査-」(株)東京航業研究所

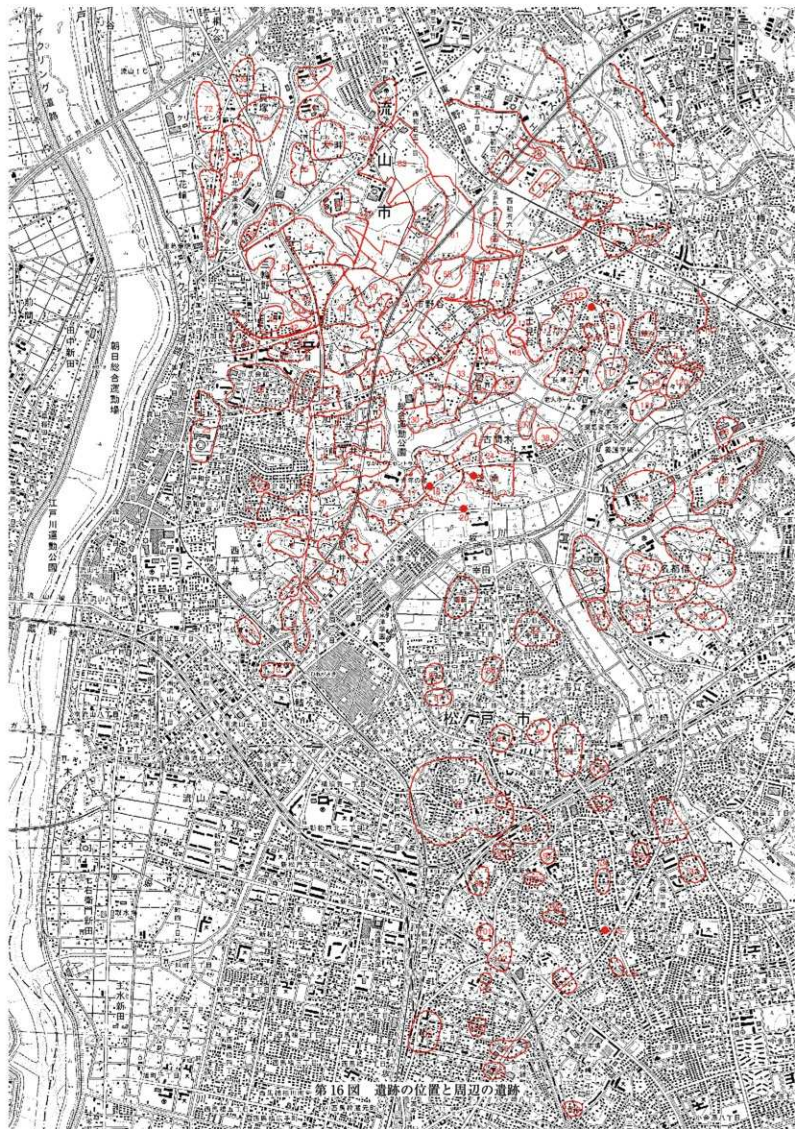
- 39 流山市教育委員会 2003「Ⅰ. 大野西割遺跡」『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 40 流山市教育委員会 2010「Ⅱ. 三輪野山宮前遺跡A地点8」『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 41 (株)地域文化財コンサルタント 2009『流山市野々下元木戸遺跡(第3次調査)』(株)地域文化財コンサルタント
- 42 (株)東京航業研究所 2011『流山市野々下元木戸遺跡(第2次調査)』(株)東京航業研究所・流山市教育委員会
- 43 流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所 2012『向下遺跡 野々下元木戸遺跡(第4次)』流山市教育委員会
- 44 酒詰伸男・岡田茂弘他 刊行年不詳(1952～1953?)『千葉県前々崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史学部
なお、この文献は正式に刊行されたものではなく、手書きの原稿と実測図、拓本などから構成されている。
- 45 流山市教育委員会 1997「Ⅱ. 古間木茶葉木谷遺跡」『平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 46 (財)千葉県文化財センター 2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書-流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前-』(財)千葉県文化財センター
- 47 (財)千葉県文化財センター 2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書(2)-流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡-』(財)千葉県文化財センター
- 48 流山市教育委員会 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
- 49 (財)千葉県文化財センター 1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 50 流山市教育委員会 2013「Ⅲ. 野々下貝塚」『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 51 大成エンジニアリング(株) 2017『千葉県流山市加村台遺跡K地点発掘調査報告書』(有)常陽エステート
- 52 流山市教育委員会 2019「Ⅴ. 加村台遺跡L地点」『平成29年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 53 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山市新街地区埋蔵文化財調査報告書1-流山市野宮瓦遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 54 辻 史郎 1998「119 流山廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良-平安時代)』千葉県
- 55 流山市教育委員会 2007「Ⅴ. 思井堀ノ内遺跡」『平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 56 大久保奈奈 2013『思井堀ノ内遺跡中世墓副葬品詳細調査報告』『研究紀要28』(公財)千葉県教育振興財団
- 57 流山市教育委員会 1998「Ⅰ. 中屋敷遺跡」『平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 58 (財)千葉県文化財センター 1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡-都市計画道路3・3・2号線(新川南流山線)埋蔵文化財発掘調査報告書-』(財)千葉県文化財センター
なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東割遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東割遺跡の範囲内に当たる。
- 59 (株)地域文化財研究所 2014『加東割遺跡 3次』(株)地域文化財研究所
- 60 流山市教育委員会 2011「Ⅲ. 三輪野山宮前遺跡A地点8-2」『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 61 北澤 滋 1998『三輪野山遺跡群(三輪野山道六神遺跡B地点)』『千葉県の歴史 資料編 中世1(考古資料)』千葉県

上記以外の関連文献

- (財)千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ-谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)-』(財)千葉県文化財センター
- (財)千葉県文化財センター 1994『流山市上新宿貝塚発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 千葉県教育委員会 1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域-』千葉県教育委員会
- 流山市立博物館市史編さん係編 2001『流山市史 通史編Ⅰ』流山市教育委員会

(財)千葉県教育振興財団編 2006『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』千葉県教育委員会
流山市立博物館編 2015『ふるさと流山のあゆみ』流山市教育委員会
千葉県教育委員会 2018『流山市三輪野山北浦遺跡～県道越谷流山線事業埋蔵文化財発掘調査報告書～』千葉県教育委員会





第16図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 後平井中通選跡(1)～(35)調査一覧

調査区分	年度	事業名	調査期間	調査地	担当者	調査費(千円)	調査費(千円)		本調査(千円)	完了(千円)	備考
							調査費	下管			
(1)	平成13	中平井中通選跡(1)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	1,984 / 5,546	36 / 5,546	0 / 5,546	0 / 5,546		
(2)	平成13	中平井中通選跡(2)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	1,985 / 19,333	391 / 19,333	0 / 19,333	0 / 19,333	調査費の半、上管は(1)～(6)の(7)～(13)・(15)・(21)で済ませた。	
(3)	平成13	中平井中通選跡(3)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	— / —	96 / 2,400	5,300 / 2,400	5,300 / 2,400	0 / 2,400(2)で済まし本調査決定した範囲(1,500円)	
(4)	平成13	中平井中通選跡(4)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	6,031 / 6,034	236 / 6,264	— / 6,264	6,264	調査費の半、上管は(1)～(3)で済まし本調査決定した範囲	
(5)	平成13	中平井中通選跡(5)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	3,100 / —	104 / 2,100	— / 2,100	450 / 2,100(3)	上管本調査範囲の下部調査・本調査	
(1)	平成13	中平井中通選跡(1)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	770 / —	8 / 132	— / 132	636	—	
(2)	平成13	中平井中通選跡(2)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	333 / —	— / —	— / —	333	—	
(7)	平成13	中平井中通選跡(7)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	333 / —	12 / 305	— / 305	—	—	
(8)	平成13	中平井中通選跡(8)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	116 / —	— / —	8 / 116	116	0	
(9)	平成13	中平井中通選跡(9)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	546 / —	35 / 546	12 / 546	112	0	
(10)	平成13	中平井中通選跡(10)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	550 / 109 / 549	36 / 549	0 / 549	0	549	
(11)	平成13	中平井中通選跡(11)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	303 / 43 / 363	3 / 363	0 / 363	0	363	
(12)	平成13	中平井中通選跡(12)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	363 / —	— / —	12 / 585	585	0	
(13)	平成13	中平井中通選跡(13)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	3,387 / —	315 / 2,467	104 / 3,187	3,140	0	
(14)	平成13	中平井中通選跡(14)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	333 / —	30 / 533	0 / 533	0	533	
(15)	平成13	中平井中通選跡(15)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	849 / —	— / —	18 / 848	849	0	
(16)	平成13	中平井中通選跡(16)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	1,314 / —	151 / 1,514	61 / 1,514	0	1,514	
(17)	平成13	中平井中通選跡(17)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	320 / —	51 / 320	7 / 320	0	320	
(18)	平成13	中平井中通選跡(18)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	831 / —	70 / 831	12 / 831	0	831	
(19)	平成13	中平井中通選跡(19)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	1,631 / —	191 / 1,631	51 / 1,631	196	0	
(20)	平成13	中平井中通選跡(20)調査 地区	11月2,28 ～12月3,30	調査委託 株式会社 北河田建設事務所	主任調査員 藤本浩二 調査員 藤本浩二	1,333 / —	128 / 1,333	— / —	0	1,333	

調査番号	年度	事業名	調査期間	調査対象	調査対象	担当者	調査費(千円)		成果(千円)		完了率(%)	備考		
							調査経費	対象経費	調査経費	対象経費				
121	平成21年度	つくばみんぞく(1)11.16.2.18 つくばみんぞく(1)11.16.2.25 つくばみんぞく(1)11.16.2.22	11.16.2.18 11.16.2.25 11.16.2.22	研究員1名 研究員1名 研究員1名	調査対象者 4名 調査対象者 7名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名 研究員1名	3,114	184 / 1,914	40 / 2,114	238	0 / 2,114	一部(2)で確認した調査成果は、本欄(2)(3)に		
122	平成21年度	つくばみんぞく(1)11.16.2.22	11.16.2.22	研究員1名	調査対象者 6名	研究員1名	266	266 / 266	— / —	0	—	266		
123	平成21年度	つくばみんぞく(1)11.16.2.17 つくばみんぞく(1)11.16.2.30	11.16.2.17 11.16.2.30	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	2,529	266 / 2,529	98 / 2,529	0	0 / 2,529	0	0 / 2,529	
124	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.26.3.19 つくばみんぞく(1)11.26.3.22	11.26.3.19 11.26.3.22	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	1,014	132 / 1,014	0 / 1,014	0	0 / 1,014	0	0 / 1,014	
125	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.26.3.23	11.26.3.23	研究員1名	調査対象者 6名	研究員1名	2,558	255 / 2,558	148 / 2,558	1,000	0 / 2,558	0	2,558	
126	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.26.3.23	11.26.3.23	研究員1名	調査対象者 6名	研究員1名	3,129	312 / 3,129	60 / 3,129	270	0 / 3,129	0	3,129	
127	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.26.3.17 つくばみんぞく(1)11.26.3.13	11.26.3.17 11.26.3.13	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	2,360	314 / 2,360	36 / 2,360	0	0 / 2,360	0	2,360	
128	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.22.1.36 つくばみんぞく(1)11.22.1.13	11.22.1.36 11.22.1.13	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	423	423 / 423	8 / 423	423	0	0	423	
129	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.22.1.30 つくばみんぞく(1)11.22.1.30	11.22.1.30 11.22.1.30	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	3,832	276 / 3,792	114 / 3,832	60	186 / 3,832	60	3,832	
130	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.22.1.38 つくばみんぞく(1)11.22.1.11	11.22.1.38 11.22.1.11	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	252	168 / 252	26 / 252	26	732	56	752	
131	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.22.1.11 つくばみんぞく(1)11.22.1.9	11.22.1.11 11.22.1.9	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	1,791	254 / 1,791	36 / 1,791	0	0 / 1,791	0	1,791	
132	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.21.2.2 つくばみんぞく(1)11.21.2.9	11.21.2.2 11.21.2.9	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	306	466 / 306	8 / 466	0	0 / 306	0	306	
133	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.21.2.10 つくばみんぞく(1)11.21.2.2	11.21.2.10 11.21.2.2	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	715	715 / 715	8 / 715	0	0 / 715	0	715	
134	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.21.2.30 つくばみんぞく(1)11.21.2.11	11.21.2.30 11.21.2.11	研究員1名 研究員1名	調査対象者 6名 調査対象者 6名	研究員1名 研究員1名	2,574	291 / 2,574	72 / 2,574	60	0 / 2,574	60	2,574	
135	平成22年度	つくばみんぞく(1)11.21.2.9	11.21.2.9	研究員1名	調査対象者 6名	研究員1名	1,217	1,217 / 1,217	36 / 1,217	0	0 / 1,217	0	1,217	
計							17,412	30,005 / 67,261	2,139 / 66,180	16,771	159,460	0	159,460	

新 種 合 計

第2表 後平井中通遺跡上層遺構一覧

調査区	調査年度	調査時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置 (ウツト)	備 考						
C0	平成 11	C0B303	003	壁穴住居跡	縄文	M34-59-69, N34-50-60							
			012										
			006										
C0	平成 11	C0B312	007	壁穴住居跡	縄文	N34-40-42-51-52	溝人口施設						
			008				溝人口施設						
			009				溝人口施設						
			016				P13						
			017				P12						
			031										
C0	平成 11	C0B331	031	壁穴住居跡	縄文	M34-58-59-68-69							
			032	壁穴住居跡	縄文	M34-57-58-67-68	一部は石置敷						
C0	平成 11	C0B335	035	壁穴住居跡	縄文	M34-56-65-62	一部は石置敷						
			045	壁穴住居跡	縄文	M34-47-48							
C0	平成 11	C0B346	046	壁穴住居跡	縄文	M34-37-38-47-48							
			048										
C0	平成 11	C0B348	049	壁穴住居跡	縄文	M34-29-39, N34-20-30	P6						
			050				P8						
			051				P6						
			052				P2						
			053				P19						
			054				P4						
			055				P9						
			056				P1						
			057				P18						
			058				P17						
			059				P16						
			060				P15						
			061				P14						
			063				P12						
			064				P13						
			065				P11						
			066				P9						
			C0				平成 11	C0B372	072	壁穴住居跡	縄文	M34-06-07-16-17	
			C0				平成 11	C0B373	073	壁穴住居跡	縄文	M34-06-07-16-17	
			C0				平成 11	C0B378	078	壁穴住居跡	縄文	M34-18-19-28-29	
C0	平成 11	C0B379	079	壁穴住居跡	縄文	M34-07-09-17-19							
C0	平成 11	C0B380	080	壁穴住居跡	縄文	M34-08-09-19							
C0	平成 11	C0B381	081	壁穴住居跡	縄文	M34-08-18							
C0	平成 11	C0B384	104	壁穴住居跡	縄文	N34-10-11-20-22-30-31							
C0	平成 11	C0B318	118	壁穴住居跡	縄文	M34-19-29, N34-10-20							
			121										
			136										
			100				P16						
			101				P7						
C0	平成 11	C0B336	111	壁穴住居跡	縄文	N34-02-03-12-13							
			100				P9						
			101				P17						
			111				P18						
C0	平成 11	C0B339	139	壁穴住居跡	縄文	N33-81-82-91-92							
C0	平成 11	C0B340	140	壁穴住居跡	縄文	N33-70-71							
C0	平成 11	C0B347	147	壁穴住居跡	縄文	N33-65-66-75-76-83-86	溝人口施設						
			148				溝人口施設						
			149				溝人口施設						
			150										
			156										
C0	平成 11	C0B356	156	壁穴住居跡	縄文	M37-48-49-58-59							
C0	平成 11	C0B359	159	壁穴住居跡	縄文	M37-29-30, N37-20-20							
C0	平成 11	C0B360	160	壁穴住居跡	縄文	M37-69-69, N37-40-40							
C0	平成 11	C0B361	161	壁穴住居跡	縄文	N33-34-35-44-45							
C0	平成 11	C0B363	163	壁穴住居跡	縄文	N33-11-12-21-23	一部は石置敷						
C0	平成 11	C0B365	165	壁穴住居跡	縄文	N33-62-63-72-73							
C0	平成 11	C0B377	177	壁穴住居跡	縄文	N33-25-28-38-38							
C0	平成 11	C0B379	179	壁穴住居跡	縄文	N33-33-34-43-44							
C0	平成 11	C0B380	180	壁穴住居跡	縄文	N33-13-14-23-24							
C0	平成 11	C0B381	181	壁穴住居跡	縄文	N33-05-06-15-16							
C0	平成 11	C0B384	194	壁穴住居跡	縄文	M38-66-67-76-77							
C0	平成 11	C0B392	192	壁穴住居跡	縄文	M38-68-69-78-79							
C0	平成 11	C0B396	196	壁穴住居跡	縄文	N38-31-32-41-42							
C0	平成 11	C0B304	004	土坑	縄文	N34-42							
C0	平成 11	C0B305	005	土坑	縄文	N34-42-52							
C0	平成 11	C0B310	010	土坑	縄文	N34-53							
C0	平成 11	C0B311	011	土坑	縄文	N34-41							
C0	平成 11	C0B314	014	土坑	縄文	N34-40							
C0	平成 11	C0B315	015	土坑	縄文	N34-50-51							
C0	平成 11	C0B319	019	土坑	縄文	N34-53-56							
C0	平成 11	C0B329	020	土坑	縄文	N34-57							
C0	平成 11	C0B321	021	土坑	縄文	N34-56-57							
C0	平成 11	C0B322	022	土坑	縄文	N34-56-57-67							
C0	平成 11	C0B323	023	土坑	縄文	M34-58							
C0	平成 11	C0B324	024	土坑	縄文	M34-89							
C0	平成 11	C0B326	026	土坑	縄文	M34-58							
C0	平成 11	C0B327	027	土坑	縄文	M34-57							
C0	平成 11	C0B328	028	土坑	縄文	M34-57-67							
C0	平成 11	C0B329	029	土坑	縄文	N34-30-40							
C0	平成 11	C0B330	030	土坑	縄文	N34-40							
C0	平成 11	C0B333	033	土坑	縄文	M34-67-68							

調査年度	調査年度	報告時道標名	調査時道標名	道標類別	時代	位置(グリッド)	備考
昭	昭	08S001	001	土坑	縄文	M34-67	
昭	昭	08S006	006	土坑	縄文	M34-57	
昭	昭	08S007	007	土坑	縄文	M34-57	
昭	昭	08S008	008	土坑	縄文	M34-57	
昭	昭	08S009	009	土坑	縄文	M34-65-68	
昭	昭	08S040	040	土坑	縄文	M34-39	
昭	昭	08S041	041	土坑	縄文	M34-39	
昭	昭	08S042	042	土坑	縄文	M34-39-49	
昭	昭	08S043	043	土坑	縄文	M34-49	
昭	昭	08S044	044	土坑	縄文	M34-49	
昭	昭	08S068	068	土坑	縄文	M34-48	
昭	昭	08S069	069	土坑	縄文	M34-17-27	
昭	昭	08S070	070	土坑	縄文	M34-27	
昭	昭	08S071	071	土坑	縄文	M34-26-27	
昭	昭	08S074	074	土坑	縄文	M34-16-06	
昭	昭	08S075	075	土坑	縄文	M34-27	
昭	昭	08S077	077	土坑	縄文	M34-47	
昭	昭	08S082	082	土坑	縄文	M34-09	
昭	昭	08S083	083	土坑	縄文	M34-09	
昭	昭	08S084	084	土坑	縄文	M34-28-29	
昭	昭	08S085	085	土坑	縄文	M34-28	
昭	昭	08S086	086	土坑	縄文	M34-28-29	
昭	昭	08S087	087	土坑	縄文	M34-19-29	
昭	昭	08S088	088	土坑	縄文	M34-37-38	
昭	昭	08S089	089	土坑	縄文	M34-38	
昭	昭	08S090	090	土坑	縄文	M34-38	
昭	昭	08S091	091	土坑	縄文	M34-38	
昭	昭	08S092	092	土坑	縄文	M34-38	
昭	昭	08S093	093	土坑	縄文	N34-02-03-12	
昭	昭	08S094	094	土坑	縄文	N34-02-12	
昭	昭	08S095	095	土坑	縄文	N34-12	
昭	昭	08S097	097	土坑	縄文	N34-12	
昭	昭	08S098	098	土坑	縄文	N34-03	
昭	昭	08S099	099	土坑	縄文	N34-03-13	
昭	昭	08S102	102	土坑	縄文	N34-23	
昭	昭	08S103	103	土坑	縄文	N34-13-23	
昭	昭	08S106	106	土坑	縄文	N34-32	
昭	昭	08S107	107	土坑	縄文	N34-33	
昭	昭	08S110	110	土坑	縄文	N34-12	
昭	昭	08S112	112	土坑	縄文	M34-19	
昭	昭	08S113	113	土坑	縄文	M34-29	
昭	昭	08S114	114	土坑	縄文	M34-29	
昭	昭	08S115	115	土坑	縄文	M34-29	
昭	昭	08S117	117	土坑	縄文	N33-74	
昭	昭	08S119	119	土坑	縄文	N34-01	
昭	昭	08S120	120	土坑	縄文	N34-01	
昭	昭	08S122	122	土坑	縄文	N33-61	
昭	昭	08S123	123	土坑	縄文	N33-54	
昭	昭	08S124	124	土坑	縄文	N33-45-46-55-56	
昭	昭	08S125	125	土坑	縄文	N33-91	
昭	昭	08S126	126	土坑	縄文	N33-62-72	
昭	昭	08S127	127	土坑	縄文	N33-62-63-72-73	
昭	昭	08S128	128	土坑	縄文	N33-72	
昭	昭	08S129	129	土坑	縄文	N33-72	
昭	昭	08S130	130	土坑	縄文	N33-72	
昭	昭	08S131	131	土坑	縄文	N33-19	
昭	昭	08S133	133	土坑	縄文	N33-73	
昭	昭	08S134	134	土坑	縄文	N33-73-74	
昭	昭	08S135	135	土坑	縄文	N33-63	
昭	昭	08S137	137	土坑	縄文	N33-63	
昭	昭	08S141	141	土坑	縄文	N33-92-93	
昭	昭	08S142	142	土坑	縄文	N33-92	08S139 西人口施設中
昭	昭	08S143	143	土坑	縄文	N33-92	08S139 西人口施設中
昭	昭	08S144	144	土坑	縄文	N33-81-91	
昭	昭	08S145	145	土坑	縄文	N33-81-82	
昭	昭	08S146	146	土坑	縄文	N33-63	
昭	昭	08S151	151	土坑	縄文	M37-28-38	
昭	昭	08S152	152	土坑	縄文	M37-28	
昭	昭	08S153	153	土坑	縄文	N37-31	
昭	昭	08S154	154	土坑	縄文	M37-19	
昭	昭	08S155	155	土坑	縄文	N37-10	
昭	昭	08S157	157	土坑	縄文	N37-41-51	
昭	昭	08S158	158	土坑	縄文	N37-60-51-60-51	
昭	昭	08S162	162	土坑	縄文	N33-44	
昭	昭	08S164	164	土坑	縄文	N33-22-32	
昭	昭	08S166	166	土坑	縄文	N33-50-51	
昭	昭	08S167	167	土坑	縄文	N33-50-51-60-51	
昭	昭	08S168	168	土坑	縄文	N33-51	
昭	昭	08S169	169	土坑	縄文	N33-51	
昭	昭	08S170	170	土坑	縄文	N33-50	
昭	昭	08S171	171	土坑	縄文	N33-31-32	
昭	昭	08S172	172	土坑	縄文	N33-31-32	
昭	昭	08S173	173	土坑	縄文	N33-25-25	

調査区	調査年度	調査地番	調査地番	調査地番	地層	地層	年代	位置(グリッド)	備考
05	平成 11	068J174	174		土坑	縄文		N33-12	2)調査区からは検出されず
05	平成 11	068J175	175		土坑	縄文		N33-25	
05	平成 11	068J176	176		土坑	縄文		N33-36	
05	平成 11	068J182	182		土坑	縄文		N33-16	
05	平成 11	068J183	183		土坑	縄文		N33-81-91-92	
05	平成 11	068J184	184		土坑	縄文		N33-82	
05	平成 11	068J185	185		土坑	縄文		N33-82-92	
05	平成 11	068J188	188		土坑	縄文		N37-83-84	
05	平成 11	068J189	189		土坑	縄文		N37-89-90	
05	平成 11	068J190	190		土坑	縄文		N37-90	
05	平成 11	068J193	193		土坑	古代以降		N38-70-71	
05	平成 11	068J194	194		土坑	縄文		N38-84	
05	平成 11	068J196	196		土坑	縄文		N38-93	
05	平成 11	068J197	197		土坑	縄文		N38-23-24	
05	平成 11	068J198	198		土坑	縄文		N38-11-21	
05	平成 11	068J199	199		土坑	縄文		N38-42-52	
05	平成 11	068J200	200		土坑	縄文		M38-09	
05	平成 11	068J201	201		土坑	縄文		M38-79	
05	平成 11	068J202	202		土坑	縄文		M37-79-80	
05	平成 11	068J203	203		土坑	縄文		M37-79-80, N37-70-80	
05	平成 11	068J204	204		土坑	縄文		N37-70	
05	平成 11	068J205	205		土坑	縄文		M37-88	
05	平成 11	068J013	013		ビレット	縄文		N34-40	
05	平成 11	068J018	018		ビレット	縄文		N34-50	
05	平成 11	068J025	025		ビレット	縄文		M34-49	
05	平成 11	068J047	047		ビレット	縄文		N34-30	
05	平成 11	068J062	062		ビレット	縄文		M34-30	
05	平成 11	068J067	067		ビレット	縄文		M34-49	
05	平成 11	068J105	105		ビレット群	縄文		N34-31	
05	平成 11	068J108	108		ビレット	縄文		N34-12	
05	平成 11	068J109	109		ビレット	縄文		N34-12	
05	平成 11	068J132	132		ビレット群	縄文		M34-00-10-11	
05	平成 11	068J138	138	M34-28-29 掘り出し物	ビレット群	縄文		M34-28-29-38	
05	平成 11	068J178	178		ビレット群	縄文		N33-55	
05	平成 11	068J186	186		ビレット	縄文		N33-40-41	
05	平成 11	068J076	076		陥穴	縄文		M34-47	
05	平成 11	068J096	096		陥穴	縄文		N34-12-13	
05	平成 11	068J116	116		陥穴	縄文		N34-77	
05	平成 11	068J092	092		溝状遺構	中・近世		N33-80-81-82-83-84-85-86-87-88-89-90-91-92-93-94-95-96-97-98-99-100	調査区からは検出されず
05	平成 11	068J206	206		溝状遺構	中・近世		M38-46-56-59-66-69, N38-50-51-60-67-70-77	調査区からは検出されず
05	平成 11	068J207	207		溝状遺構	中・近世		N38-50-51-60-67-70-77	調査区からは検出されず
05	平成 11	文書	001		有蓋土中埋没品	旧石器		-	調査区からは検出されず
05	平成 11	文書	187		-	-		-	調査区からは検出されず
05	平成 12	068K208	208		土坑	縄文		N33-85	
05	平成 12	068K209	209		土坑	縄文		N33-41	
05	平成 12	068K210	210		土坑	縄文		N33-23-22	
05	平成 12	068K211	211		土坑	縄文		N33-21	
05	平成 12	068K212	212		土坑	縄文		N33-21	
05	平成 12	068K213	213		土坑	縄文		N33-40	
05	平成 12	068K214	214		土坑	縄文		N33-73-74-83-84	
05	平成 12	068K215	215		土坑	縄文		N33-84	
05	平成 12	068K216	216		土坑	縄文		N33-84	
05	平成 12	068K217	217		土坑	縄文		N33-71-72-81-82	
05	平成 12	068K218	218		土坑	縄文		N33-63	
05	平成 12	068K219	219		土坑	縄文		N33-30	
05	平成 12	068K220	220		土坑	縄文		N33-65	
05	平成 12	068J006	006	陥穴状遺構	縄文			N32-88-97-98, N33-07-08	調査区からは検出されず
05	平成 12	068J007	007	陥穴状遺構	縄文			N32-96-98, N33-06-08	調査区からは検出されず
05	平成 12	068J008	008	陥穴状遺構	縄文			N34-02-93, N33-07-08	調査区からは検出されず
05	平成 12	068J001	001	土坑 01	縄文			N32-87	掘り出し物
05	平成 12	068J002	002	土坑 02	縄文			N32-86-87-90-97	掘り出し物
05	平成 12	068J003	003	土坑 03	縄文			N32-94-96, N33-04-05	掘り出し物
05	平成 12	068J004	004	土坑 04	縄文			N33-08-09	掘り出し物
05	平成 12	068J005	005	土坑 05	縄文			N33-20-30, N33-20-30	掘り出し物
05	平成 12	068J008	008	土坑 08	縄文			N32-97-98, N33-07-08	掘り出し物
05	平成 12	068J009	009	土坑 09	縄文			N33-18-19-20-29	掘り出し物
05	平成 12	068J010	010	土坑 10	縄文			N33-08-18	掘り出し物
05	平成 12	068J011	011	土坑 11	縄文			N33-08-18	掘り出し物
05	平成 12	068J015	015	土坑 15	縄文			N34-71	掘り出し物
05	平成 12	068J018	018	土坑 18	縄文			N34-81	掘り出し物
05	平成 12	068J019	019	土坑 19	縄文			N34-81	掘り出し物
05	平成 12	068J021	021	土坑 21	縄文			N34-81	掘り出し物
05	平成 12	068J023	023	土坑 23	縄文			N34-81	掘り出し物
05	平成 12	068J024	024	土坑 24	縄文			N34-91	掘り出し物
05	平成 12	068J025	025	土坑 25	縄文			N34-91	掘り出し物
05	平成 12	068J027	027	土坑 27	縄文			N34-72	掘り出し物
05	平成 12	068J028	028	土坑 28	縄文			N34-72	掘り出し物
05	平成 12	068J029	029	土坑 29	縄文			N34-72	掘り出し物
05	平成 12	068J016	016	土坑 16	ビレット	縄文		N34-71	掘り出し物
05	平成 12	068J017	017	土坑 17	ビレット	縄文		N34-71	掘り出し物
05	平成 12	068J020	020	土坑 20	ビレット	縄文		N34-81	掘り出し物

第3表 周辺遊跡一覧表

番号	遊跡名	時代
1	後甲申中津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良、平安、中・近世
2	高甲申鹿遊跡	縄文・中世
3	西甲申一階築遊跡	縄文・中世
4	中甲申遊跡	平安、中・近世
5	遊舟跡(内津遊)	印石跡、縄文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、平安、中・近世
6	西甲申大船遊跡	縄文・中世
7	遊舟跡の見通遊	縄文(早・前)、古墳、近世
8	跡・船場の遊跡跡	古墳(後)
9	跡・船場の碇石遊跡	古墳(後)
10	跡・船場	縄文(早・中・後)、平安
11	字跡の遊跡	縄文(中)、古墳、平安、中・近世
12	大友野村遊跡	縄文(早)、古墳(後)、平安
13	沼本遊跡	縄文(中)、平安
14	沼平野遊跡	縄文(前・中)、平安
15	沼平野本津遊跡	古墳(後)、奈良、平安
16	沼平上ノ内津遊	印石跡、縄文(早・前・中・後)、古墳、奈良、平安、中・近世
17	沼平本山ノ新上津遊	縄文(前)、平安
18	沼平本山ノ新上津遊	古墳
19	沼平本山ノ新上津遊跡	縄文、古墳(後)、奈良、平安
20	芝崎倉之字津遊跡	古墳
21	芝崎大津遊跡	縄文(前・中)、古墳、平安
22	芝崎島ノ新津遊跡	古墳
23	沼平本野船場上津遊	縄文(前・中)、平安
24	沼平本野船場新上津遊	縄文(後)、古墳(後)、平安、近世
25	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(中)、古墳(後)、平安、近世
26	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、奈良、平安
27	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文、平安
28	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(前)、中・近世
29	沼平中津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良、平安、中・近世
30	沼平中津遊跡	縄文(前・中)
31	沼平下大船遊跡	縄文(後)、平安
32	沼平下大船遊跡	縄文(前)、平安
33	沼平下大船遊跡	縄文(前・中・後・晩)
34	沼平下大船遊跡	古墳
35	沼平下大船遊跡	縄文(後)、平安
36	沼平下大船遊跡	縄文(後)、近世
37	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(早・前・後)
38	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(中)
39	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、平安
40	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文、平安
41	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、平安
42	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(早)、平安
43	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、平安
44	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(後・晩)
45	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・中・後・晩)
46	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、平安、近世
47	沼平本野船場新上津遊跡	古墳(後)、平安
48	沼平本野船場新上津遊跡	縄文
49	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(前・中)、古墳(中・後)
50	沼平本野船場新上津遊跡	縄文
51	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良、平安、中・近世
52	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(中・後)、平安、中・近世
53	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、平安、中・近世
54	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(前)、古墳(後)、平安、近世
55	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳(後)、平安、近世
56	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・後)、古墳、平安、近世
57	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、中・近世
58	沼平本野船場新上津遊跡	奈良、平安、中・近世
59	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(後)、奈良、平安
60	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・中・後・晩)、奈良、平安
61	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・中・後・晩)、古墳(前・後)、奈良、平安
62	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良、古墳(前)、奈良、平安、近世
63	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(前)、奈良、古墳(前)
64	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(早・中)、古墳(後)、平安
65	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(早・前・中)、平安
66	沼平本野船場新上津遊跡	古墳
67	沼平本野船場新上津遊跡	古墳
68	沼平本野船場新上津遊跡	縄文(後)、古墳(後)
69	沼平本野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後)、奈良、古墳、奈良、平安、中・近世
70	沼平本野船場新上津遊跡	縄文、古墳、中世

番号	遊跡名	時代
71	下野船場新上津遊跡	縄文(中・後)、平安、近世
72	下野船場新上津遊跡	縄文(前・後)、平安、近世
73	下野船場新上津遊跡	縄文(前・後)、平安
74	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・後)、平安
75	下野船場新上津遊跡	縄文(前)、古墳、中世
76	下野船場新上津遊跡	縄文(前・中・後)、平安
77	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文、奈良、平安
78	下野船場新上津遊跡	縄文(早・前・中・後)、平安、近世
79	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(中・後・晩)、平安、近世
80	下野船場新上津遊跡	縄文(早・前・中・後・晩)、平安
81	下野船場新上津遊跡	縄文(中)
82	下野船場新上津遊跡	縄文(前)
83	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前・中・後)、古墳
84	下野船場新上津遊跡	奈良(後)、古墳(前・中・後)
85	下野船場新上津遊跡	縄文(早・前・中・晩)、奈良(後)、古墳(後)、奈良、平安
86	下野船場新上津遊跡	縄文(後)、古墳(中)
87	下野船場新上津遊跡	縄文(後)
88	下野船場新上津遊跡	縄文(早・前)、奈良、古墳(中・後)、平安
89	下野船場新上津遊跡	縄文(後)
90	下野船場新上津遊跡	縄文(中)
91	下野船場新上津遊跡	古墳
92	下野船場新上津遊跡	縄文、古墳、平安、中世
93	下野船場新上津遊跡	古墳
94	下野船場新上津遊跡	古墳(前・中・後)
95	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(前)
96	下野船場新上津遊跡	古墳
97	下野船場新上津遊跡	古墳(前・中・後)
98	下野船場新上津遊跡	印石跡、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・中・後)
99	下野船場新上津遊跡	縄文(前・後)
100	下野船場新上津遊跡	縄文(前・中)
101	下野船場新上津遊跡	縄文(早・前・中)
102	下野船場新上津遊跡	古墳
103	下野船場新上津遊跡	古墳
104	下野船場新上津遊跡	縄文(中)
105	下野船場新上津遊跡	縄文(前・後)、平安、近世
106	下野船場新上津遊跡	中世
107	下野船場新上津遊跡	古墳
108	下野船場新上津遊跡	古墳
109	下野船場新上津遊跡	古墳
110	下野船場新上津遊跡	古墳
111	下野船場新上津遊跡	古墳
112	下野船場新上津遊跡	古墳
113	下野船場新上津遊跡	古墳
114	下野船場新上津遊跡	古墳
115	下野船場新上津遊跡	古墳
116	下野船場新上津遊跡	古墳
117	下野船場新上津遊跡	古墳
118	下野船場新上津遊跡	古墳
119	下野船場新上津遊跡	古墳
120	下野船場新上津遊跡	古墳
121	下野船場新上津遊跡	古墳
122	下野船場新上津遊跡	古墳
123	下野船場新上津遊跡	古墳
124	下野船場新上津遊跡	古墳
125	下野船場新上津遊跡	古墳
126	下野船場新上津遊跡	古墳
127	下野船場新上津遊跡	古墳
128	下野船場新上津遊跡	古墳
129	下野船場新上津遊跡	古墳
130	下野船場新上津遊跡	古墳
131	下野船場新上津遊跡	古墳
132	下野船場新上津遊跡	古墳
133	下野船場新上津遊跡	古墳
134	下野船場新上津遊跡	古墳
135	下野船場新上津遊跡	古墳
136	下野船場新上津遊跡	古墳
137	下野船場新上津遊跡	古墳
138	下野船場新上津遊跡	古墳
139	下野船場新上津遊跡	古墳
140	下野船場新上津遊跡	古墳
141	下野船場新上津遊跡	古墳
142	下野船場新上津遊跡	古墳
143	下野船場新上津遊跡	古墳
144	下野船場新上津遊跡	古墳
145	下野船場新上津遊跡	古墳
146	下野船場新上津遊跡	古墳
147	下野船場新上津遊跡	古墳

第2章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 概要（第17図）

後平井中通遺跡の所在する台地は、坂川により形成された沖積地を東に臨み、また凝灰質粘性土壌が地表から浅い深度に位置する地点も多いことから、湧水点が多く、このため湧水点から坂川に流入する小河川により複雑に開析された舌状台地となる。

坂川は江戸川水系の一般河川であり、流山市内を流れる小河川の中でも水量・流域面積共に最大規模である。水源は流山市野々下二丁目付近とされるが、つくばエクスプレスおおたかの森駅付近にも水源を辿ることができる。この水源から南西に流下した川は、市野谷孝久保遺跡や市野谷宮後遺跡付近の湧水点からの小河川を取り込み、市野谷地蔵谷遺跡、市野谷堀内第Ⅱ遺跡付近で流路を南に変える。現在の総合運動公園が所在する地点であり、後平井中通遺跡も右岸側の台地上に所在する。後平井中通遺跡から300m程流下すると都市計画道路3・4・11号線（野々下思井線）が通る台地に遮られ、東に流路を変える。この台地の東端を巻き込むように再び南西向きを変え、広大な沖積低地を形成し江戸川に合流する。

このように流山市の地形は小河川により複雑に形成されており、要因として第四紀更新世の急激な隆起が考えられる。標高の高い地点からの湧水は、同じく標高の高い地点に凝灰質粘性土が位置しているためであり、関東ローム層が形成される直前まで水成層が形成される環境であったことが窺える。埋蔵文化財調査においても、粘性土壌から第2黒色帯付近に属する文化層の石器群の検出例が多いことも肯定できる。

第2節 遺構と遺物

1 第1ブロック（第18・19図、図版25）

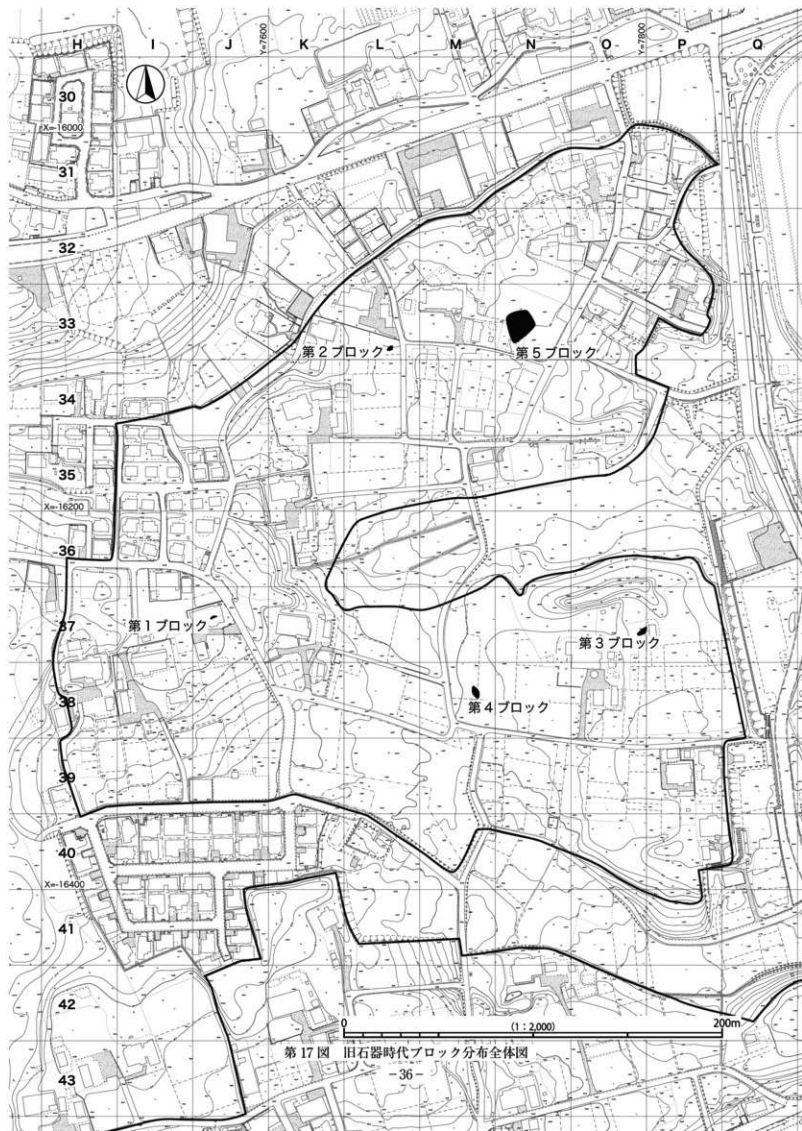
坂川に流入する小河川に開析された小支谷の最深部、標高20mの台地緩斜面部に位置する。黒曜石裂とチャート製の剥片及び安山岩製の礫片3点で構成され、J37.32グリッドからJ37.42グリッドにかけて東西4mの範囲に遺物が集中する。出土層位は不明であるが、ローム層中の出土および出土標高から地表面から0.5m～0.8m程の深度であり、おそらくハードローム層上面の出土であろう。

1は黒曜石裂の調整痕の認められる剥片である。縦長剥片の途中で折断し、折断面に網緑色からの微細な調整が認められる。背面を構成する剥離の方向は腹面の剥離方向と一致し、縦長剥片の作出を意図していることが窺える。2はチャート製の剥片である。矮小な打面を有し、末端部付近に最大幅をもつ不定形剥片である。

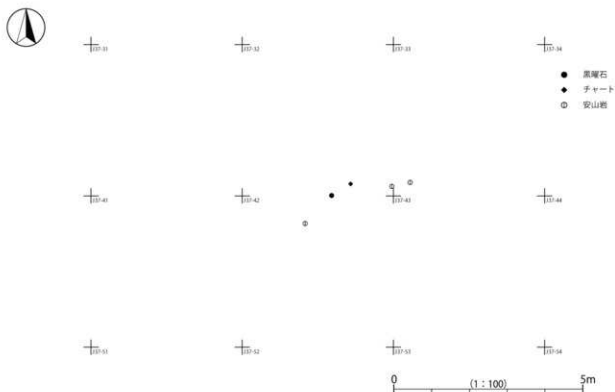
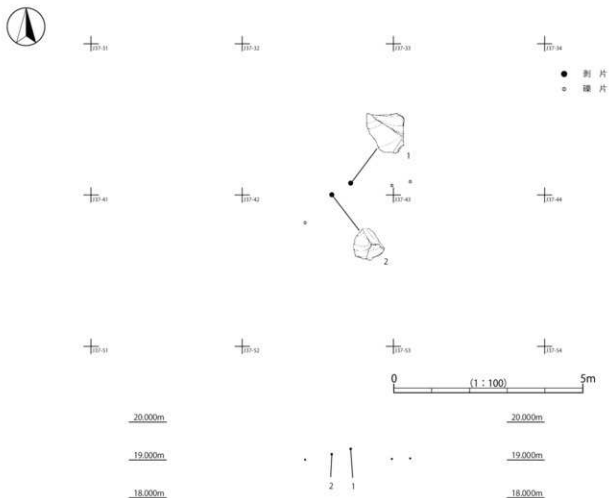
2 第2ブロック（第20・21図、図版2・25）

北に向かい緩やかに下る標高14mの台地緩斜面部に位置する。調整痕の認められる剥片1点、剥片2点、石核1点で構成される。L33.86・87グリッドにかけて散布し、出土標高は13.6m～13.8mである。出土層位は不明であるが、ソフトローム層からハードローム層にかけての所属と考えられる。

1は流紋岩製の調整痕の認められる剥片である。打面に対し長軸が斜軸となる石刃状剥片で、背面を構成する剥離の方向は腹面の剥離方向と同一である。片側縁の背面側に微細な調整痕が認められ、一部打面に近い部位には使用による微細な剥落痕も認められる。2は黒色頁岩の石核である。立方体に近い形状で



第17図 旧石器時代ブロック分布全体図



第18図 第1ブロック器種別・石材別分布



第19図 第1ブロック出土遺物

あり、最終剥離面は上面を打面とし正面右側面に剥片を作出した一連の剥離である。

3 第3ブロック (第22～26図、図版2・25～28)

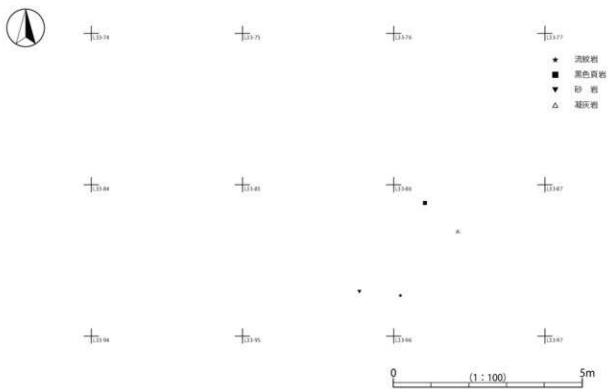
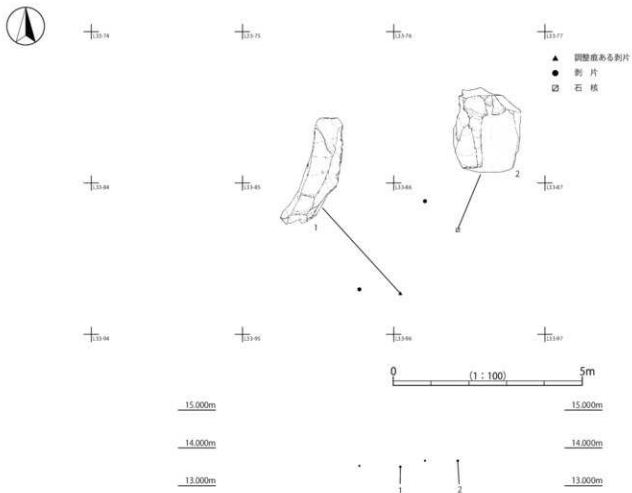
坂川に流入する小河川により開析された台地の平坦部に所在する。ブロックの北側には東西方向にわたる帯状の微高地が見られるが、ブロックを検出した地点の標高は微高地よりも1mほど下がる。立川ローム層の状況が不明瞭であるが、後世の削平により旧地形が大きく変えられていると考えられる。出土層位は不明であるが、出土標高が16m前後であることと削平された深度を鑑み、旧地表面から1.5m下に位置することが想定される。近隣の第4ブロックの立川ローム層の堆積状況と照合すると、Ⅹ層付近に対比できる。

第3ブロックの石器組成は、定型的な石器は含まれず、調整痕の認められる剥片、剥片、石核で構成される。使用石材は黒曜石の剥片1点の他25点は黒色安山岩で占められる。O37-59グリッドを中心に集中区で直径3m、分布範囲は長軸5m程の楕円形状を呈する。

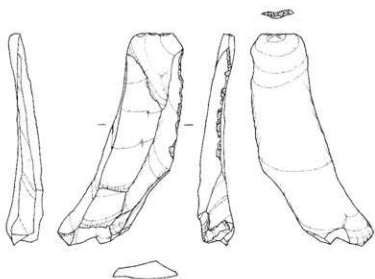
1は黒色安山岩製の調整痕の認められる剥片である。縦長剥片であるが、中途付近に最大幅をもち、片側縁側に極端に張り出す感のある形状である。調整は素材剥片の打面側に認められ、打面を除去するような微細な調整が背面側から施される。2は黒色安山岩製の大型の縦長剥片であり、打面部直下に最大幅を有する。全体に薄い作りであり、末端部は鋭く尖る。3・4は黒色安山岩製の不定形剥片であり、背面には原礫面が遺存する。5は黒曜石製の小型不定形剥片である。末端部はヒンジ・フラクチュアとなる。6は黒色安山岩製の石核である。円礫を素材とし、打面転移を行いながら剥片を作出している。剥離工程初期段階の剥離は裏面に見られる一連の剥離痕であり、次の段階でこの剥離を打面とし上面、正面右側からの剥片剥離を行っている。7・8は黒色安山岩製の接合資料である。7は剥片2点と打割した石核との接合例である。7-1・2の剥片は共に部厚な作りであり、原礫面を打面とし作出される。7-3の石核に見られる剥離痕からは部厚な大型剥片を作出している様子は看取できないことから、剥片剥離工程の初期段階に原礫打割の目的で作出された剥片と考えられる。8は剥片3点と石核の接合例である。8-1・2の剥片は背面に大きく原礫面を有し、1の作出後、打点を大きく移動し2を作出している。このため8-1・2は石核整形を目的として作出された剥片と考えられる。8-3は最終打面から作出された剥片であり、この剥片を作出後数回の剥片剥離の後作業を終了している。

4 第4ブロック (第27～29図、図版28)

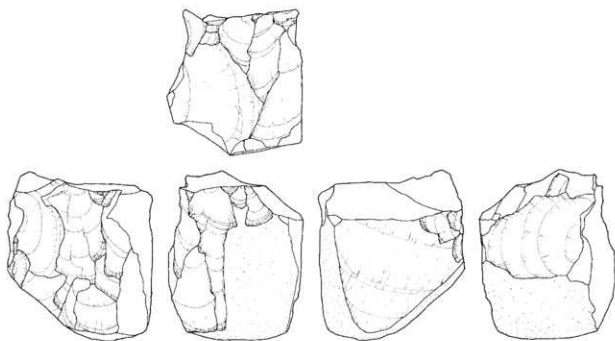
坂川に流入する小河川により開析された舌状台地の付け根付近、標高15m付近に所在する。M38-37グリッドからM38-47グリッドにかけて石器が点在し、特に集中区は形成しない。黒色安山岩、チャート、



第20図 第2ブロック器種別・石材別分布



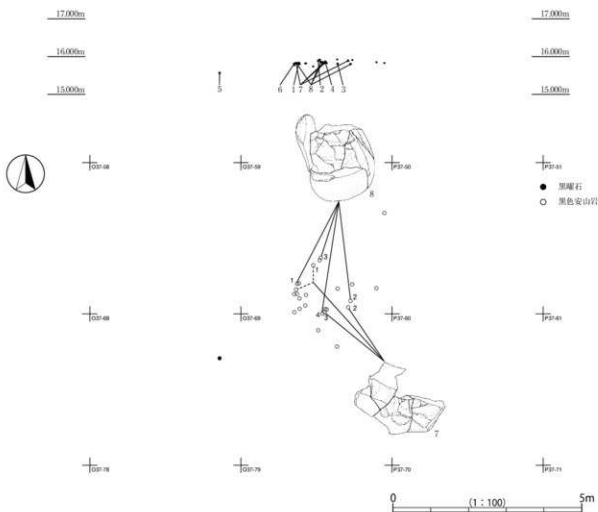
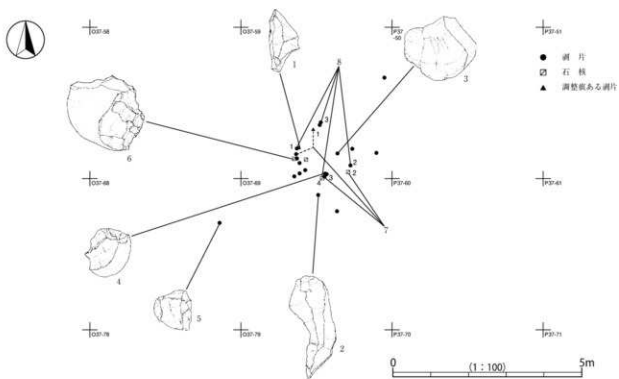
1 L33-86.1 流紋岩 割断線ある剥片



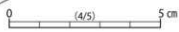
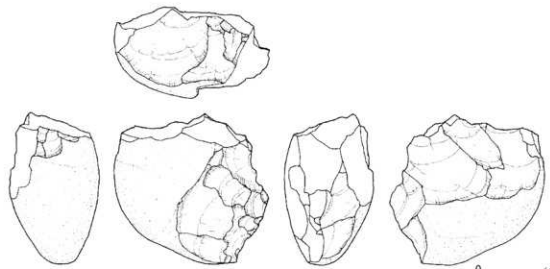
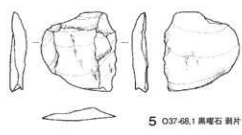
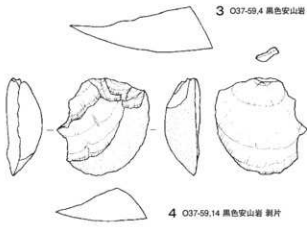
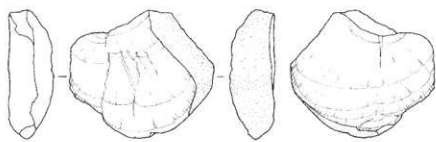
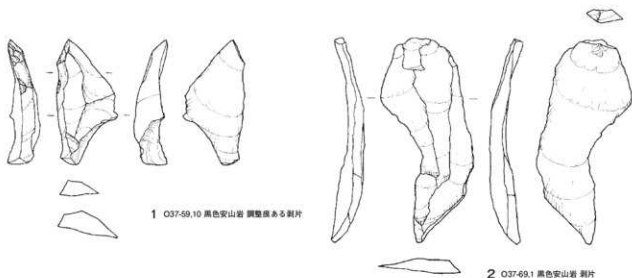
2 L33-86.4 黑色頁岩 石核



第21図 第2ブロック出土遺物

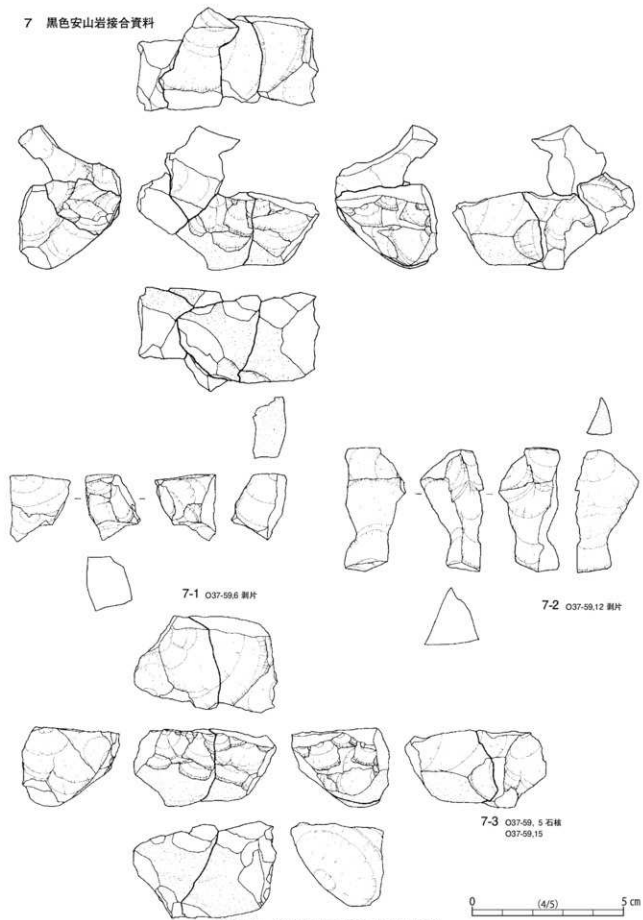


第22図 第3ブロック器種別・石材別分布



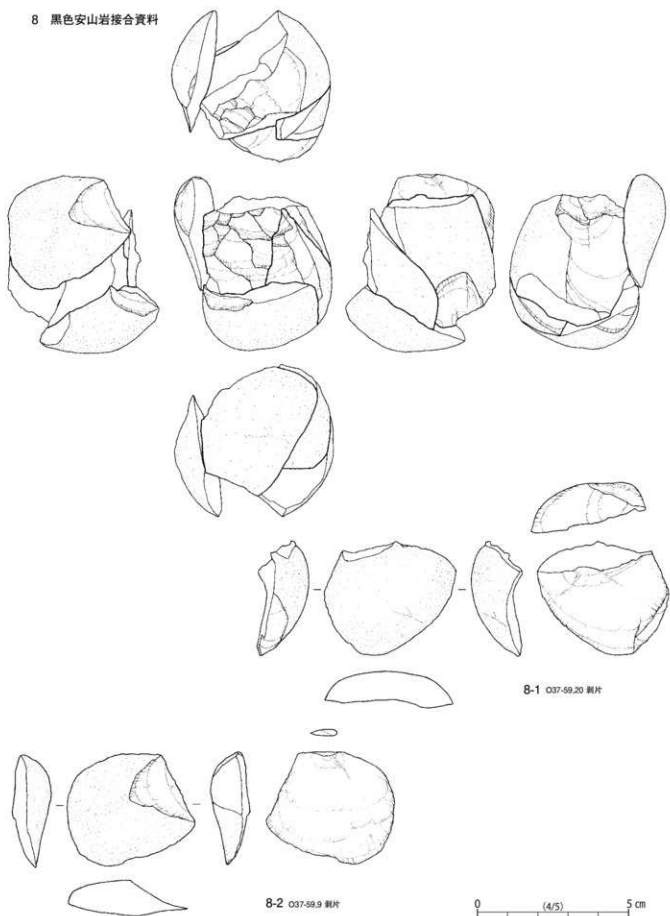
第23図 第3ブロック出土遺物(1)

7 黒色安山岩接合資料

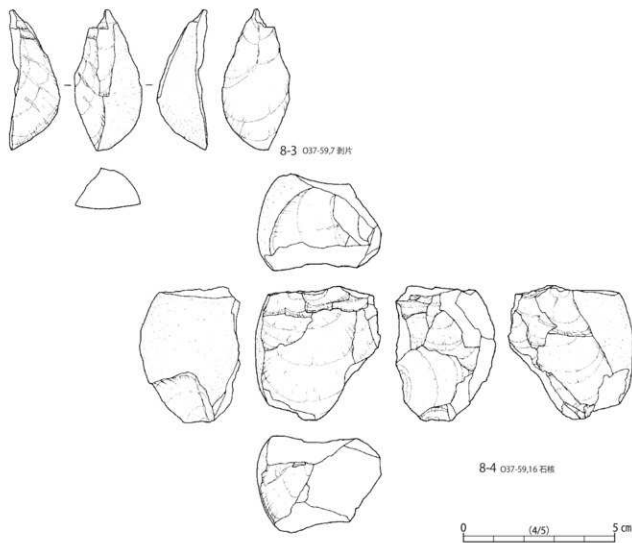


第24図 第3ブロック出土遺物(2)

8 黒色安山岩接合資料



第25図 第3ブロック出土遺物(3)

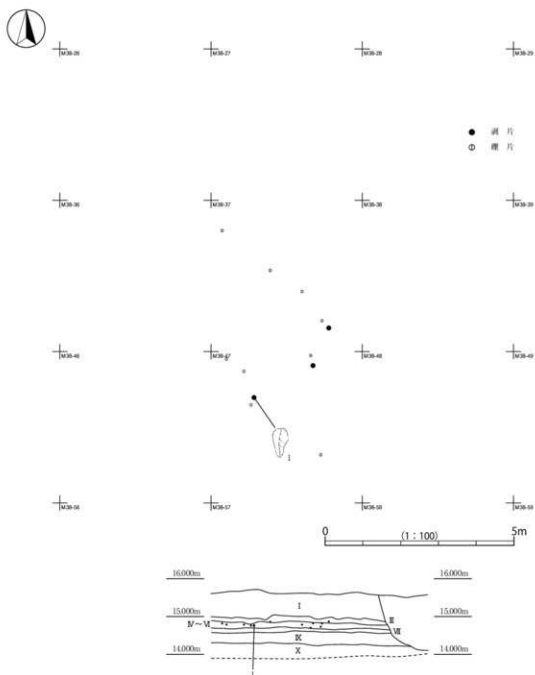


第26図 第3ブロック出土遺物(4)

凝灰岩の小型剥片の他、砂岩、安山岩等の破砕、礫で構成され、出土層位はⅢ層からⅥ層にかけてである。1は黒色安山岩製の剥片である。小型の縦長剥片であり、打面を広く設定し作出される。背面には原礫面が遺存する。

5 第5ブロック(第30～36図、図版2・28～31)

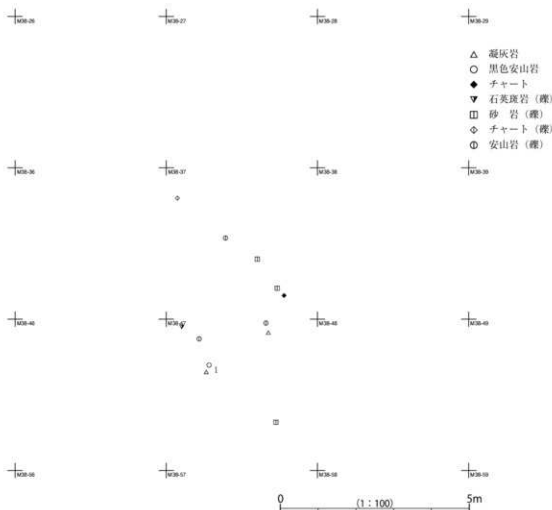
坂川に流入する小河川に開析された舌状台地に所在する。北側及び南東から進入する浅い谷の合流点であり、この地点の標高は14mを測る。分布域は南北13m、東西14mを測り、N33-42グリッド付近に1か所、N33-33グリッド付近に1か所、N33-53グリッド付近に1か所、N33-62グリッド付近に1か所の合計4か所の集中区が認められる。石器の出土点数は140点を数え、点数的、重量比的にも黒色頁岩が半数を占める。他の石材は黒色安山岩、安山岩(トトロ石)、ホルンフェルス、チャート、頁岩が使用される。定型的な石器はナイフ形石器が挙げられ、黒色頁岩、黒色安山岩、安山岩(トトロ石)製の個体が見られる。剥片石器の他、礫・礫片が共伴し、個体数、重量比でもチャート製の個体が主体となる。石器の出土層位はⅡc層～Ⅲ層とされた層からⅤ層にかけてである。標高差は0.45m、平均標高は13.532mとなり、ソフ



第27図 第4ブロック器種別分布

トローム層の下部に該当する。

1～7はナイフ形石器である。1～4は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、2以外のものは素材剥片の打面側を基部とし、素材剥片の打面を除去するように背腹両面に調整が施される。3・4は基部のみの遺存であるが、1と同様に片側縁のほぼ全域に調整が施されたものと考えられる。2の調整は片側縁の先端部から中途で終了しており、形状も同石材の他のナイフ形石器とは異なる。5・6は黒色安山岩製のナイフ形石器である。前述した黒色頁岩製のナイフ形石器と比較すると大型であることが指摘できる。5については両側縁に対して調整が施されるが、腹面への調整は皆無である。6は縦長剥片を素材とし、二側縁

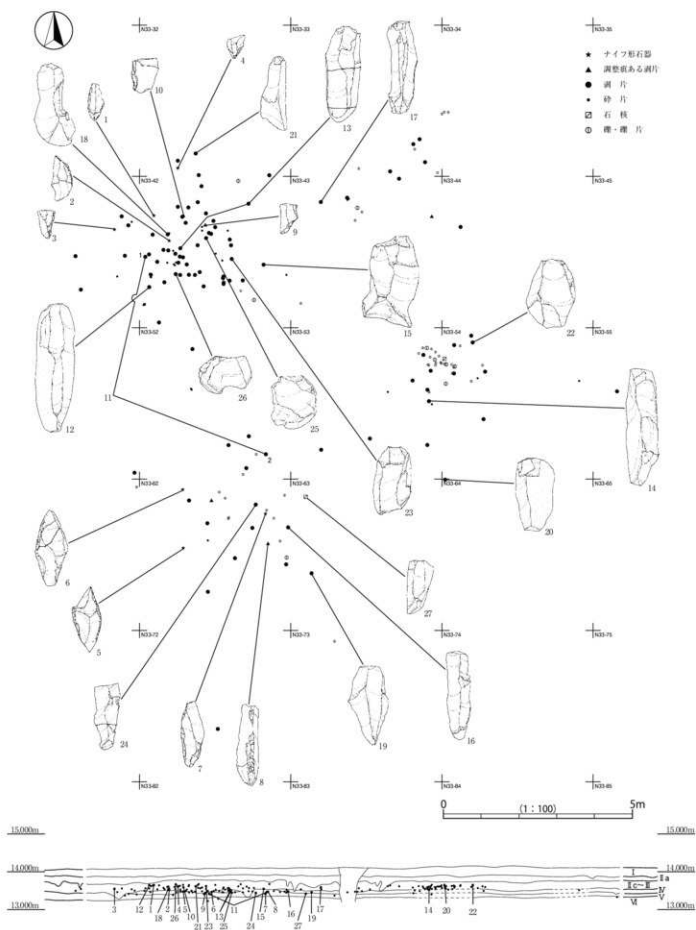


第28図 第4ブロック石材別分布

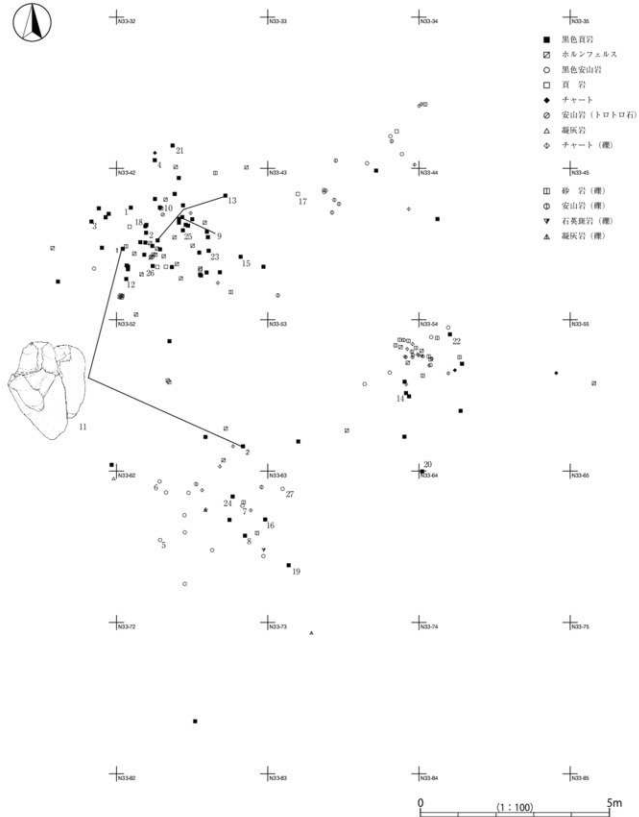


第29図 第4ブロック出土遺物

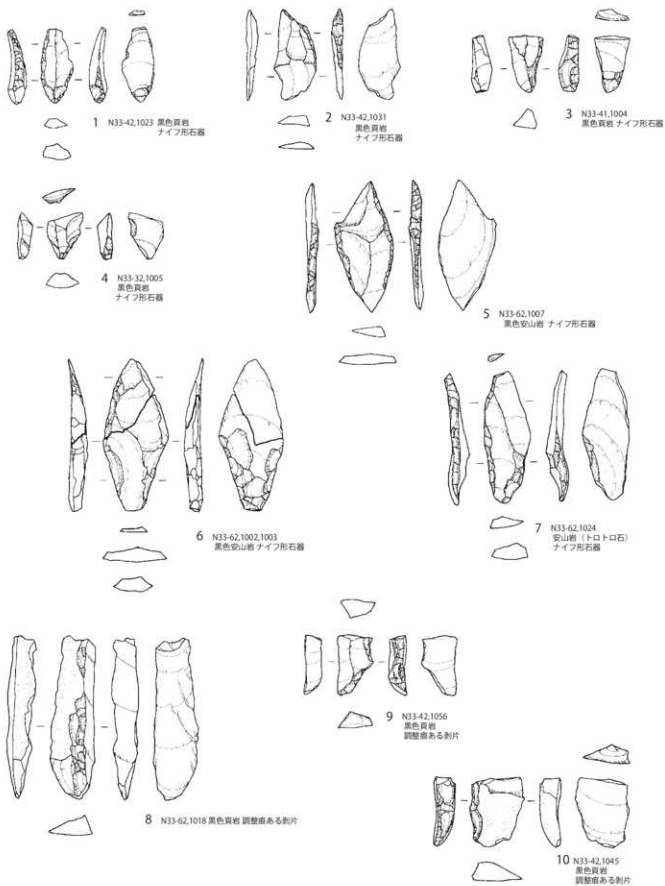
及び腹面基部付近には緻密な調整が施される。7は安山岩（トトロ石）製の縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面を背面側からの調整により除去している。調整は2側縁に対して施されるが、腹面側の調整は見られない。8～10は黒色頁岩製の調整痕の認められる剥片である。8は縦長剥片の背面後部に対し、調整が密に施される。9・10は縦長剥片の片側縁に腹面側からの調整が密に施される。両者とも剥片の打面側が欠損しており、この部位の調整は不明であるが、ナイフ形石器の作出を意図している可能性も考えられる。11は黒色頁岩製の剥片2点の接合資料である。部厚な大型剥片の接合例であり、各々の打面は石核に対して同方向であるが剥離工程を異にし、11-1の剥片を作出後に打面再生が行われ、11-2を作出している。12～26は黒色頁岩製の剥片である。一様に縦長剥片であり、背面構成も腹面の剥離の方向とはほぼ同一方向の剥離である。縦長剥片の連続的な作出を意図していることが顕著に



第30図 第5ブロック器種別分布

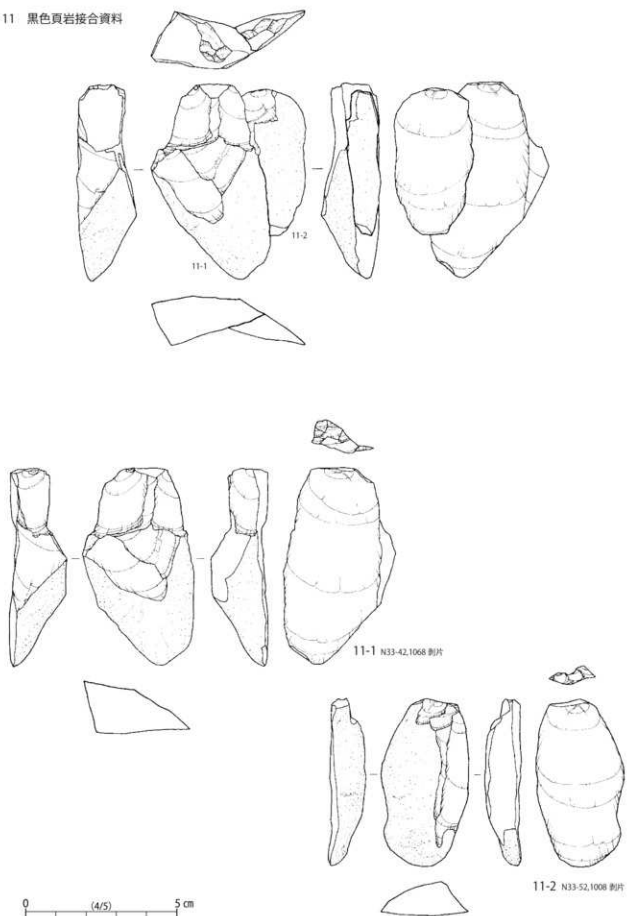


第31図 第5ブロック石材別分布

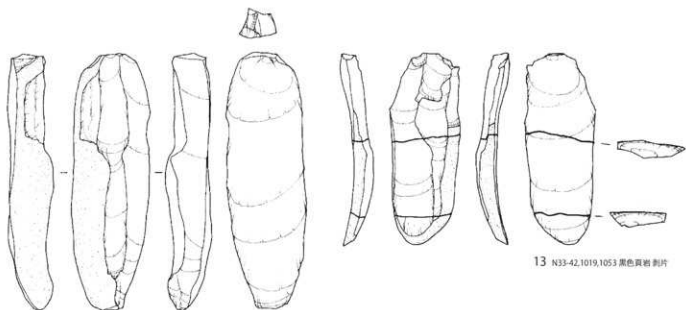


第32図 第5ブロック出土遺物(1)

11 黑色頁岩接合資料

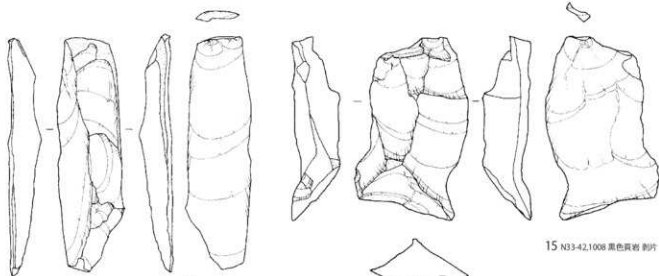


第33図 第5ブロック出土遺物(2)



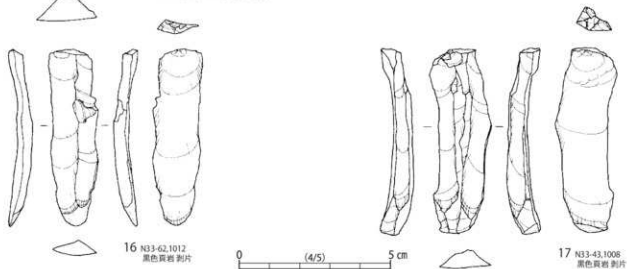
12 N33-42,1027 黒色頁岩剥片

13 N33-42,1019,1053 黒色頁岩剥片



14 N33-53,1019 黒色頁岩剥片

15 N33-42,1008 黒色頁岩剥片

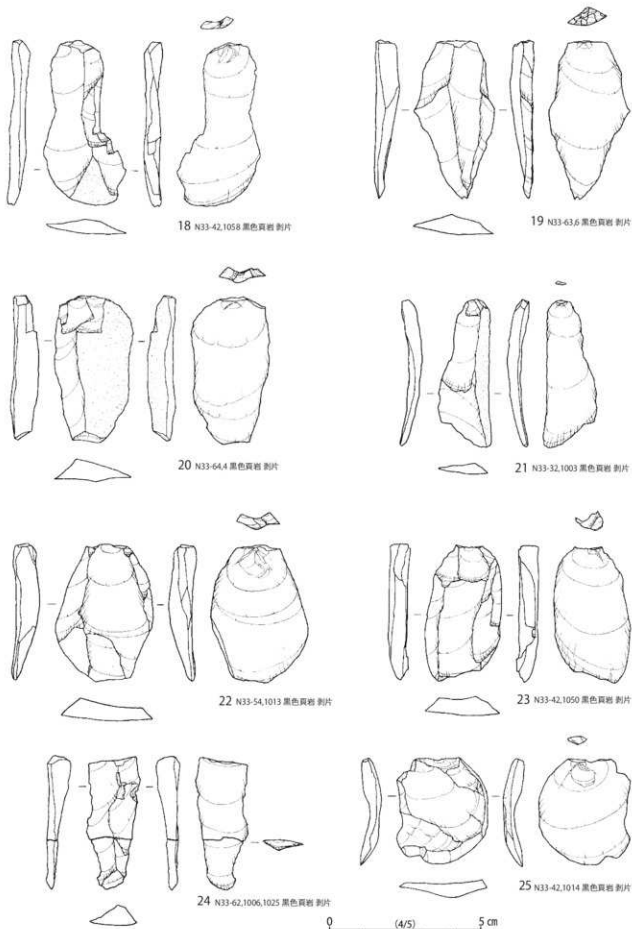


16 N33-62,1012
黒色頁岩剥片

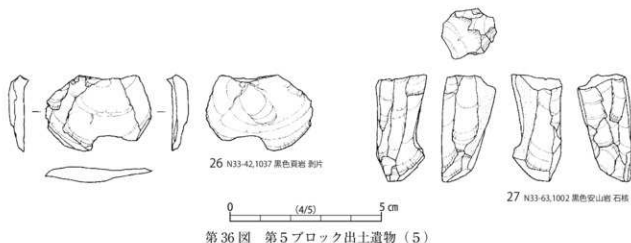
17 N33-43,1008
黒色頁岩剥片

0 (4/5) 5 cm

第34図 第5ブロック出土遺物(3)



第35図 第5ブロック出土遺物(4)



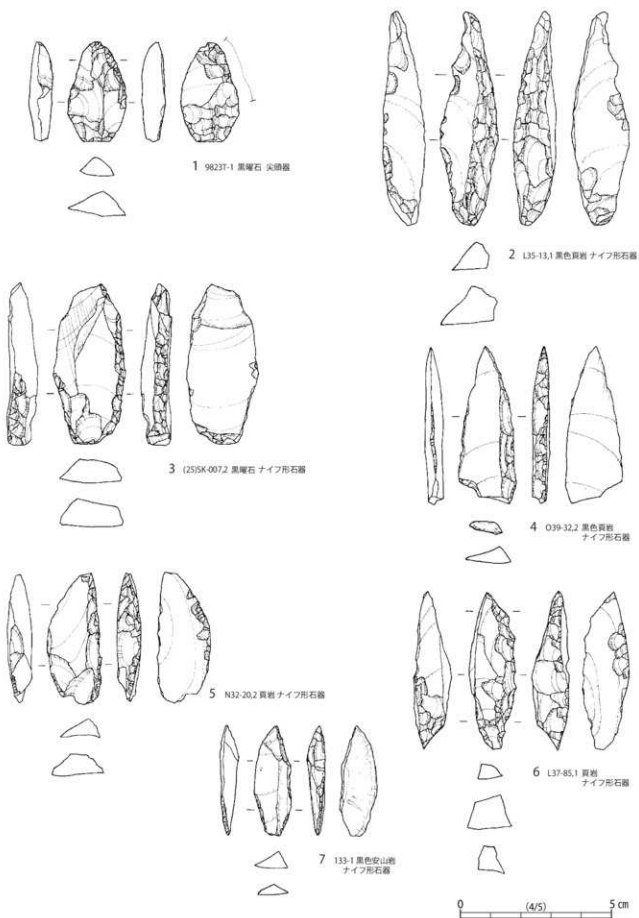
第36図 第5ブロック出土遺物(5)

窺える。剥片の断面形状は背面に明瞭な1条の稜線を有し二等辺三角形を呈するもの(12・14・16)、複数の稜線を有し扁平な台形を呈するもの(13・17～24)の2種が認められる。25・26は不定形剥片で、背面に見られる剥離の方向は一定しないため、石核整形もしくは打面再生を目的として作出された剥片と考えられる。27は黒色安山岩製の石核である。長軸5cmに満たない小型石核であるが、同一方向に設定された打面から連続的に剥片を作出しているため、逆角錐に近い形状となる。

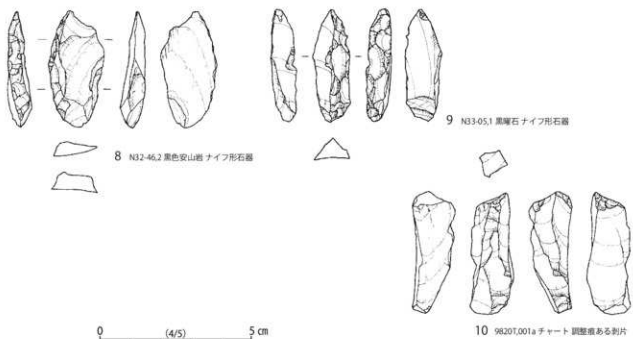
6 単独出土遺物(第37・38図、図版32)

後平井中通過跡の調査では、当該時期の単独出土石器が数多く出土した。前述したブロックに属する可能性のある石器も見受けられるが、帰属させる根拠に欠けるため、それらを含め単独出土遺物として扱った。

1は黒曜石製の槍先形尖頭器である。部厚な縦長剥片を素材とし、剥片末端部を先端部に設定し製品化している。先端部から基部にかけて丸みを帯び、基部が欠損するが中央よりやや基部側に最大幅をもつ形状である。背腹両面に調整がみられ、先端部から左側縁に対して種状剥離が認められる。2～9はナイフ形石器である。2は黒色頁岩製の縦長剥片の打面側を基部に設定し、調整は主に素材剥片の片側縁に施され、背腹両面から密に行われている。3は透明度の高い黒曜石製であり、大型の縦長剥片を素材としている。末端部に厚みのある素材剥片であり、末端部を基部側に設定し、先端部に該当する素材剥片打面部は調整により除去される。調整は右側縁の全てと左側縁の基部に対して行われ、腹面側からの密な調整が施される。4は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、素材剥片の末端部側を先端部に設定し、鋭利な先端部を作出している。基部に近い部位に最大幅をもち、この部位より基部にかけて急激に横幅が減少する形状である。5は頁岩製の横長剥片を素材とし、調整は主に素材剥片の打面部に対して施される。6は頁岩製の部厚な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部を除去するような調整が施される。この部位の調整は腹面側から急角度で行われており、このため横断面は正方形に近い形状となる。7は黒色安山岩製の横長剥片を素材とし、素材剥片の打面を除去するような調整が施される。先端部に近い部位に最大厚をもつ形状である。8は黒色安山岩製の不定形剥片を素材とし、素材剥片の末端部から片側縁にかけて調整が施される。9は黒曜石製の部厚な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部に対し背腹両面からの調整により製品化している。急角度の調整であるため、横断面は正三角形に近い形状となる。10はチャート製の調整痕の認められる剥片である。部厚な縦長剥片の打面部を除去後、折面からの調整が背面に施される。



第37図 単独出土遺物(1)



第38図 単独出土遺物（2）

第4表 旧石器時代出土石器属性表

博物館番号	発掘 番号	プロット 番号	グリッド 番号	層位 番号	種別	器種	石材	目録 番号	保存 番号	報告 番号	報告 期年	最大幅 mm	最大長 mm	最大厚 mm	重量 g	X	Y	Z	備考	
第19802	5	1	137-2	2	削片	燧石						2.08	2.05	0.28	3.02	165253.41	101.109	101927		
第19801	5	1	137-5-3	3	削片	燧石						2.73	3.47	0.472	0.19	165053.990	2570.309	19.150		
	5	1	137-10	3	削片	燧石						0.80	0.65	0.26	0.10	165055.690	2672.443	19.049		
	5	1	137-11	3	削片	燧石						2.01	2.51	0.31	0.09	165049.311	2469.664	19.006		
	5	1	138-3	2	削片	燧石						3.82	3.02	1.35	0.59	166114.810	2963.090	13.525		
第21011	13	2	133-8	2	削片	燧石						1.11	1.02	0.09	1.12	161125.269	1664.197	13.540		
	13	2	133-8	3	削片	燧石						-1.18	-2.41	0.089	0.65	166114.810	1664.859	13.620		
第21012	13	2	134-8	4	石核	燧石						3.27	0.65	3.27	117.12	161133.243	2966.000	13.609		
	13	2	135-2	1	削片	燧石						2.68	2.19	0.48	0.10	165031.211	2798.738	15.655		
	13	2	135-2	2	削片	燧石						3.39	2.40	0.57	4.57	165033.119	2799.587	15.675		
	13	2	135-2	3	削片	燧石						2.43	1.58	1.21	0.63	166263.113	2798.949	15.598		
第24011	19	3	137-9	4	削片	燧石						4.03	4.67	0.45	2.86	165033.523	2798.528	15.834		
第24012	19	3	137-9	5	石核	燧石						h	3.71	3.32	2.69	24.35	165033.624	2798.837	15.915	
第24013	19	3	137-9	6	削片	燧石						a	2.25	2.13	1.39	8.99	165032.581	2798.984	15.836	
第24014	19	3	137-9	7	削片	燧石						c	4.69	2.71	1.38	12.63	165024.516	2798.114	15.881	
	19	3	137-9	8	削片	燧石						e	2.86	1.72	0.65	3.05	165032.103	2797.914	15.764	
第24015	19	3	137-9	9	削片	燧石						a	3.55	4.18	1.29	20.10	165033.204	2797.887	15.849	
第24016	19	3	137-9	10	燧石製あみ網目	燧石						2.18	2.07	0.65	3.77	165031.183	2797.555	15.809		
第24017	19	3	137-9	11	石核	燧石						3.55	4.90	2.90	90.76	165033.475	2799.411	15.847		
第24018	19	3	137-9	12	削片	燧石						a	4.21	2.07	1.96	12.18	165033.554	2797.461	15.833	
第24019	19	3	137-9	13	削片	燧石						3.85	2.14	0.70	6.04	165033.809	2798.771	15.855		
第24020	19	3	137-9	14	削片	燧石						3.18	3.10	1.13	10.35	165033.809	2798.552	15.891		
第24021	19	3	137-9	15	石核	燧石						c	3.89	2.26	2.18	25.69	165033.251	2798.211	15.851	
第24022	19	3	137-9	16	石核	燧石						d	3.52	4.12	3.75	37.61	165033.809	2798.153	15.877	
	19	3	137-9	17	削片	燧石						3.25	4.37	0.35	3.47	165033.777	2799.732	15.845		
	19	3	137-9	18	削片	燧石						2.30	1.53	0.48	2.17	165033.863	2799.255	15.826		
第24023	19	3	137-9	19	削片	燧石						1.98	1.65	0.48	0.83	165033.409	2799.243	15.833		
第24024	19	3	137-9	20	削片	燧石						b	4.30	3.74	1.45	28.83	165033.654	2798.902	15.827	
	19	3	137-9	21	石核	燧石						3.78	2.61	1.23	20.20	165033.295	2799.273	15.835		
	19	3	137-9	22	削片	燧石						3.04	2.92	0.43	3.63	165033.409	2799.243	15.833		
	19	3	137-9	23	削片	燧石						3.75	1.69	0.62	4.13	165033.499	2797.485	15.833		
第24025	19	3	137-9	24	石核	燧石						3.61	2.54	0.55	3.38	165033.113	2798.211	15.833		
第24026	19	3	137-9	25	削片	燧石						6.27	3.01	0.56	10.19	165043.433	2798.005	15.915		
第24027	19	3	137-9	26	削片	燧石						2.84	2.00	0.67	4.03	165034.861	2798.249	15.950		
	19	3	137-9	27	削片	燧石						3.25	2.58	0.78	3.75	165034.861	2798.249	15.950		
	19	3	137-9	28	削片	燧石						2.27	1.82	0.43	2.29	165036.368	2710.008	14.820		
	19	3	137-9	29	削片	燧石						7.32	3.86	0.93	7.32	165036.103	2710.008	14.700		
	19	3	137-9	30	削片	燧石						3.01	2.13	1.03	3.17	165036.103	2710.008	14.868		
	19	3	137-9	31	削片	燧石						11.028	16.95	1.83	22.00	165036.103	2710.008	14.816		
	19	3	137-9	32	削片	燧石						39.25	38.94	4.13	70.02	165036.103	2710.008	14.725		
	19	3	137-9	33	削片	燧石						4.15	3.25	1.16	4.15	165036.103	2710.008	14.861		
	19	3	137-9	34	削片	燧石						4.06	3.62	0.82	7.08	201.3	2708.203	14.813		
	19	3	137-9	35	削片	燧石						13.35	16.98	1.94	23.88	201.3	2708.203	14.727		
	19	3	137-9	36	削片	燧石						29.93	29.64	3.17	55.61	201.3	2708.203	14.726		
第24028	19	3	137-9	37	削片	燧石						1.91	1.03	0.45	0.66	165026.214	2699.157	14.763		
	19	3	137-9	38	削片	燧石						3.09	3.29	0.88	2.09	165026.214	2699.157	14.728		
第24029	19	3	N33-2	1002	削片	燧石						1.69	2.27	0.62	2.50	165026.651	2725.561	13.974		
	19	3	N33-2	1003	削片	燧石						4.88	1.76	0.43	3.28	165026.307	2720.483	13.613		
	19	3	N33-2	1004	削片	燧石						2.52	1.61	1.28	4.02	165026.514	2720.011	13.624		
第24030	19	3	N33-2	1005	削片	燧石						1.62	1.12	0.41	0.79	165026.728	2720.513	13.610		
	19	3	N33-2	1006	削片	燧石						3.41	0.80	0.75	3.63	165026.967	2721.436	13.673		
	19	3	N33-2	1007	削片	燧石						7.52	0.95	0.78	7.52	165026.728	2721.804	13.564		
	19	3	N33-2	1008	削片	燧石						1.48	1.96	0.63	1.18	165026.862	2721.033	13.529		
	19	3	N33-2	1009	削片	燧石						2.08	0.95	0.79	2.73	165026.728	2721.929	13.505		
	19	3	N33-2	1010	削片	燧石						2.27	1.49	0.19	0.79	165026.512	2723.411	13.588		
	19	3	N33-2	1011	削片	燧石						1.29	1.89	0.52	1.90	165026.523	2723.559	13.577		
	19	3	N33-2	1012	削片	燧石						16.67	0.95	0.93	7.83	165026.903	2723.883	13.611		
	19	3	N33-2	1013	削片	燧石						2.39	2.75	0.45	2.37	165026.189	2723.208	13.525		
	19	3	N33-2	1014	削片	燧石						3.82	2.68	0.61	3.82	165026.189	2723.006	13.608		
	19	3	N33-2	1015	削片	燧石						3.32	2.69	1.48	7.00	165026.189	2723.006	13.574		
	19	3	N33-2	1016	削片	燧石						1.45	1.37	0.47	0.71	165026.038	2722.557	13.559		
	19	3	N33-2	1017	削片	燧石						0.84	1.31	0.21	0.29	165026.182	2722.750	13.537		
	19	3	N33-2	1018	削片	燧石						1.11	1.09	0.27	0.61	165026.182	2722.750	13.614		
第24031	19	3	N33-2	1019	削片	燧石						1.81	1.14	0.65	1.30	165026.259	2722.301	13.548		
	19	3	N33-2	1020	削片	燧石						0.62	0.71	0.25	0.17	165026.414	2722.414	13.601		
	19	3	N33-2	1021	削片	燧石						7.04	1.68	0.43	4.90	165026.414	2722.414	13.601		
	19	3	N33-2	1022	削片	燧石						3.52	1.51	0.33	2.52	165026.968	2726.452	13.544		
	19	3	N33-2	1023	削片	燧石						2.69	2.61	0.59	3.21	165026.829	2727.613	13.520		
	19	3	N33-2	1024	削片	燧石						1.42	1.10	0.39	0.93	165026.860	2728.510	13.649		
	19	3	N33-2	1025	削片	燧石						0.77	0.82	0.24	0.36	165026.969	2728.125	13.497		
	19	3	N33-2	1026	削片	燧石						0.81	0.76	0.29	0.27	165026.969	2728.125	13.497		
	19	3	N33-2	1027	削片	燧石						0.87	0.92	0.24	0.25	165026.969	2728.125	13.497		
	19	3	N33-2	1028	削片	燧石						3.32	0.43	0.23	0.11	165026.969	2728.125	13.497		
	19	3	N33-2	1029	削片	燧石						2.92	2.32	0.39	3.42	165026.969	2728.125	13.497		
	19	3	N33-2	1030	削片	燧石						3.71	3.52	0.82	8.49	165026.186	2730.738	13.540		
	19	3	N33-2	1031	削片	燧石						2.62	1.89	1.12	3.62	165026.186	2730.738	13.495		
第24032	19	3	N33-2	1032	削片	燧石						6.01	3.47	1.48	26.53	165026.111	2731.877	13.581		
	19	3	N33-2	1033	削片	燧石			</											

棟号	フロア	グリッド	層高	構造	柱径	部種	石材	設計	積小	積大	積大	積大	積大	積大	X	Y	Z	備考
棟号	フロア	グリッド	層高	構造	柱径	部種	石材	設計	積小	積大	積大	積大	積大	積大	X	Y	Z	備考
3	5	N3333	1025	鋼骨	φ900	チャート								26.52	16030796	7730333	133295	
3	5	N3333	1025	鋼骨		チャート								27.06	16030796	7730362	133210	
3	5	N3354	1026	石積		ノンランダムス			4.23	6197	3.26	5982	16030017	7736171	7736171	133618		
3	5	N3354	1023	鋼骨		石積								101.00	16030064	7736009	133630	
3	5	N3354	1024	鋼骨		石積								1009	16030386	7736372	133634	
3	5	N3354	1025	鋼骨		石積								54.61	16030971	7736259	133623	
3	5	N3354	1026	鋼骨		単体支柱			3.33	1.49	0.59	1.83	16030293	7736316	7736316	133628		
3	5	N3354	1027	鋼骨		単体支柱			3.07	2.52	1.88	2.74	16030478	7736103	7736103	133622		
3	5	N3354	1028	鋼骨		単体支柱			1.10	1.36	0.93	0.93	16030413	7737106	7737106	133604		
3	5	N3354	1029	鋼骨		チャート								90.65	16030412	7736779	133599	
3	5	N3354	1031	鋼骨		チャート			0.85	0.85	1.00	0.01	16031313	7736951	7736951	133703		
3	5	N3354	1031	鋼骨		単体支柱		2	2.89	3.02	0.39	1.84	16030461	7737143	7737143	133597		
3	5	N3354	1022	鋼骨		単体支柱			0.83	16030899	7737075	7737075	133615					
3	5	N3354	1023	鋼骨		単体支柱			4.58	3.21	0.70	12.82	16030362	7736929	7736929	133609		
3	5	N3354	1024	鋼骨		単体支柱		1	2.10	0.84	0.55	2.83	16030308	7736779	7736779	133598		
3	5	N3354	1025	鋼骨		単体支柱			1.86	1.86	0.78	1.86	16030478	7736381	7736381	133581		
3	5	N3354	1026	鋼骨		単体支柱			7.06	1.75	0.74	3.71	16030469	7736331	7736331	133581		
3	5	N3354	1027	鋼骨		チャート			0.70	0.74	0.12	0.06	16030465	7736862	7736862	133535		
3	5	N3354	1028	鋼骨		チャート			1.52	1.75	0.87	28.53	16030386	7736113	7736113	133652		
3	5	N3354	1029	鋼骨		チャート			0.06	3.35	2.47	0.09	16030203	7736343	7736343	133615		
3	5	N3354	1029	鋼骨		チャート			14.21	26.03	20.5	7736277	7736277	133541				
3	5	N3354	1030	鋼骨		ノンランダムス			1.00	16030481	7736553	7736553	133582					
3	5	N3341	1001	鋼骨		複合			33.52	0.80	0.30	1.05	16030408	7736925	7736925	133618		
3	5	N3347	1002	ナチク右側	単体支柱				28.27	1.25	0.44	1.52	16030466	7740314	7740314	133600		
3	5	N3347	1003	ナチク右側	単体支柱				4.82	2.16	0.60	3.90	16030471	7739009	7739009	133606		
3	5	N3347	1004	鋼骨		単体支柱			51.46	16030433	7738110	7738110	133600					
3	5	N3347	1005	鋼骨		チャート			30.07	16030404	7739396	7739396	133530					
3	5	N3347	1006	鋼骨		単体支柱		4	2.26	1.74	0.65	0.65	16030411	7737103	7737103	133611		
3	5	N3346	1007	ナチク右側	単体支柱				4.27	1.96	0.37	3.80	16030521	7738115	7738115	133614		
3	5	N3347	1008	鋼骨		単体支柱			7.65	2.40	0.64	4.40	16030516	7740799	7740799	133628		
3	5	N3347	1009	鋼骨		単体支柱			0.52	1.03	0.23	0.13	16030519	7739312	7739312	133600		
3	5	N3346	1010	鋼骨		単体支柱			1.98	0.75	0.15	0.32	16030599	7738989	7738989	133628		
3	5	N3347	1011	鋼骨		チャート			8.98	16030533	7737324	7737324	133621					
3	5	N3347	1012	鋼骨		単体支柱		1	4.52	16030525	7737933	7737933	133600					
3	5	N3346	1013	鋼骨		単体支柱			3.82	1.69	0.47	1.47	16030427	7737839	7737839	133625		
3	5	N3347	1014	鋼骨		単体支柱			18.57	16030421	7737364	7737364	133609					
3	5	N3347	1025	鋼骨		単体支柱			9.30	16030527	7737571	7737571	133606					
3	5	N3346	1026	鋼		石積			0.52	0.65	2.85	89.25	16030674	7737893	7737893	133617		
3	5	N3347	1027	鋼骨		単体支柱			1.20	1.48	0.48	1.10	16030649	7737887	7737887	133611		
3	5	N3346	1028	複合		複合		2	5.25	1.55	0.69	6.85	16030512	7737399	7737399	133624		
3	5	N3346	1029	鋼骨		単体支柱			3.74	0.93	0.32	2.44	16030690	7730331	7730331	133600		
3	5	N3346	1029	鋼骨		単体支柱			1.61	1.20	0.65	0.63	16030686	7738341	7738341	133622		
3	5	N3346	1031	鋼骨		単体支柱			5.08	16030515	7738361	7738361	133603					
3	5	N3342	1028	ナチク右側	単体支柱 1345 (右)				4.35	1.63	0.65	3.24	16030914	7731333	7731333	133613		
3	5	N3342	1025	鋼骨		単体支柱		4	a	1.77	1.32	0.35	0.61				133624	
3	5	N3342	1026	鋼骨		単体支柱			6.70	2.70	0.65	6.09	16030542	7740300	7740300	133604		
3	5	N3343	6	鋼骨		単体支柱		2	3.71	1.68	1.09	11.85	16030468	7735800	7735800	133620		
3	5	N3343	1005	石積		単体支柱		1	b	4.80	2.11	0.87	10.95				133625	
3	5	N3343	1006	鋼骨		単体支柱			2.64	1.12	0.32	1.22	16030430	7738082	7738082	133628		
3	5	N3373	1005	鋼骨		複合			10.09	16030829	7735159	7735159	133620					
3	5	N3376	1	単体		ナチク右側	柱		5.22	1.28	1.05	8.81					133696	
3	5	N3377	1	単体		複合	単体支柱		0.99	1.48	1.51	8.06					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		1.81	1.89	0.58	0.39					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		2.01	2.26	0.92	0.52					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		5.12	1.93	1.35	16.03					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		3.65	1.20	0.76	0.35					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		3.67	1.25	0.61	2.52					133696	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			2.38	2.39	0.25	1.16					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			3.22	1.28	0.46	2.16					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			2.80	2.42	0.31	2.11					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			2.40	1.72	0.48	1.63					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			1.94	1.24	0.39	0.28					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			3.53	2.60	0.38	2.02					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			1.38	0.97	0.14	0.31					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	柱		4.35	1.76	0.83	5.38					11898	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			4.78	2.97	1.12	2.87					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱 1345 (右)			5.41	3.47	0.68	8.43					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			1.20	1.75	0.55	0.84					17800	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			2.18	3.55	1.79	10.97					15583	
3	5	N3378	1	単体		チャート			2.82	1.99	0.68	4.08					133698	
3	5	N3378	1	単体		チャート			1.68	2.04	0.98	3.31					133698	
3	5	N3378	1	単体		チャート			1.85	2.30	0.85	3.74					133698	
3	5	N3378	1	単体		単体支柱			2.79	2.24	0.57	2.58					133698	
3	5	N3378	1	単体		複合	単体支柱		3.83	1.82	0.60	4.52					133698	
3	5	N3378	1	単体		ナチク右側	単体支柱		5.31	3.39	0.98	12.03					133698	

第5表 旧石器ブロック別組成表

第1ブロック

	割片	礫片	計	組成比
黒曜石	4.19g	1	4.19g	50.00%
チャート	1.29g	1	1.29g	30.00%
計	5.47g	2	5.47g	100.00%
組成比	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
安山岩	6.15g	3	6.15g	100.00%
計	6.15g	3	6.15g	100.00%
組成比	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

第2ブロック

	調整ある割片	割片	石核	計	組成比	
黒色頁岩		1		1	25.00%	
頁岩	6.25g			6.25g	1	25.00%
計	15.12g	1		15.12g	1	6.72%
砂岩		1		32.49g	1	25.00%
礫岩				171.12g	1	25.00%
計	15.12g	2	171.12g	171.12g	4	100.00%
組成比	25.00%	50.00%	25.00%	100.00%	100.00%	100.00%
	6.72%	17.22%	78.06%	100.00%		

第3ブロック

	調整ある割片	割片	石核	計	組成比		
黒曜石	3.36g	1		3.36g	1	34.7%	
黒色安山岩	8.82g	2	19	219.98g	4	25	96.16%
計	8.82g	2	20	219.98g	4	26	100.00%
組成比	7.80%	230.8%	210.9%	129.6%	100.00%	100.00%	100.00%
	2.09%	47.2%	50.16%	100.00%			

第4ブロック

	割片	礫片	計	組成比	
黒色安山岩	0.66g	1	0.66g	1	33.33%
チャート	5.17g	1	5.17g	1	33.33%
礫岩	2.97g	1	2.97g	1	33.33%
計	8.80g	3	8.80g	3	100.00%
組成比	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	
砂岩	175.98g	3	175.98g	3	33.33%
安山岩	103.43g	3	103.43g	3	33.33%
チャート	4.98g	1	4.98g	1	11.11%
石英質岩	15.32g	1	15.32g	1	11.11%
礫岩	5.69g	1	5.69g	1	11.11%
計	305.00g	9	305.00g	9	100.00%
組成比	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	

第5ブロック

	ナイフ形石器	調整ある割片	割片	砕片	石核	礫	礫片	計	組成比			
黒色頁岩	4.56g	4	11.47g	3	306.73g	53	2.08g	10	321.86g	70	50.00%	
黒色安山岩	8.72g	3			24.73g	0.85g		11.85g	1	46.17g	21	13.00%
安山岩		1			6.26g			1	9.30g	2	1.43%	
トナリドリ石	3.24g										1.99%	
ホルンフェルス					101.94g	21	3.89g	59.82g	1	165.65g	34	24.29%
チャート					19.35g	2	0.07g	2	19.42g	4	2.65%	
頁岩					34.13g	9			34.13g	9	6.43%	
計	16.52g	8	11.47g	3	493.12g	86	6.89g	71.67g	2	599.70g	149	100.00%
組成比	5.71%	2.14%	70.00%	20.72%	1.43%			100.00%	100.00%	100.00%		
	2.76%	1.66%	82.23%	1.14%	11.96%							
安山岩								386.80g	3	253.52g	6	21.13%
石英質岩								85.25g	1	101.00g	1	3.40%
砂岩								166.86g	3	310.00g	11	36.92%
チャート								130.39g	2	449.32g	28	42.30%
礫岩										17.22g	3	5.77%
計								789.30g	9	1,130.04g	43	100.00%
組成比								17.30%	82.70%	1,809.34g	100.00%	100.00%
								40.51%	59.49%	100.00%		

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 概要 (第39図)

縄文時代の遺構の内訳は、堅穴住居跡もしくは堅穴状遺構54軒、炉跡の可能性が強い焼土遺構1基、土坑123基、柱穴状ピット7基、ピット群4群、陥穴4基である。その他遺物が出土しなかったものの、縄文時代の可能性が強いと判断される遺構は堅穴状遺構3基、土坑101基、ピット47基、ピット群1群を数える。遺構の時期は前期中葉から後葉と後期前葉を中心とする。遺跡の立地する台地は東側の谷へ注ぐ小支谷を取り囲むように東へ舌状に突出するが、遺構がまとまって存在するのは南北の台地中央付近で、調査次としては3・5・6・13・15・19・21次調査区が主に該当する。特に北側は未調査部分が存在するものの、後期前葉を中心とする密度の高い馬蹄形集落となっている。南側の台地は前期の遺構が主体であるが、後期に比べ密度は薄く散漫な分布である一方で、貝層を伴う堅穴住居跡や土坑が検出されている。それ以外の調査区は遺構の密度は薄く、西側の台地奥は全く検出されない。

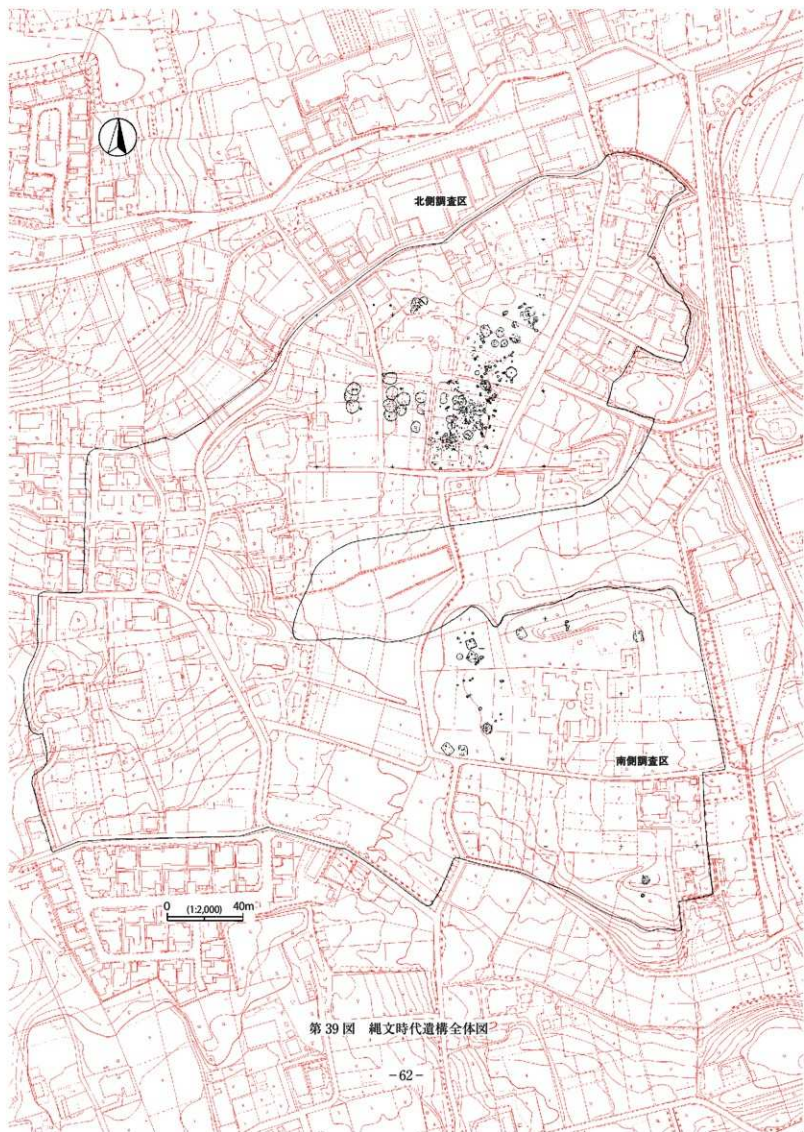
遺構はエリア別に記載することとした。また、当初は遺構種別ごとに区別して記載するつもりであったが、住居跡と重なるように検出され住居に付随するの否か判断がつかない土坑が多かったこと、出土した遺物がどの遺構に帰属するか判断できないことがあったなどの理由から、重なっている遺構群をまとめて扱うこととした。堅穴住居跡について、図中のP〇(●●)はピット番号と深さ(単位cm)を示しているが、現場での付番から変更したものや、新たに付番したものもある。主軸方位は各住居跡のプラン形状及び炉の位置などから判断したが、楕円形プランで炉のないものについては長軸方向で計測した。表記法は、真北(N)を0°として軸の東(E)西(W)への傾きをN□°-EあるいはN□°-Wとして表している。土坑類の主軸方位については、陥穴など軸の設定ができるものについて長軸中心線が真北または真南の方位からずれる角度を「主軸」とし、それ以外の主軸方向が判断できないものは省略している。表記法は堅穴住居跡に準じているが、南側へ向く場合は真南(S)を0°として、東西への軸の傾きをS□°-EあるいはS□°-Wとして表している。

図面の縮尺は、堅穴住居跡の全体図が1/80、堅穴住居跡の炉と炉穴、土坑、陥穴は1/40である。遺物の実測図は、土器で器形復元ができるもの及び破片ではあるが特に大きなものについては1/4、土器の破片は1/3、石器は剥片石器が2/3、礫石器が1/3である。土製品はミニチュア土器、土偶、装飾品が1/2、それ以外は1/3である。土製品・石器については第9・10表に属性をまとめてある。

第2節 遺構と遺物

1 北側調査区の遺構群

北側調査区は前節で述べたとおり後期前葉を中心とする馬蹄形集落となっている。このうち北東側から南西側の約1/2の範囲と北西側の一部が調査された。堅穴住居跡は北側が開く馬蹄形に分布し、周辺から土坑、ピットなど多数検出され、特に南東部の3次調査区に濃密に分布している。土坑は貯蔵穴と考えられるフラスコ状を呈するものや、柱痕が認められる小ピット、陥穴などである。円形に配列した小ピット群のうちいくつかは、壁が削平された堅穴住居跡と判断されたものもある。



(1) 竪穴住居跡と関連する土坑・ピット

(3)SI003 (第40図、図版2・33)

形状と規模 調査時の記録に西側はやや掘りすぎとあるが、本来想定された範囲がどこまでなのか不明なので、残された実測図を元に記述する。形状は正円に近い楕円形を呈する。規模は長軸で現存長5.0m、短軸は4.7mを測る。南壁側のピットP6とP8の間を出入口と推測し、その中間と炉の中心を通る線を主軸と捉えた。主軸方位はN-10°-Eである。

内部の状況 壁の立上りは緩やかで、壁高は最も高い部分で10cm、低い部分で4cmである。床面の最も深い部分でも確認面から20cmと浅い。畑の耕作で削平されているものと思われる。覆土は黄褐色土を含む暗褐色土で、壁際は黄褐色土の含有量が多くなる。床面はほぼ平坦で、明確な硬化面は検出されなかった。

炉 中心から検出されている。長軸88cm、短軸80cm、深さ16cmを測る。炉底付近にやや焼土が多く堆積しているが、被熱による硬化は顕著ではない。

ピット 全部で12基検出されている。P1・3・4・7・10・11の6基は深さ30cm～70cmとやや深く、P3・10・11の3基では柱痕が確認されている。これらが主柱穴と判断される。P5・9はやや浅く15cm～20cm程度であるが、柱痕が確認される。

出土遺物 1・2は黒浜式の深鉢胴部である。3は諸磯a式の深鉢胴部である。4～6は加曾利E式の深鉢胴部である。4は大木8b～9式の影響が強い。6は判断が難しいが、地文が柳羽状工具と思われることや調整・焼成などから中期とした。橋状把手の根本とみられる。7～16は堀之内式に属するものである。7～12は深鉢口縁部で、7～11は堀之内1式、12・13は堀之内2式である。14～16は深鉢胴部である。17は縄文施文の深鉢胴部で、縄文は縦位施文であり、中期の可能性が高い。

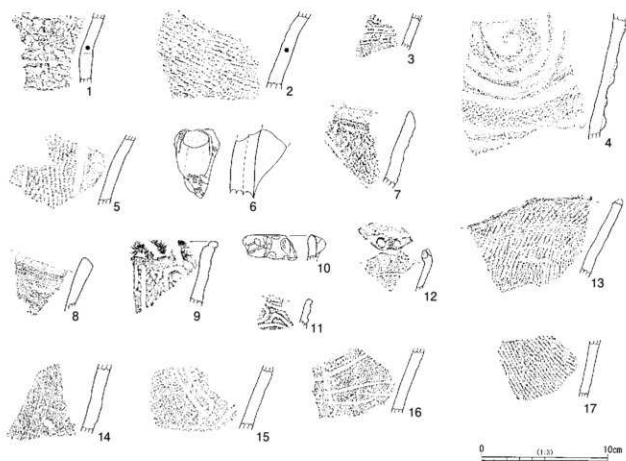
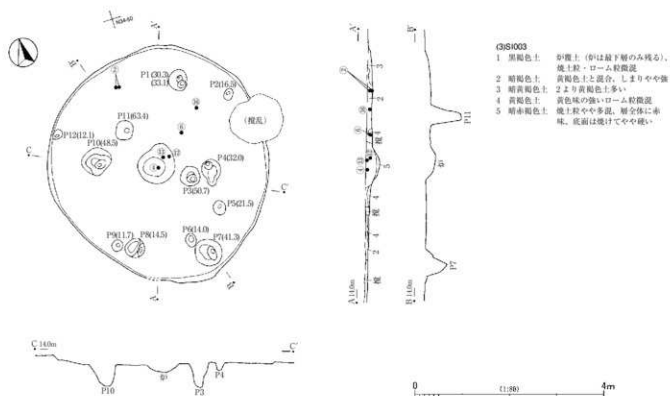
時期 主要な出土土器は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI012 (第41～44図、図版2・33・94・95)

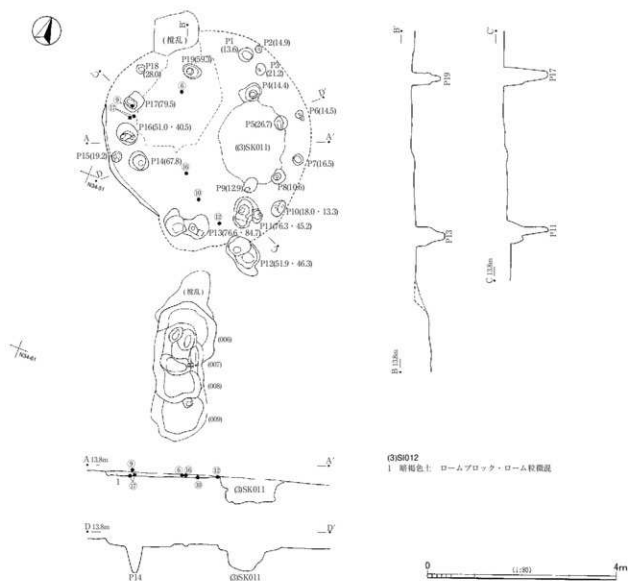
形状と規模 当住居跡が立地している地点は北側に向かって下る緩斜面となっているため、北側の壁が消失しており、加えて南東側は地山と住居覆土との区別が難しく若干掘りすぎているため正確な状況は不明であるが、形状は正円に近い楕円形を呈すると推測される。規模は長軸で現存長4.55m、短軸は4.4mを測る。南壁側の2基のピットP12・13の間を出入口と推測し、その中間とプランの中心を通る線を主軸と捉えた。主軸方位はN-25°-Wである。なお、南側に4基からなる土坑群が存在し、調査時は住居跡とは別個の土坑群として006～009と扱っていたが、検討した結果この住居は柄鏡形である可能性が高く、土坑群は出入口施設であろうと判断した。説明の便宜を図るため、旧番号をそのまま引用している。両者合わせた長軸長は8.8mとなる。

他遺構との重複関係 プラン内部の中央東側に(3)SK011土坑が検出されている。土層セクションの観察から、当住居跡より(3)SK011土坑は新しいと判断される。

内部の状況 本体側は壁がほとんど遺存しておらず、かろうじて南西部に残存するのみである。壁高は最も高い部分で10cmを測り、遺構確認面は北東に向かって下り(3)SK011付近から先は床面も流出する。覆土はロームブロックを微量含む暗褐色土で、住居内での差異は認められなかった。床面のうち、西側に残存している部分はほぼ平坦である。北西壁側に硬化面が検出されている。出入口施設は本体より深く、中央の008で60cmを測る。調査時は4基の土坑が重なり合っていると認識されていたが、覆土を検証すると、



第40図 (3)SI003住居跡、出土遺物



第41図 (3)SI012住居跡

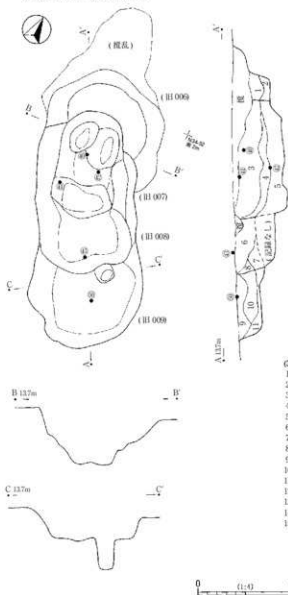
それぞれの土坑の壁とされる線を介して隣接している土層は極めて類似しており、堆積状況も壁で断絶されているのではなく全体が一様に堆積しているように見える。そうした点もこれらが出入口施設であると推測した根拠となっている。土層断面図は調査時の記録をほぼそのまま掲載したが、1と3、2と5、4と6、7と11、8と10の各層はそれぞれ同一であると思われる。

炉 検出されなかった。

ピット 全部で12基検出されている。P11・14・16・17・19は深く支柱穴であろう。東側のピットは相対的に浅いが、床面が流れているためであろう。

出土遺物 先述したとおり当初住居跡本体と出入口施設の土坑群を別々に扱っていたため、挿図もそのようなレイアウトになっている。1～18は本体部分から出土したものである。1は黒浜式である。2は加曾利E式である。3・4は称名寺式である。5～13は堀之内式である。14は加曾利B式と思われる。15は堀之内式の注口土器と思われる。17・18はミニチュア土器である。出入口施設出土遺物は、調査時想定さ

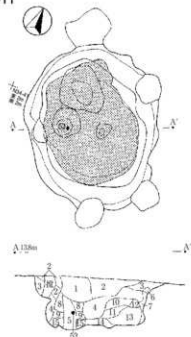
(3)SI012 出入口施設



(3)SI012 出入口施設

- 1 600% 暗赤褐色土 3に類似する。ローム粒やや多量
 2 600% 黄褐色土 ローム粒多量、φ20mmロームブロック少量
 3 600% 暗褐色土 ローム粒・塊土粒少量
 4 600% 暗褐色土 色黒1より層全体が明るい、φ5mm以下ローム粒やや多量
 5 600% 暗赤褐色土 ローム粒多量
 6 600% 暗褐色土 ローム粒数個、塊土粒微量
 7 600% 暗褐色土 φ10mmロームブロック、ローム粒多量
 8 600% 黒褐色土 黒色土ブロック+ローム粒極少
 9 600% 暗褐色土 φ~5mmローム粒多量
 10 600% 暗赤褐色土 φ10mmロームブロック少量
 11 600% 暗褐色土 φ20mmロームブロック+黄褐色土

(3)SK011

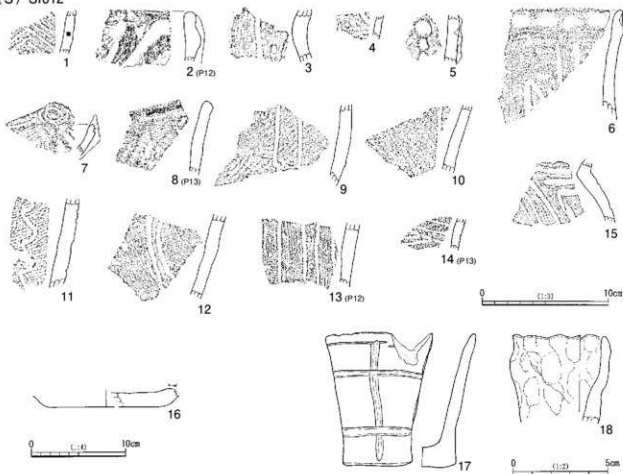


(3)SK011

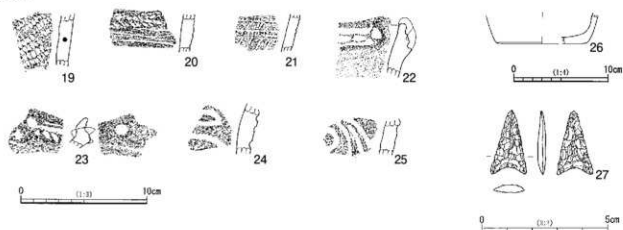
- 1 黒褐色土 ローム粒・塊土粒やや多量、しまり弱
 2 暗褐色土 塊土粒微量、しまり弱
 3 暗褐色土 φ10mmロームブロック少量
 4 暗赤褐色土 塊土多量、黒色土ブロック少量
 5 黒褐色土 φ5mmロームブロックやや多量、しまり弱
 6 暗褐色土 φ5mmロームブロック少量、しまり弱
 7 暗赤褐色土 ローム粒多量
 8 暗褐色土 黄褐色土層状
 9 黒色土 φ10mm黄褐色土層状
 10 明赤褐色土 φ5mm塊土粒やや多量、層全体よく破けており特に上面は硬化している
 11 暗褐色土 塊状でロームブロックが電線、φ5mmロームブロック多量、しまり弱
 12 暗赤褐色土 φ10mmロームブロック多量
 13 黄褐色土 暗褐色土少量、粒子密
 14 暗褐色土 φ10mmロームブロック多量、しまり弱
 15 暗褐色土 ローム粒少量、しまり弱

第 42 図 (3)SI012 住居跡出入口施設、(3)SK011 土坑

(3) SI012

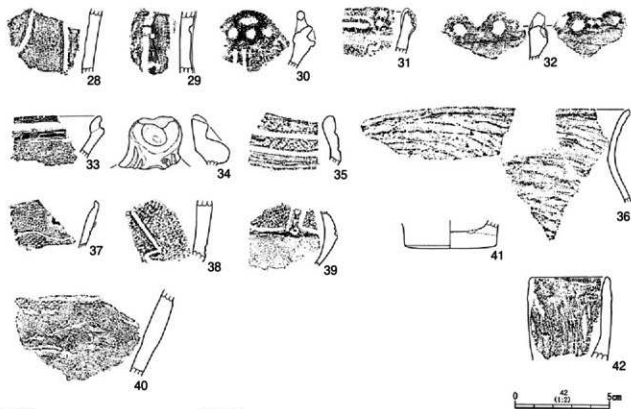


旧 006

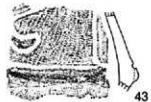


第43图 (3)SI012住居跡出土遺物(1)

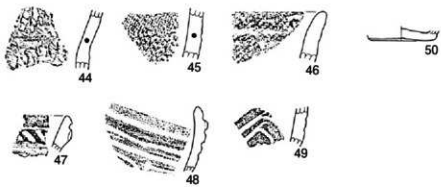
旧 007



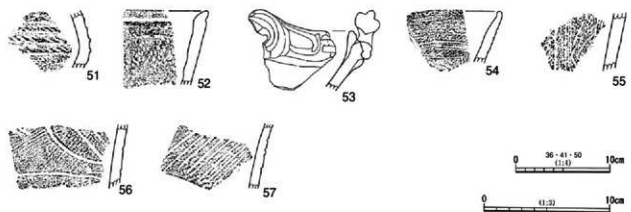
旧 008



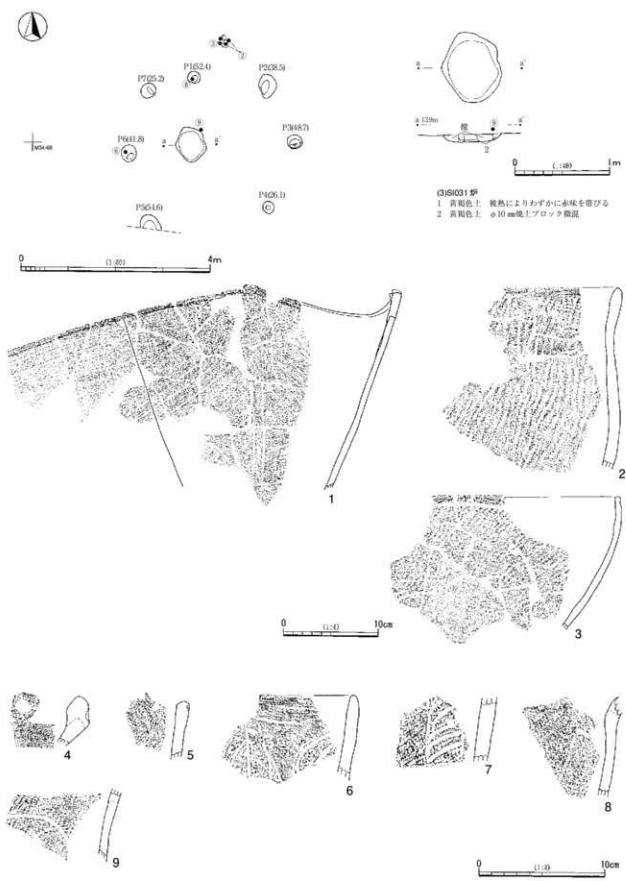
旧 009



(3) SK011



第 44 图 (3)SI012 住居跡出土遺物 (2)、(3)SK011 土坑出土遺物



第 45 図 (3)SI031 住居跡、出土遺物

れた土坑単位で掲載している。19～27は006とされた部分から出土したものである。19は黒浜式である。20・21は浮島式である。22～25は堀之内式である。27は石蔵であるが、攪乱部分からの出土で当遺構に伴うかは不明である。28～42は007とされた部分から出土したものである。28は称名寺式である。29～39は堀之内式である。42はミニチュア土器である。43は008とされた部分から出土したもので、堀之内式である。44～50は009とされた部分から出土したものである。44・45は黒浜式である。47～49は堀之内式である。

時期 主たる出土土器は堀之内内に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK011 (第42・44図、図版2・33)

状況 (3)SI012内や東側、住居の柱穴P4・5・8・9に囲まれるような位置に構築される。長軸長175cm、短軸長143cmの不整形円形を呈し、深さは56cmを測る。本来の用途は貯蔵穴と考えられるが、途中まで埋めた後柱を立てた痕跡が認められる。堆積土の5層は柱痕と考えられ、坑底部は浅いピット状を呈する。その後再び柱は抜かれ、多量の焼土を含んだ土により埋め戻されたと考えられる。

出土遺物 51は諸磯b式である。52～56は堀之内式である。57は加曾利B式の粗製土器である。

時期 主たる出土遺物は堀之内内に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI031 (第45図、図版2・34・35)

形状と規模 当住居跡は壁が残存しておらず、竪と柱穴のみ検出された。柱穴は直径約4mの円を描くように配置される。遺物の2・3はそれらの外から出土したが、関連があるものと考えた。

内部の状況 壁が残存しておらず、床面も残存しているか不明である。

炉 長軸長75cm、短軸長65cmの不整形円形を呈し、深さは8cmと浅い。焼土の混入量も少なく、使用頻度は低かったとみられる。

ピット 全部で7基検出されている。ほぼ等間隔であり柱穴であろう。

出土遺物 1～9はいずれも堀之内式である。1はかなり摩耗していた。

時期 主たる出土遺物は堀之内内に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI032 (第46・48図、図版3・34・35・95・96)

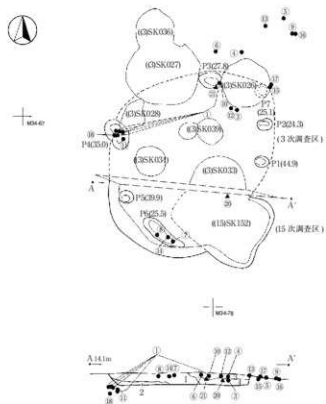
形状と規模 当住居跡は3次調査区と15次調査区にまたがって検出されている。3次調査区側は壁が残存せず、柱穴の配置によりプランを推測した。15次調査区側では壁が検出され、3次調査時の推測が妥当であったことが確認された。長軸長4.0m、短軸長3.4m、深さ25cmを測る。

他遺構との重複関係 当住居跡には多くの土坑が重複している。3次調査区側で検出された土坑のうち(3)SK026・028については柱穴と考えられるピットが重なっており、いずれも土坑より新しいため、土坑が古く住居跡が新しいと推測される。他の(3)SK027・033・034・039については新旧関係は不明である。15次調査区側で検出された(15)SK152は、土層観察から住居跡より新しいことが確認されている。なお、図上ではつながっているように見える(3)SK033と(15)SK152は、覆土に焼土が微量含まれるなど共通点も認められるが、平面形状がやや不自然で同一の土坑とするには疑問も残る。

内部の状況 記録が残るのは15次調査区側のみである。壁は立上りがかなり緩やかである。覆土は全体にローム粒子が多量に混入し、しまりが強い。床面は平坦であるが、特に硬化面は検出されなかった。

ピット 全部で7基検出されている。壁に沿って並ぶと思われる、南側のP6以外は柱穴であろう。

出土遺物 図中遺物番号の後に(15)と記載されているのは15次調査区側、それ以外は3次調査区側から出



(3)SK032

- 1 明褐色土 ローム粒多量、φ10mmロームブロック少量、しまり強
2 褐色土 ローム粒やや多量、しまり強

(15)SK152

- 3 暗褐色土 砂粒少量、しまり極めて強
4 褐色土 焼土粒もしくは赤色スコリア散見、しまり強



(3)SK027

- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒散見、しまり極めて強
2 暗褐色土 φ5mm黄褐色土やや多量（団状）、しまりやや弱
3 暗褐色土 褐色粘質土の混入、しまりやや弱
4 黄褐色土 φ10mm赤色土団状、しまりやや弱
5 暗黄褐色土 ローム粒・黒色粒少量、しまりやや弱
6 褐色粘質土 φ5mm黄褐色土団状

(3)SK028

- 7 暗褐色土 ローム粒散見、しまり強
8 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒やや多量、φ5mmロームブロック少量
9 暗褐色土 1-2より色調暗い、ローム粒多量
10 褐色粘質土 φ3mmローム粒やや多量

(3)SK026

- 11 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物粒散見、しまり極めて強
12 黄褐色土 φ5mmロームブロック散見、しまり極めて強

(3)SK036

- 13 暗褐色土・黄褐色土
14 暗褐色土 φ5mmローム粒多量（団状）
15 黄褐色土 しまり強

(3)SK037

- 16 黒褐色土 しまり弱
17 暗褐色土
18 暗黄褐色土 φ5mmロームブロック少量、しまり強
19 褐色土 φ5mmロームブロック多量、しまり強

(3)SK038

- 20 暗褐色土 炭化物粒・黒色土粒少量、しまり強
21 暗褐色土 5-7・8に比べ黄色味強い
22 暗褐色土 5に類似する、6・8より色調暗い、しまり弱
23 褐色土 6に類似するが6より色調暗い、しまり強

(3)SK032 P3・4・7

- 24 暗黄褐色土 しまり強
25 暗黄褐色土 しまり強
26 暗黄褐色土 しまり強

(3)SK033

- 27 暗褐色土 ローム粒・焼土粒散見、しまり強
28 暗褐色土 ローム粒散見、しまり強
29 黒褐色土 黄褐色土少量、しまりやや弱
30 黄褐色土 しまりやや弱
31 暗褐色土 28より色調やや明るい、しまりやや弱、粘性やや強

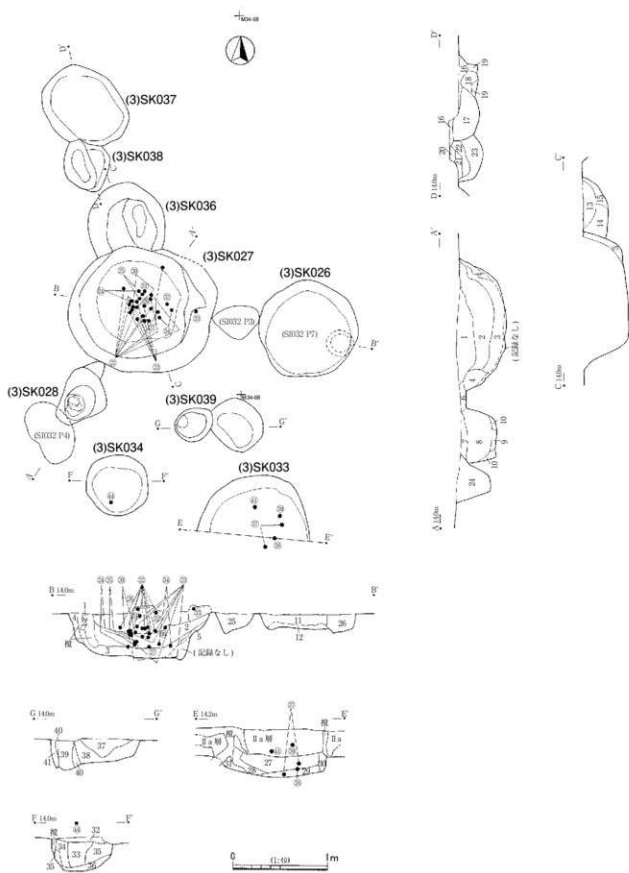
(3)SK034

- 32 暗褐色土 黒色土粒散見、SH02層上？
33 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒少量
34 暗褐色土 ローム粒散見
35 暗黄褐色土 黄褐色土粒多量（散在）、粘性やや強
36 褐色粘質土 しまり強、粘性やや強

(3)SK039

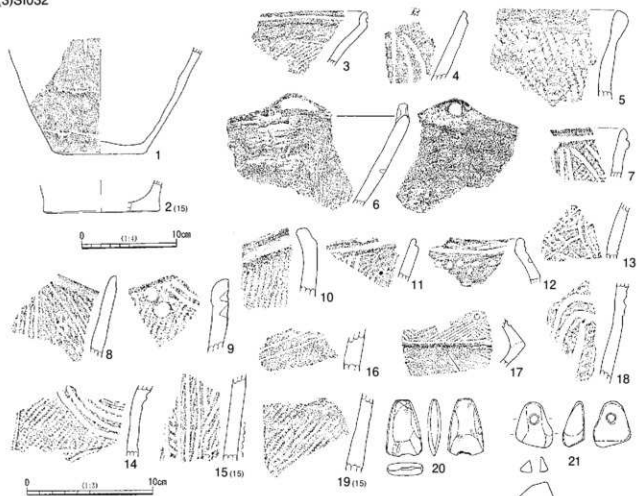
- 37 黄褐色土 黒色土粒・ローム粒少量、粒子細、しまり強
38 暗褐色土 37より黒色土粒・ローム粒の粒子大、しまりやや弱
39 暗褐色土 糞上中色調最も暗い、φ10mmロームブロックやや多量、しまり強、柱頭跡？
40 暗褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱
41 黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱

第46図 (3)SI032住居跡

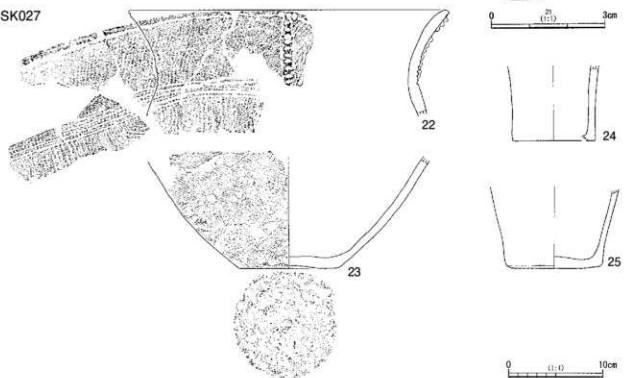


第 47 图 (3)SK026 ~ 028 · 033 · 034 · 036 ~ 039 土坑

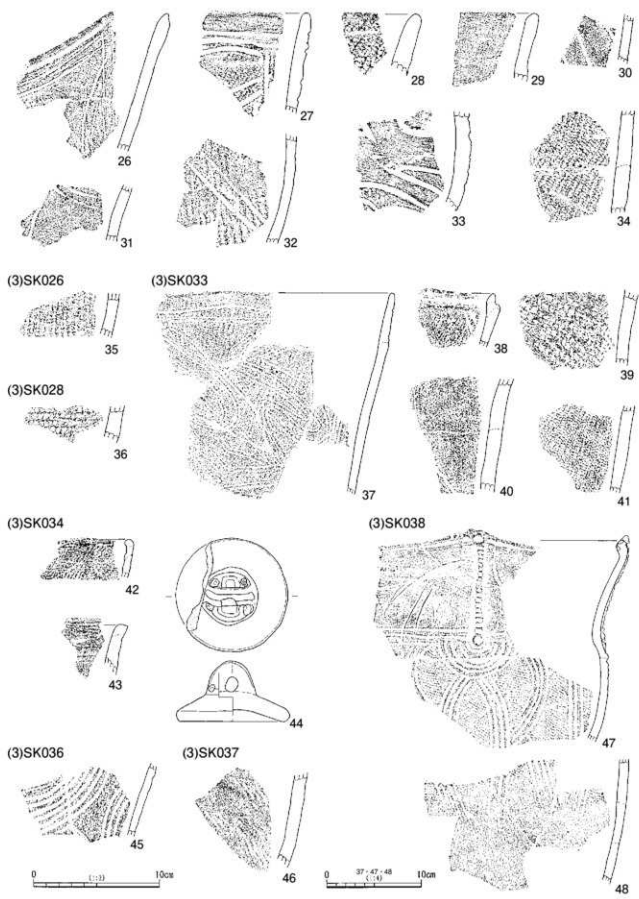
(3)SI032



(3)SK027



第 48 图 (3)SI032 住居跡、(3)SK027 土坑出土遺物



第 49 图 (3)SK026 ~ 028 · 033 · 034 · 036 ~ 038 土坑出土遗物

土したものである。1～19はいずれも堀之内式である。17は注口土器胴部である。20は磨製石斧である。21は翡翠製垂飾で、熱により表面が劣化し亀裂が認められる。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK026 (第47・49図、図版3・36)

状況 (3)SI032住居跡の北東部に位置する。直径105cmのほぼ正円を呈し、床面はほぼ平坦で深さは15cmである。東端部には(3)SI032の柱穴と考えられるピットが存在し、土層観察からピットの方が新しいと判断される。

出土遺物 図示できるのは1点のみである。35は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。

時期 出土遺物からの判断は難しいが、堀之内式期の住居跡より古いもの大ききは測れないものと推測される。

(3)SK027 (第47～49図、図版3・34・35)

状況 (3)SI032の北西部に位置し、(3)SK026からは50cm西側である。東西150cm、南北120cmの楕円形に近い不整形形を呈する。床面は東西方向に平坦で南北方向は緩やかに傾斜する。深さは53cmである。

出土遺物 22は堀之内式の深鉢口縁部である。23は堀之内式と思われる浅鉢底部である。24・25は堀之内式の深鉢底部である。26～33は堀之内式で、33は鉢であろう。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK028 (第47・49図、図版3・36)

状況 (3)SI032の北西部に位置する。(3)SK027の南西側に接するように検出されている。住居の柱穴と思われるピットと重なっており、ピットより古い。坑底は円形になるものの開口部は不整形で、(3)SK027に接するように張り出した部分は土坑とは無関係の可能性が。その張り出し部分も含めた長軸長は77cm、短軸長は50cm、深さは38cmを測る。

出土遺物 図示できるのは1点のみである。36は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。

時期 出土遺物からの判断は難しいが、堀之内式期の住居跡より古いもの大ききは測れないものと推測される。

(3)SK033 (第47・49図、図版3・36)

状況 (3)SI032住居跡の東部に位置する。南半分は調査区境となっており、3次調査の際は全掘できなかった。南側の15次調査の際は(15)SK152が検出されたが、当土坑と同一かは断定できない。規模は東西長120cm、南北は65cmほどが検出されている。床面は概ね平坦で深さはIIa層下部より22cmである。

出土遺物 37・38は堀之内式の深鉢口縁部である。39～41は縄文施文のみあるいは沈線のみであるが、やはり堀之内式と思われる。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK034 (第47・49図、図版3・36・93)

状況 (3)SI032の西部に位置する。直径63cmのほぼ正円形を呈する。断面は碗形を呈し、深さは34cmを測る。

出土遺物 42・43は堀之内式の深鉢口縁部である。44は蓋形土製品で、堀之内式と考えられる。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK036 (第47・49図、図版3・36)

状況 (3)SK027の北側に位置する。土層観察より(3)SK027より古いと判断される。残存している部分で南北長72cm、東西長82cmを測る。断面は平坦な坑底から開口部に向け緩やかに立ち上がる形状であり、深さは27cmを測る。

出土遺物 図示できるのは1点のみである。45は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK037・038 (第47・49図、図版3・36)

状況 (3)SK036の北北西側に接するように位置し、両者は重なり合っている。土層観察から判断すると(3)SK038が古く(3)SK037が新しい。(3)SK037は長軸長95cm、短軸長78cmの不整形円形を呈する。坑底はやや凹凸があるものの概ね平坦で、深さは22cmを測る。(3)SK038は(3)SK037の南側に位置し、残存長軸長56cm、短軸長50cmの不整形円形を呈する。断面碗形を呈し、深さは35cmを測る。

出土遺物 (3)SK037出土で図示できるのは1点のみである。46は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。(3)SK038出土の47・48は同一個体で、深鉢の口縁部と胴部である。堀之内式である。

時期 (3)SK038の出土遺物は堀之内式に位置づけられ、それより新しい(3)SK037も近い時期と考えられる。

(3)SK039 (第47図、図版3)

状況 (3)SI032住居跡の中心部に位置する。(3)SK026・027・033・034の各土坑との距離は30cm～50cmで、ちょうどそれらの中心に当たるような位置である。2基の土坑が重なったような瓢箪形を呈し、東西長94cm、南北長57cmである。深さはビット状の西側が31cm、東側は26cmである。西側は覆土中に柱痕跡を思わせる土層があり、(3)SI032住居跡の柱穴かもしれない。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、近接する他の遺構とほぼ同時期の堀之内式期と推定される。

(3)SI035 (第50図、図版3・35・36・96)

形状と規模 当住居跡も3次調査区と15次調査区にまたがって検出されている。3次調査の際は半円形に並ぶビット5基で堅穴住居と想定した。15次調査の際は特に住居跡とは考えず独立した土坑として調査が行われたが、ビットの並び方などを検討した結果、1軒の住居跡として想定した。15基のビットが東西6m、南北4mの範囲で概ね楕円形となるよう構築されているが、P14・15は帰属しない可能性もある。

内部の状況 どちらの調査区からも壁は検出されなかった。床面も残存しているか不明である。

炉 検出されなかった。

ビット 全部で15基検出されている。規模にばらつきがあるほか配置も不規則である。P1・3・5・10は主柱穴であろう。

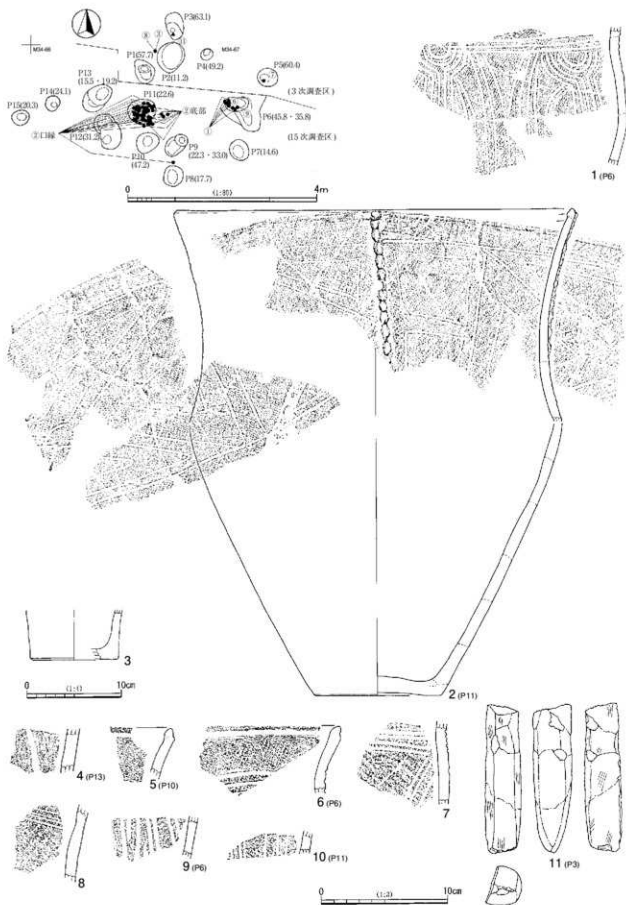
出土遺物 4は称名寺式の深鉢胴部である。2は器形復元ができる堀之内式の大形の深鉢である。熱により摩耗している。5・6は堀之内式の深鉢口縁部、1・7～10は胴部である。11は磨製石斧であるが、先端部(一点鎖線より先)は強く熱を受けており赤色変色している。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI045 (第51・52図、図版3・36・37)

形状と規模 東西長4.3m、南北長3.5mの楕円形を呈する。

他遺構との重複関係 (3)SI046と接しているが、新旧関係は不明である。また、(3)SK076・077土坑が重なっているが、確認面では視認できなかったことから住居跡が新しく土坑が古いと考えられる。



第50図 (3)SI035住居跡、出土遺物

内部の状況 壁はわずかに立上りが確認できる程度で、南側は流出している。覆土についての記録はない。深さはごく浅く最深でも5cm程度である。硬化面は検出されなかった。

炉 中央部より南から検出されたP5・6の上には焼土が堆積していたため、炉であると判断して調査を行ったが、覆土中の焼土の量はごく少なく底面にも熱を受けた痕跡が認められなかった。炉として使用されたかどうかは不明である。

ピット 7基検出されている。皿状を呈するものが多く、深さも柱穴とするには疑わしい。

出土遺物 3は加曽利E式の深鉢口縁部である。4は称名寺式の深鉢胴部である。5～12は堀之内式の深鉢口縁部、1・2・13・14・16は胴部である。15は堀之内式の浅鉢口縁部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI046 (第51・53図、図版3・37・38)

形状と規模 東西長4.5m、南北長3.8mの楕円形を呈する。(3)SI045より若干大きいものの、形状は極めて類似する。

他遺構との重複関係 (3)SI045と接しているが、新旧関係は不明である。

内部の状況 壁はわずかに立上りが確認できる程度である。覆土についての記録はない。深さはごく浅く最深でも10cm程度である。床面はほぼ平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されなかった。

ピット 3基検出されている。皿状の浅いものしかなく、柱穴とは考えにくい。

出土遺物 遺存状況がよい資料が多かった。28・29・32・34～37は堀之内式の深鉢口縁部である。30・31・38～42は堀之内式の深鉢胴部である。33は底部で、やはり堀之内式と考えられる。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。(3)SI045より新しい資料が多く、遺構の新旧関係を示しているかもしれない。

(3)SK076・077 (第51・52図、図版3・37)

状況 (3)SI045内の北部に位置する。(3)SK076は長軸長175cm、短軸長90cm、深さ264cmの不整形円形を呈する、いわゆる陥穴である。(3)SK077は(3)SK076と重なっているため半分程度しか残存していないが、残存部の長軸長88cm、短軸長は34cm、深さは31cmを測る。

出土遺物 (3)SK076の23は黒浜式の深鉢口縁部である。24は諸磯式の深鉢口縁部である。25は分かりにくいが縄文と無文部との境が微隆起線状に膨らんでおり、加曽利E式と推測した。26・27は称名寺式の深鉢口縁部である。(3)SK077の17・18・22は黒浜式の深鉢で、17は口縁部、18は胴部、22は底部直上である。19・20は諸磯式の深鉢口縁部である。21は堀之内式の深鉢胴部である。

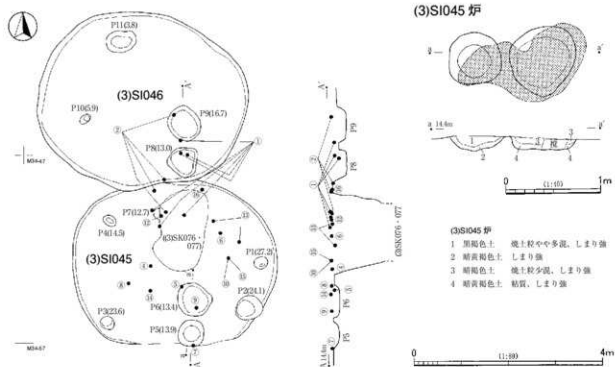
時期 主たる出土遺物は黒浜式、次いで諸磯式であること、そして陥穴の形状などから、両者とも前期中葉から後葉の遺構と考えられる。

(3)SI048 (第54図、図版3・38)

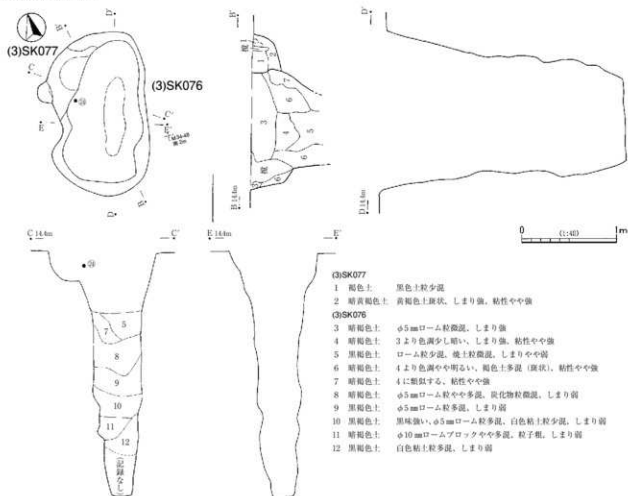
形状と規模 当住居跡は調査時19基からなるピット群として捉えられていたが、配置等を検討した結果住居跡の可能性があると考えた。東西6.1m、南北5.2mの楕円形状にピットが並ぶ。深さはいずれも30cm以上あり柱穴と考えられる。

他遺構との重複関係 P10と(3)SK041が重なっているが、新旧関係は不明である。

内部の状況 壁は残されておらず、床面も残存しているか不明である。

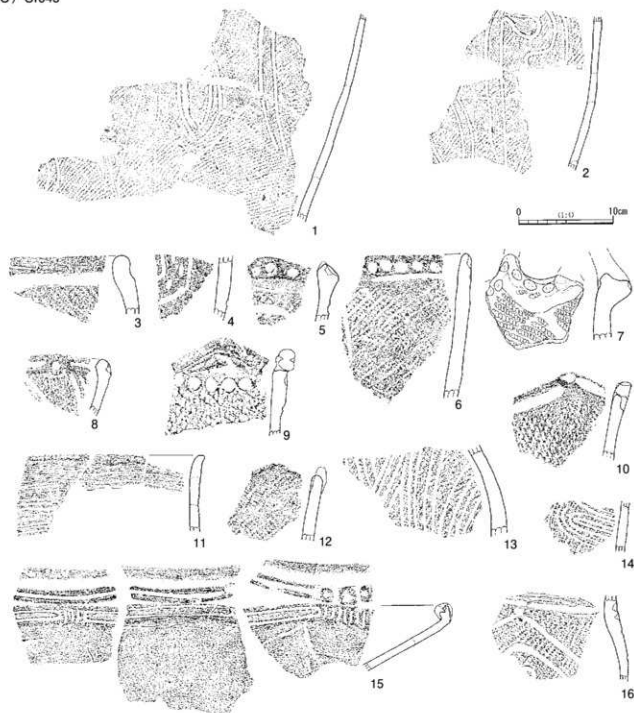


(3)SK076・077



第51図 (3)SI045・046住居跡、(3)SK076・077土坑

(3) SI045



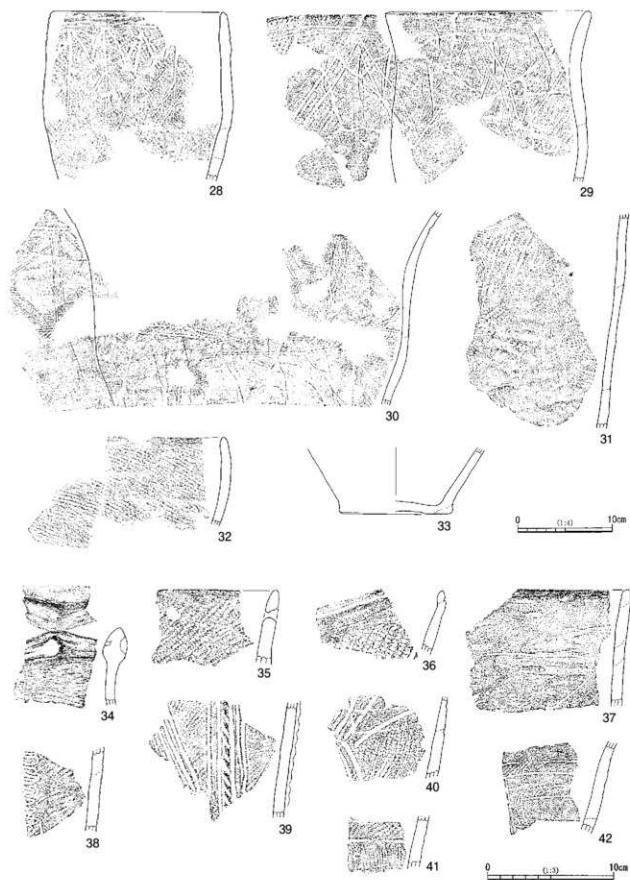
(3) SK077



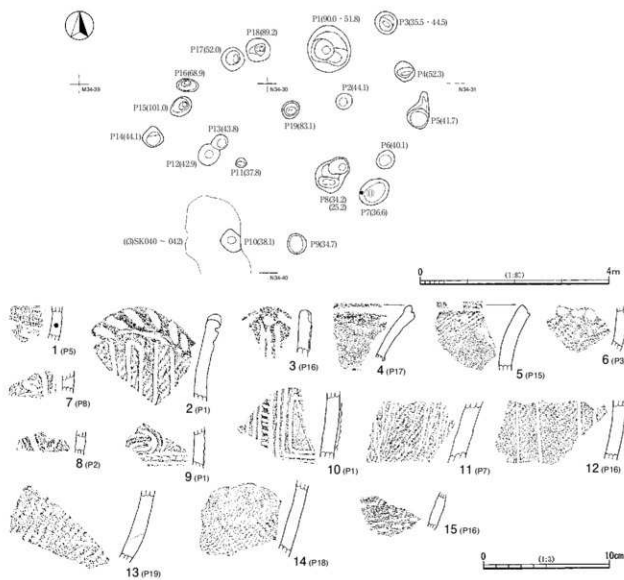
(3) SK076



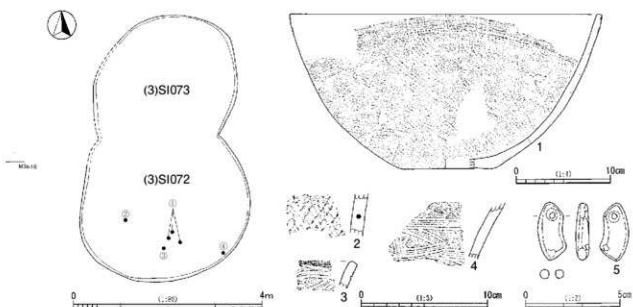
第 52 図 (3)SI045 住居跡、(3)SK076・077 土坑出土遺物



第53図 (3)SI046住居跡出土遺物



第54図 (3)SI048住居跡、出土遺物



第55図 (3)SI072・073竪穴状遺構、出土遺物

炉 検出されていない。

出土遺物 1は黒浜式の深鉢胴部である。2～5は堀之内式の深鉢口縁部、6～12は胴部である。13～15は縄文のみの深鉢胴部破片で、堀之内式であろう。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI072・073 (第55図、図版3・38・95)

形状と規模 2基の円形プランが重なり合ったような瓢箪形を呈する。別々の遺構番号が付されたが、境界は判然としない。両者を合わせた長軸長は5.7m、短軸長は(3)SI072が3.6m、(3)SI073が3.0mである。隅丸長方形を呈する単一の堅穴住居跡である可能性を指摘しておく。

内部の状況 覆土はごく浅く最深でも5cm程度である。断面が実測されていないため新旧関係は不明である。床面は平坦で、両住居跡のレベル差もない。

炉 検出されていない。

ピット 検出されていない。

出土遺物 1～4の土器はいずれも(3)SI072の範囲から出土している。2は黒浜式の深鉢胴部である。1は諸磯式の浅鉢である。3は諸磯式の深鉢口縁部、4は諸磯式の深鉢胴部である。5は滑石製の垂飾であるが、本来は珠状耳飾りだったものを欠損後に再加工したものと思われる。なおこの資料は表土剥ぎ中に(3)SI073付近から出土したもので、遺構確認面より若干上位ではあったが当住居跡に伴うものと考えてここに掲載した。

時期 (3)SI072の主たる出土遺物は諸磯式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。(3)SI073は遺物から時期を判断することはできないが、(3)SI072とは大きく隔たっていないと思われる。

(3)SI078～081 (第56・58～60図、図版4・38～40・95)

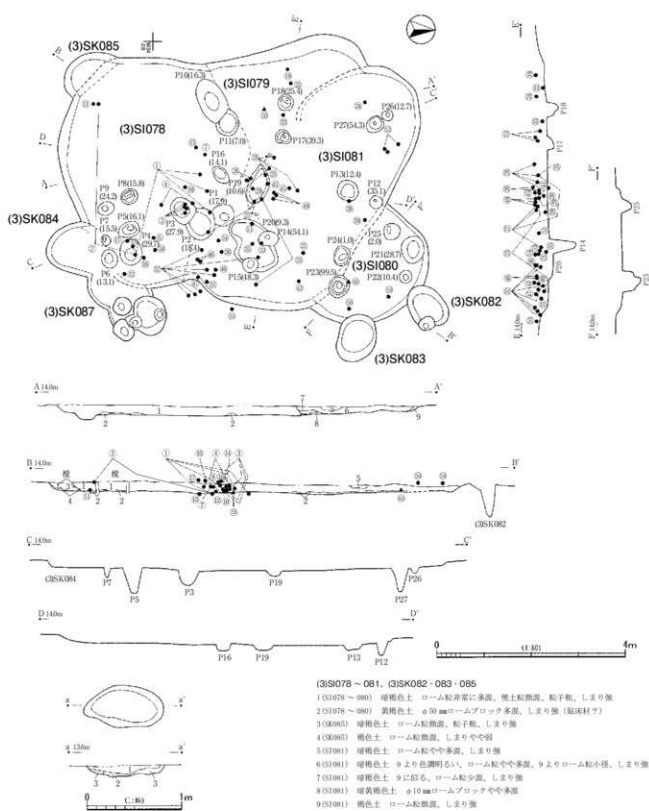
形状と規模 4軒の堅穴住居跡が重なり合っていると認識されたものであるが、個別に分離するのは不可能なので一括して説明する。住居部分は南北8.0m、東西6.1mの範囲に収まる。(3)SI078と(3)SI079及び(3)SI079と(3)SI080の境にそれぞれ引いた破線は、確認面上で把握された住居の範囲である。(3)SI081西南側の輪郭線は土層断面から推測したものである。以上の状況から判断して、(3)SI078・080・081は円形もしくはそれに類するプランと推測される。最も古いと思われる(3)SI079の形状は判然としないが、隅丸長方形の可能性がある。

他遺構との重複関係 土坑との重複が多い。土層観察によって(3)SK085は住居より古く、(3)SK083・084は新しいと考えられる。それ以外はやや不明瞭であるが、確認面上での検出状況から(3)SK082・087とも住居群より古いと考えられる。

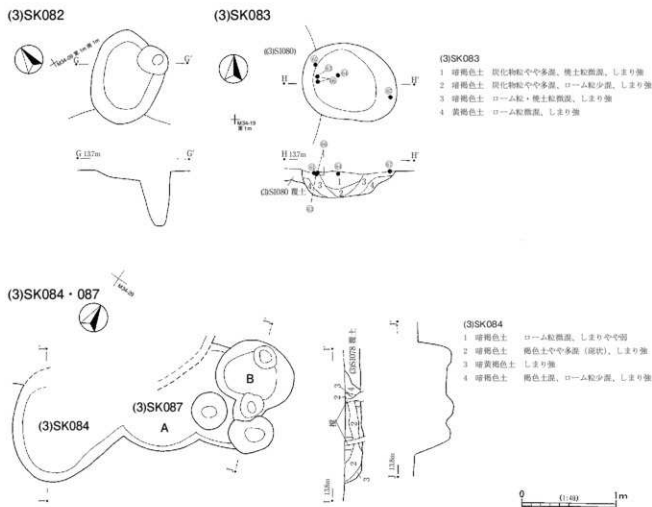
内部の状況 壁はいずれもなだらかに立ち上がる。深さは最深で20cm程度で、床面は各住居ともほとんどレベル差がない。表面観察による各住居の形状と新旧関係は先述したとおりであるが、覆土の観察では(3)SI081以外明確に分離できておらず詳細不明である。

炉 全体のほぼ中心部から1基検出された。位置から考えて(3)SI079に伴う可能性が高いが、断定はできない。長軸長85cm、短軸長45cmの不整形円で深さは11cmである。覆土に含まれる焼土は微量であり、熱を受けた形跡がほとんど認められないことから使用頻度は低かったとみられる。

ピット 個別の住居ごとに番号が1から振られていたが、混同しやすいので通し番号とした。全部で25基検出されているが、配置は極めて不規則でありピットと住居の帰属関係も不明である。全体に浅いものが



第56図 (3)SI078～081住居跡、(3)SK082～085・087土坑



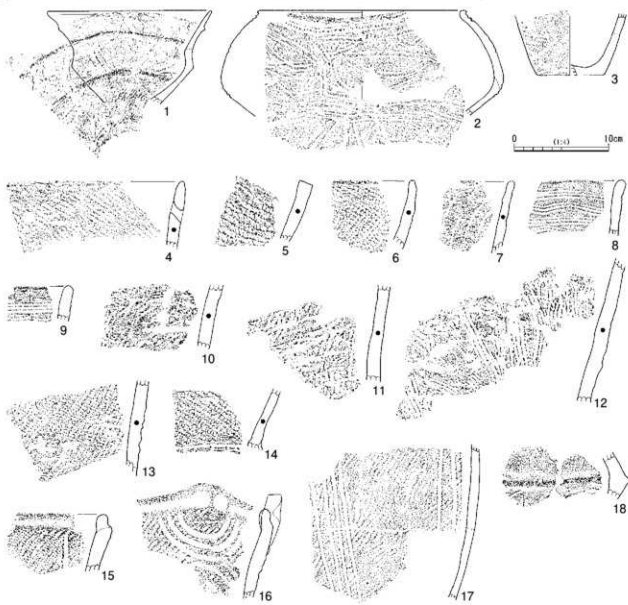
第57図 (3)SK082～084・087土坑

多く柱穴の配置も判断しがたい。

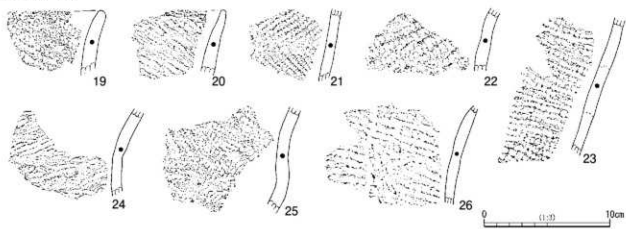
出土遺物 出土位置別にレイアウトしたが、多様な時期の遺物が入り交じった状態である。1～18は(3)SI078の範囲から出土した遺物である。4～7は黒浜式の深鉢口縁部、10～14は同じく黒浜式の深鉢胴部である。1～3は諸磯式で、1は類例に乏しい形状であるがおそらく浅鉢、2は浅鉢、3は深鉢底部である。8・9も同じく諸磯式の深鉢口縁部である。15・16は堀之内式の深鉢口縁部、17は胴部、18は注口土器と思われる。19～55は(3)SI079と(3)SI081の範囲から出土した遺物である。19・20は黒浜式の深鉢口縁部、21～26・33～36は胴部である。27～29・37・38は諸磯式の深鉢胴部である。39・40は称名寺式の深鉢口縁部と胴部である。32・41～47は堀之内式の深鉢口縁部、48～53は胴部である。54は加曾利B式の浅鉢胴部である。55はチャート製の石鏃である。56～60は(3)SI080の範囲から出土した遺物である。56・57は黒浜式の深鉢口縁部である。58は諸磯式の深鉢口縁部、59は胴部である。60は石鏃で、信州系と思われる黒曜石が素材である。

時期 出土遺物から大きく黒浜式期、諸磯式期、堀之内式期に分けられる。最も古い(3)SI079が黒浜式期

(3)SI078

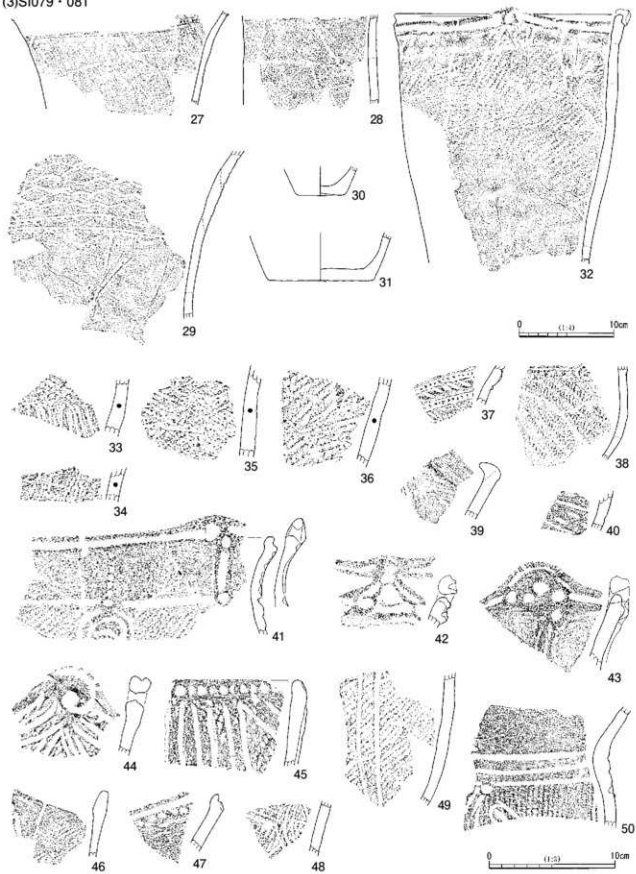


(3)SI079・081



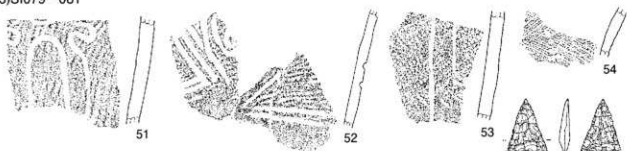
第58図 (3)SI078・079・081 住居跡出土遺物

(3)SI079・081

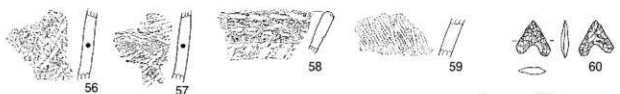


第 59 图 (3)SI079・081 住居跡出土遺物

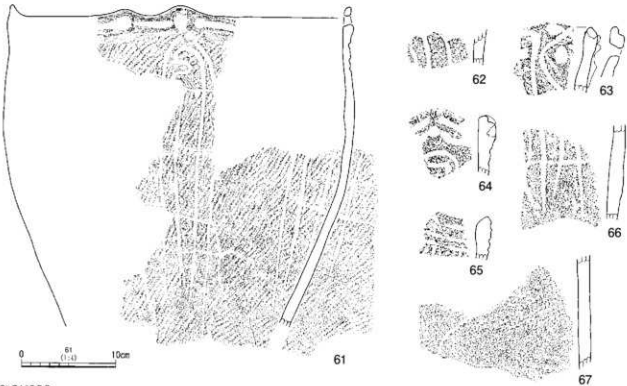
(3)SI079・081



(3)SI080



(3)SK083



(3)SK082



(3)SK087



第60図 (3)SI079～081住居跡、(3)SK082・083・087土坑出土遺物

であろうと推測され、諸磯式がまとまって出土している(3SI078が該期と推測される)。(3SI080は前期と思われるが黒浜式期か浮島式期かは判断が難しい。最も新しいと思われる(3SI081は堀之内式期であろう。

(3)SK082 (第57・60図、図版4・41)

状況 (3SI080の北東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層の切り合い関係は記録されていないが、確認面の検出状況から住居より古いと判断される。長軸長100cm、短軸長80cmの不整形形を呈する。断面皿状で深さも10cm程度であるが、東側に直径30cm、深さ59cmの柱穴状ピットを伴う。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。68は縄文施文の深鉢胴部である。

時期 遺物からは時期の特定は困難である。

(3)SK083 (第57・60図、図版4・40・41)

状況 (3SI080の東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層観察により住居跡より新しいと判断される。長軸長102cm、短軸長80cmの不整形形を呈する。断面逆台形で深さは26cmである。

出土遺物 62は称名寺式の深鉢胴部である。61は堀之内式の深鉢で、形状が復元できるものである。63～65は堀之内式の深鉢口縁部、66は胴部である。67は縄文のみの深鉢胴部破片である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK084・087 (第57・60図、図版4・41)

状況 (3SI078の南東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層観察から(3SK084は住居より新しいと判断される。土層の記録がない(3SK087は、確認面での検出状況から(3SI078及び(3SK084いずれよりも古いと推測される。全体の規模は不明であるが残存している部分を見ると、(3SK084は長軸長約120cm、短軸長約110cmの不整形形を呈する。断面逆台形で深さは20cmである。(3SK087は大ぶりな円形土坑とピット状の小土坑から構成されるが、これらが一体のものか複数の土坑が切り合っているものかは不明である。南北170cm、東西140cmの範囲に位置する。深さはピット状の最も深いところで36cmを測る。

出土遺物 (3SK084からは図示できる遺物は出土しなかった。(3SK087の69～72は堀之内式の深鉢口縁部、73・74は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

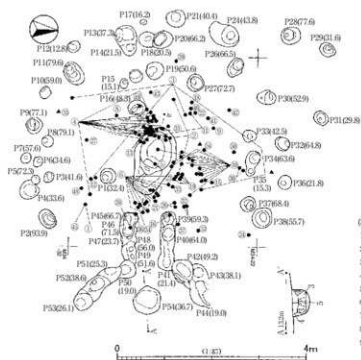
(3)SI104 (第61～64図、図版4・41～43・96・99)

形状と規模 当住居跡は壁が失われているものの、円形に並ぶ柱穴と「ハ」の字状の出入口施設により、明確に住居跡と認識されるものである。柱穴列から推測される規模は堅穴本体の直径が5.7m、出入口施設を含む長軸長が6.5mである。主軸方向はほぼ正確に真西である。

内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明であるが、炉の遺存状況からあまり削平されていないと思われる。

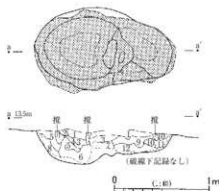
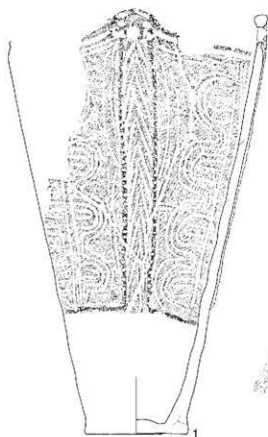
炉 中央部から規模の大きな炉が検出されている。長軸長150cm、短軸長88cmの不整形形で、住居奥側が深く掘り窪められ、手前側は一段浅くなっている。深さは奥側が33cm、手前側が25cmである。覆土中に焼土ブロックや焼土粒が多量に含まれ、底面も強く熱を受けていることから使用頻度はかなり高かったと推測される。

ピット 二重に並ぶように検出されており、建替えが行われたと考えられる。なお、P28・29・31はやや外れているが、一応関連があるものと考えた。径50cm程度のやや大きいものと、径30cm程度の概ね2種類に分類され、大きいものは深くて柱穴とされるべきものであろう。



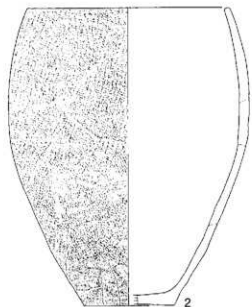
(3)SI104

- 1 埴間色土 ローム粒・焼土粒や中多量、しまりやや弱
- 2 埴間色土 ローム粒多量、褐色土面状、しまりやや弱
- 3 埴間色土 ローム粒や中多量、しまりやや弱
- 4 黄褐色土+埴間色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 5 埴間色土 ローム粒・ロームブロックや中多量、しまりやや弱

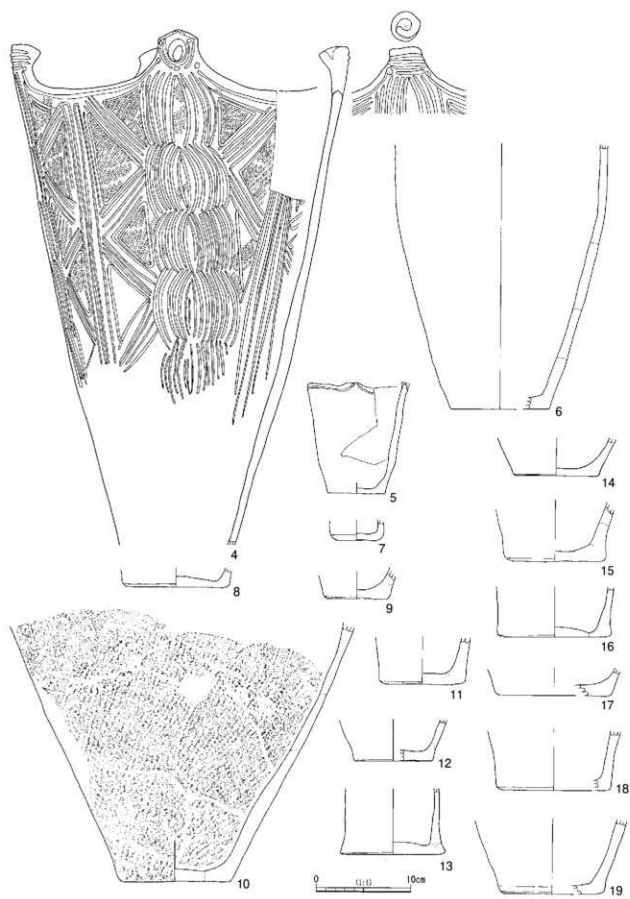


(3)SI104 伊

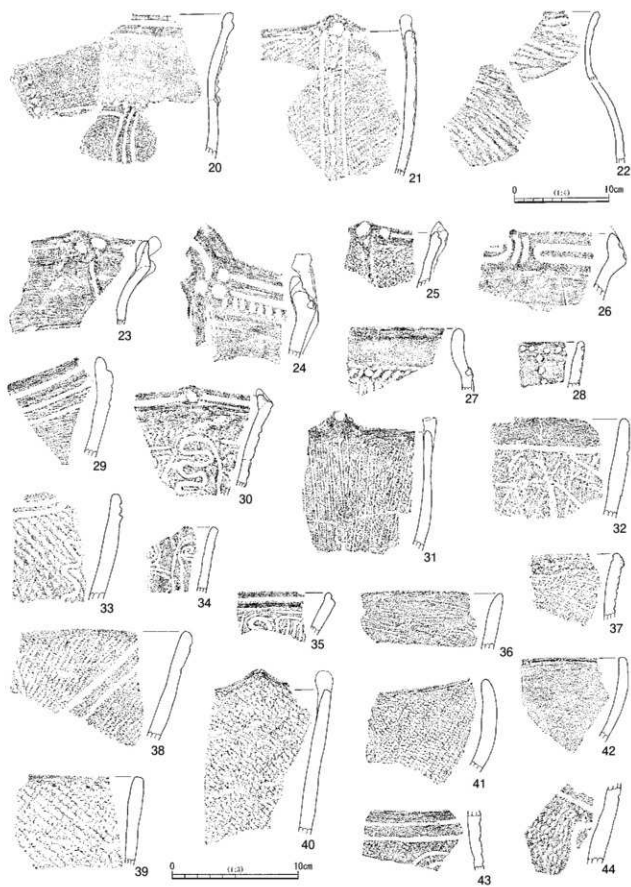
- 1 埴間色土 $\phi 5$ mm焼土ブロック・焼土粒少量、しまりやや弱
- 2 埴間色土 褐色土を面状に含む、焼土粒少量
- 3 黄褐色土 $\phi 5$ mm焼土粒・ローム粒や中多量、粘土粒、しまりやや弱
- 4 褐色土 ローム粒・焼土粒少量 (塊状)
- 5 埴間色土 焼土粒多量、ローム粒や中多量、粘土粒、しまり弱
- 6 埴間色土 ローム粒多量、粘土粒、しまり弱
- 7 赤褐色土 $\phi 30$ mm焼土ブロック多量
- 8 黄褐色土 焼土粒少量、しまり弱、層上は焼成変成
- 9 緑(赤)黄褐色土 層全体が赤味を帯びる、焼土粒や中多量、粘土粒、しまり弱
- 10 埴間色土 焼土粒、 $\phi 5$ mm焼土ブロック多量、粘土粒、しまり弱
- 11 埴間色土 層全体が赤味を帯びる、ローム粒・焼土粒や中多量、粘土粒、しまり弱
- 12 黄褐色土 層上は焼成変成



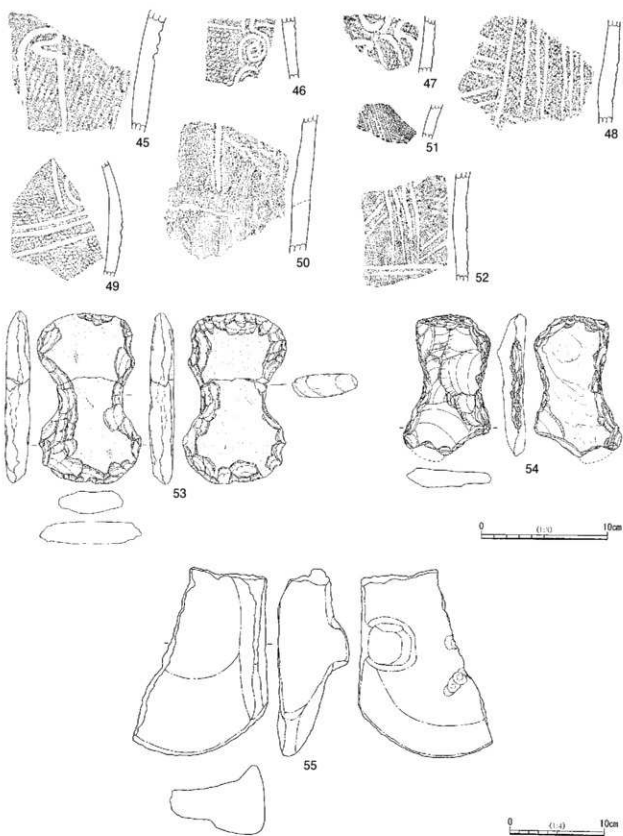
第61図 (3)SI104住居跡、出土遺物(1)



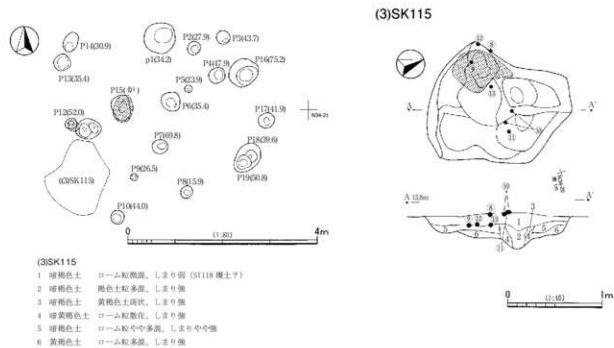
第 62 図 (3)SI104 住居跡出土遺物 (2)



第 63 図 (3)SI104 住居跡出土遺物 (3)



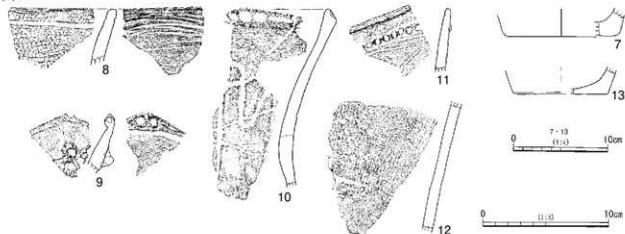
第64図 (3)SI104住居跡出土遺物(4)



(3)SI118



(3)SK115



第 65 図 (3)SI118 住居跡、(3)SK115 土坑、出土遺物

出土遺物 極めて多量の遺物が出土している。1～19は器形復元ができる土器である。有文のものは全て堀之内式であり、無文の底部も堀之内式と考えられる。20～42は堀之内式の深鉢口縁部、43～52は胴部である。22はケズリ状の調整が顕著である。53・54は分銅形打製石斧で、54は剥片素材から作出されたものである。55は脚付石皿である。熱を受けている。

時期 主たる出土遺物は堀之内内に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI118 (第65図、図版4・43)

形状と規模 当住居跡も壁が失われているが、炉跡と円形に並ぶ柱穴状ピットが検出されたことにより設定されたものである。規模は東西4.8m、南北4.3mの範囲に及ぶ。

他遺構との重複関係 南西部に(3)SK115が位置する。新旧関係は不明である。

内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明であるが、炉の状況からある程度削平されている可能性がある。

炉 プラン中央よりやや西寄りに検出されたピット1基の上面に焼土が堆積しており、一応炉として扱ったが、土層断面の記録がないため覆土や床面の状況はよく分からず詳細は不明である。長軸長56cm、短軸長38cmの不整形円形を呈し、深さは10cmである。

ピット 先の炉を含め19基のピットが検出されている。そのうちP17～19は調査時(3)SI104の柱穴として扱われていたが、そちらのプランからはやや外れる一方で、こちらのプラン内にもうまく収まるため帰属を変更した。また、(3)SK115内にもピット状の掘込みがあり、当住居の柱穴である可能性がある。

出土遺物 1・2は黒浜式の深鉢胴部である。3は堀之内式の深鉢口縁部、4～6は胴部である。7は後期深鉢の底部であろう。

時期 小破片のみなので判断は難しいが、堀之内式期と考えられる。

(3)SK115 (第65図、図版4・43)

状況 (3)SI118住居跡の南西部に構築される。長軸長150cm、短軸長125cmの不整形を呈する。底面は安定せず起伏に富み、深さは焼土に覆われている部分が最も深く43cmである。土層観察では埋戻しを行っている途中で柱を立て(2層が柱痕か)、それを抜いた後最後まで埋め戻しているように見える。あるいはこの柱痕は住居の柱で、すでに埋まっていた(3)SK115の場所に柱穴を掘ったものかもしれない。そうなるなら1層は土坑ではなく住居の覆土ということになる。いずれにしても確証はない。

出土遺物 8～11は堀之内式の深鉢口縁部である。12は縄文施文のみであるがおそらく同時期の深鉢胴部、13は底部であろう。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI136 (第66図、図版4・44・45)

形状と規模 壁は失われているが円形に並ぶピットを柱穴列と想定して設定されたものである。規模は東西7.0m、南北5.3mになるが、P19は離れており帰属しない可能性がある。

他遺構との重複関係 (3)SK093～099が重なっているが、新旧関係は不明である。

内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉 検出されていない。

ピット 全部で19基検出されている。P7・16～18は独立したピットとして扱われていたが、当住居に帰属するものと考えた。

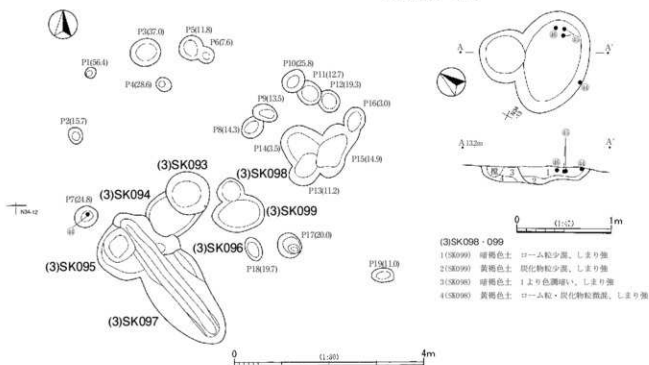
出土遺物 3は称名寺式の深鉢口縁部、4～6は胴部である。1は堀之内式の器形復元ができる深鉢である。7～9は堀之内式の深鉢口縁部、10～14は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK093～097 (第67・68図、図版4・44)

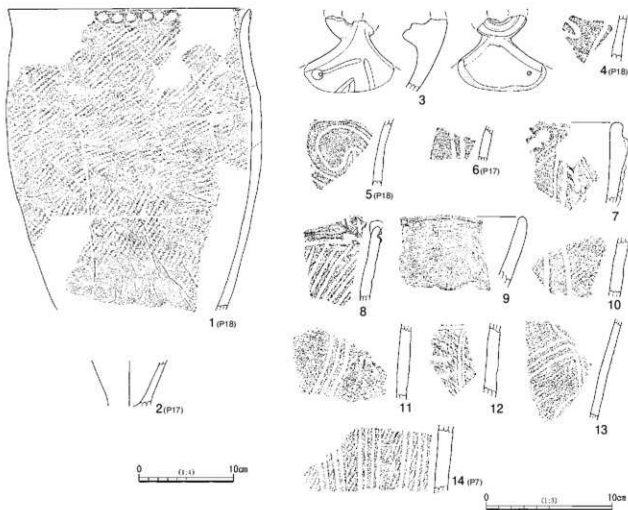
状況 4基の土坑と1基の陥穴が重なり合っている。北東から南西へ、(3)SK093・094・095が重なり合っ

(3)SK098・099

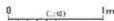
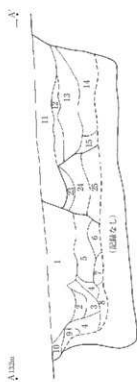
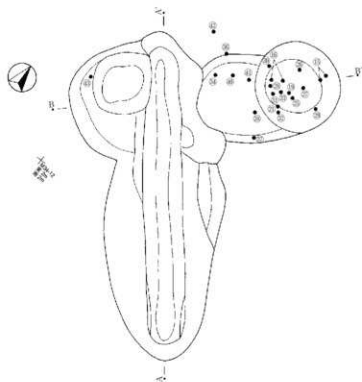


(3)SK098・099

- 1(3)SK098 埴輪色土 コーア粒少量、しまり強
- 2(3)SK099 黄褐色土 炭化物粒少量、しまり強
- 3(3)SK098 埴輪色土 しまり色調強、しまり強
- 4(3)SK098 黄褐色土 コーア粒・炭化物粒微量、しまり強



第 66 図 (3)SI136 住居跡・出土遺物、(3)SK098・099 土坑



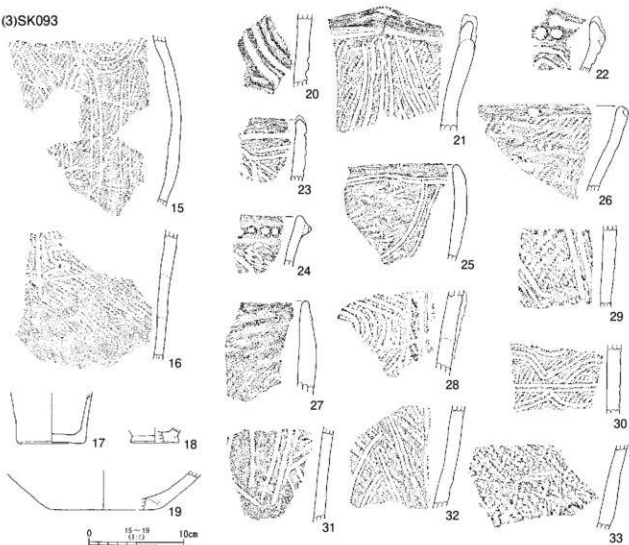
③SK093 ~ 097

- 1 (SK093) 黒褐色土 φ30 mmロームブロックやや多量、しまり強、1と11の分層困難
- 2 (SK094) 黒色土 黒人跡少、粘土質、しまりや中弱
- 3 (SK095) 黄褐色土 2に類似するが2より褐色土や中多量、しまりや中弱
- 4 (SK096) 埴粉色土 黒人跡少、粘土質、しまりや中弱
- 5 (SK096) 埴粉色土 埴粉色中に褐色土や斑状に含む、しまりや中弱
- 6 (SK096) 褐色土 φ10 mmロームブロック散在、しまりや中弱
- 7 (SK096) 黒色土 黄褐色土少量、しまりや中弱
- 8 (SK096) 埴黄褐色土 φ10 mmロームブロック少量、しまりや中弱、粘性やや強
- 9 (SK096) 黄褐色土 φ30 mmロームブロック多量、しまり強
- 10 (SK096) 埴黄褐色土 ローム粒少量
- 11 (SK093) 埴粉色土 1に類似するがやや中弱が少なく、しまり強
- 12 (SK093) 埴粉色土 褐色土混、しまり強
- 13 (SK093) 埴粉色土 褐色土・黄褐色土多量 (混状)

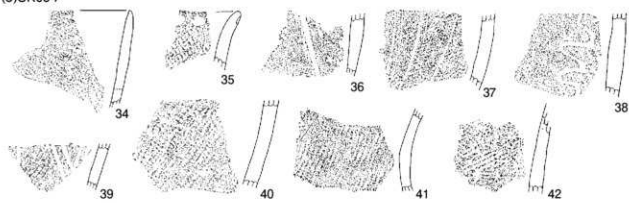
- 14 (SK093) 埴粉色土 13に類似するが黄褐色土が少ない
- 15 (SK093) 黒褐色土 ローム粒少量、しまり強めて弱い
- 16 (SK093) 埴粉色土 φ10 mm粘土和熟土、粘土質、しまり強
- 17 (SK093) 埴粉色土 φ10 mm粘土和16より多量、粘性やや強、しまり強
- 17' (SK093) 埴粉色土 17より色濃くや明ない
- 18 (SK093) 黒褐色土 褐色土ブロック・褐色土粘事混、しまり弱
- 19 (SK093) 黄褐色土 ロームブロック斑状に含む、しまり強
- 20 (SK094) 埴粉色土 粘土質
- 21 (SK094) 埴粉色土 20より黄褐色土多量、粘土質
- 22 (SK094) 黄褐色土 φ10 mmロームブロック多量、しまり非常に強
- 23 (SK097) 黒褐色土 12に類似する、φ10 mmロームブロック少量 (混状)、しまり強
- 24 (SK097) 埴黄褐色土 φ30 mm黒色土・黄褐色土多量 (混状)、しまりや中弱
- 25 (SK097) 褐色土 黄褐色土少量 (混状)、しまりや中弱、粘性やや強

第 67 図 ③SK093・094・095・097 土坑

(3)SK093



(3)SK094



(3)SK095



(3)SK099



第 68 图 (3)SK093 ~ 095 · 099 土坑出土遺物

て並び、南東側に(3)SK096が重なっている。さらに下側に(3)SK097陥穴が存在する。各遺構の規模は判断が難しいが、(3)SK093は長軸長98cm、短軸長90cmの正円に近い楕円形、(3)SK094は長軸長110cm以上、短軸長94cmの不整形円形、(3)SK095は直径115cm程度のおそらく円形、(3)SK097陥穴は長軸長347cmの長楕円形である。(3)SK096は(3)SK097とはほぼ重なるため規模や形状は不明であるが、(3)SK097北東部の張出しが遺構の一部とみられる。新旧関係であるが、陥穴(3)SK097が最も古く、埋まった後(3)SK094が構築される。次いで(3)SK095→(3)SK096となる。(3)SK093は(3)SK094より新しいが、(3)SK095との新旧関係は不明である。深さは(3)SK093が65cm、(3)SK094が25cm、(3)SK095が65cm、(3)SK097が90cmである。(3)SK096は土層断面図で記録された底部の線が真の床面かどうか不明なため計測していない。

出土遺物 15～33は(3)SK093から出土した遺物である。20～27は堀之内式の深鉢口縁部、15・16・28～32は胴部である。17・18は無文の底部である。19は浅鉢もしくは注口土器の底部であろう。34～42は(3)SK094から出土した遺物である。34・35は堀之内式の深鉢口縁部、36～39は胴部である。なお、36と42は遺構外から出土したようになっているが、検出時の遺構範囲はここまで広がっているように見えたため遺構出土として取り上げたものである。43は(3)SK095から出土した遺物で、黒浜式の深鉢胴部である。(3)SK096・097からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期 (3)SK093・094の主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、両遺構とも該期と考えられる。(3)SK095の出土遺物は黒浜式であるが、先述したとおり遺構自体は(3)SK094より新しいことが確実なため混入品であり、(3)SK097陥穴に伴うものかもしれない。(3)SK095・096は出土遺物から判断はできないが、(3)SK094に近い時期と思われる。

(3)SK098・099 (第66・68図、図版4・44)

状況 (3)SI136住居跡中央部に位置する。(3)SK098は直径60cmの正円形、(3)SK099は長軸長110cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。土層観察から(3)SK098が古く(3)SK099が新しいと判断されるが、深さはいずれも20cmで床面はほぼ同一レベルである。

出土遺物 (3)SK098からは図示できる遺物は出土しなかった。44～46は(3)SK099から出土した遺物で、いずれも堀之内式の深鉢胴部である。

時期 (3)SK099の主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。(3)SK098は(3)SK099より古いதாகி 大きき廻るとは思われず、近い時期であろう。

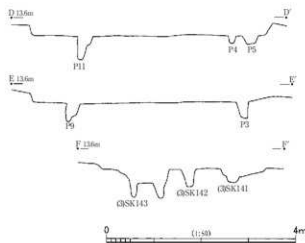
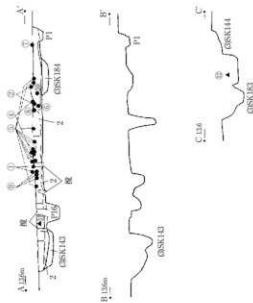
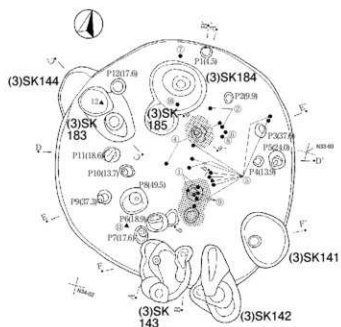
(3)SI139 (第69・71・72図、図版4・45・99)

形状と規模 直径5.1mの正円形に近い円形を呈する。深さは20cmである。

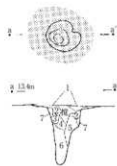
他遺構との重複関係 (3)SK141～144・183～185の7基の土坑と重なり合う。(3)SK183～185は住居の床下から検出されたもので住居より古い。(3)SK141～144は土層断面の観察から住居より新しいと考えられるが、(3)SK142と(3)SK143については一部もしくは全体が住居跡の出入口施設の可能性がある。

内部の状況 壁は直立気味に立ち上がる。覆土はほぼ単一であるが、2層は貼床かもしれない。床面は南側に下るよう緩やかに傾斜している。硬化面は検出されなかった。

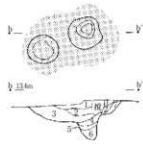
炉 住居中央部に、A・B2基が縦に連なるように検出されている。Aは直径30cm、深さ63cmのピット上に構築されているが、直接関係あるのかは不明である。Bは断面皿状の土坑の中に直径30cm、深さ19cmのピットと、直径33cm、深さ41cmのピット2基が掘られるという構造になっているが、上端の記録がないため詳細不明である。住居全体の平面図にあるトーンは焼土の範囲であるが、土坑の開口部の形状を示して



炉 A



炉 B



GIS139

- 1 埴明色土 ローム粒多量、φ5mmロームブロックやや多量、焼土粒少量、しまり強
- 2 黄褐色土 ローム粒・黒色土粒微量、しまり強

GIS139 伊 A

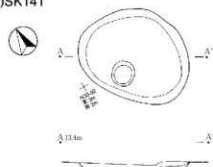
- 1 黒褐色土 焼土粒やや多量、焼土ブロック・ローム粒・炭化物粒少量、灰子部、しまりやや強
- 2 埴明褐色土 焼土粒多量、ローム粒少量、しまりやや弱
- 3 埴明褐色土 2より色調明るく非味を帯びる、しまり弱
- 4 埴明褐色土 2より色調暗い、しまり弱
- 5 埴明褐色土 黒色土層、焼土を全く含まない、しまり弱(残灰?)
- 6 黒褐色土 ローム粒多量、しまり弱、粘性強
- 7 埴明褐色土 レンガ状の焼土ブロック多量、しまり弱

GIS139 伊 B

- 1 埴明褐色土 φ2mmローム粒・焼土粒微量、しまり強
- 2 埴明褐色土 焼土粒非常に多量、しまり強
- 3 埴明褐色土 焼土粒・炭化物粒微量、しまりやや弱
- 4 埴明褐色土 焼土粒少量、しまりやや弱
- 5 黒褐色土 焼土粒微量、しまりやや弱
- 6 黒色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 7 赤褐色土 焼土粒多量、φ5mm焼土ブロック微量、しまり強

第 69 図 (3) SI139 住居跡

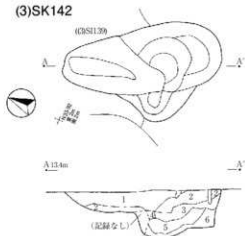
(3)SK141



(3)SK141

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、しまり強、黏床材?
- 2 黄褐色土 ローム粒・焼土粒散見

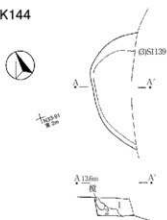
(3)SK142



(3)SK142

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまり強
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量、しまり強
- 3 暗褐色土 φ5mmローム粒少量、しまり強
- 4 黄褐色土 φ10mmロームブロック多量、しまり強
- 5 黒褐色土 φ5mmロームブロック少量、粒子粗、しまりやや弱
- 6 暗褐色土 ローム粒散見、粒子粗、しまりやや弱

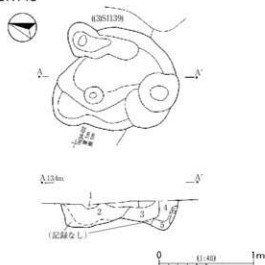
(3)SK144



(3)SK144

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまり非常に強
- 2 暗黄褐色土 ローム粒やや多量、しまり非常に強

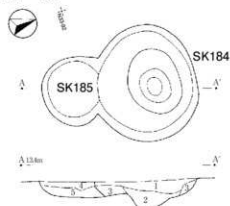
(3)SK143



(3)SK143

- 1 暗褐色土 ローム粒散見、しまり強
- 2 暗褐色土 焼土粒・φ3mmローム粒散見、しまり強
- 3 暗褐色土 黒色土粒やや多量、φ3mmローム粒散見、しまり強
- 4 暗褐色土 ローム粒多量、黒色土粒少量、しまり強
- 5 褐色土 ローム粒多量、しまり強
- 6 黄褐色土 しまり非常に強

(3)SK184・185

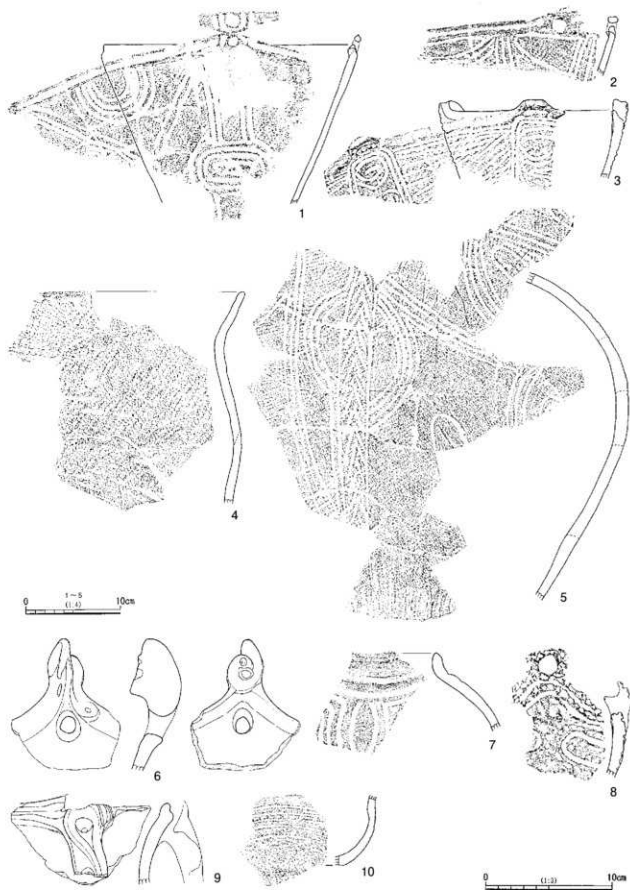


(3)SK184・185

- 1(SK184) 暗褐色土 ローム粒散見、しまり強
- 2(SK184) 暗褐色土 ローム粒やや多量、焼土粒散見、しまりやや弱
- 3(SK184) 褐色土 ローム粒多量、しまり強
- 4(SK185) 暗褐色土 ローム粒少量、しまり非常に強
- 5(SK185) 暗褐色土 4より色調明るい、ローム粒少量、しまり非常に強

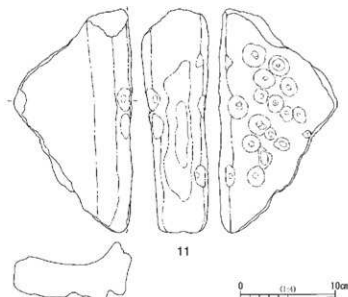
第70図 (3)SK141～144・184・185土坑

(3)SI139

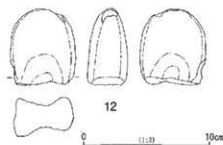


第71図 (3)SI139住居跡出土遺物(1)

(3)SI139



(3)SK183



第72図 (3)SI139住居跡出土遺物(2)、(3)SK183土坑出土遺物

いると考え拡大図でも示した。

ピット 12基検出されている。P5・8などは柱穴の可能性ある。

出土遺物 6は称名寺式の深鉢口縁部である。1～4は堀之内式の深鉢口縁部である。5は同じく胴部で鉢形を呈する。この大きさでも径の復元ができないほどの大形品である。7・8は同時期の鉢形及び深鉢の口縁部で、三十稲場式の影響が見られるものである。9は堀之内式の注口土器把手である。10は堀之内式の浅鉢底部である。11は石皿で、熱を受けている。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK141 (第70図、図版4)

状況 (3)SI139住居跡の南東部に位置し、大部分が住居と重なっている。長軸長120cm、短軸長96cmの不整形円形を呈する。床面は北西側が下がるように傾斜しており、深さは最深で15cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK142 (第70図、図版4)

状況 (3)SI139住居跡の南部に位置し、半分が住居と重なっている。長軸長170cm、短軸長100cmの不整形円形で、複数の土坑が重なり合っているような形状であるが、土層断面ではそうした痕跡は認められない。深さは最深で50cmである。調査時の所見では1・2層と3層以下は別々の土坑であり、下側の土坑は住居の出入口施設の可能性があると考えられていた。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK143 (第70図、図版4)

状況 (3)SI139住居跡の南部に位置し、半分が住居と重なっている。長軸長140cm、短軸長110cmの不整形円で、複数の土坑が重なり合っているような形状である。調査時の所見では土層断面図の4～6層は平面図右端のピットの覆土である可能性を指摘しており、住居の柱穴かもしれない。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、住居跡より新しいものの大きくなることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK144 (第70図、図版4)

状況 (3)SI139住居跡の北西部に位置し、大部分が住居と重なっている。住居との境で最大長125cm、残存幅45cmである。断面は方形に近い逆台形で深さは20cmである。住居側を先に掘ったため土層断面の右側は実測していないが、調査所見では住居が古く土坑が新しいとのことである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、住居跡より新しいものの大きくなることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK183 (第69・72図、図版4・97)

状況 (3)SI139住居跡の北西部壁際に位置し、住居の床面下から検出された。長軸長76cm、短軸長64cmの楕円形土坑と直径40cmのビット状土坑が組み合わされた状況で、それらを囲むように長軸長110cm、短軸長88cmの不整形円形土坑が掘り込まれる。ただしビット状土坑は住居の柱穴の可能性がある。深さは住居の床面からそれぞれ32cmと48cmである。

出土遺物 図示できる土器は出土しなかった。I2は磨石である。

時期 不明であるが、住居跡より古いものの大きくなることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK184・185 (第70図、図版4)

状況 (3)SI139住居跡の北部に位置し、住居の床面下から検出された。(3)SK184は長軸長125cm、短軸長110cmの楕円形を呈する皿状の土坑の中央部に長軸長69cm、短軸長56cmの断面逆三角形の土坑が掘り込まれる。(3)SK185は直径73cmの正円形を呈する皿状の土坑である。土層断面から(3)SK185が古く(3)SK184が新しいと判断される。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、両者とも住居跡より古いものの大きくなることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SI140 (第73～76図、図版4・46・47・99)

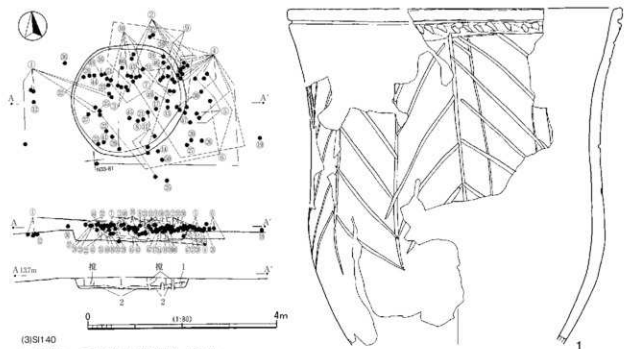
形状と規模 直径2.4mのはほぼ正円形を呈する。

内部の状況 断面は均整のとれた逆台形で床面も平坦である。硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

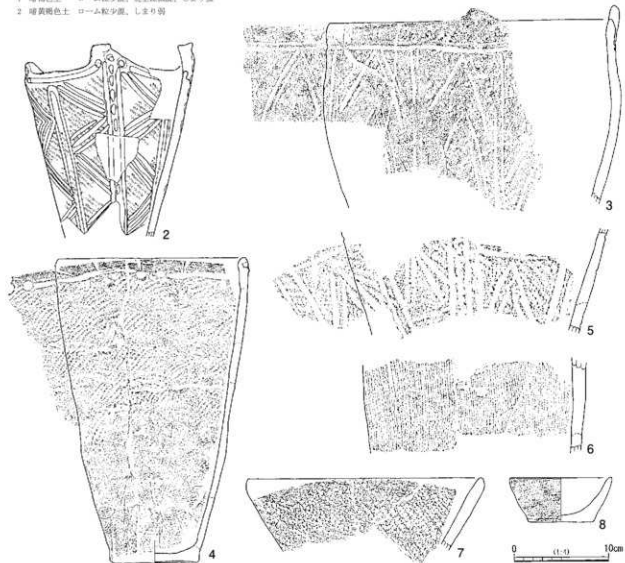
ピット 検出されていない。

出土遺物 遺構の規模に対し極めて多量の遺物が出土した。I2は浮島式の深鉢胴部である。I3は称名寺式の深鉢胴部である。1～8は器形復元可能なものである。いずれも堀之内式で、8は浅鉢、それ以外は深

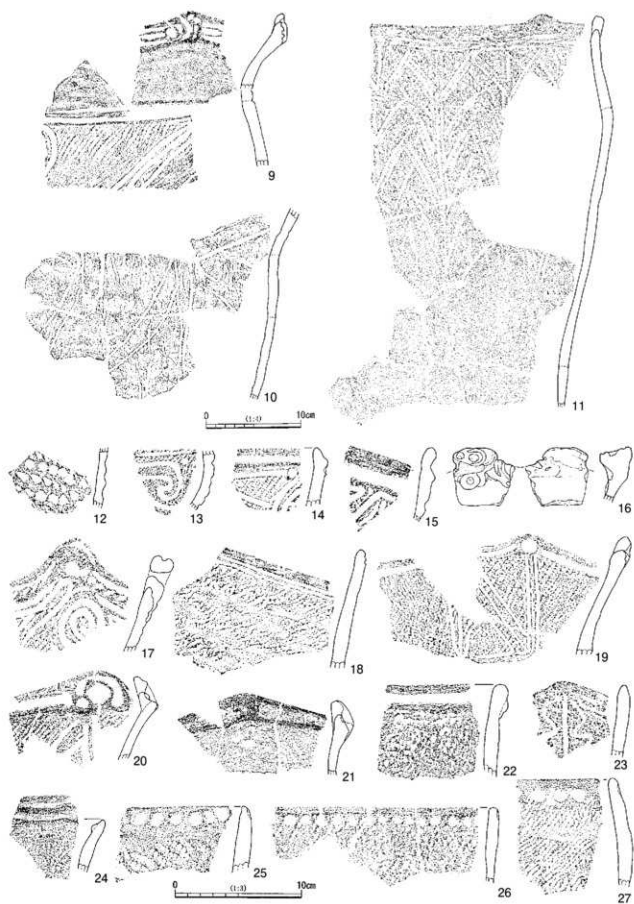


(3)SI140

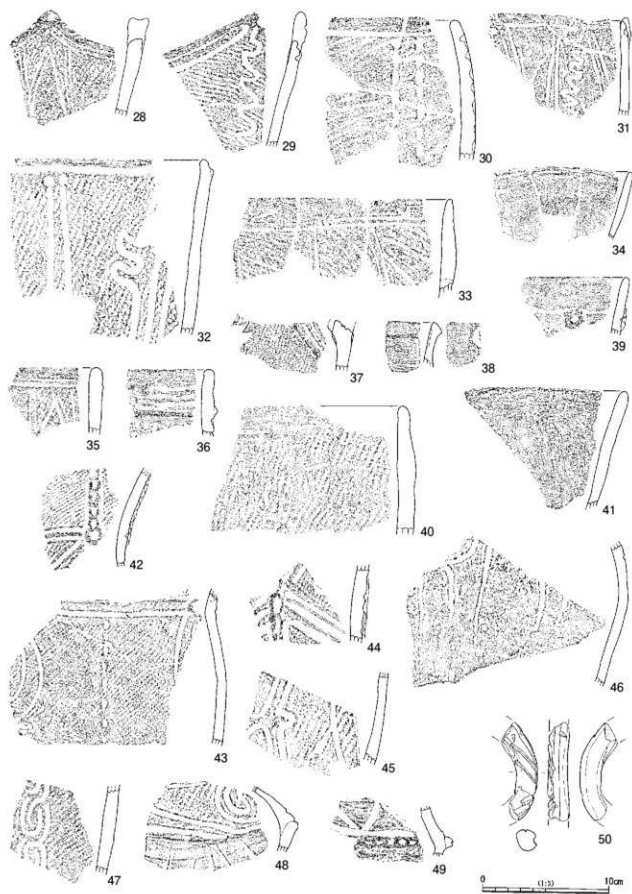
- 1 薄褐色土 コーア粒少量、粘土粒微細、しまり強
- 2 薄黄褐色土 コーア粒少量、しまり弱



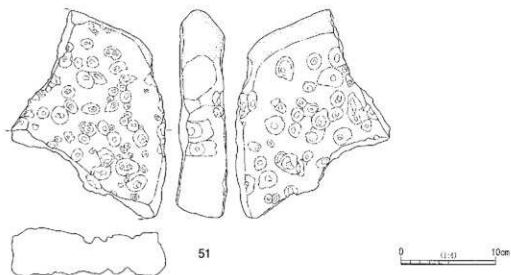
第73図 (3)SI140住居跡、出土遺物(1)



第74图 (3)SI140住居跡出土遺物(2)



第75図 (3)SI140住居跡出土遺物(3)



第76図 (3SI140住居跡出土遺物(4))

鉢である。9・11・14～41は堀之内式の深鉢口縁部、10・42～47は胴部である。48～50は注口土器で、50は把手である。51は石皿である。両面とも磨耗著しく孔の密度もほぼ同じで、どちらが上面かは判断できない。熱を受けている。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI147 (第77・78図、図版4・48・96～98)

形状と規模 当住居跡は出入口施設をもつ、いわゆる柄鏡形住居である。本体部は南北長5.6m、東西長5.8mの不整形を呈する。南側に長さ29m、最大幅1.4mの出入口施設が設けられる。2基の楕円形土坑を連結したような形状を呈する。調査時は円形と住居跡と土坑との重なり合いとして捉えられていたが、一体のものとするのが妥当であろう。

内部の状況 断面逆台形で深さは30cmである。床面はほぼ平坦で、出入口施設までレベル差なく続く。硬化面は検出されなかった。

炉 住居のほぼ中央に構築される。掘り方は長軸長67cm、短軸長56cm、深さ43cmのピット状で、覆土に多量の焼土粒・焼土ブロックが含まれる。使用頻度が高かったと考えられる。

ピット 全部で22基検出されている。壁に沿って規則正しく一列に並ぶ。どのピットもしっかり掘り込まれており、柱穴と考えられる。出入口施設のほぼ中央にも1基ピットが検出されている。

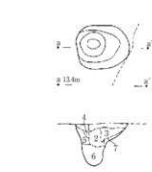
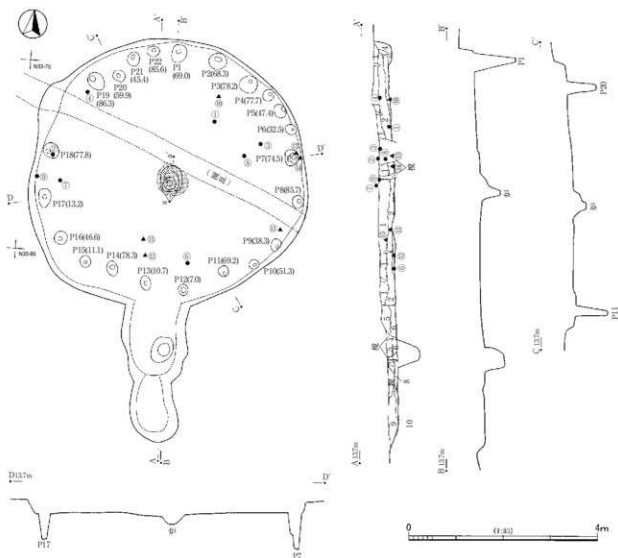
出土遺物 1～4は器形復元できる資料で、いずれも堀之内式である。3は台付土器と思われる。5～7は堀之内式深鉢口縁部、9は胴部、8は注口土器の把手である。10・11は磨製石斧である。12・13は石棒である。12は帯磁している。13は強く熱を受けており、破断した状態で出土した。14・15は軽石製品である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI161 (第79・80図、図版4・48・49・96・98・99)

形状と規模 長軸長4.1m、短軸長3.6mの楕円形を呈する。

他遺構との重複関係 南西側に(3)SK162土坑が重なっている。土層観察により住居より新しいと判断され



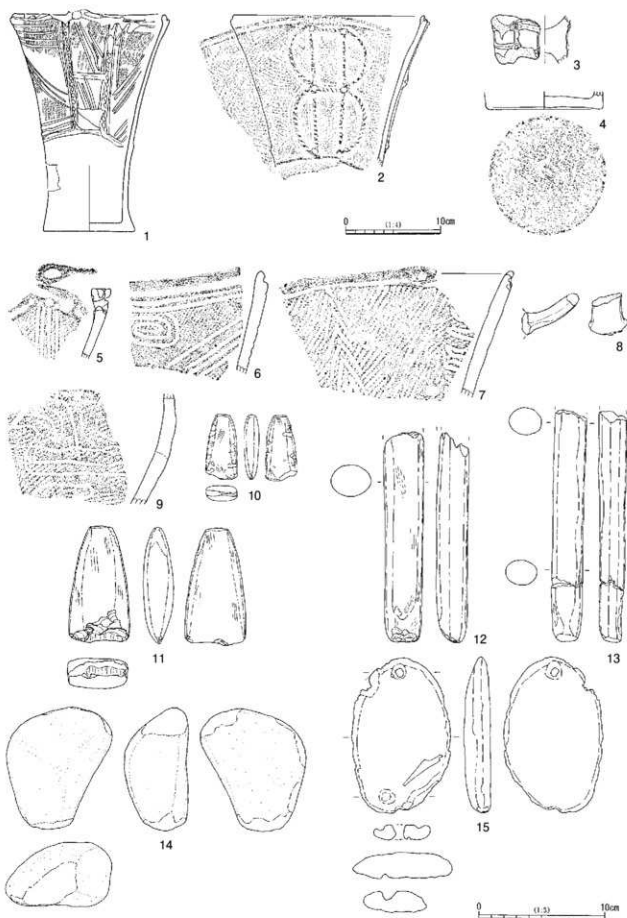
(3S1147 伊)

- 1 埴粉色土 焼土粒・ローム粒混入、しまり強
- 2 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少混、しまり強
- 3 埴赤褐色土 焼土粒やや多混、しまり強、粘性やや強
- 4 埴粉色土 ローム粒混入、しまり強
- 5 褐色粘質土 ローム粒混入、しまり強
- 6 黒褐色土 焼土ブロック混、しまり強、粘性強
- 7 埴粉色土 レンガ状に推熟した焼土ブロック混

(3S1147)

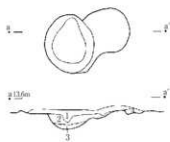
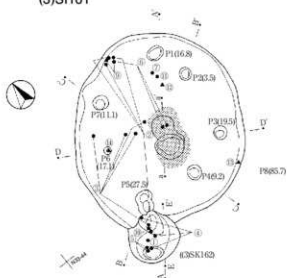
- 1 埴粉色土 ローム粒・φ10mm焼土ブロック・焼土粒やや多混、粘性やや強、肌層する土硬化調整
- 2 埴粉色土 1より色調暗い、ローム粒やや多混、焼土粒少混、粘性やや強、肌層する土硬化調整
- 3 黒褐色土 2より色調暗い、ローム粒多混、焼土粒混入、粘性やや強、肌層する土硬化調整
- 4 黄褐色土 ローム粒少混
- 5 埴粉色土 ローム粒・焼土粒混入、しまり強
- 6 埴褐色粘質土 焼土粒・ローム粒少混、炭化物粒混入、しまり強
- 7 埴粉色土 ローム粒やや多混、しまりやや強
- 8 埴褐色粘質土 しまり強
- 9 褐色土 ローム粒混入、しまり強
- 10 黄褐色土 しまり強、粘性やや強

第77図 (3S1147) 住居跡



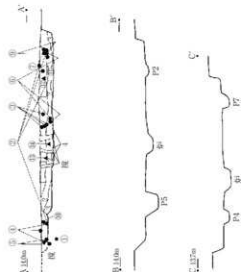
第78図 3SI147住居跡出土遺物

(3)SI161



(3)SI161 跡

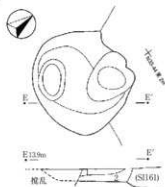
- 1 埴形褐色土 焼土粒・ローム粒散在、しまり強
- 2 埴形褐色土 1より黄色味強い、焼土粒多量、しまりやや弱
- 3 埴形褐色土 焼土粒多量、しまりやや弱
- 4 黄褐色土 焼土ブロック多量、粒子粗、しまり強



(3)SI161

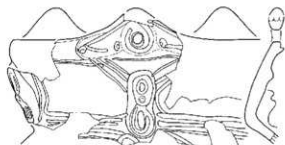
- 1 埴形褐色土 ローム粒やや多量、焼土粒散在、粒子やや粗、しまり強
- 2 埴形褐色土 ローム粒+φ5mmロームブロック少量、粒子やや密、しまり強
- 3 褐色土 焼土粒・ローム粒散在、粒子密、しまりやや弱
- 4 埴形褐色土 φ5mm焼土ブロックやや多量、ローム粒多量、しまり弱、砂層土

(3)SK162



(3)SK162

- 1 埴形褐色土 ローム粒やや多量、しまり強
- 2 褐色土 φ5mm焼土粒少量、しまり強



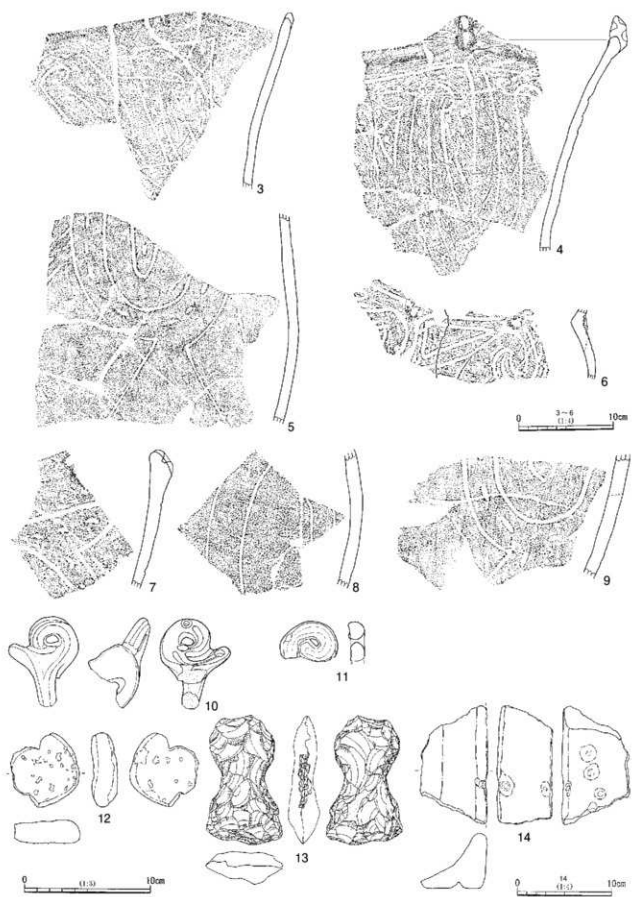
1 (SK162)



2



第79図 (3)SI161住居跡、(3)SK162土坑、出土遺物



第80図 (3SI161) 住居跡出土遺物

るが、住居の出入口施設である可能性も指摘しておく。

内部の状況 断面逆台形で深さは30cmである。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉 住居の中央よりやや南西側に構築される。長軸長62cm、短軸長52cmの楕円形を呈し、北東側に同規模の張出しが存在する。

ピット 7基検出されている。壁からやや離れた位置に円錐を描くように配される。全体に浅い。

出土遺物 2～4は称名寺式の深鉢口縁部、5～9は胴部である。10・11は深鉢の把手である。12は軽石製品、13は打製石斧、14は石皿である。

時期 主たる出土遺物は称名寺式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK162 (第79図、図版4・48)

状況 (3)SI161の南西側に位置する。長軸・短軸とも長さ110cmの不整形形を呈し、内部にはピット状の掘込みが2か所認められる。断面皿状であるが遺存状況は悪い。

出土遺物 1は称名寺式の深鉢口縁部である。

時期 主たる出土遺物は称名寺式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI163、(3)SK174 (第81～83図、図版5・49・50・96～98)

形状と規模 当住居跡は3次調査区と7次調査区にまたがって構築されている。長軸長6.4m、短軸長5.2mの不整形形を呈する。西側の壁がやや不自然に曲がっており、2軒以上の重複の可能性も考えたが柱穴配置などからはそうした状況は認定できなかった。楕円形が隅丸長方形だったかもしれない。北東部に(3)SK174が重なっているが、これは3次調査区側で検出されたものの、7次調査区側では検出されなかったようで、実態は不明である。

他遺構との重複関係 (3)SK164と(3)SK173が重なっている。(3)SK164は住居より新しく、(3)SK173は住居より古い。

内部の状況 壁の立上りはややなだらかである。覆土は全体にロームブロックや焼土粒が多量に混入しており、人為的に埋め戻されたものであろう。床面は平坦であるが、特に硬化面などは検出されなかった。

炉 ブラン北部のかなり壁に近い位置に構築されている。長軸長82cm、短軸長46cmの不整形形を呈する。深さは5cmとごく浅いが、覆土に焼土粒・焼土ブロックが多量に含まれており、使用頻度は高かったと考えられる。

ピット 全部で17基検出されている。7次調査区側は壁に沿うようにある程度規則正しく配されるのに対し、3次調査区側は不規則な配置である。検出が不十分だった可能性がある。

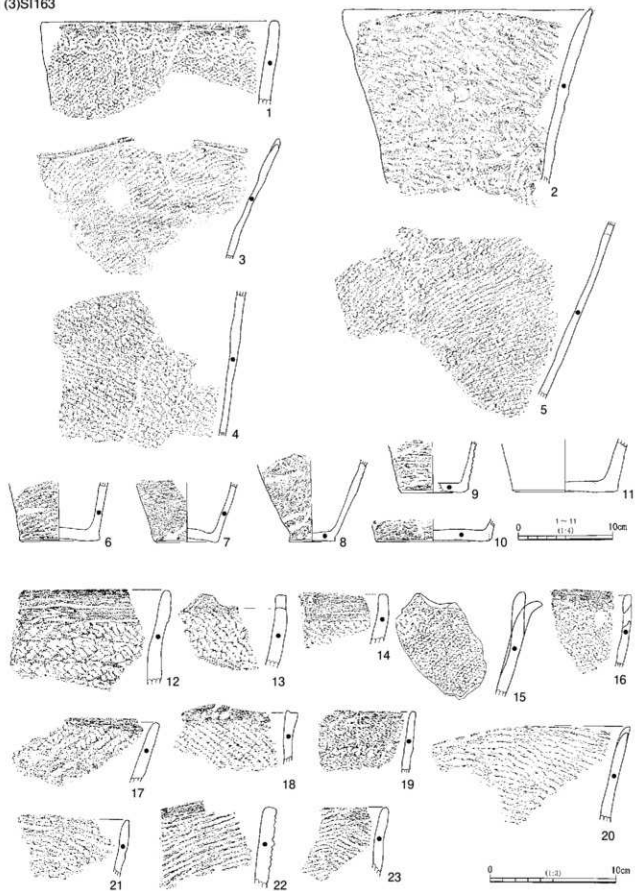
出土遺物 1・2・6～10は器形復元できる資料で、黒浜式の深鉢である。3・12～27は黒浜式の深鉢口縁部、4・5・28・29は胴部である。30・31は諸磯式の深鉢口縁部である。32は堀之内式の深鉢口縁部である。11はおそらく後期土器の底部である。33・34は磨製石斧である。35は敲石である。36は三角錐形軽石製品である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

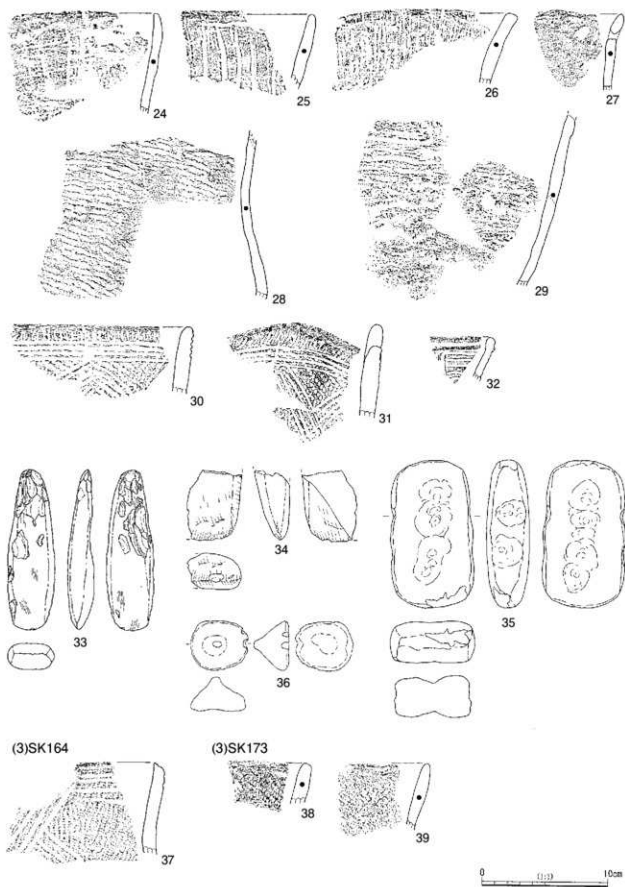
(3)SK164 (第81・83図、図版5・50)

状況 (3)SI163住居跡の南部に位置し、住居と半分ほど重なっている。長軸長120cm、短軸長84cmの不整形形を呈する。床面には凹凸があり、最も深い部分で22cmである。南西側には直径30cmのピット状の掘込み

(3)SI163



第 82 図 (3)SI163 住居跡出土遺物 (1)



第 83 图 (3)SI163 住居跡出土遺物 (2)、(3)SK164・173 土坑出土遺物

が存在する。土層断面の観察から住居より新しいと判断される。

出土遺物 37は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK173 (第81・83図、図版5・50)

状況 (3)SI163住居跡の南部に位置し、住居と3分の1ほど重なっている。長軸長124cm、短軸長96cmの不整形円形を呈する。床面はほぼ平坦で、深さは30cmである。土層断面の観察から住居より古いと判断される。

出土遺物 38・39は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI165 (第84・85図、図版5・50)

形状と規模 当住居跡は南北4.6m、東西5.0mの範囲で円形に並ぶ柱穴状のピット7基から構成される。ただし7基とも小さく浅い。

他遺構との重複関係 P5と(3)SK128が重なっている。また、ピットの内側には(3)SK126・127が存在するが、いずれも新旧関係は不明である。

内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉 検出されていない。

出土遺物 当住居跡に帰属するとして取り上げられているのは1であるが、平面図を見ると(3)SK128から出土しているようにも見える。堀之内式の深鉢と思われる。

時期 堀之内式期に属するものであろう。

(3)SK126 (第84・85図、図版5・51)

状況 長軸長104cm、短軸長100cmの不整形円形を呈する。床面は緩やかに窪んでおり、深さは38cmである。

出土遺物 2は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 堀之内式期に属するものであろう。

(3)SK127 (第84・85図、図版5・51)

状況 長軸長180cm、短軸長150cmの隅丸台形状を呈する。底面は西側に向かって緩やかに下降するように傾斜しており、深さは最深で33cmである。土坑南西部には長軸長130cm、短軸長80cmの台形状を呈する一回り小さな掘込みが存在する。

出土遺物 4は堀之内式の深鉢口縁部、3は胴部から底部である。

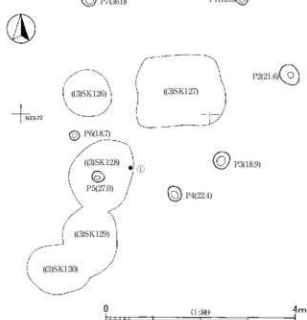
時期 出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK128~130 (第84・85図、図版5・51・96)

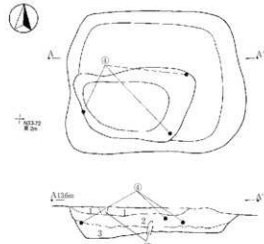
状況 3基の土坑が重なり合っている。(3)SK128は長軸長160cm、短軸長128cmの不整形円形を呈し、深さは19cmである。中心部に直径20cm～26cmのピットが掘り込まれる。(3)SK129は長軸長145cm、短軸長114cmの不整形円形を呈し、深さは20cmである。(3)SK130は長軸長138cm、短軸長103cmの不整形円形を呈し、深さは26cmである。3基の中では(3)SK129が最も古い。

出土遺物 3基分まとめて記載する。5・6・9・10は堀之内式の深鉢口縁部、7・11は胴部である。12は堀之内式の注口土器胴部である。8はミニチュア土器で、無文であるが堀之内式であろう。13は磨製石斧である。

(3)SI165



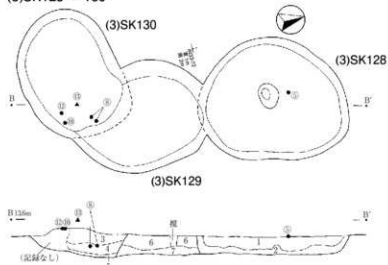
(3)SK127



(3)SK127

- 1 暗褐色土 ローム粒微量、しまりや中弱
- 2 暗黄褐色土 0.30mmロームブロック少量、ローム粒・炭化物粒微量、しまりや中弱
- 3 暗黄褐色土 0.5mmローム粒少量、しまりや中弱

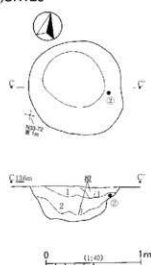
(3)SK128 ~ 130



(3)SK128・129・130

- 1 (3)SK128 暗褐色土 ローム粒・炭土粒微量、しまり強
- 2 (3)SK128 褐色土 黄褐色土少量（底状）、ローム粒微量、しまりや中弱
- 3 (3)SK130 暗褐色土 0.5mmローム粒少量、炭土粒微量
- 4 (3)SK130 暗褐色土 0.5mm〜1mmロームブロック少量
- 5 (3)SK130 褐色土 しまり非常に強
- 6 (3)SK129 褐色土 ローム粒微量、しまりや中弱
- 7 (3)SK129 褐色土 暗褐色土少量、しまりや中弱

(3)SK126

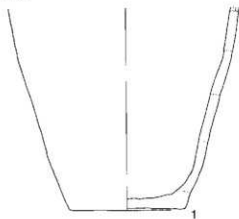


(3)SK126

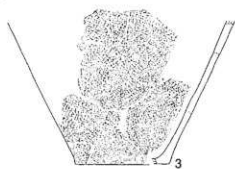
- 1 暗褐色土 ローム粒・0.5mmロームブロック少量、しまり強
- 2 黄褐色土 ローム粒・炭土粒・炭化物粒微量、しまり強
- 3 暗黄褐色土 ローム粒微量、しまり強

第84図 (3)SI165住居跡、(3)SK126～130土坑

(3)SI165



(3)SK127



(3)SK126



(3)SK128



(3)SK129



(3)SK130



第 85 図 (3)SI165 住居跡、(3)SK126 ~ 130 土坑出土遺物

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI177 (第86図、図版5・51)

形状と規模 当住居跡は南北4.0m、東西4.8mの範囲で検出された柱穴状のピット7基と硬化面から構成される。

他遺構との重複関係 中央よりやや東部に(3)SK176土坑が存在する。新旧関係は不明である。

内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。ただし北西部を除きほぼ全面に硬化面が認められ、床面は残存していることが明らかである。

炉 検出されていない。東端部のP1は覆土に焼土が多量に混入しており炉を思わせるが、位置を考慮すると炉ではないと思われる。

ピット 硬化面を取り囲むように7基検出されている。壁柱穴と思われる。

出土遺物 確実に当住居跡に伴っているのは1のみである。称名寺式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物は少ないが称名寺式であり、当遺構の時期を示していると思われる。

(3)SK176 (第86図、図版5・51)

状況 直径130cmの正円形を呈する。ただし開口部は均整がとれた形状であるのに対し、坑底は不整形である。最深で40cmを測る。西部に径35cm～50cmのピット状の掘込みが存在する。

出土遺物 6は称名寺式の深鉢口縁部、7・9～11は胴部である。2～5は堀之内式の深鉢口縁部、8は胴部である。12～15は後期土器の底部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI179 (第87図、図版5・51)

形状と規模 長軸長3.9m、短軸長3.6mの不整形円形を呈する。

内部の状況 断面皿状を呈し、壁の立上りは緩やかである。床面は平坦で深さは15cmと浅い。硬化面は検出されなかった。

炉 中央より北西部から検出されている。

ピット 5基検出されている。中央部に寄った位置であり、P1・4は主柱穴であろう。

出土遺物 1・2は黒浜式の深鉢口縁部、3は胴部である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI181 (第88図、図版5)

形状と規模 視乱が著しく不明な点はあるが、長軸長3.7m、短軸長3.2mの不整形円形を呈すると思われる。

他遺構との重複関係 中央西寄りに(3)SK182が存在し、住居より新しい。

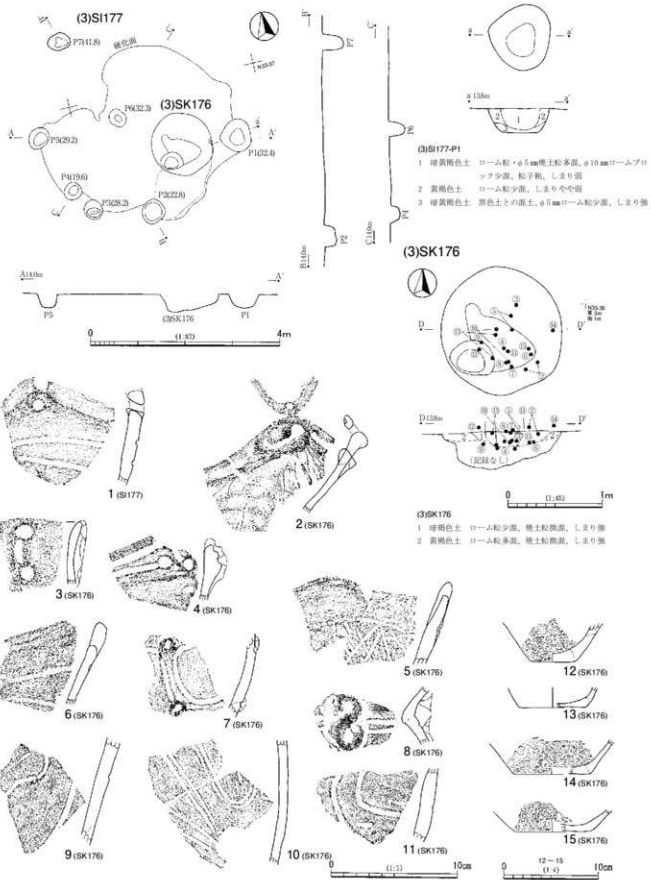
内部の状況 断面皿状を呈し、壁の立上りは緩やかである。深さは10cmとごく浅い。床面に硬化面は検出されなかった。

炉 中央部に位置するが、土坑と視乱によってほとんど削平されている。径約50cmの円形を呈すると思われる。

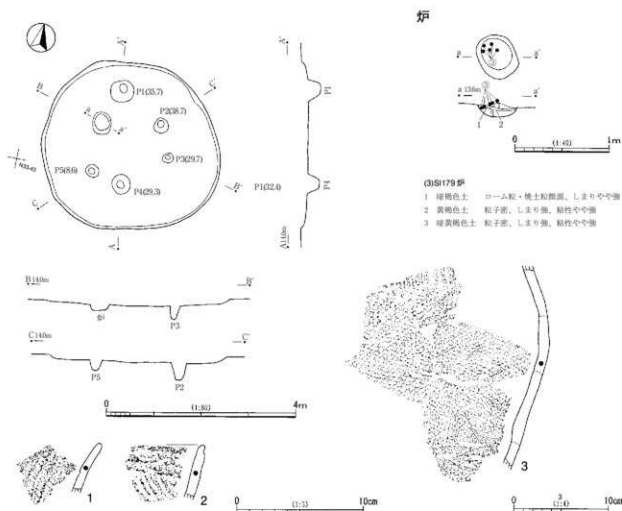
ピット 中央部に寄った位置から7基検出されている。P1・4は主柱穴であろう。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

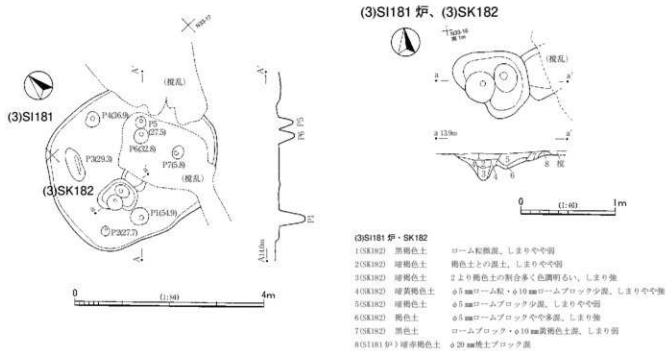
時期 細別時期は、不明である。



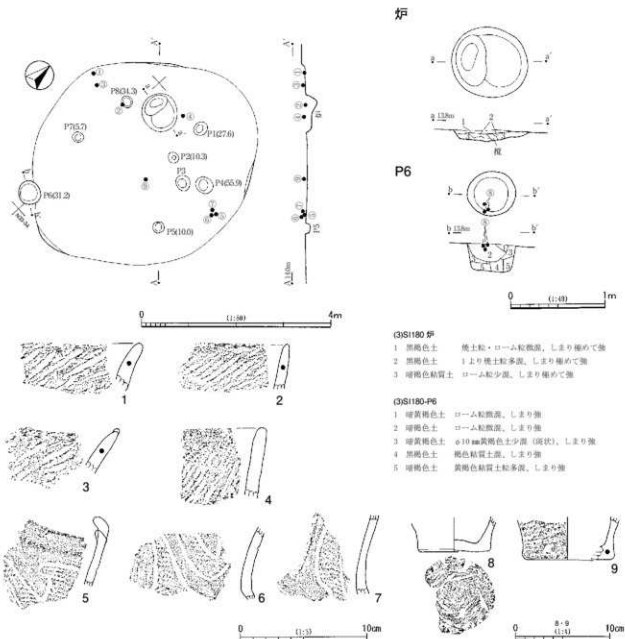
第 86 図 (3)SI177 住居跡、(3)SK176 土坑、出土遺物



第 87 図 (3)SI179 住居跡、出土遺物



第 88 図 (3)SI181 住居跡、(3)SK182 土坑



第 89 図 (3)SI180 住居跡、出土遺物

(3)SK182 (第88図、図版5)

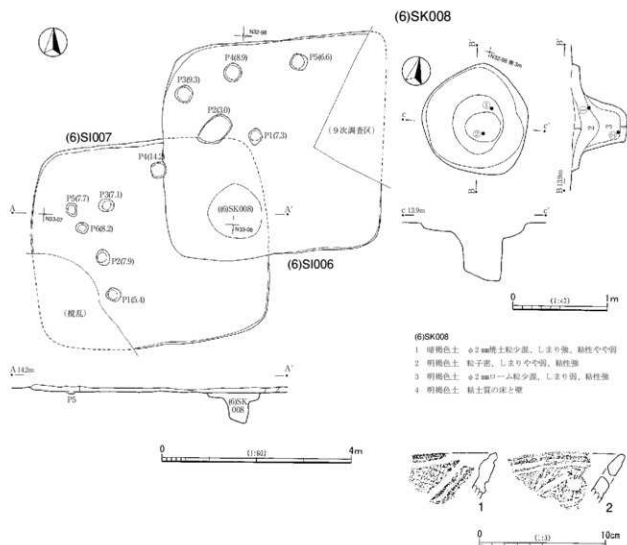
状況 (3)SI181住居跡の床面やや西寄りに位置し、住居の炉を切っている。東西長80cm、南北長70cmの不整形土坑の床に、直径25cm～30cmの摺鉢状のピット2基が連結されたような形状である。土層断面からこの2基のうち東側が古く西側が新しいと判断される。この西側のピットには柱痕と思われる土層堆積が認められるが、住居との関連はないと考えられ、性格は不明である。深さは最深で29cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SI180 (第89図、図版5・52)

形状と規模 壁がほとんど残存していないため一部推定復元しているが、長軸長5.2m、短軸長4.4mの不整形円形を呈する。



第90図 (6)SI006・007住居跡、(6)SK008土坑、出土遺物

内部の状況 断面皿状を呈し、壁の立上りは緩やかである。深さは5cm以下でかろうじて掘込みが認識できる程度である。床面はほぼ残存していると思われるが、硬化面は検出されなかった。

炉 北西部に存在する。長軸長80cm、短軸長75cmの正門に近い楕円形である。西側が一段低くなっており深さが10cmである。焼土粒が混入するものが多いとは言えず、使用頻度は低かったとみられる。

ピット 全部で8基検出されている。そのうちP6は住居の壁をまたぐように位置しており、独立した土坑かもしれない。

出土遺物 1～3は黒浜式の深鉢口縁部、9は底部である。5は称名寺式の深鉢口縁部、6・7は胴部である。4は堀之内式の深鉢口縁部、8は後期土器の底部である。

時期 出土遺物は黒浜式と称名寺式に分けられ、数量はほぼ拮抗しているが、称名寺式の遺物は住居東部のごく狭い範囲からの出土であるのに対し、黒浜式の遺物は住居内の各所から出土しているため、当遺構は黒浜式期と考えられる。

(6)SI006 (第90図、図版5)

形状と規模 東西長、南北長とも4.6mの隅丸方形を呈する。なお、北東側は9次調査区の範囲になるが、

検出されなかった。

他遺構との重複関係 南西部が(6)SI007及び(6)SK008と重なっており、(6)SI007より古いことは分かるが(6)SK008との新旧関係は不明である。

内部の状況 断面方形で壁はほぼ直立する。床面は平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で5基検出されている。配置は極めて不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、堀之内式を出土している(6)SK008と大きな隔たりはないと考えられる。

(6)SI007 (第90図、図版5)

形状と規模 東西長5.0m、南北長4.3mの隅丸長方形を呈する。

他遺構との重複関係 北東部が(6)SI006及び(6)SK008と重なっており、いずれの遺構よりも新しい。

内部の状況 断面方形で壁はほぼ直立する。床面は平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で6基検出されている。配置は極めて不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、堀之内式を出土している(6)SK008より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、土坑に近い時期と推測される。

(6)SK008 (第90図、図版6・52)

状況 開口部は径114cmの不整形円形を呈する。深さ8cmの皿状に掘り窪められ、中央部はさらに径52cm～62cmの柱穴状のピットが掘り込まれる。(3)SI007住居跡の床下から検出され、住居より古いと判断される。土層断面から、全体が同時に埋まったものと判断され、複数の遺構が重なっている状況ではないとみられる。

出土遺物 1・2は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI001 (第91図、図版6・52・93)

形状と規模 長軸長6.0m、短軸長4.7mの不整形を呈する。東・南の壁は直線的であるが、北・西の壁は円弧を描いている。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分かりにくいだが、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも10cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

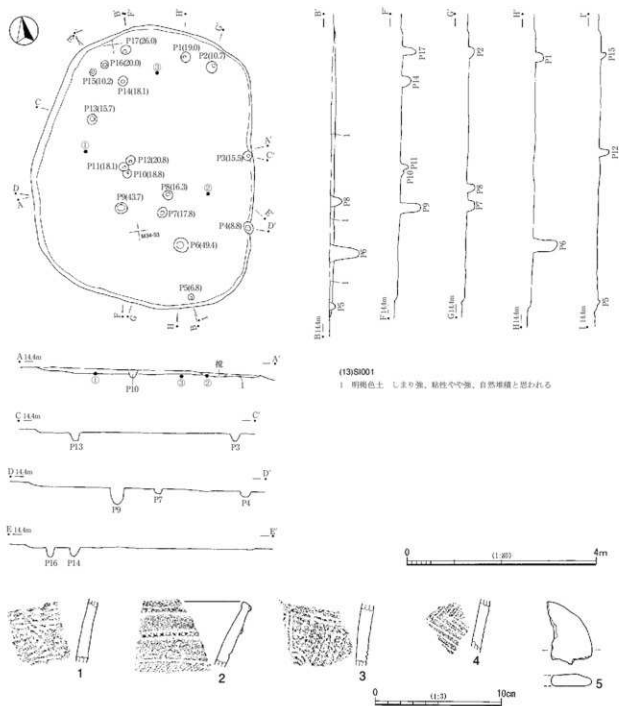
ピット 全部で17基検出されている。ただしP6・8・10は土層断面の観察から当住居跡より新しいと考えられる。

出土遺物 1は浮島式の深鉢胴部である。2は堀之内式の深鉢口縁部、3・4は深鉢胴部である。5は土製円盤である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI002 (第92図、図版6・52)

形状と規模 当住居跡は13次調査区と15次調査区にまたがって構築されているが、15次調査区側には中・



(13)SI001

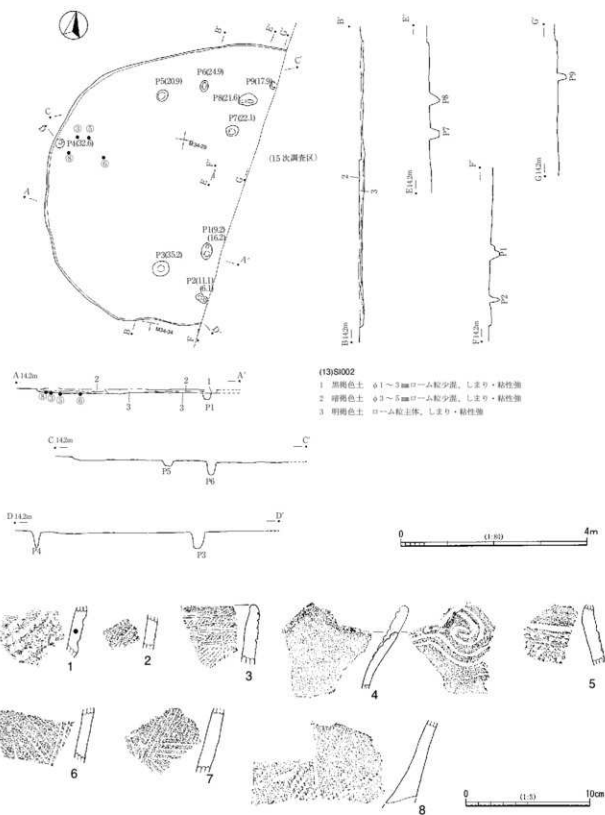
1 明褐色土 しまり強、粘性やや強、自然崩壊と想われる

第91図 (13)SI001 住居跡、出土遺物

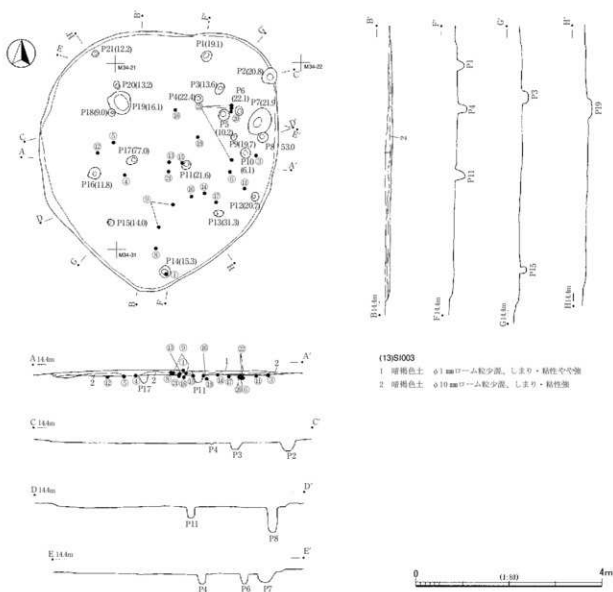
近世の(15)SD201溝状遺構が伸びており削平されたと考えられる。従って全体の規模は不明である。13次調査区での東西長は46m、南北長は6.1mを測る。全体形状は不整形を呈すると思われる。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分かりにくい、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも10cm程度である。床面は中央部が微妙に窪む。硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。



第92図 (13)SI002住居跡、出土遺物



第93図 (13)SI003住居跡

ピット 全部で9基検出されている。P3・5などが支柱穴であろう。

出土遺物 1は黒浜式の深鉢胴部である。2は興津式の深鉢胴部である。3・4は堀之内式の深鉢口縁部、5～8は胴部である。5は三十稲場式の影響がみられる。

時期 主たる出土遺物は堀之内内に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

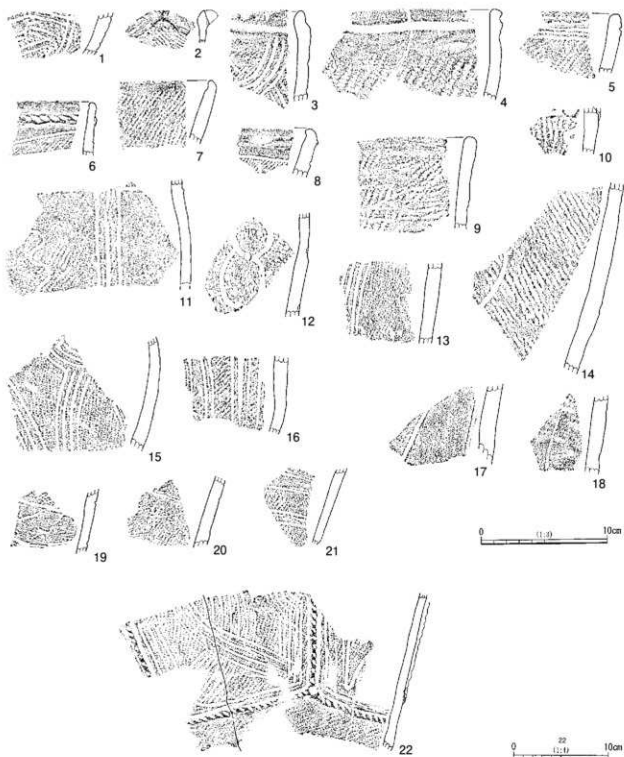
(13)SI003 (第93・94図、図版6・53)

形状と規模 長軸長5.6m、短軸長5.1mの隅丸五角形ともいべき形状を呈する。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分りにくいが、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも15cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で21基検出されている。ただしP11は土層断面の観察から当住居跡より新しいと考えられる。

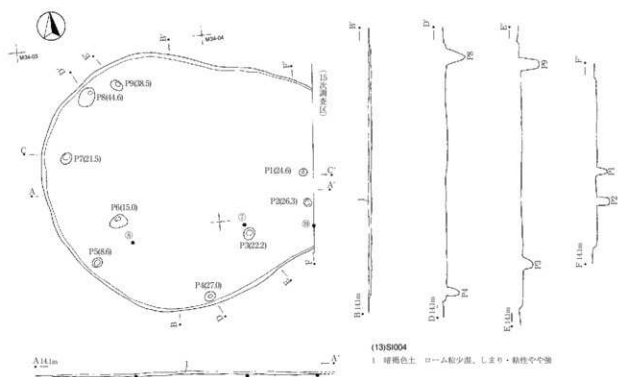


第94図 (13)SI003住居跡出土遺物

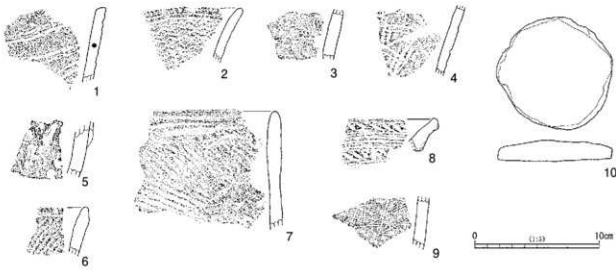
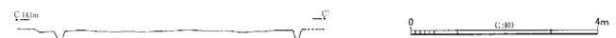
出土遺物 1は諸磯式の深鉢胴部である。2は加曾利E式の深鉢口縁部である。3～9は堀之内式の深鉢口縁部、10～22は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内内に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI004 (第95図、図版6・52)



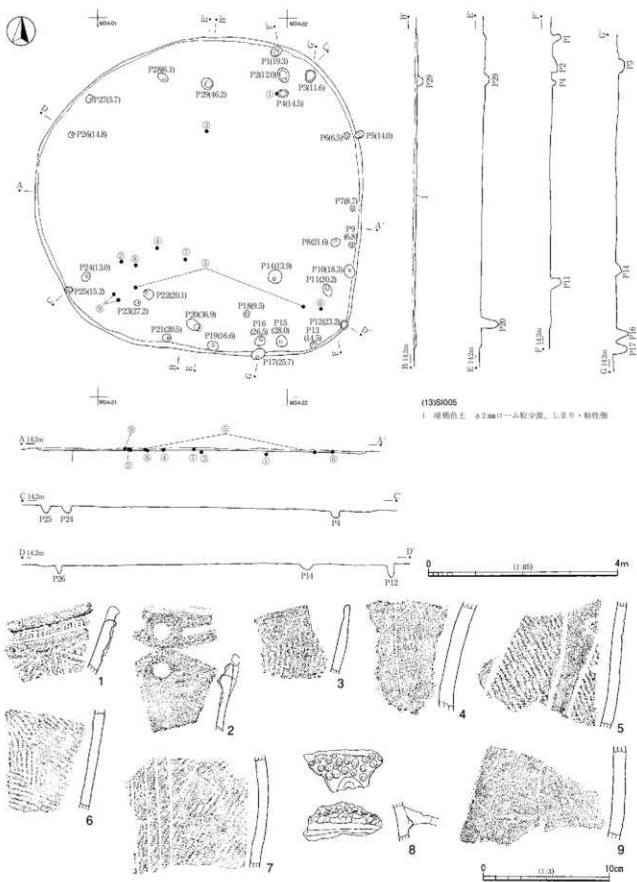
(13)SI004
 1 埋蔵土 ローム状少量、しまり・粘性や全量



第95図 (13)SI004 住居跡、出土遺物

形状と規模 当住居跡は13次調査区と15次調査区にまたがって構築されているが、15次調査区側には中・近世の(15)SD201溝状遺構が伸びており、削平されたと考えられる。従って全体の規模は不明である。13次調査区での東西長は5.7m、南北長は5.6mを測る。全体形状は不整形形を呈すると思われる。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分かりにくい、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも7cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。



第96图 (13)SI005住居跡、出土遺物

炉 検出されていない。

ピット 全部で9基検出されている。P8などは支柱穴と考えられる。

出土遺物 1は黒浜式の深鉢口縁部である。2は諸磯式の深鉢口縁部である。3・4は浮島式の深鉢胴部である。5は加曽利E式の深鉢胴部である。6～8は堀之内式の深鉢口縁部、9は胴部である。10は土器片円盤で、土器の底部を打ち欠いて加工したものである。

時期 出土土器数をもとめ前期後葉と後期前葉の双方の可能性があるが、遺構の形状や周囲の状況などから堀之内式期と考えられる。

(13)SI005 (第96図、図版6・53)

形状と規模 東西長6.9m、南北長6.6mの隅丸方形と円形を組み合わせたような形状を呈する。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分りにくいが、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも8cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で29基検出されている。南東部は2重に巡っているように見え、拡張が行われたかもしれない。

出土遺物 1は諸磯式の深鉢口縁部である。2・3は堀之内式の深鉢口縁部、4～9は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI006 (第97図、図版6・53)

形状と規模 南北長6.6m、東西長6.2mの不整円形を呈する。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分りにくいが、緩やかな立上りのようである。深さは最大でも5cm程度である。床面は北側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で22基検出されている。南壁側に密に存在するのに対し北側は少ない。

出土遺物 1・2は黒浜式の深鉢胴部である。4・5は堀之内式の深鉢口縁部、3・6は胴部、7は底部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式期に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

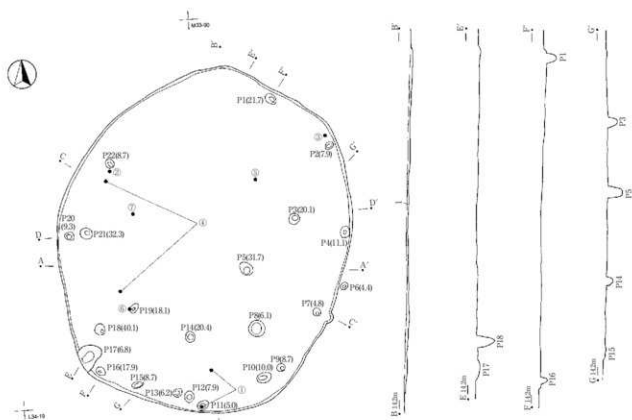
(13)SI007・008 (第98～101図、図版7・54・99)

形状と規模 (13)SI007は東西長7.0m、南北長6.9mの不整円形、(13)SI008は東西長7.0m、南北長は確認できる範囲で5.9mの不整円形を呈する。土層観察では(13)SI007が新しく(13)SI008が古いことになっているが、後述するとおり疑わしい。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分りにくいが、緩やかな立上りのようである。深さは(13)SI007が8cm、(13)SI008が5cmで、(13)SI007の方がわずかに深い。床面は両方とも西側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

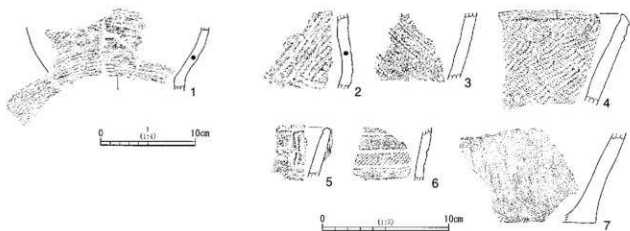
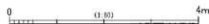
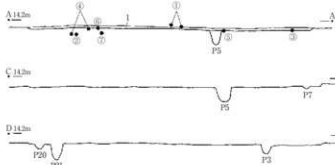
炉 (13)SI007からは検出されていない。(13)SI008は中央よりやや南西部に存在する。長軸長108cm、短軸長92cmの不整円形を呈する。掘込みはごく浅く皿状を呈し、内側には径30cm～35cmのピット状の掘込みが存在する。焼土粒は広い範囲に散布するが、多量に存在するのはピット状の掘込み付近に限られる。

ピット 2軒合わせて46基存在し、調査時はP1～23が(13)SI007、P24～46が(13)SI008に帰属するとしていたが、両者が重なった部分にあるP7・8は断定できない。いずれも壁よりやや内側を円弧を描くように配

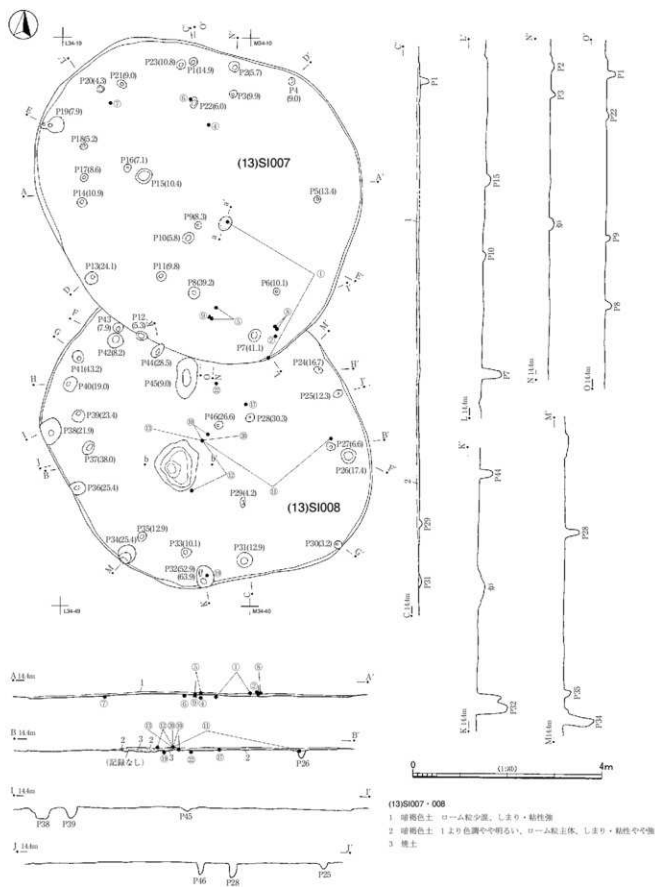


(13)SI006

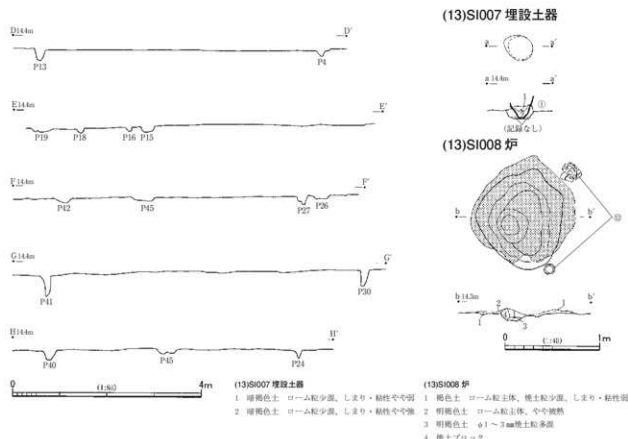
1 母岩色土 全体のやや凹味を帯びる。ロームが少量、しまり・粘性や平



第97図 (13)SI006住居跡、出土遺物



第98図 (13)SI007・008住居跡(1)



第99図 (13)SI007・008 住居跡(2)

される。(13)SI008のP8・32・34・38・41などは支柱穴であろう。

出土遺物 1～9は(13)SI007、10～25が(13)SI008出土である。1は称名寺式の深鉢で、接合しないが同一個体である。住居ほぼ中央部に底部側が埋設されていた。底部が穿孔されている。2は称名寺式の深鉢口縁部である。3・4は堀之内式の深鉢口縁部、5～8は胴部である。9は石皿で、熱を受けている。10～14は堀之内式の深鉢で、器形復元ができるものである。15は黒浜式の深鉢口縁部である。16～22は堀之内式の深鉢口縁部、23～25は胴部である。

時期 (13)SI007は堀之内式が多いものの、埋設土器は称名寺式であり遺構の時期を示していると思われる。(13)SI008の主たる出土遺物は堀之内式であり、堀之内式期と考えられる。従って遺構の新旧は(13)SI007が古く(13)SI008が新しいと判断するのが妥当であろう。

(13)SI009 (第102・103図、図版7・55)

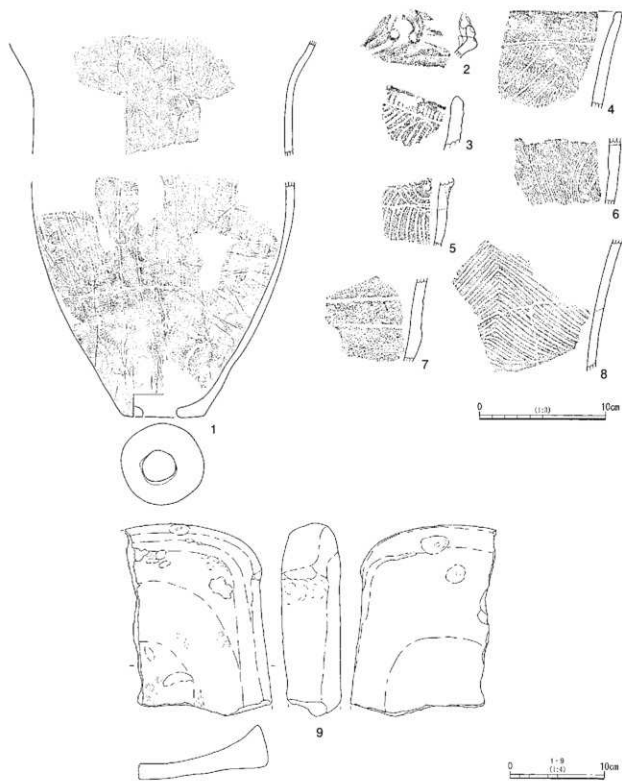
形状と規模 東西長7.2m、南北長6.2mの不整形を呈する。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分りにくいが、緩やかな立上りのようである。特に東西壁はわずかの段差しかない。深さは最大でも5cm程度である。床面は北側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

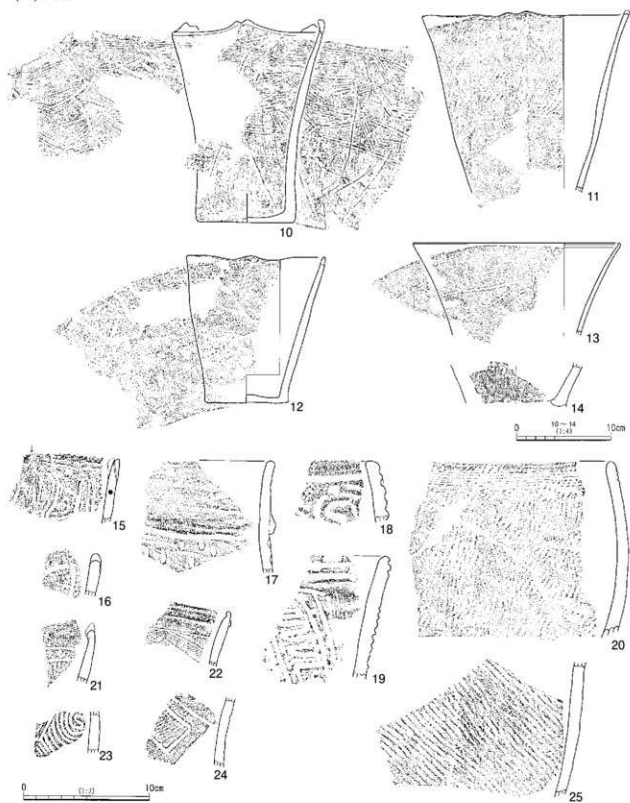
ピット 全部で10基検出されている。概ね壁に沿って配置されるが、いずれも浅くて規模が小さい。

出土遺物 1～3は堀之内式の器形復元できる深鉢である。5は詔磯式の深鉢口縁部である。6～11は堀之内式の深鉢口縁部、12～17は胴部である。

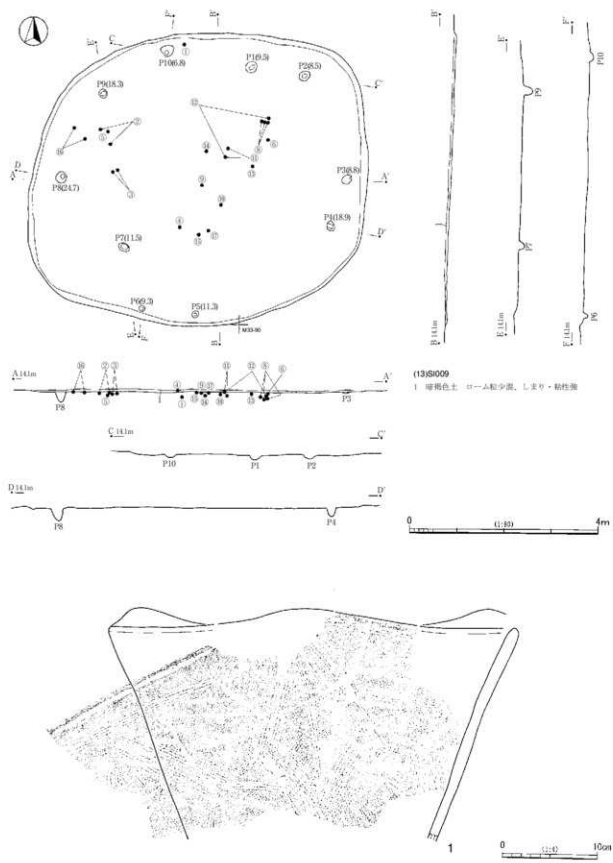


第 100 図 (13)SI007 住居跡出土遺物

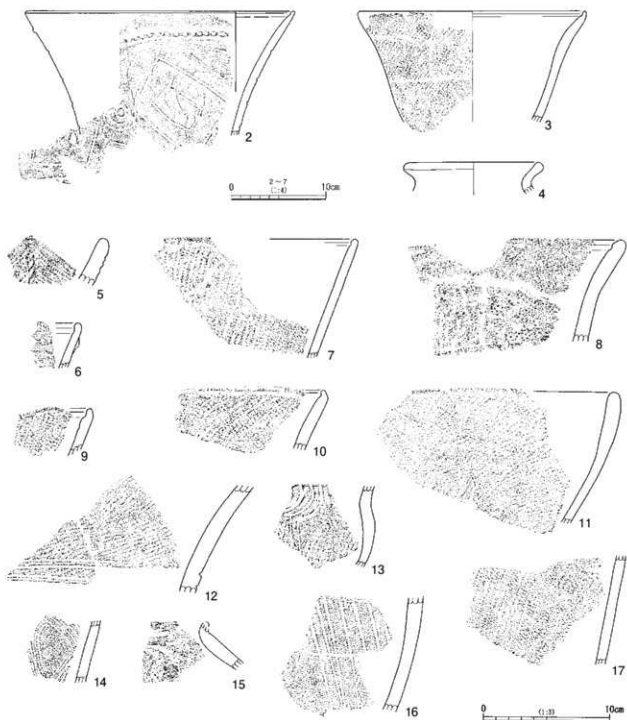
(13)SI008



第101図 (13)SI008 住居跡出土遺物



第102図 (13)SI009住居跡、出土遺物(1)



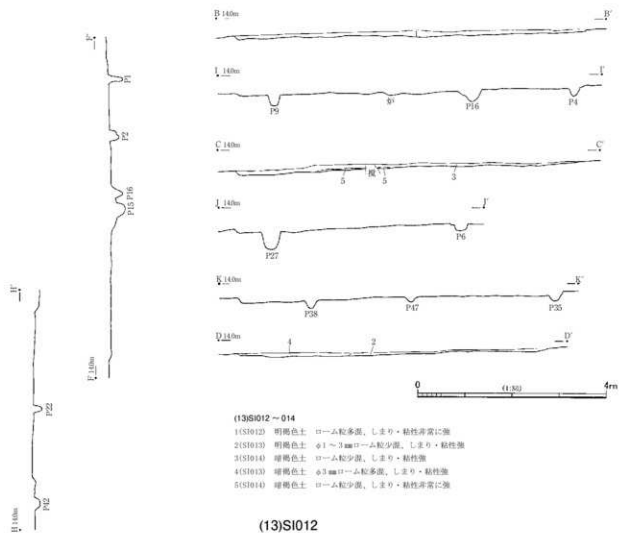
第103図 (13)SI009住居跡出土遺物(2)

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI012~014 (第104~116図、図版7・56~63・93・96・97)

形状と規模 (13)SI012は東西長7.5m、南北長6.9mの不整円形、(13)SI013は東西長、南北長とも7.0mの不整円形を呈する。(13)SI014は両住居跡に切られているため全体は分からないが、東西長7.4m、南北残存長6.2mを測り、正門に近い形状を呈すると思われる。

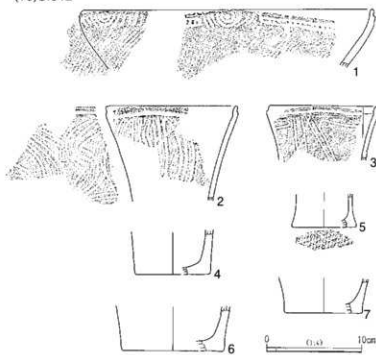
内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分かりにくい、緩やかな立上りのようである。深さは(13)



(13)SI012～014

- 1(3)SI012 明褐色土 10～15mmワーム較多量、しまり・粘性非常に強
- 2(3)SI013 明褐色土 6～10mmワーム較少量、しまり・粘性強
- 3(3)SI014 暗褐色土 10～15mmワーム少量、しまり・粘性強
- 4(3)SI013 暗褐色土 6～10mmワーム較多量、しまり・粘性強
- 5(3)SI014 暗褐色土 10～15mmワーム少量、しまり・粘性非常に強

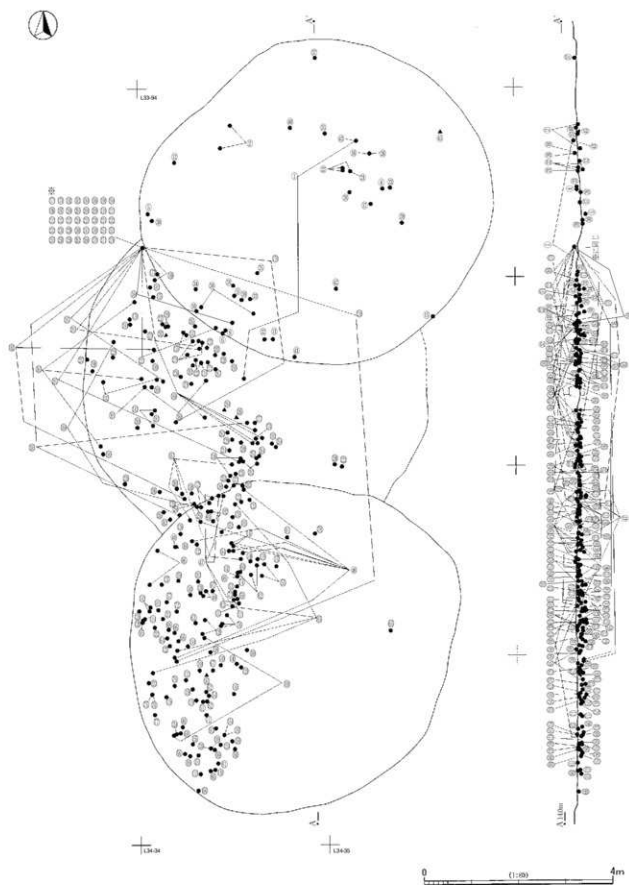
(13)SI012



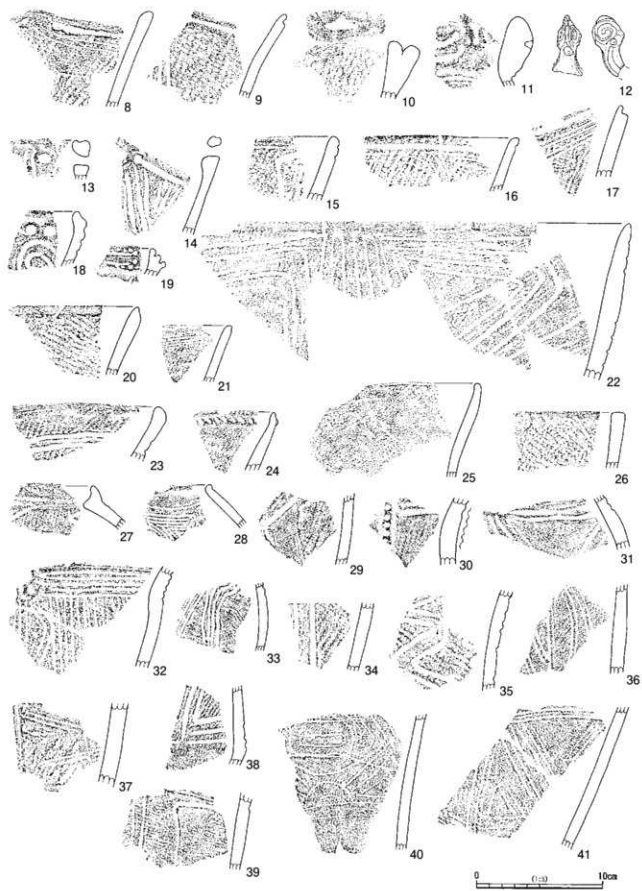
(13)SI012 跡

- 1 明褐色土 層次に焼土が散布
- 2 焼土塊

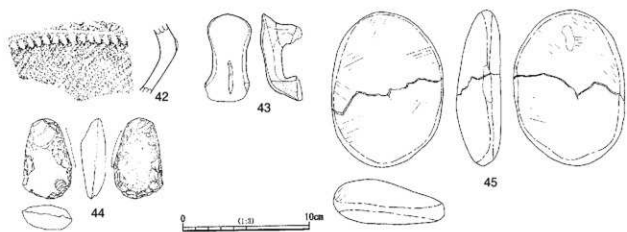
第 105 図 (13)SI012～014 住居跡 (2)、(13)SI012 住居跡出土遺物 (1)



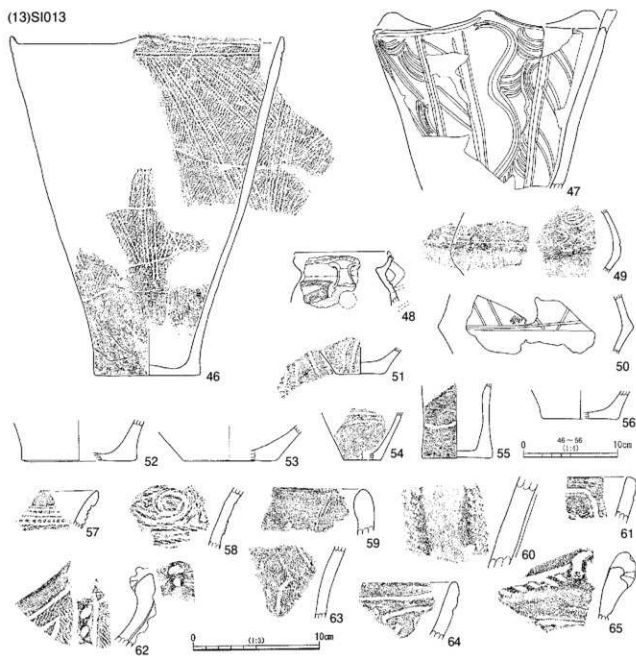
第106図 (13)SI012～014住居跡遺物分布



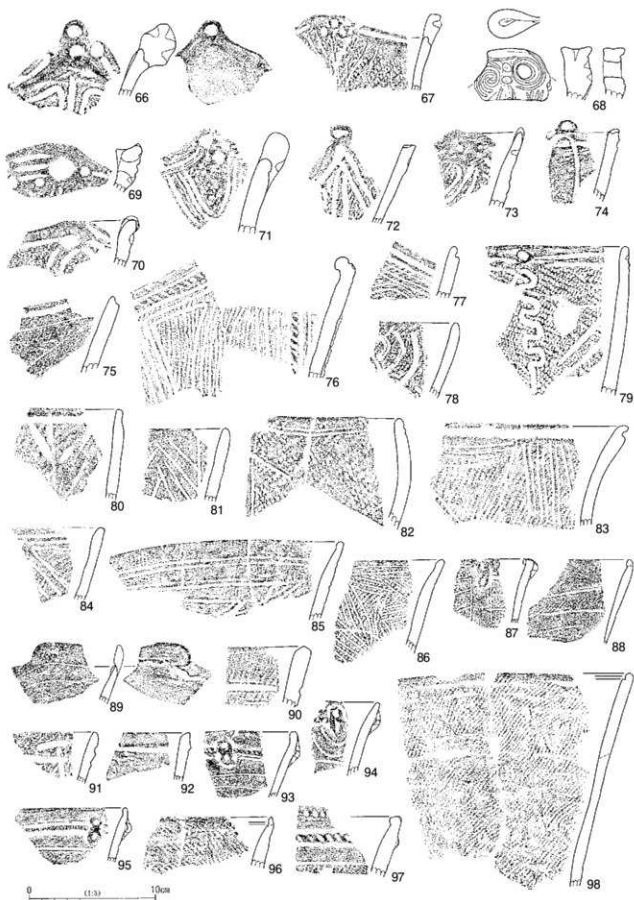
第 107 图 (13)SI012 住居跡出土遺物 (2)



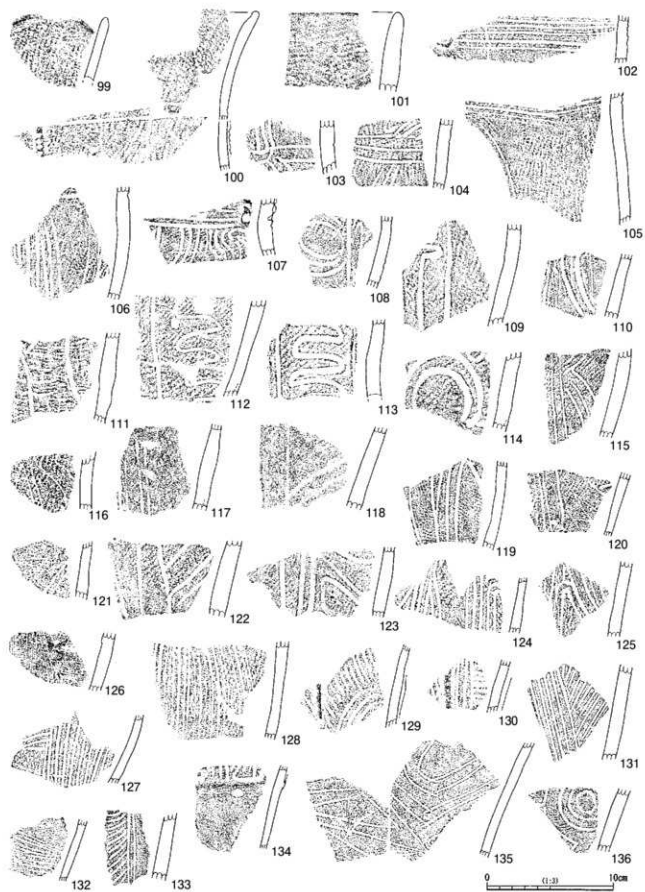
(13)SI013



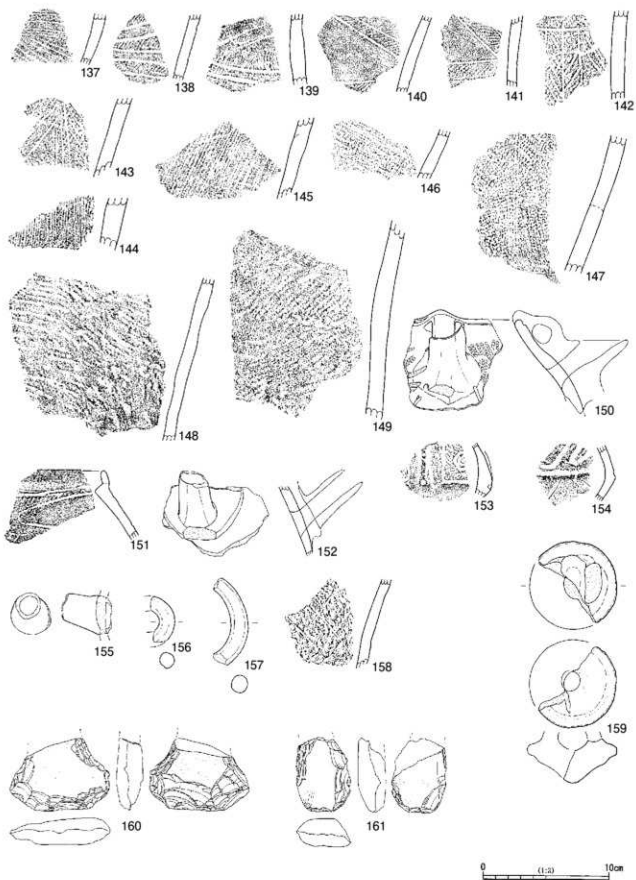
第 108 图 (13)SI012 住居跡出土遺物 (3)、(13)SI013 住居跡出土遺物 (1)



第109图 (13)SI013住居跡出土遺物(2)

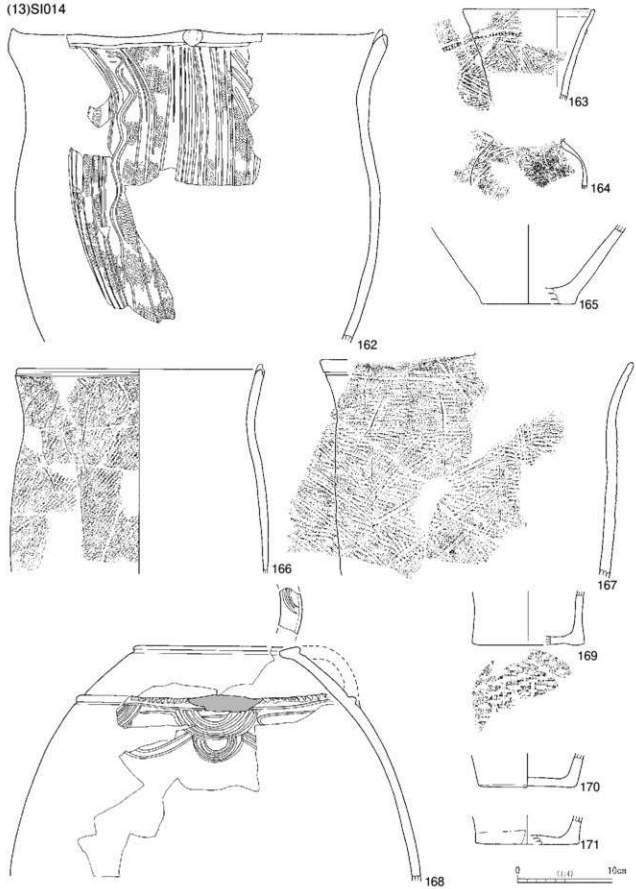


第110图 (13)SI013住居跡出土遺物(3)

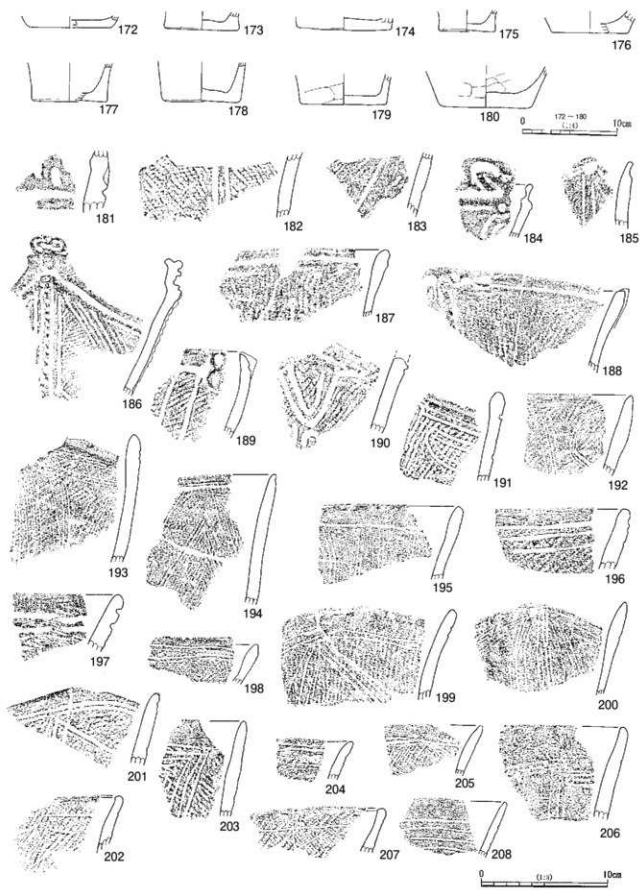


第111图 (13)SI013住居跡出土遺物(4)

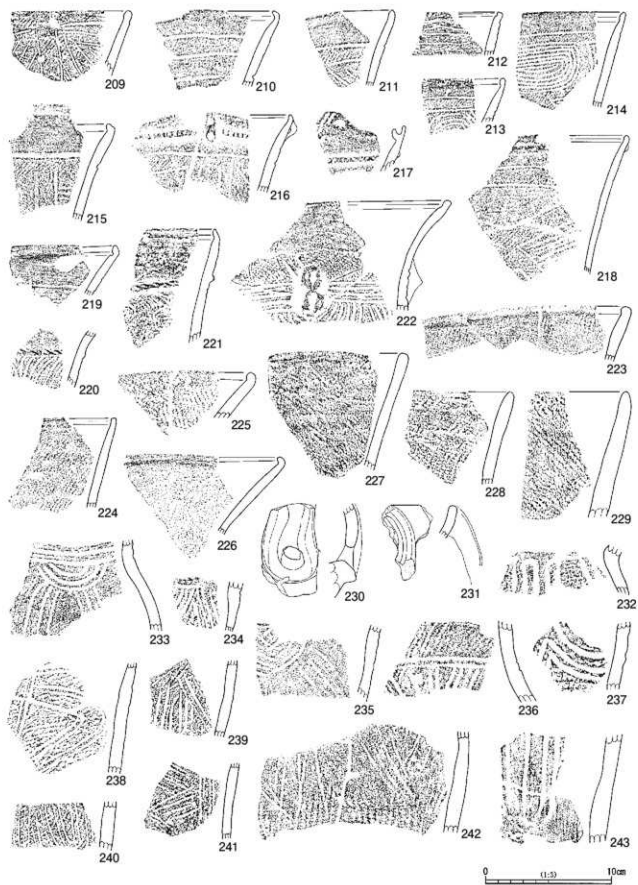
(13)SI014



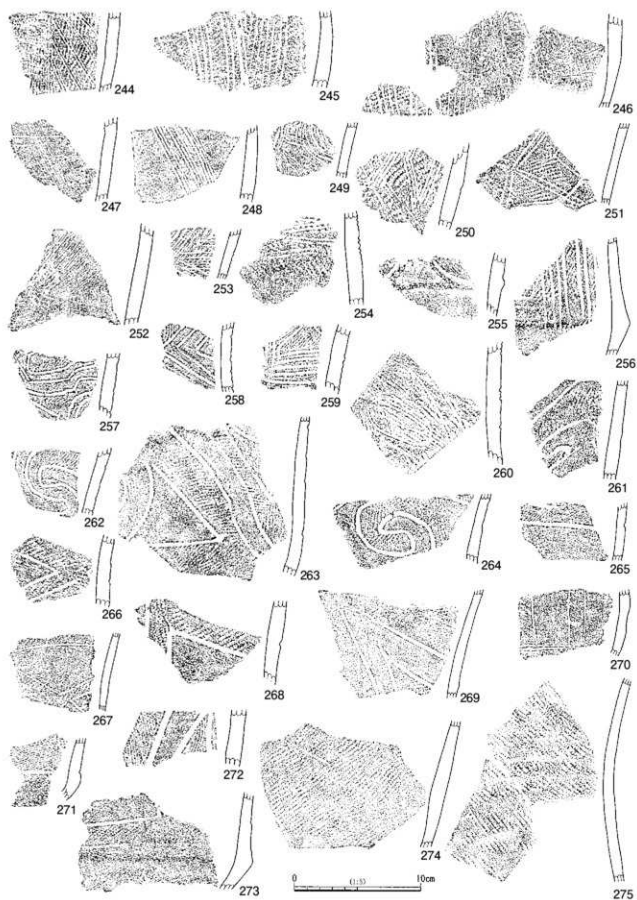
第 112 図 (13)SI014 住居跡出土遺物 (1)



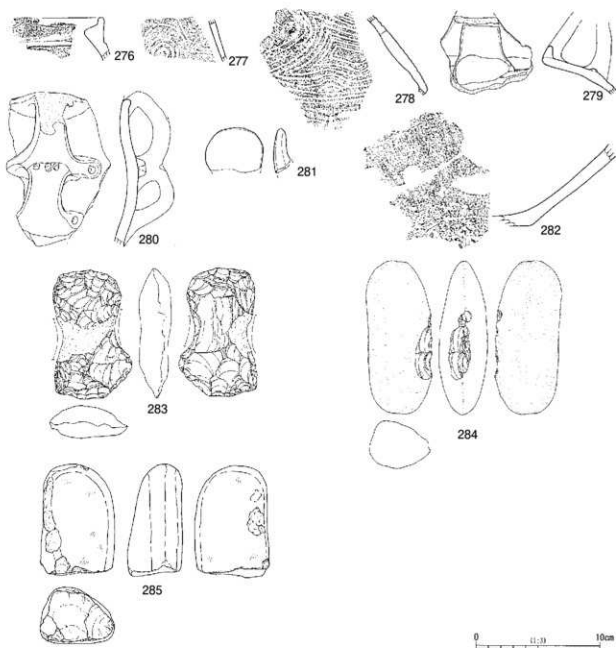
第 113 图 (13)SI014 住居跡出土遺物 (2)



第 114 図 (13)SI014 住居跡出土遺物 (3)



第 115 图 (13)SI014 住居跡出土遺物 (4)

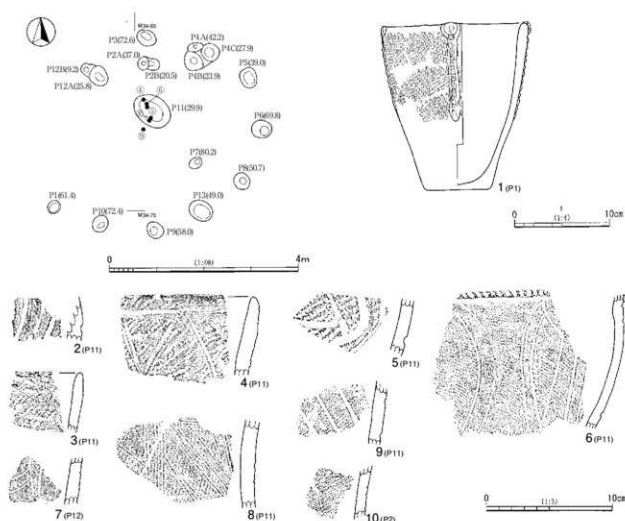


第116図 (13)SI014住居跡出土遺物(5)

SI012が12cm、(13)SI013・014が5cmである。床面は3軒とも西側に向かって緩やかに下り傾斜するほか、(13)SI012は中央の炉付近がやや掘り窪められたようになっている。硬化面は検出されなかった。

炉 (13)SI012は中央よりやや南寄りに存在する。長軸長140cm、短軸長88cmである。(13)SI013・014から炉は検出されていない。

ピット 調査時の所見ではP1～16は(13)SI012、P17～31は(13)SI014、P32～47は(13)SI013に帰属しているが、P5～9は(13)SI012と(13)SI014、P30・40～46は(13)SI013と(13)SI014がそれぞれ重なる範囲に位置しており、どちらに帰属するかは判断が難しい。(13)SI012は概ね壁に沿って配置されるが、(13)SI013・014は不規則な配置である。



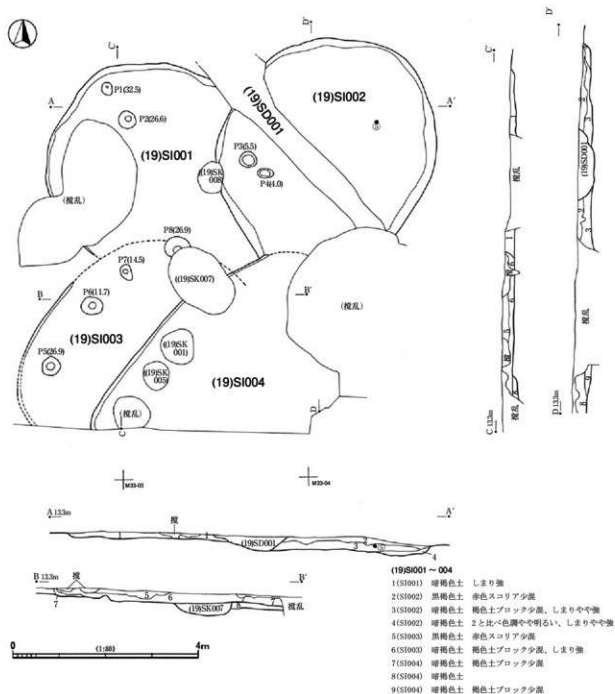
第117図 (15)SI127住居跡、出土遺物

出土遺物 1～45は(13)SI012、46～161は(13)SI013、162～285は(13)SI014からそれぞれ出土した。1～3は堀之内式の器形復元できる深鉢である。4～7は後期土器の底部である。8～26は堀之内式の深鉢口縁部、27・28は注口土器の口縁部、29～41は深鉢胴部、42は注口土器胴部、43は注口土器把手である。44は打製石斧である。45は磨石で、熱を受けて破断している。

57は諸磯式の深鉢口縁部、58は胴部である。51は加曾利E式の深鉢底部、59は口縁部、60は胴部である。61・62・64は称名寺式の深鉢口縁部、63は胴部である。46・47は堀之内式の器形復元できる深鉢、48～50は注口土器である。65～101は堀之内式の深鉢口縁部、102～149は胴部、52～56は底部である。150・151は注口土器口縁部、152～154は胴部、155は注口部、156・157は把手である。158は加曾利B式の深鉢胴部である。159は蓋形土製品である。160・161は打製石斧である。

182は加曾利E式の深鉢胴部である。183は称名寺式の深鉢胴部である。162～167は堀之内式の器形復元できる深鉢である。168は鉢形土器で、南三十稲場式の影響が認められる。184～229は堀之内式の深鉢口縁部、230・231は把手、232～275は胴部、169～180は底部である。276は注口土器の口縁部、277・278は胴部、279～281は把手、282は底部である。283は打製石斧、284は敲石、285はスタンプ形石器である。

時期 3軒とも主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。



第118図 (19)SI001 ~ 004 住居跡

(15)SI127 (第117図、図版8・63)

形状と規模 東西4.8m、南北4.5mの範囲に12基のピットが円環状に並び、中心にやや大きい土坑が存在する遺構群を堅穴住居跡として設定した。

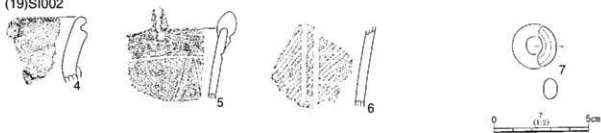
内部の状況 壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉 検出されていない。

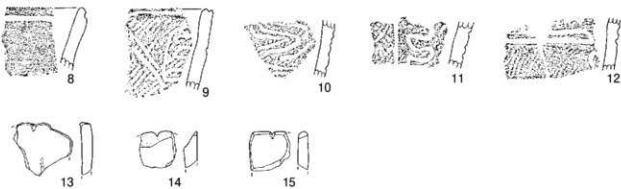
(19)SI001



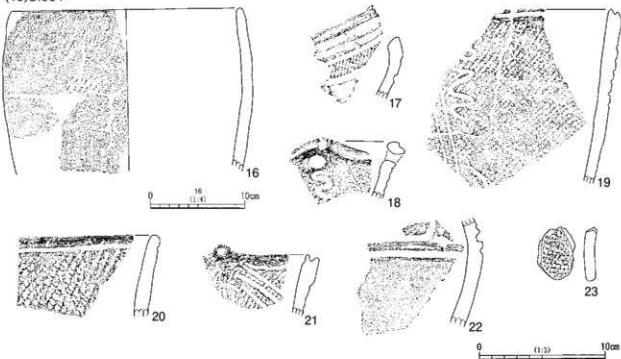
(19)SI002



(19)SI003



(19)SI004



第119图 (19)SI001 ~ 004 住居跡出土遺物

ピット 12基のピットのうちP2・12は2基、P4は3基重なっている。いずれのピットも深く柱穴と考えられる。

出土遺物 1はP1から出土したもので、堀之内式の器形復元できる深鉢である。2は称名寺式の深鉢胴部である。3・4は堀之内式の深鉢口縁部、5～10は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(19)SI001～004 (第118・119図、図版8・64・93・94)

形状と規模 4軒の竪穴住居跡が重なり合っており、かつ攪乱が著しいため規模や形状は分かりにくい。計測値は検出されている範囲で示す。(19)SI001は東西南北とも4.6m、(19)SI002は東西南北とも4.8m、(19)SI003は東西5.0m、南北4.8m、(19)SI004は東西5.4m、南北4.7mで、いずれも楕円形か不整形である。

他遺構との重複関係 まず4軒の新旧関係であるが、土層観察から(19)SI003は(19)SI001・004より新しいことが分かる。そして遺構範囲確認時の所見から(19)SI004は(19)SI001・002より新しく、(19)SI002は(19)SI001より新しいとされている。それらを総合すると、(19)SI001→002→004→003の順に構築されたと推測される。住居群には(19)SK005～008の4基の土坑が重なり合っている。土層観察から(19)SI007は(19)SI004より新しく、(19)SI003より古い。(19)SK008は調査時の所見では(19)SI001・002の両住居より新しいとしている。(19)SK005・006については(19)SI004に伴うものではなく独立した土坑としているが、根拠は不明で住居との新旧関係も明らかではない。

内部の状況 いずれも壁の立上りは緩やかである。床面はやや不安定で、全体に東方向に下るように緩やかに傾斜しているほか、(19)SI002はわずかに段状を呈して南方向へ緩やかに下る。深さは(19)SI001が15cm、(19)SI002が32cm、(19)SI003が24cm、(19)SI004が40cmである。

炉 検出されていない。

ピット 全部で8基のピットが検出されている。調査時所見ではP1・2・7・8が(19)SI001に、P3・4が(19)SI002に、P5・6が(19)SI003にそれぞれ属するとされている。いずれにしても配置は極めて不規則である。P1・2・5・8などは柱穴の可能性がある。

出土遺物 1～3は(19)SI001出土で、1・2は堀之内式の深鉢口縁部、3は胴部である。4～7は(19)SI002出土で、4・5は堀之内式の深鉢口縁部、6は胴部である。7は環状の土製品である。8～15は(19)SI003出土で、8・9は堀之内式の深鉢口縁部、10～12は胴部である。13～15は土器片である。16～23は(19)SI004出土で、17は称名寺式の深鉢口縁部である。16は堀之内式の器形復元できる深鉢、18～21は深鉢口縁部、22は胴部である。23は土器片である。

時期 4軒とも主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構群は該期と考えられる。

(19)SK005 (第120図、図版8)

状況 先述したとおり(19)SI004の範囲内であるが、独立した土坑として扱う。なお、住居との新旧関係は不明である。東西長55cm、南北長60cmの不整形を呈する。断面皿状を呈するが、床面は東方向に下り傾斜している。深さは7cmとごく浅い。

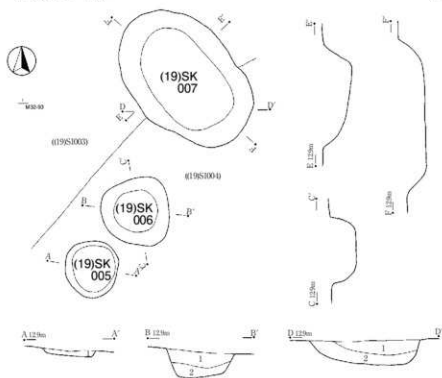
出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、住居や周囲の土坑と大きく隔たっていないと推測される。

(19)SK006 (第120図、図版8・64)

状況 これも先述したとおり(19)SI004の範囲内であるが、独立した土坑として扱う。住居との新旧関係は

(19)SK005 ~ 007



(19)SK005

1 埴粉色土 しまりやや強

(19)SK006

1 埴粉色土 ローム紅褐色、しまりやや強
2 埴粉色土 φ~20mm褐色土ブロック状、しまりやや強

(19)SK007

1 埴粉色土 しまり強
2 埴粉色土 しまりややや強い、しまり強

(19)SK006



(19)SK007



(19)SK008



0 10cm

第120図 (19)SK005 ~ 008 土坑、出土遺物

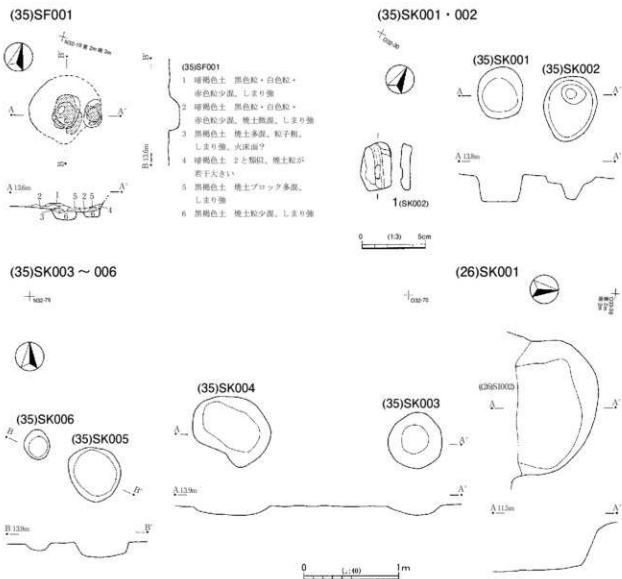
不明である。東西長72cm、南北長75cmの不整形形を呈する。開口部が傾斜しているが断面逆台形を呈し、深さは28cmである。

出土遺物 1は堀之内式の深鉢口縁部、2・3は胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(19)SK007 (第120図、図版8・64)

状況 (19)SI003と004にまたがるように位置する。(19)SI003より古く(19)SI004より新しい。長軸長163cm、短軸長60cmの楕円形に近い不整形形を呈する。壁の立上りは緩やかである。床面は北西方向に下るように緩やかに傾斜している。深さは33cmである。



第121図 (35)SF001 炉跡、(26)SK001、(35)SK001～006 土坑、出土遺物

出土遺物 4は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期 出土している遺物は黒浜式であるが、堀之内式の住居である(19)SI004より新しく(19)SI003より古い。当土坑の時期も堀之内式期と判断される。

(19)SK008 (第120図、図版8・64)

状況 (19)SI001と(19)SI002にまたがるように位置し、両者よりも新しい。東西長55cm、南北長70cmの不整形円形を呈する。断面皿状で、深さは10cmと浅い。

出土遺物 5・6は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(2) その他の土坑・ピットなど

(35)SF001 (第121図、図版8)

状況 縄文時代遺構群の最も北東端部から検出されたもので、堅穴住居の炉の可能性を考えて周辺を精査

したが、柱穴などは検出されず、単独の炉跡としたものである。東西長80cm、南北長70cmの不整形を呈する土坑の中に、径30cm～35cmと20cm～30cmの2基のピットが掘り込まれる。土坑は深さ4cmとごく浅く、ピットも深さ8cmで浅い。ピットの上を中心に焼土が堆積しており、一部硬化してブロック状になっている。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK001 (第121図)

状況 東西長50cm、南北長56cmの不整形を呈する。断面は長方形に近い逆台形で、深さは28cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK002 (第121図、図版93)

状況 (35)SK001の東側に位置する。東西長55cm、南北長72cmの不整形を呈する。断面は皿状で深さは7cmである。底面北部には径20cm～25cm、深さ15cmのピット状の掘込みが存在する。

出土遺物 周縁が研磨された土器片が出土している。土器片錘への加工を意図したものは不明である。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK003 (第121図)

状況 直径60cmのはほぼ正円に近い不整形を呈する。断面皿状で深さは10cmと浅い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK004 (第121図)

状況 長軸長85cm、短軸長70cmの不整形を呈する。断面皿状で深さは10cmと浅い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK005 (第121図)

状況 直径65cmの正円に近い不整形を呈する。断面逆台形で深さは16cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(35)SK006 (第121図)

状況 長軸長30cm、短軸長26cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは8cmと浅い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(26)SK001 (第121図)

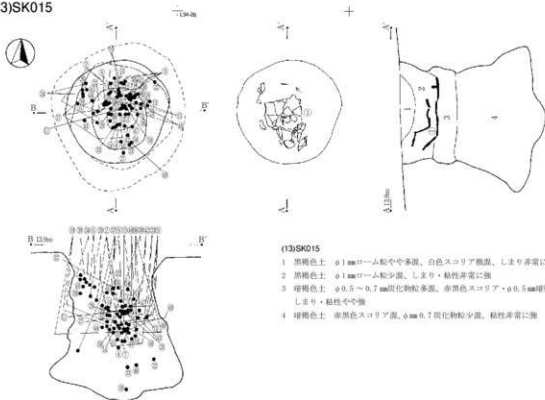
状況 一部が後世の遺構によって削平されている。残存している部分は東西長140cm、南北長85cmの不整形を呈する。断面は逆台形であるが壁の立上がりは一定ではない。深さは50cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(13)SK010 (第122・125図、図版8・66)

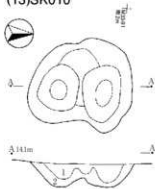
(13)SK015



(13)SK015

- 1 黄褐色土 ϕ 1mmローム粒や多数、白色スコリア散見、しまり非常に強、粘性強
- 2 黄褐色土 ϕ 1mmローム粒少量、しまり・粘性非常に強
- 3 黄褐色土 ϕ 0.5~0.7mm細化粒多数、赤褐色スコリア・ ϕ 0.5mm球形赤粘土粒散見、しまり・粘性やや強
- 4 黄褐色土 赤褐色スコリア散、 ϕ 0.5mm細化粒少量、粘性非常に強

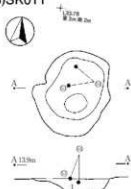
(13)SK010



(13)SK010

- 1 黄褐色土 ϕ 3mmローム粒少量、しまり・粘性やや強
- 2 黄褐色土 ϕ 1mmローム粒・ ϕ 10mmロームブロック少量、しまり・粘性やや強

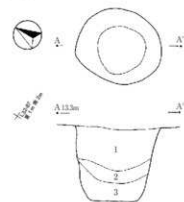
(13)SK011



(13)SK011

- 1 黄褐色土 ローム粒少量、しまり・粘性強

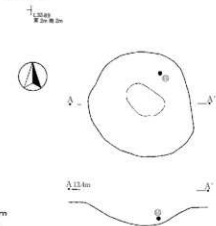
(22)SK002



(22)SK002

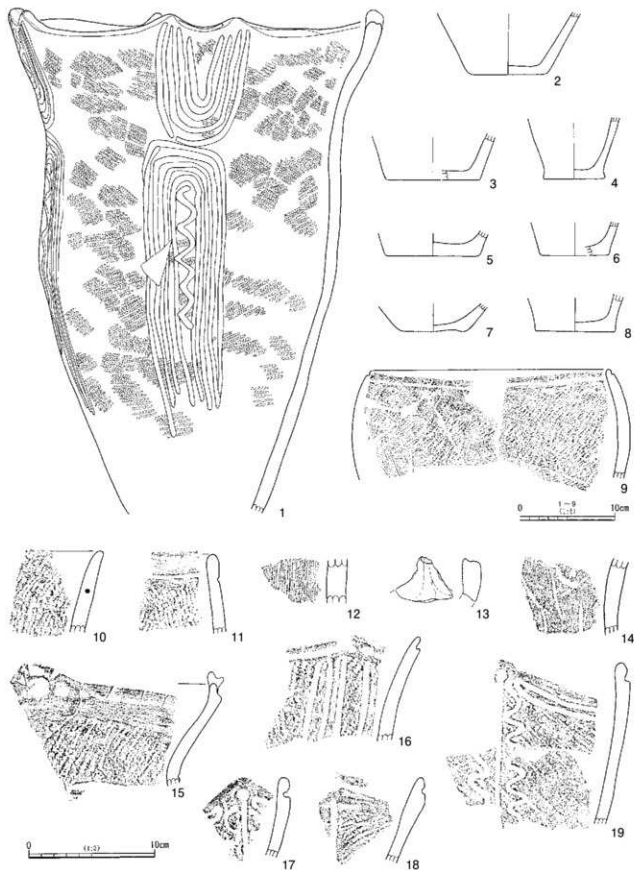
- 1 黄褐色土 しまり・粘性強
- 2 黄褐色土 しまり・粘性強
- 3 褐色土 しまり強、粘性強

(22)SK001

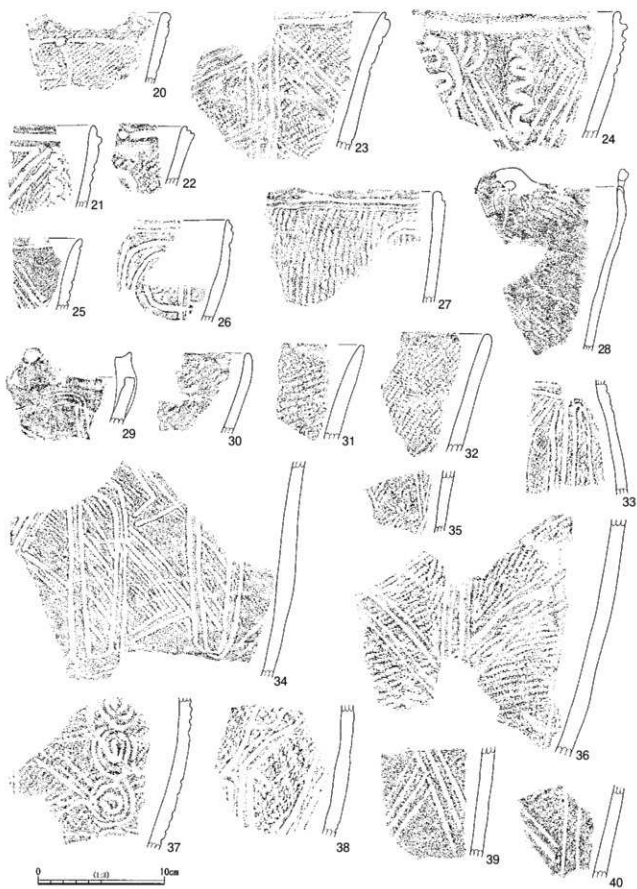


第 122 図 (13)SK010・011・015、(22)SK001・002 土坑

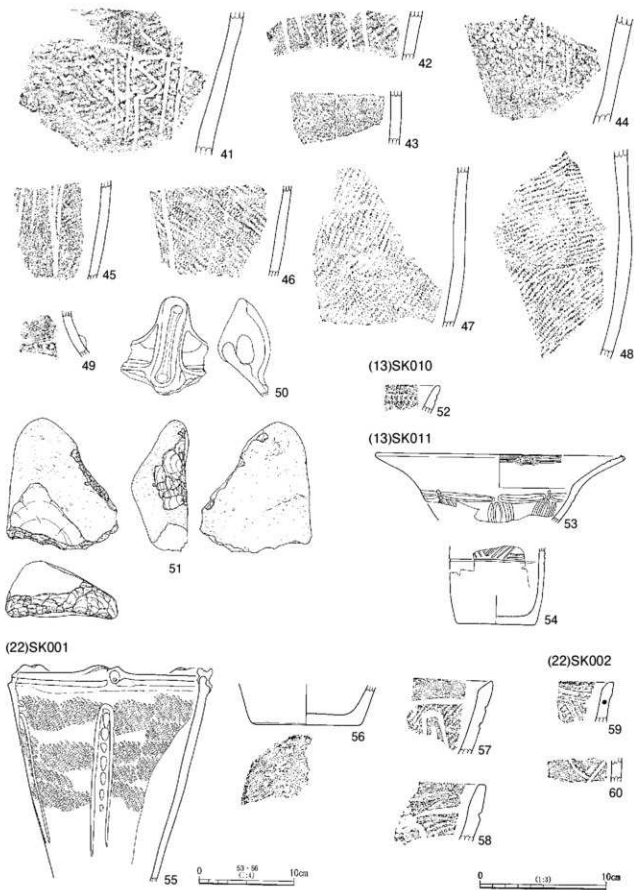
(13)SK015



第 123 図 (13)SK015 土坑出土遺物 (1)

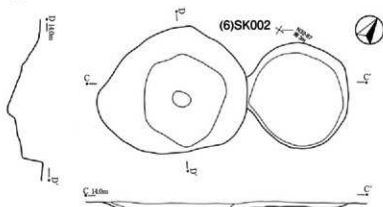


第124図 (I3)SK015土坑出土遺物(2)



第125図 (13)SK015土坑出土遺物(3)、(13)SK010・011、(22)SK001・002土坑出土遺物

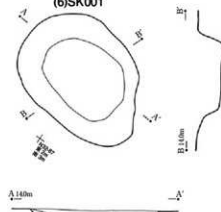
(6)SK001・002



(6)SK002

- 1 黒色土 ローム粒少量、しまり弱
- 2 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまり・粘性弱、水分を多く含む

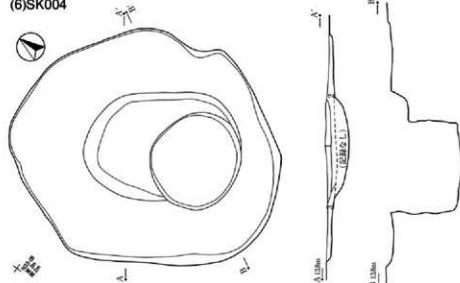
(6)SK001



(6)SK001

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、しまり強、粘性弱
- 2 明褐色土 ローム粒少量、しまり強、粘性弱

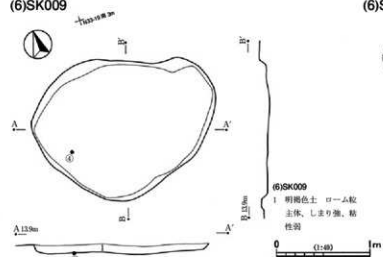
(6)SK004



(6)SK004

- 1 暗褐色土 ローム粒主体、粘土質、しまりやや弱、粘性強
- 2 暗褐色土 φ2mmローム粒多量、しまり・粘性強
- 3 暗褐色土 φ1mmローム粒少量、しまり・粘性強

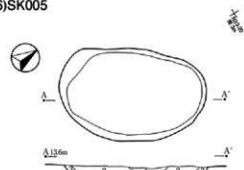
(6)SK009



(6)SK009

- 1 明褐色土 ローム粒主体、しまり強、粘性弱
- 2 暗褐色土

(6)SK005

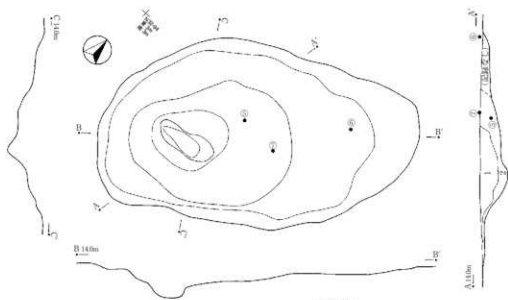


(6)SK005

- 1 暗褐色土 ローム粒混、しまり弱、粘性強
- 2 暗褐色土 φ3mmローム粒少量、粘土質、しまり弱、粘性強
- 3 明褐色土 ローム粒主体(ブロック状)、しまり・粘性強

第126図 (6)SK001・002・004・005・009土坑

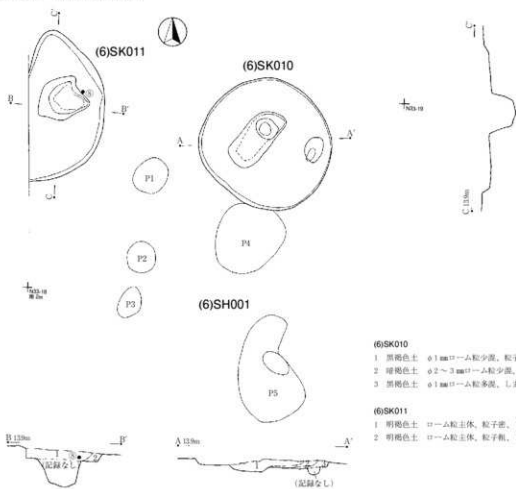
(6)SK003



(6)SK003

- 1 黒褐色土 0.3mm以下粒多量、しまり強、粘性弱
- 2 暗褐色土 0.1mm以下粒多量、しまり強、粘性弱

(6)SK010・011、(6)SH001



(6)SK010

- 1 黒褐色土 0.1mm以下粒少量、粒子密、しまり強、粘性弱
- 2 暗褐色土 0.2～3mm以下粒少量、しまり・粘性やや弱
- 3 黒褐色土 0.1mm以下粒多量、しまり・粘性やや強

(6)SK011

- 1 明褐色土 ローム粘土体、粒子密、しまり強、粘性弱
- 2 明褐色土 ローム粘土体、粒子粗、しまり・粘性弱

第 127 図 (6)SK003・010・011 土坑、(6)SH001 ビット

状況 長軸長110cm、短軸長100cmの不整形形を呈する。底面にはさらに径40cm～60cmのピットが2基並ぶように掘り込まれる。深さは25cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。52は諸磯式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物から諸磯式期と考えられる。

(13)SK011 (第122・125図、図版8・66)

状況 東西長84cm、南北長90cmの不整形形を呈する。断面も不整形で床面も安定しない。深さは27cmである。

出土遺物 53・54はいずれも堀之内式の深鉢で器形復元できるものである。

時期 出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SK015 (第122～125図、図版9・64～66・97)

状況 開口部は直径110cmの正円に近い不整形形、坑底部は東西長175cm、南北長160cmの不整形形を呈する。断面はいわゆるフラスコ状で、中央部はさらに一段掘り窪められている。深さは最深で155cmである。

出土遺物 極めて多量の遺物が出土した。10は前期中葉黒浜式の深鉢口縁部である。11は中期後葉加曾利E式の深鉢口縁部、12は胴部である。13は後期初頭称名寺式の深鉢口縁部、14は胴部である。1～9は後期前葉堀之内式の器形復元できる深鉢である。1は特に大形であるが、器面は摩耗している。15～32は堀之内式の深鉢口縁部、33～48は胴部である。49は堀之内式の鉢と思われる土器の胴部、50は注口土器把手である。51はスタンプ形石器である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(22)SK001 (第122・125図、図版9・66)

状況 東西長120cm、南北長110cmの不整形形を呈する。断面皿状で底面に平坦面はほとんどない。深さは24cmである。

出土遺物 55は堀之内式の器形復元できる深鉢である。57・58は堀之内式の深鉢口縁部、56は底部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(22)SK002 (第122・125図、図版9・66)

状況 長軸長90cm、短軸長77cmの不整形形を呈する。断面逆台形で深さは75cmである。

出土遺物 59は黒浜式の深鉢口縁部である。60は称名寺式の深鉢胴部である。

時期 いずれも小破片で時期も隔たっており、判断は困難である。

(6)SK001 (第126図、図版9)

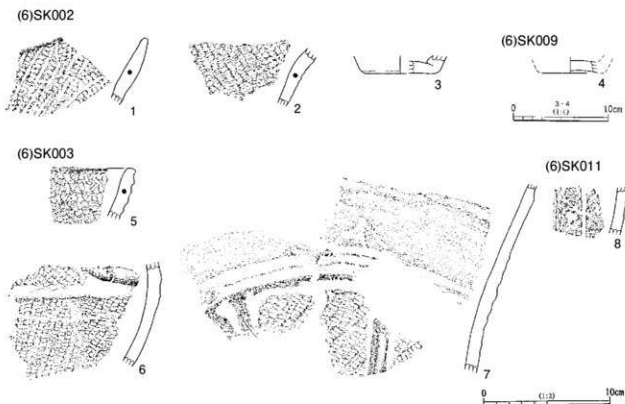
状況 長軸長155cm、短軸長110cmの不整形形を呈する。断面皿状であるが底面は東から西へ下るように緩やかに傾斜する。深さは最深で23cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(6)SK002 (第126・128図、図版9・67)

状況 長軸長160cm、短軸長130cmの不整形形土坑と、直径110cmの正円形土坑が連結した状況である。不整形形部は断面碗形を呈するものの床面は凹凸が目立ち不安定である。深さは42cmを測る。正円形部は断面皿状で床面は平坦である。深さは5cmとごく浅い。両者あわせた長軸方向はN55°-Eである。



第128図 (6)SK002・003・009・011土坑出土遺物

出土遺物 1は黒浜式の深鉢口縁部、2は胴部である。3は後期の深鉢底部と思われる。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と考えられる。

(6)SK003 (第127・128図、図版9・67)

状況 長軸長342cm、短軸長195cmの不整形円形を呈する。断面は歪な楕円形で、南西部が最も深い。深さは最深で30cmを測る。

出土遺物 5は黒浜式の深鉢口縁部である。6・7は加曾利E式の深鉢胴部である。

時期 主たる出土遺物は加曾利E式であり、当遺構は該期と考えられる。

(6)SK004 (第126図、図版9)

状況 当遺構は複数の土坑が重なり合ったような状況を示している。長軸長292cm、短軸長255cmの断面皿状を呈する不整形土坑のほぼ中心に、長軸長166cm、短軸長116cmの断面皿状を呈する不整形円形土坑が掘り込まれ、さらにその南部に径96cm～106cmの断面長方形を呈する正円に近い不整形円形が掘り込まれる。深さは順に深くなり、それぞれ10cm、24cm、100cmとなっている。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(6)SK005 (第126図、図版10)

状況 長軸長160cm、短軸長100cmの楕円形を呈する。断面皿状で中心部に向かって緩やかに傾斜する。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(6)SK009 (第126・128図、図版10)

状況 長軸長202cm、短軸長150cmの不整形を呈する。断面皿状で、深さは10cmと浅い。

出土遺物 4は後期と思われる深鉢底部である。

時期 出土遺物は小破片で判断が難しいが、後期と思われる。

(6)SK010 (第127図)

状況 径142cmの正円に近い不整形形を呈する。中心部に長軸長70cm、短軸長35cmの不整形の掘込みが存在し、さらにその内側に直径25cmのビット状の掘込みが存在する。土坑東部にも径20cm～25cmのビット状の掘込みが存在する。深さは8cmと浅く、掘込みは14cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(6)SK011 (第127・128図、図版10・67)

状況 一部調査区外になるため全容は不明であるが、南北長160cm、東西長80cm以上の不整形を呈する。中央部には50cm四方の不整形の掘込みが存在する。断面は逆台形で、深さは10cm、掘込み部は38cmである。

出土遺物 8は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(6)SH001 (第127図)

状況 (6)SK010・011周辺に存在する5基のビットである。P1は径約45cmの不整形形、P2は径約40cmの円形、P3は径30cm～40cmの不整形形、P4は径約90cmの不整形形、P5は長軸約140cm、短軸約90cmの不整形を呈する。当遺構は詳細な記録がないため、内部の状態や深さなどは不明である。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(15)SK101～113土坑群 (第129・130図、図版10・67)

15次調査区は環状集落の内側と外側の2か所に分かれるが、そのうち内側の調査区で検出された遺構群を第129図の上側に示した。柱穴と思われる土坑も存在するが、建物の具体的な状況までは復元できなかった。説明は主要な遺構のみとする。第130図1～3は(15)SK101から出土した遺物で、いずれも後期前葉堀之内式の深鉢である。6は(15)SK113から出土した遺物で、後期と思われる深鉢底部である。

(15)SK102 (第129・130図、図版10・67)

状況 東西長78cm、南北長70cmの不整形形を呈する。断面皿状で底面はほぼ平坦である。深さは18cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。4は縄文施文のみの土器で判断が難しいが、後期と思われる深鉢胴部である。

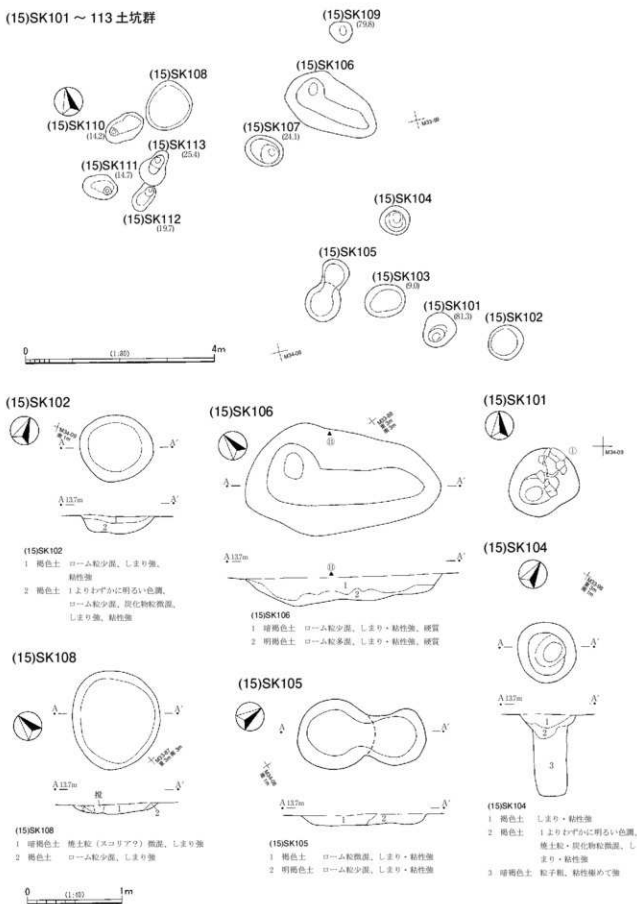
時期 出土遺物から後期と思われる。

(15)SK104 (第129・130図、図版10・67)

状況 開口部は直径62cmのほぼ正円形を呈し、深さ約15cmまで漏斗状にすぼまってから下は円筒状に掘り込まれる。深さは86cmを測る。上下は別遺構の可能性もある。

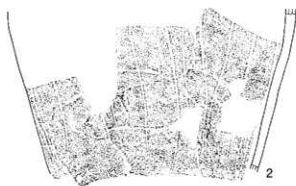
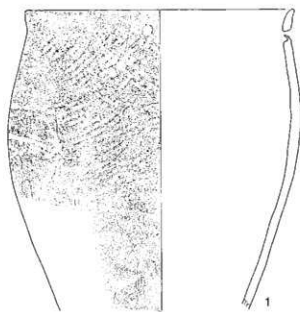
出土遺物 5は堀之内式の深鉢口縁部である。

(15)SK101 ~ 113 土坑群



第129図 (15)SK101 ~ 113 土坑

(15)SK101



(15)SK102



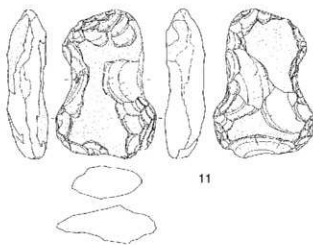
(15)SK104



(15)SK113

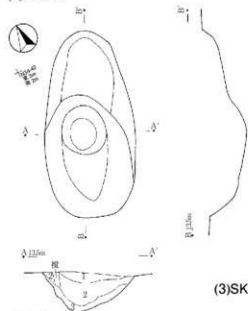


(15)SK106



第130图 (15)SK101・102・104・106・113土坑出土遺物

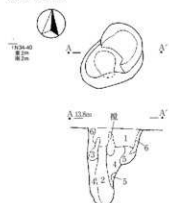
(3)SK004



(3)SK004

- 1 埴輪色土 ローム粒数濃
- 2 埴輪色土 1より黄色味を帯びる、ローム粒少濃
- 3 埴黄褐色土 φ30mmロームブロック少濃、しまり強

(3)SH013

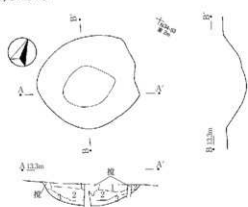


(3)SH013

- 1 埴輪色土 φ5mmローム粒少濃
- 2 黒褐色土 ローム粒数濃濃、しまりやや弱、柱状物多
- 3 埴黄褐色土 ロームブロック少濃
- 4 黒褐色土 2より加味強い、ローム粒少濃、炭化物粒・φ20mmロームブロック濃
- 5 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒濃、しまりやや弱
- 6 埴黄褐色土 φ10mmロームブロック多濃、ローム粒少濃

0 (1.00) 1m

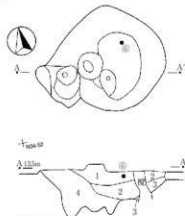
(3)SK010



(3)SK010

- 1 埴輪色土 ローム粒数濃
- 2 埴輪色土 φ5mm埴黄褐色土少濃（炭化）、難着、しまり強
- 3 黄褐色土 埴輪色土上の土、ローム粒やや多濃

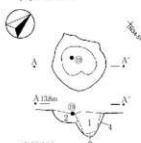
(3)SK005



(3)SK005

- 1 黒褐色土+埴輪色土面状
- 2 埴輪色土 φ5mmローム粒少濃
- 3 黄褐色土 φ30mmロームブロック少、しまり弱
- 4 埴黄褐色土 しまり極めて強

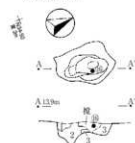
(3)SK015



(3)SK015

- 1 黒褐色土 ロームブロック少濃、黄褐色土やや多濃
- 2 埴黄褐色土 ローム粒濃、しまり極めて強
- 3 埴輪色土 φ10mmロームブロック少濃
- 4 黄褐色土 しまり極めて強

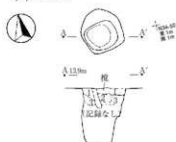
(3)SK014



(3)SK014

- 1 黄褐色土 黒褐色土上の土、しまり強
- 2 黒褐色土 黄褐色土上の土、ローム粒やや多濃、しまりやや弱
- 3 埴黄褐色土 ローム粒濃、しまり極めて強

(3)SH018



(3)SH018

- 1 埴輪色土 ローム粒・炭化物粒濃、しまり強
- 2 黒褐色土 φ5mmローム粒少濃
- 3 埴輪色土 しまり強

第131図 (3)SK004・005・010・014・015土坑、(3)SH013・018ピット

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(15)SK105 (第129図、図版10)

状況 径70cm～80cmの不整形円形土坑と径60cm～70cmの不整形円形土坑が重なり合った状況である。土層観察から南西側の大きい土坑が新しい。ただし深さは両方ともほぼ同じで10cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(15)SK106 (第129・130図、図版11・67・96)

状況 長軸長207cm、短軸長118cmの不整形を呈する。断面皿状であるが北西側が最も深くなるよう傾斜し、底面も平坦ではない。

出土遺物 7は黒浜式の深鉢胴部である。8は諸磯式の深鉢胴部である。9・10は堀之内式の深鉢口縁部である。11は打裂石斧である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(15)SK108 (第129図、図版11)

状況 径94cm～104cmの不整形円形を呈する。断面皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは10cmと浅い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK004 (第131・133図、図版11・68)

状況 長軸長195cm、短軸長96cmの楕円形に近い不整形円形を呈する。中央部がピット状を呈して最も深く、そこに向かって両側から底面が急傾斜している。深さは最深で44cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。1は縄文施文のみの土器で判断が難しいが、後期と思われる深鉢胴部である。

時期 出土遺物から後期と思われる。

(3)SK005 (第131・133図、図版68)

状況 東西長138cm、南北長112cmの不整形円形を呈する。底面にはさらにピット状の掘込みが複数認められるが、人為的なものかどうかは不明である。深さは最深で52cmを測る。1～3層と4層とは別遺構である可能性がある。

出土遺物 2は堀之内式の深鉢口縁部、3～6は胴部である。7・8は径が復元できる底部で、堀之内式であろう。

時期 主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK010 (第131・133図、図版11・68)

状況 東西長100cm、南北長105cmの不整形円形を呈する。断面碗形で、深さは22cmである。

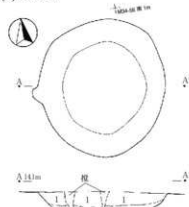
出土遺物 10は堀之内式の深鉢口縁部、11・12は胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH013 (第131・133図、図版68)

状況 長軸長76cm、短軸長55cmの不整形円形を呈する。直径約50cm、深さ81cmの円形ピットの北西側に、ほぼ同じ径で深さ38cmのピットが重なっているような状況である。土層図中の2層は柱痕跡の可能性がある。

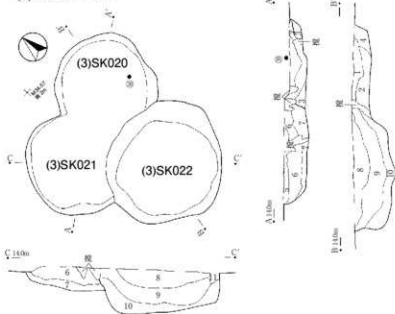
(3)SK019



(3)SK019

- 1 埴埴色土 ローム粒少量
- 2 埴黄埴色土 ローム粒・炭化物粒散見、しまり強、粘性強

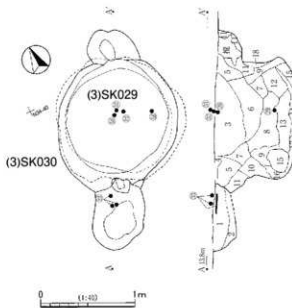
(3)SK020 ~ 022



(3)SK020 ~ 022

- 1 (SK020) 埴埴色土 ローム粒多量、黒色土散見、しまりやや弱
- 2 (SK020) 埴埴色土 ローム粒・ $\phi 5$ mm土粒散見、しまりやや弱
- 3 (SK020) 埴埴色土 褐色土混状、しまり極めて強、粘性やや強
- 4 (SK020) 黄褐色土 ローム粒主体、しまり極めて強
- 5 (SK021) 埴埴色土 色調がかなり明るい、黄褐色土との混土
- 6 (SK021) 黄褐色土 $\phi 2$ mmのローム粒多量、粘土粒、しまり強
- 7 (SK021) 埴黄埴色土 しまり強、粘性やや強
- 8 (SK022) 埴埴色土 $\phi \sim 5$ mmローム粒・粘土粒少量、しまり強
- 9 (SK022) 黒褐色土 $\phi \sim 5$ mmロームブロック少量、粘土粒散見、しまり強
- 10 (SK022) 埴埴色粘質土 $\phi 5$ mmロームブロック少量、しまり強
- 11 (SK022) 黄褐色土 埴埴色土少量、しまり強

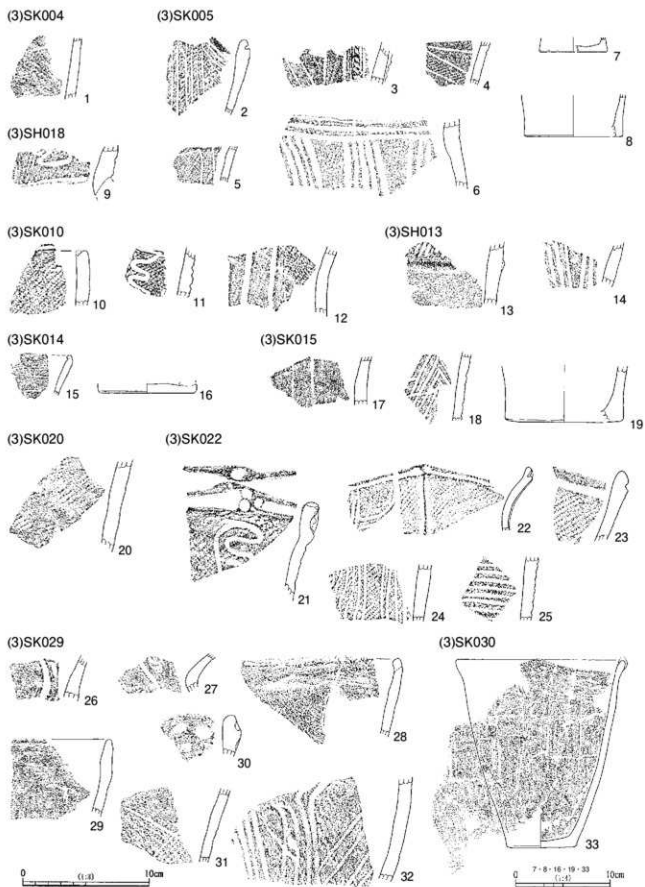
(3)SK029・030



(3)SK029・030

- 1 (SK030) 埴埴色土 ローム粒多量、粘土粒、しまり弱
- 2 (SK030) 埴黄埴色土 ローム粒主体、埴埴色土混、しまりやや強
- 3 (SK029) 埴埴色土 $\phi 10$ mmロームブロック少量、ローム粒散見
- 4 (SK029) 埴埴色土 $\phi 5$ mmローム粒やや多量、しまりやや強
- 5 (SK029) 埴埴色土 4より色調明るい、 $\phi 5$ mmローム粒やや多量
- 6 (SK029) 埴埴色土 ローム粒割合、炭化物粒少量
- 7 (SK029) 埴埴色土 ローム粒多量
- 8 (SK029) 埴埴色土 $\phi 5$ mmローム粒少量
- 9 (SK029) 黒褐色土 黄褐色土多量
- 10 (SK029) 埴埴色土+黄褐色土 ローム粒多量
- 11 (SK029) 黄褐色土 粘土粒散見
- 12 (SK029) 黒色土 $\phi 5$ mmローム粒やや多量、 $\phi 30$ mm黄褐色土混 (混状)
- 13 (SK029) 黒色土 $\phi 5$ mmローム粒多量
- 14 (SK029) 埴埴色土 炭化物粒・ロームブロック多量 (混状)、しまり弱
- 15 (SK029) 埴黄埴色土 ローム粒主体、ブロック状堆積、しまり弱、礫層混土
- 16 (SK029) 黒色土 オーバーハンダ下部の初期堆積土
- 17 (SK029) 黒色土 炭化したように濃黒、断面傾斜に広がる、オーバーハンダ下部の下部堆積層
- 18 (SK029) 埴黄埴色土 ズフトローム主体、しまり弱、礫初期堆積

第 132 図 (3)SK019 ~ 022・029・030 土坑



第133図 (3)SK004・005・010・014・015・020・022・029・030土坑、(3)SH013・018ピット出土遺物

出土遺物 13・14は堀之内式の胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK014 (第131・133図、図版68)

状況 長軸長65cm、短軸長44cmの不整形を呈する。底面は安定せず、南西部は一段深く掘り込まれている。深さは22cmである。

出土遺物 15は堀之内式の深鉢口縁部、16は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK015 (第131・133図、図版68)

状況 東西長60cm、南北長55cmの不整形を呈する。平面図では分からないが、東側が深く掘り込まれている。深さは最深で25cmを測る。

出土遺物 17・18は堀之内式の深鉢胴部、19は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH018 (第131・133図、図版68)

状況 開口部は径45cmの不整形を呈するが、坑底は隅丸方形に近い。断面逆台形で深さは60cmを測る。柱穴状であるが、柱痕跡があるか確認できていない。

出土遺物 9は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK019 (第132図、図版11)

状況 直径135cmのほぼ正円形を呈する。断面皿状であるが、底面は東から西に向かってわずかに下り傾斜する。深さは最深で25cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK020～022 (第132・133図、図版11・68)

状況 3基の円形土坑が重なった状況である。(3)SK020・021は直径110cm、(3)SK022は120cm～130cmのほぼ正円形を呈する。断面はいずれも皿状で、中心部に向かって緩やかに窪む。深さは(3)SK020が20cm、(3)SK021が26cm、(3)SK022が45cmである。土層断面の観察から新旧関係も把握されており、(3)SK020→021→022の順に構築されたと判断される。

出土遺物 (3)SK020出土遺物のうち図示できる遺物は1点のみである。20は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK021からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK022出土遺物では、21～23は堀之内式の深鉢口縁部、24・25は胴部である。

時期 3基の中で最も新しい(3)SK022は出土遺物から堀之内式期と考えられる。他の2基は出土遺物からの判断は難しいが、(3)SK022より古いもの大きく遡ることはないと考えられる。

(3)SK029・030 (第132・133図、図版67・68)

状況 2基の土坑が重なっている。(3)SK029は長軸長140cm、短軸長130cmの正円形に近い不整形を呈する。北東側に張り出し部分があり、土層観察から一体のものと考えられる。坑底は直径約110cmの円形であるが、壁の途中には開口部や坑底よりも張り出した部分もあり、断面はいわゆるフラスコ状を呈する。深さは88cmである。(3)SK030は(3)SK029の南西側に接する。長軸長72cm、短軸長54cmの不整形を呈す

る。底面は南西側が最も深くなるよう傾斜しており、最深で25cmを測る。土層観察から(3)SK029が古く(3)SK030が新しい。なお、両者が接する部分の(3)SK029側には小さな段状の掘込みがあるが、これは北東側と同様の張出しであった可能性がある。

出土遺物 (3)SK029出土資料のうち、26・27は称名寺式の深鉢胴部である。28～30は堀之内式の深鉢口縁部、31・32は胴部である。(3)SK030出土の33は堀之内式の器形復元ができる深鉢である。

時期 いずれも主たる出土遺物は堀之内式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK023 (第134・136図、図版11・68)

状況 長軸長112cm、短軸長55cmの不整円形を呈する。北側は円筒形で柱穴状といえるが、南側は平面・断面とも不安定な形状で人為的なものか疑わしい。深さは最深で58cmを測る。

出土遺物 1・2は堀之内式の深鉢口縁部、3・4は胴部、5は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK024 (第134・136図、図版11・68)

状況 東西長・南北長とも80cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは38cmである。平面形状では分からないが、土層断面からは1層と2層で別遺構となる可能性も指摘できよう。

出土遺物 6・7は堀之内式の深鉢口縁部、8は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH025 (第134図)

状況 開口部は径50cm～55cmの不整円形を呈するが、坑底は不整形でかなり不安定である。しかし土層断面では柱痕跡と思われる土層が確認でき、柱穴と考えられる。深さは45cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

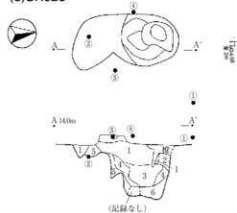
時期 細別時期は不明である。

(3)SK040～044 (第134・136図、図版68)

状況 (3)SK040～043が南北に連結したような状況で検出され、(3)SK043の西側に(3)SK044が接している。(3)SK040～043の南北長は298cm、東西長は(3)SK040で113cm、(3)SK041で120cm、(3)SK042で110cm、(3)SK043で113cmとなる。043と044の東西長は180cm、044の南北長は79cmである。表面観察からは各遺構の境界を判別するのは不可能であるが、土層観察によって分別は可能である。よって掘上がり状態と土層から、概ね(3)SK040は径約120cmの不整円形、(3)SK041は南北長約100cmの不整形、(3)SK042は中心に存在する深いピットを中心とした径約70cmの円形、(3)SK043は径約100cmの不整円形、(3)SK044は径約90cmの不整円形と推測される。深さは最深で(3)SK040が60cm、(3)SK041が36cm、(3)SK042の中心ピットが114cm、(3)SK043が28cm、(3)SK044が34cmである。新旧関係は土層観察を根拠として、(3)SK041→042→043→040→044と判断される。なお、(3)SK040と(3)SK041の境に径約40cm、深さ約55cmの2基のピットが対になるように掘られているが、これらの帰属がどちらなのか(あるいは独立したものなのか)は明らかではない。

出土遺物 いずれの土坑からも出土遺物は少なかった。(3)SK040の9は黒浜式の深鉢胴部である。10は称名寺式の深鉢胴部である。(3)SK041の11は堀之内式の深鉢口縁部、12・13は胴部である。(3)SK042からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK043の14は堀之内式の深鉢口縁部、15は胴部である。(3)SK044の16～19は堀之内式の深鉢口縁部である。16は沈線区画内に刺突で充填しており、三十稲場式土器の影響

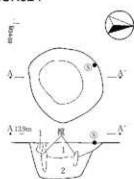
(3)SK023



(3)SK023

- 1 埴黄褐色土 ローム粒少量、しまり極めて強
- 2 黄褐色土 φ5mmローム粒多量
- 3 埴褐色土 炭化物粒・ローム粒やや多量、焼土粒散見、しまり強
- 4 埴黄褐色土 ローム粒多量、黑色土粒少量
- 5 黄褐色土 黄色味の強いローム粒多量
- 6 黄褐色粘質土 粘土に回るが、炭化物粒が散入、しまり強

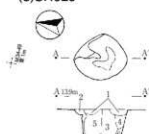
(3)SK024



(3)SK024

- 1 埴褐色土 炭化物粒やや多量、しまりやや弱
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量、炭化物粒・ローム粒少量、しまり強

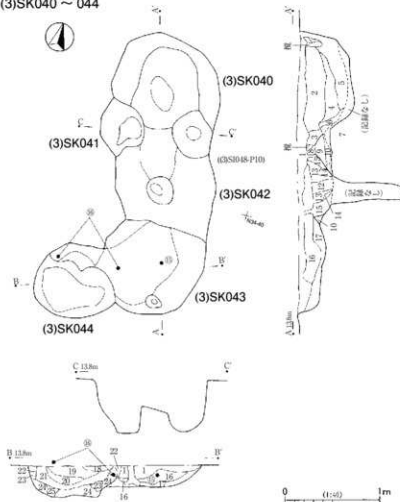
(3)SH025



(3)SH025

- 1 埴褐色土 ローム粒散見、しまりやや弱
- 2 黄褐色土 ローム粒散見、しまりやや弱
- 3 埴褐色土 ローム粒・炭化物粒やや多量、しまりやや弱、柱痕跡?
- 4 埴褐色土 ローム粒散見、しまり極めて強
- 5 黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 6 埴黄褐色土 φ5mmロームブロックやや多量、炭化物粒少量

(3)SK040 ~ 044

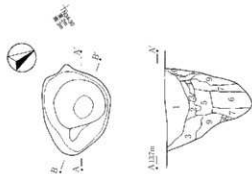


(3)SK040 ~ 044

- 1 (3)SK040 埴黄褐色土 φ5mm黄褐色土やや多量 (底切)、しまり強
- 2 (3)SK040 埴褐色土 黒褐色土面状、ローム粒散見
- 3 (3)SK040 埴褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 4 (3)SK040 埴褐色土 黄褐色土多量、ローム粒少量、しまり強
- 5 (3)SK040 埴黄褐色土 φ~5mmロームブロック散見、しまり強
- 6 (3)SK040 埴黄褐色土 5~7中層も黄色味が強い、ローム粒多量、しまり強
- 7 (3)SK040 埴黄褐色土 ローム粒多量
- 8 (3)SK041 埴褐色土 ローム粒やや多量、しまりやや弱
- 9 (3)SK041 埴褐色土+黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 10 (3)SK041 埴黄褐色土 φ5mmロームブロックやや多量、しまり弱
- 11 (3)SK042 埴褐色土 紫色土少量、しまり強
- 12 (3)SK042 黒褐色土 黒褐色土面状に少量、しまり強
- 13 (3)SK042 黒褐色土 12より色調やや明るい、ローム粒やや多量、しまり強
- 14 (3)SK042 埴褐色土+黒褐色土 底状に牛ヶくらしい層
- 15 (3)SK042 黒褐色土+黄褐色土 底状、しまり弱
- 16 (3)SK043 埴褐色土 ローム粒少量
- 17 (3)SK043 黄褐色土 ローム粒少量、しまり強
- 18 (3)SK043 埴褐色土 ローム粒散見、しまり強
- 19 (3)SK043 埴褐色土 ローム粒・炭化物粒散見、しまり強
- 20 (3)SK044 埴褐色土 ローム粒やや多量
- 21 (3)SK044 埴褐色土 黄褐色土との混土、しまり強
- 22 (3)SK044 黄褐色土 埴褐色土
- 23 (3)SK044 埴黄褐色土 埴褐色土+黄褐色土牛ヶくらしい層、ローム粒多量、しまり弱
- 24 (3)SK044 黄褐色土 ソフトローム主体、φ2~3mmローム粒少量、しまりやや弱
- 25 (3)SK044 埴褐色土 粘土層、しまりやや弱

第134図 (3)SK023・024・040~044土坑、(3)SH025ピット

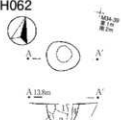
(3)SH047



(3)SH047

- 1 埴輪色土 ローム粒や中多量
- 2 埴輪色土 φ5mmローム粒少量
- 3 褐色土 φ10mmロームブロック少量
- 4 埴輪色土 3に類似
- 5 埴輪色土 ローム粒・炭化物粒・焼土粒微量、粒子粗、しまり弱、柱状跡?
- 6 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒多量、粒子粗、しまり弱、柱状跡?
- 7 埴輪色土 ローム粒少量、しまり弱
- 8 埴黄褐色土 ローム粒多量、粒子粗、しまり弱
- 9 褐色土 ローム粒多量、粒子粗、しまり弱
- 10 黄褐色土 ローム粒多量、粒子微密
- 11 黄褐色土 ローム粒多量、φ5mmロームブロック少量

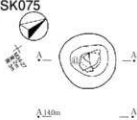
(3)SH062



(3)SH062

- 1 埴輪色土 ローム粒少量、しまり強
- 2 埴輪色土 粒子微密、しまり強、柱状跡?
- 3 黒褐色土 粒子粗、しまり強
- 4 黄褐色土+埴輪色土 凝状、しまり強

(3)SK075



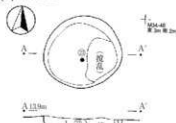
(3)SH067



(3)SH067

- 1 埴黄褐色土 ローム粒や中多量、しまり強
- 2 埴輪色土 ローム粒多量、焼土粒微量、しまり強
- 3 黄褐色土 φ5mmロームブロック少量、しまりやや弱
- 4 埴黄褐色土 ローム粒や中多量、しまりやや弱

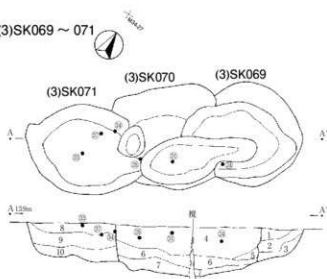
(3)SK068



(3)SK068

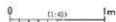
- 1 埴輪色土 ローム粒少量、黒色土粒微量、しまり強
- 2 黄褐色土 φ10mmロームブロック多量、しまり強

(3)SK069~071

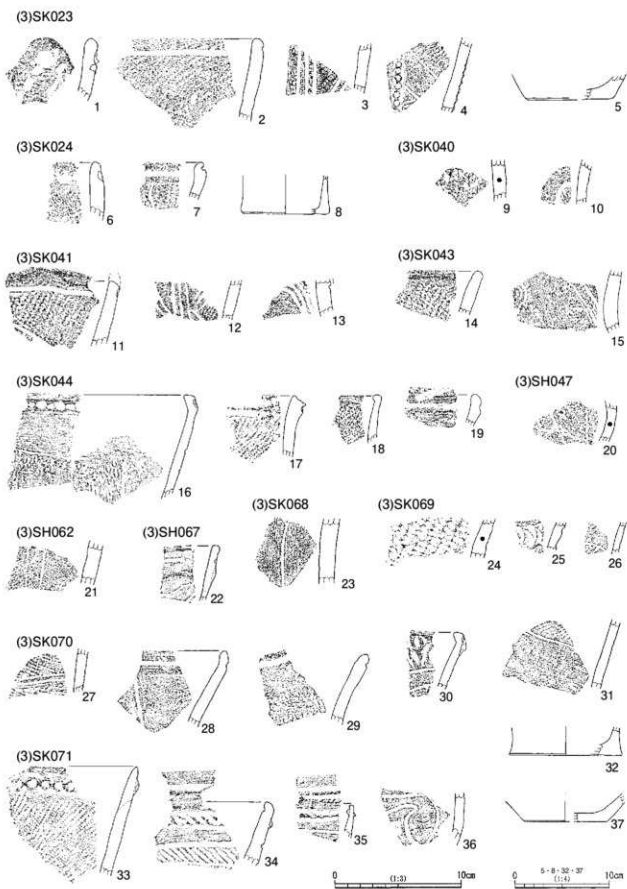


(3)SK069~071

- 1 (3)SK069 埴輪色土 φ5mmローム粒少量、しまり強
- 2 (3)SK069 褐色土 φ30mmロームブロック微量、しまり強
- 3 (3)SK069 黄褐色土 φ10mmロームブロック多量、しまり強
- 4 (3)SK070 埴輪色土 φ5mmローム粒や中多量、焼土粒少量、しまり強
- 5 (3)SK070 埴輪色土 1より色調やや暗い、φ5mmローム粒や中多量、しまりやや弱
- 6 (3)SK070 黒褐色土 黒色土粒少量、しまりやや弱
- 7 (3)SK070 埴黄褐色土 φ10mmロームブロック少量、しまり強
- 8 (3)SK071 埴輪色土 炭化物粒微量、しまり強
- 9 (3)SK071 埴輪色土 ローム粒少量、しまりやや弱
- 10 (3)SK071 埴輪色土 しまり強、粘性やや強

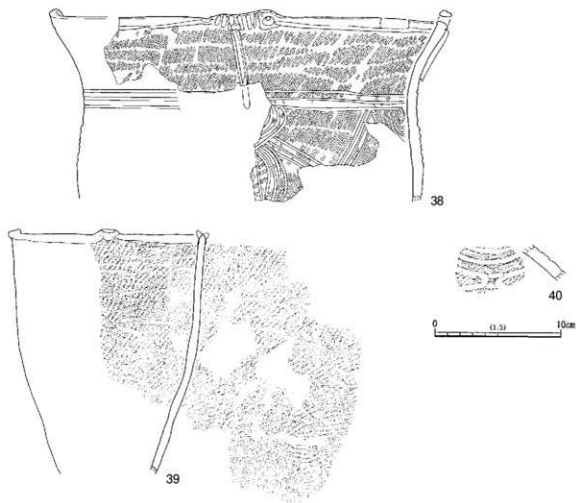


第 135 図 (3)SK068～071・074・075 土坑、(3)SH047・062・067 ピット

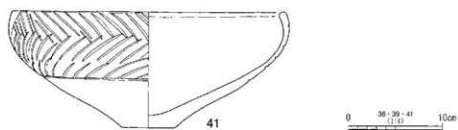


第136図 (3)SK023・024・040・041・043・044・068～071土坑、(3)SH047・062・067ピット出土遺物

(3)SK074



(3)SK075



第137図 (3)SK074・075 土坑出土遺物

かもしれない。

時期 最も古い(3)SK041と新しい(3)SK044のいずれも主体となるのは堀之内式であり、遺構群は堀之内式期と考えられる。

(3)SH047 (第135・136図、図版68)

状況 長軸長95cm、短軸長70cmの不整形円形を呈する。断面は漏斗状で丸底になっているが中間から下は壁がほぼ垂直に立ち上がるため、開口部南東側は崩落して広がったかもしれない。深さは92cmを測る。土層観察では柱痕跡と思われる土層が検出されており、柱穴だったと思われる。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。20は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(3)SH062 (第135・136図、図版68)

状況 径30cm～34cmの楕円形を呈する。断面は碗形で丸底になっており、深さは25cmを測る。浅いが柱痕跡と思われる土層が認められ、柱穴と考えられる。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。21は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SH067 (第135・136図、図版68)

状況 開口部は径35cm～40cmの楕円形を呈するが、坑底は長軸長20cm、短軸長6cmの紡錘形を呈する。断面碗形で丸底となり、深さは43cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。22は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK068 (第135・136図、図版68)

状況 径76cm～82cmの楕円形を呈する。断面皿状で壁の立ち上がりは緩やかである。深さは15cmと浅い。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。23は称名寺式と思われる深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(3)SK069～071 (第135・136図、図版12・69)

状況 3基の土坑が重なり合った状況である。全体の長軸長は296cm、短軸長は(3)SK069・070が共に110cm、(3)SK071が95cmである。形状はいずれも不整形と思われるが、各遺構の境界が不明確なため断定できない。(3)SK070の南東部には更に長軸長125cm、短軸長50cmの不整形を呈する掘込みが存在するが、これが(3)SK070と同一か別遺構かは不明である。深さは(3)SK069が36cm、(3)SK070が52cm、(3)SK071は41cmである。新旧関係は(3)SK069・071が古く(3)SK070が新しい。

出土遺物 (3)SK069出土遺物では、24は黒浜式の深鉢胴部である。25は浮島式の深鉢胴部である。26は堀之内式の胴部である。(3)SK070では27は諸磯式の深鉢胴部である。28～30は堀之内式の深鉢口縁部、31は胴部、32は底部である。(3)SK071では33～35は堀之内式の口縁部、36は胴部、37は底部である。

時期 (3)SK069が前期主体であるものの、他の2基で主体となるのは堀之内式であり、3基とも時期の隔たりは少ないと考えられることから、遺構群は堀之内式期と考えられる。

(3)SK074 (第135・137図、図版12・69)

状況 長軸長88cm、短軸長72cmの不整形形を呈する。断面は皿状を呈するが、南東部が最も深く北西壁が段状に傾斜する。深さは18cmである。

出土遺物 38・39は堀之内式の器形復元できる深鉢である。40は堀之内式の鉢もしくは注口土器の胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

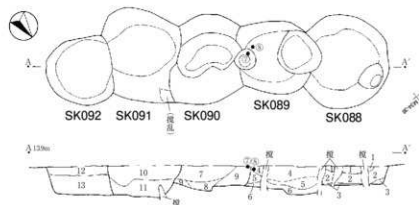
(3)SK075 (第135・137図、図版69)

状況 直径60cmのはほぼ正円形を呈する。断面皿状で深さは6cmとごく浅い。

出土遺物 41は加曾利B式の浅鉢である。

時期 出土遺物から加曾利B式期と考えられる。

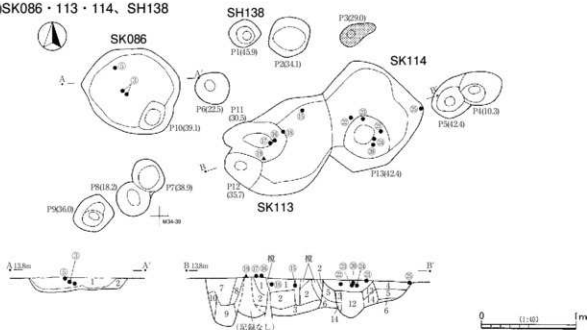
(3)SK088 ~ 092



(3)SK088 ~ 092

- | | | | |
|----------------|---------------------|-----------------|---------------------|
| 1(SK088) 埴間色土 | ローム粒多量、しまり強 | 8(SK090) 埴間褐色土 | 黄褐色土層、しまり強 |
| 2(SK088) 埴間色土 | 1より色調暗い、黒色土粒少量、しまり強 | 9(SK090) 黄褐色土 | 黒色土粒少量 |
| 3(SK088) 埴間褐色土 | ロームブロック多量、しまり強 | 10(SK091) 埴間色土 | φ10mmロームブロック少量、しまり強 |
| 4(SK089) 埴間色土 | ローム粒少量、しまり強 | 11(SK091) 埴間褐色土 | φ10mmロームブロック微量、しまり強 |
| 5(SK089) 埴間色土 | 黄褐色土少量(斑状)、しまりやや弱 | 12(SK092) 埴間褐色土 | ローム粒少量、しまり強 |
| 6(SK089) 黄褐色土 | ローム粒少量、しまり強 | 13(SK092) 黄褐色土 | φ5mmローム粒多量、しまり強 |
| 7(SK090) 埴間色土 | ローム粒少量、しまり強 | | |

(3)SK086・113・114、SH138



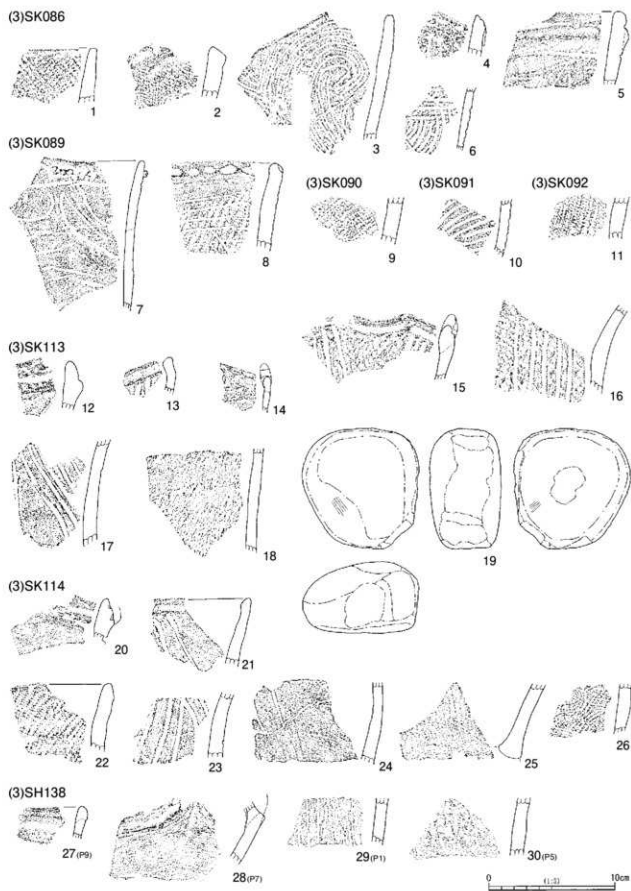
(3)SK086

- 埴間色土 φ5mm炭化物粒・ロームブロック少量
- 黄褐色土 埴間色土斑状

(3)SK113・114、SH138

- | | | | |
|----------------|------------------------|---------------------|----------------------------|
| 1(SK113) 埴間色土 | φ5mmローム粒・炭化物粒やや多量、しまり強 | 7(SK138-P12) 埴間色土 | ローム粒少量(散在)、炭化物粒微量、しまり強 |
| 2(SK113) 褐色土 | φ5mm炭化物粒微量、しまり強 | 8(SK138-P12) 埴間色土 | 1より黄色味強い、しまり強 |
| 3(SK113) 黄褐色土 | ローム粒微量、しまり弱 | 9(SK138-P12) 埴間褐色土 | φ20mm黄褐色土多量(斑状)、しまり弱 |
| 4(SK114) 埴間褐色土 | ローム粒やや多量、しまりやや弱 | 10(SK138-P12) 黄褐色土 | 埴間色土少量、しまり強 |
| 5(SK114) 黄褐色土 | 埴間色土層、しまり強 | 11(SK138-P13) 埴間色土 | ローム粒微量、しまり強 |
| 6(SK114) 黄褐色土 | ロームブロック多量、しまり強 | 12(SK138-P13) 埴間色土 | 1より形体強い、ローム粒やや多量、しまり強、柱状跡? |
| | | 13(SK138-P13) 埴間色土 | φ5mmローム粒多量、しまりやや弱 |
| | | 14(SK138-P13) 埴間褐色土 | ローム粒散在、しまり弱 |

第138図 (3)SK086・088 ~ 092・113・114土坑、(3)SH138ピット群



第139図 (3)SK086・089～092・113・114土坑、(3)SH138ピット群出土遺物

(3)SK086 (第138・139図、図版69)

状況 東西長106cm、南北長90cmの不整形形を呈する。断面皿状を呈し床面は平坦で、深さは16cmである。南東部には(3)SH138ビット群のP10が存在するが、新旧関係は不明である。

出土遺物 1～5は堀之内式の深鉢口縁部、6は胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK088～092 (第138・139図、図版69)

状況 5基の土坑が一直線に連結されたような状況である。全長は365cm、短軸長は(3)SK088が100cm、(3)SK089が78cm、(3)SK090が95cm、(3)SK091が97cm、(3)SK092が72cmである。形状は(3)SK088が正円形で他は不整形形と推測される。(3)SK088・(3)SK089の坑底にはさらにビット状の掘込みが存在し、土層観察から土坑に伴うものと判断される。深さは(3)SK088が20cm、(3)SK089が30cm、(3)SK090が26cm、(3)SK091が33cm、(3)SK092が30cmである。新旧関係は古い順に(3)SK088→089→090・092→091となる。

出土遺物 (3)SK088からは図示できる遺物が出土しなかった。(3)SK089の7・8は堀之内式の深鉢口縁部である。(3)SK090の9と(3)SK092の11は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK091の10は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 全体に遺物の数量が少ないため判断が難しいが、全て堀之内式期と思われる。

(3)SK113・114 (第138・139図、図版70・97)

状況 2基の土坑が連結したような状況である。両者あわせた長軸長は220cm、短軸長は(3)SK113が91cm、(3)SK114が112cmで、形状はいずれも不整形形である。(3)SH138ビット群のP11・12・13が重複しており、全て(3)SK113・114より新しい。断面はいずれも椀形で、深さは(3)SK113が40cm、(3)SK114が30cmである。

出土遺物 (3)SK113出土遺物では、12～15は堀之内式の深鉢口縁部、16～18は胴部である。19は敲石で、熱を受けている。(3)SK114では20～22は堀之内式の口縁部、23～26は胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH138 (第138・139図、図版70)

状況 13基のビットから構成される。P3には焼土の堆積が認められる。堅穴住居跡の柱穴である可能性も考慮したが、配置が不自然なためビット群とした。P11～13は(3)SK113・114と重複しており、土坑より新しい。

出土遺物 出土したビットの番号は図中に記載した。27・28は堀之内式の深鉢口縁部、29・30は胴部である。

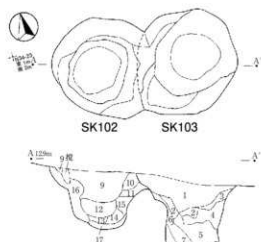
時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、遺物の出土がなかったビットも含めて堀之内式期と思われる。

(3)SK102・103 (第140・143図、図版12・70)

状況 2基の土坑が連結したような状況である。(3)SK102は直径110cmのほぼ正円形、(3)SK103は東西長115cm、南北長110cmの不整形形を呈する。断面形状はいずれも開口部から漏斗状にすぼまり、中間から下は円筒形となって丸底の坑底へ至る。深さは(3)SK102が60cm、(3)SK103が87cmである。新旧関係は(3)SK102が古く(3)SK103が新しい。

出土遺物 図示できる遺物はいずれも1点のみである。(3)SK102の1は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK103の2は堀之内式の深鉢口縁部である。

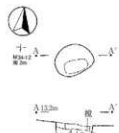
(3)SK102・103



(3)SK102・103

- 108SK102 暗褐色土 褐色土多量（腐状）、焼土粒・ローム粒微細、しまり強
- 208SK102 黒褐色土 ローム粒少量、しまり強
- 308SK102 黒褐色土 2より色調明るい、褐色土腐状、しまり強
- 408SK102 暗褐色土 ローム粒やや多量、黄褐色土やや多量（腐状）、しまり強
- 508SK102 黒褐色土 4.5mmロームブロック微細、しまりやや強
- 608SK102 暗褐色土+黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや強
- 708SK102 黒色土 褐色土多量、しまり弱、粘性やや強
- 808SK102 褐色粘質土 4.10mmロームブロック多量、しまり弱
- 908SK102 褐色粘質土 ローム粒・褐色土粒やや多量、しまり強
- 1008SK102 褐色粘質土 9より色調やや暗い、しまり強
- 1108SK102 黒褐色土 ローム粒やや多量、黄褐色土腐、しまり強
- 1208SK102 黒色土 ローム粒少量、粘子泥、しまり強
- 1308SK102 黒色土 12より黒味強い、ローム粒やや多量、しまり強
- 1408SK102 黒褐色土 12+褐色土、しまり強
- 1508SK102 暗黄褐色土 ローム粒微細、しまり強
- 1608SK102 暗黄褐色土 4.5mmローム粒多量、しまり強
- 1708SK102 褐色粘質土 褐色土やや強、しまり弱

(3)SK108

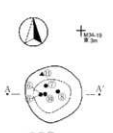


(3)SK108

- 1 褐色土 ローム粒やや多量、しまり弱
- 2 暗褐色土 褐色土腐、しまり弱
- 3 暗褐色土 2より黒味やや強い、しまり弱
- 4 黄褐色土 暗褐色土腐、しまり弱
- 5 黄褐色土 4.10mmロームブロック多量、しまり強



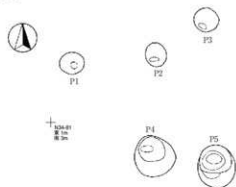
(3)SK112



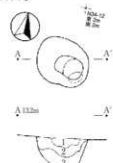
(3)SK112

- 1 褐色土 ローム粒・炭化植物微細
- 2 暗黄褐色土 黄褐色土少量（腐状）、しまり強

(3)SH105



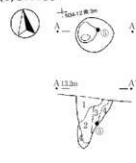
(3)SK110



(3)SK110

- 1 暗褐色土 4.10mm褐色土少量（腐状）、しまりやや強
- 2 暗褐色土 4.10mm黄褐色多量（腐状）、しまり弱
- 3 暗黄褐色土 黄褐色土土状、暗褐色土少量、褐色土腐（腐状）、しまり弱

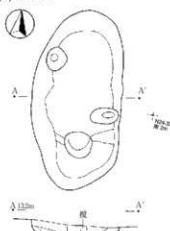
(3)SH109



(3)SH109

- 1 暗褐色土 褐色土粒少量、ローム粒微細、しまり弱
- 2 暗褐色土 4.5mmロームブロック少量、しまり弱、柱痕跡?
- 3 暗褐色土 ローム粒やや多量、黄褐色土少量（腐状）、しまり弱
- 4 黄褐色土 暗褐色土腐（腐状）、しまりやや強

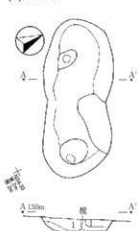
(3)SK106



(3)SK106

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、しまりやや強
- 2 褐色土 ローム粒やや多量、暗褐色土腐（腐状）、しまりやや強
- 3 黄褐色土+暗褐色土 ローム粒多量、しまりやや強

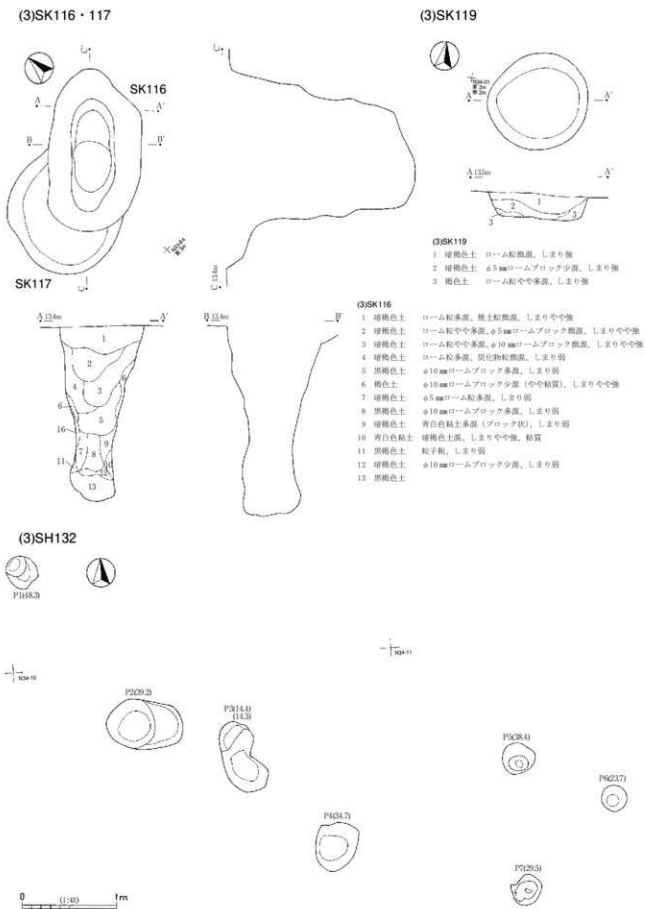
(3)SK107



(3)SK107

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、しまりやや強
- 2 褐色土 ローム粒やや多量、暗褐色土腐（腐状）、しまりやや強
- 3 黄褐色土+暗褐色土 ローム粒多量、しまりやや強

第140図 (3)SK102・103・106～108・110・112土坑、(3)SH105ピット群、(3)SH109ピット



第141図 (3)SK116・117・119土坑、(3)SH132ピット群

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、両者とも堀之内式期と思われる。

(3)SH105 (第140・143図、図版70)

状況 5基のビットから構成される。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。3はP1出土で堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK106 (第140・143図、図版12・70)

状況 長軸長191cm、短軸長96cmの不整形円形を呈する。断面皿状であるが底面はやや不安定で凹凸が見られる。深さは25cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。4は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK107 (第140図、図版12)

状況 長軸長168cm、短軸長75cmの不整形円形を呈する。断面不定形で底面は北東壁側が低くなっている。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SH108 (第140図)

状況 長軸長40cm、短軸長30cmの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり丸底である。深さは23cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SH109 (第140・143図、図版70)

状況 径38cm→40cmのほぼ正円形であるが、断面は逆三角形を呈し、底は尖ったような形状となっている。柱痕跡らしい土層も観察される。深さは54cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。5は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK110 (第140図)

状況 長軸長60cm、短軸長50cmの不整形円形を呈する。断面椀形で丸底であり、深さは南東部のオーバーハングしている部分で46cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK112 (第140・143図、図版69・70・95)

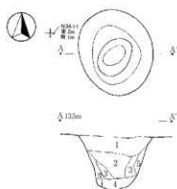
状況 径60cmのほぼ正円形を呈する。断面椀形で丸底であり、深さは15cmと浅い。確認面より上位の包含層中から多くの遺物が出土し、これらも当遺構に帰属するものと判断した。

出土遺物 6は器形復元できる深鉢下半で、後期と思われる。7は堀之内式の深鉢口縁部である。8～10は後期と思われる深鉢胴部である。11はチャート製の石織である。

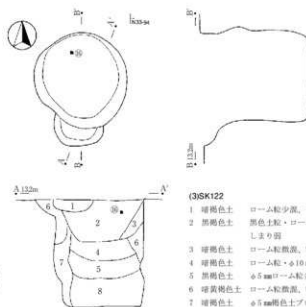
時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK116・117 (第141・143図、図版12・70)

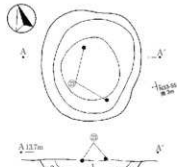
状況 2基が重なり合っている。116は陥穴で、長軸長165cm、短軸長98cmの不整形円形を呈する。坑底は

(3)SK120**(3)SK120**

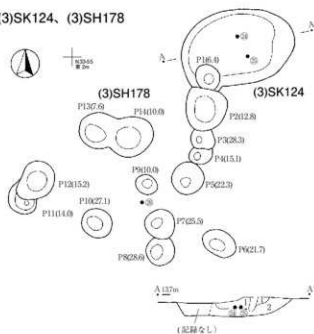
- 1 埴輪色土 炭化物粒やや多量、ローム粒・橋土粒少量、しまり強
- 2 埴輪色土 ローム粒多量、橋土粒微量、しまり強
- 3 埴輪色土 褐色土層、φ5mmロームブロック微量、しまり弱
- 4 黒褐色土 φ5mmロームブロック微量、松子粒、しまり弱
- 5 褐色土 埴輪色土層（底状）、しまり強

(3)SK122**(3)SK122**

- 1 埴輪色土 ローム粒少量、しまり強
- 2 黒褐色土 褐色土粒・ローム粒やや多量、炭化物粒少量、しまり弱
- 3 埴輪色土 ローム粒微量、松子粒、しまりやや強
- 4 埴輪色土 ローム粒・φ10mm褐色土微量、しまり弱
- 5 黒褐色土 φ5mmローム粒多量、しまり弱
- 6 埴輪褐色土 ローム粒微量、松子粒、しまりやや強
- 7 埴輪色土 φ5mm褐色土ブロックやや多量、しまり弱
- 8 黒褐色土 φ10mm褐色土ブロック多量、しまり弱

(3)SK123**(3)SK123**

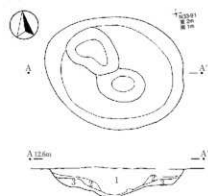
- 1 埴輪色土 ローム粒微量、松子粒、しまり強
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物粒微量、松子粒、しまり弱
- 3 埴輪色土 1より色調明るい、黄褐色土多量、炭化物粒少量、しまり強

(3)SK124、(3)SH178**(3)SK124**

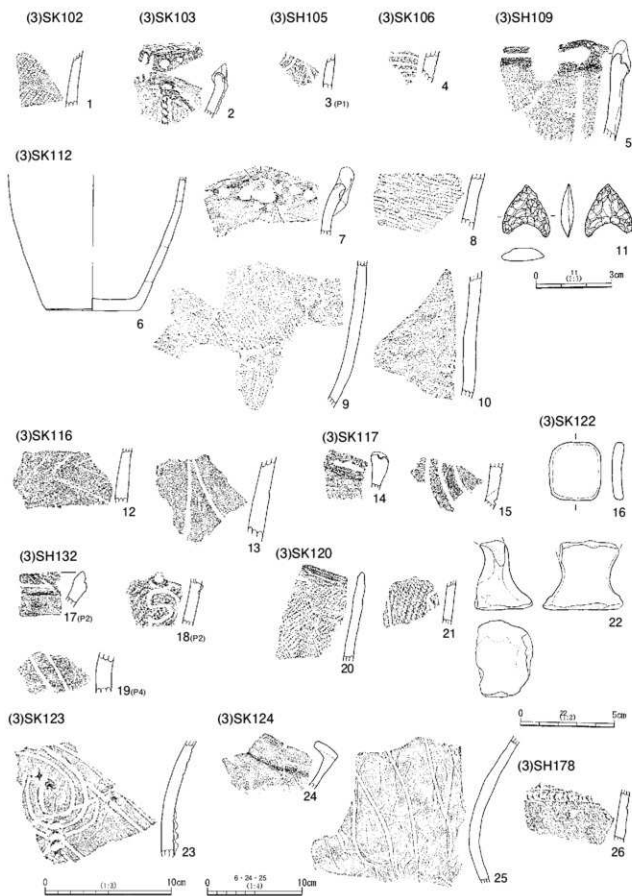
- 1 埴輪色土 φ5mmローム粒やや多量、炭化物粒少量、しまり弱
- 2 褐色土 φ5mmローム粒多量、しまりやや強

(3)SK125

- 1 埴輪色土 ローム粒多量、炭化物粒微量、しまり強
- 2 埴輪褐色土 ローム粒やや多量、φ5mmロームブロック少量、しまり強
- 3 黄褐色土 ローム粒多量、φ20mmロームブロック少量、しまりやや弱

(3)SK125

第142図 (3)SK120・122～125土坑、(3)SH178ピット群



第143図 (3)SK102・103・106・112・116・117・120・122～124土坑、
 (3)SH105・132・178ピット群、(3)SH109ピット出土遺物

長軸長85cm、短軸長40cmで、南西側が一段低くなっている。深さは最深で197cmである。(3)SK117は(3)SK116の西側に存在する。径120cmのほぼ正円形を呈すると思われる。深さは20cmである。新旧関係は記録がないが、おそらく(3)SK116が古く(3)SK117が新しいと思われる。

出土遺物 (3)SK116からは12・13が出土している。いずれも堀之内式の深鉢胴部である。(3)SK117からは14・15が出土している。14は堀之内式の深鉢口縁部、15は胴部である。

時期 (3)SK117は遺物の数量が少ないため判断が難しいが、出土遺物から堀之内式期と考えられる。(3)SK116は堀之内式が出土しているものの遺物の形状などから該期とは考えにくく、前期以前と思われる。

(3)SK119 (第141図)

状況 径105cmのほぼ正円形を呈する。断面は逆台形で深さは25cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は、不明である。

(3)SH132 (第141・143図、図版70)

状況 7基のピットから構成される。

出土遺物 17・18はP2出土で堀之内式の深鉢口縁部である。19はP4出土で堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、遺物の出土がなかったピットも含めて堀之内式期と思われる。

(3)SK120 (第142・143図、図版70・94)

状況 長軸長90cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。断面は楕円形で壁が直線的に立ち上がる。坑底中央はさらに一段掘り窪められている。深さは56cmである。上層側は焼土粒・炭化物粒の混入が目立つ。

出土遺物 20は堀之内式の深鉢口縁部、21は胴部である。22はハート形土偶の脚と思われる。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK122 (第142・143図、図版12・93)

状況 径100cmの正円形に近い不整形形を呈する。断面長方形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。南側には長さ30cm、幅55cmの張出しがある。深さは本体が111cm、張出しが15cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。16は土器片方形盤とでも言うべき土製品である。土器片を転用したもので四辺が研磨されている。

時期 出土遺物は無文の土製品で判断が難しいが、後期と思われる。

(3)SK123 (第142・143図、図版12・70)

状況 長軸長115cm、短軸長105cmの不整形形を呈する。断面逆台形を呈し、深さは25cmである。

出土遺物 23は称名寺式の深鉢胴部である。

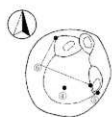
時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(3)SK124、SH178 (第142・143図、図版70)

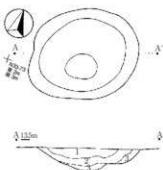
状況 (3)SK124と(3)SH178のP1・2が重なっている状況である。(3)SK124は長軸長155cm、短軸長100cmの楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、深さは20cmである。(3)SH178は14基のピットから構成される。P1～5、7と8、11と12、13と14がそれぞれ接している。P1は(3)SK124内に位置するが、両者の新旧関係は不明である。

出土遺物 (3)SK124出土の24は称名寺式の深鉢口縁部、25は胴部である。(3)SH178の26はピットの中から

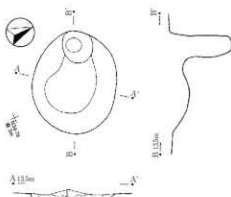
(3)SK131



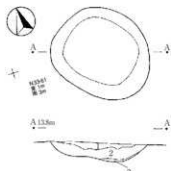
(3)SK133



(3)SK134



(3)SK146



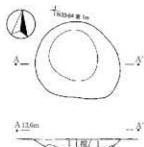
(3)SK145

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒少量、 $\phi 10\text{mm}$ ロームブロック散見、しまりやや弱
- 3 暗黄褐色土 ローム粒少量、しまり強

(3)SK133

- 1 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒散見、しまり強
- 2 暗黄褐色土 ローム粒散見、しまり強
- 3 黄褐色土 ローム粒散見、しまり強

(3)SK135



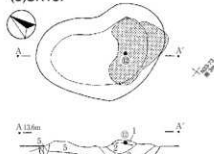
(3)SK135

- 1 褐色土 ローム粒・黒色土粒少量、粒子粗、しまりやや弱
- 2 褐色粘質土 しまり強

(3)SK134

- 1 暗褐色土 しまり強
- 2 暗褐色土 $\phi 5\text{mm}$ ローム粒少量、しまり強
- 3 暗黄褐色土 $\phi 30\text{mm}$ 黄褐色土少量（固状）、しまり強

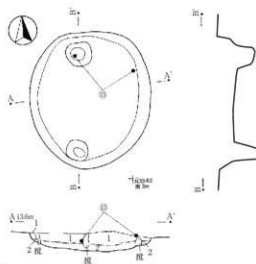
(3)SK137



(3)SK137

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多量
- 2 暗褐色土 腐土全体で色調は明るい、 $\phi 5\text{mm}$ 粘土粒やや多量
- 3 暗褐色土 炭化物粒少量
- 4 暗褐色土 粘土粒・ローム粒少量
- 5 暗黄褐色土 ローム粒・炭化物粒少量
- 6 黄褐色土 $\phi 10\text{mm}$ ロームブロック少量

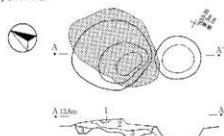
(3)SK145



(3)SK145

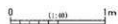
- 1 暗褐色土 粘土粒散見、粒子粗、しまりやや弱
- 2 暗黄褐色土 ローム粒やや多量、粒子粗、しまりやや弱

(3)SK175



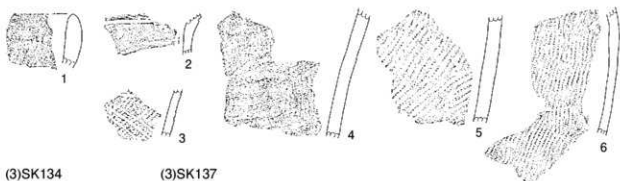
(3)SK175

- 1 暗褐色土 粘土粒・ローム粒多量、しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒少量、粘土粒散見、しまりやや弱
- 3 暗褐色土 粘土粒多量、しまりやや弱
- 4 暗褐色土 $\phi 10\text{mm}$ 粘土ブロック、 $\phi 5\text{mm}$ ローム粒多量、しまり強、本層上面が硬面?



第 144 図 (3)SK131・133～135・137・145・146・175 土坑

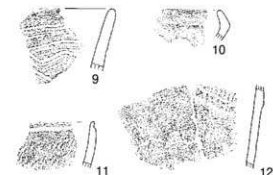
(3)SK131



(3)SK134



(3)SK137



(3)SK145



第145図 (3)SK131・134・137・145土坑出土遺物

出土したものではないが、関連がある可能性があると考えて掲載した。浮島式の深鉢胴部である。

時期 (3)SK124は遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。(3)SH178についてはビット出土遺物がないため判断できないが、浮島式期である可能性を提示しておく。

(3)SK125 (第142図)

状況 長軸長150cm、短軸長118cmの楕円形を呈する。中央部はさらに一段掘り窪められている。深さは最深で31cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK131 (第144・145図、図版70)

状況 直径90cmのほぼ正円形を呈する。北と東の壁際には小ビット状の掘込みが3か所存在する。断面は逆台形であるが中央部がやや低くなっている。深さは33cmである。

出土遺物 1は加曾利E式の深鉢口縁部と思われる。2・3は堀之内式の深鉢胴部で、4～6も同時期と思われる深鉢胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式であり、遺構も該期と判断される。

(3)SK133 (第144図)

状況 長軸長120cm、短軸長96cmの不整形円形を呈する。断面は浅い碗形で丸底である。深さは24cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK134 (第144・145図、図版70)

状況 長軸長108cm、短軸長90cmの楕円形を呈する。断面は浅い碗形で丸底である。深さは20cmを測る。なお、北西端部に直径34cm、深さ70cmのピットが存在し、形状から柱穴と考えられるが、SK134に伴うものか別遺構かは不明である。

出土遺物 7は黒浜式の深鉢胴部である。8は称名寺式の深鉢胴部である。

時期 遺物は大きく2時期に分かれ、前期と後期の両方の可能性がある。

(3)SK135 (第144図)

状況 東西長90cm、南北長80cmの不整形円形を呈する。断面は浅い碗形で丸底である。深さは20cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK137 (第144・145図、図版71)

状況 長軸長140cm、短軸長90cmの不整形円形を呈する。南東部を中心に焼土が混入するほか、全体に炭化物粒が散在する。断面皿状で、深さは30cmである。

出土遺物 9～11は堀之内式の深鉢口縁部、12は胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK145 (第144・145図、図版71)

状況 長軸長145cm、短軸長130cmの楕円形を呈する。壁は北と南が直線的に立ち上がるのに対し、東と西は緩やかに立ち上がる。深さは20cmである。北と南の壁際に直径25cm、床面からの深さ20cm～30cmのピットが存在する。柱穴の可能性がある。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。13は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK146 (第144図)

状況 長軸長105cm、短軸長90cmの不整形円形を呈する。断面皿状で、深さは18cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK175 (第144図)

状況 2基の土坑より構成される。北西側の一つは長軸長85cm、短軸長72cmの不整形円形を呈する。底面は不安定で平坦面がなく、深さも13cmと浅い。覆土には焼土粒・焼土ブロックが多量に混入していた。南東側のもう一つは径45cm～50cmの楕円形を呈する。断面逆台形で底面も平坦であり、深さは16cmを測る。本来なら別遺構として扱うところであるが、焼土が両者を覆うように堆積していたので一体のものと考えた。竪穴住居跡の炉に類似するが、近くに存在する(3)S1177住居跡の中心から大きく外れていること、他に周囲に柱穴など、竪穴を構成する遺構が存在しないことなどから、単独の土坑として扱った。

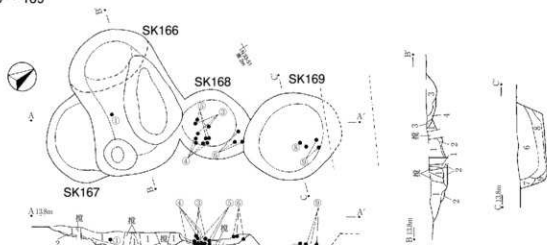
出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK166～169 (第146・147図、図版12・71)

状況 4基の土坑が重なっている状況である。全体を通した長さは312cm、短軸長は(3)SK166・(3)SK167が155cm、(3)SK168が75cm、(3)SK169が90cmである。形状は一部推測となるが、(3)SK166・169が不整形円形。

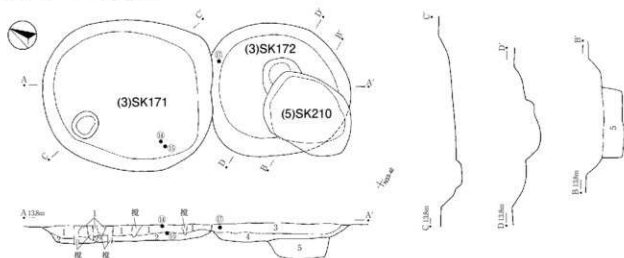
(3)SK166 ~ 169



(3)SK166 ~ 169

- | | | | |
|----------------|----------------|------------------|----------------------------------|
| 1 (SK167) 埴輪色土 | ローム粒・黒色粘散土 | 5 (SK168) 埴輪色土 | ローム粒多量 |
| 2 (SK167) 埴輪色土 | ローム粒散土 | 6 (SK169) 埴輪色土 | 炭化物粒やや多量、ローム粒少量、焼土粘散土、しまりやや強 |
| 3 (SK166) 埴輪色土 | 粘土粗、しまりやや弱 | 7 (SK169) 黒褐色土 | 炭化物粒少量、しまりやや強 |
| 4 (SK166) 埴輪色土 | 3より色調暗い、しまりやや弱 | 8 (SK169) 埴輪色土 | 6より色調やや明るい、ローム粒やや多量、焼土粘散土、しまりやや強 |
| | | 9 (SK169) 埴輪黄褐色土 | φ10mmロームブロック少量、しまりやや強 |

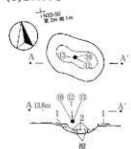
(3)SK171・172、(5)SK210



(3)SK171・172、(5)SK210

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1 (SK171) 埴輪色土 | 褐色土粒・黒褐色土粒少量、粘土粗、しまりやや弱 |
| 2 (SK171) 褐色土 | 黒色土粘散土、しまり強 |
| 3 (SK172) 埴輪色土 | 1~4の埴輪色土中色調最も暗い、しまり弱 |
| 4 (SK172) 埴輪色土 | しまり強 |
| 5 (SK210) 埴輪色粘質土 | 焼土粒・ロームブロック散 |

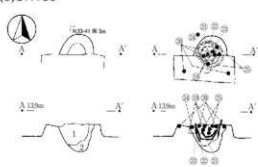
(3)SK170



(3)SK170

- | | |
|--------|-------------|
| 1 黒褐色土 | 粘性やや強 |
| 2 埴輪色土 | ローム粒散土、しまり強 |

(3)SH186



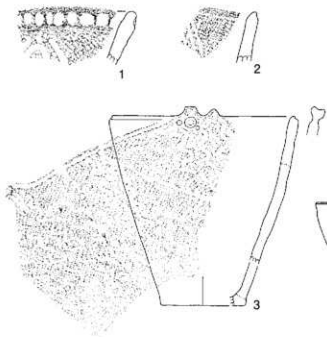
(3)SH186

- | | |
|-------------|------------------|
| 1 埴輪色土 | 黒色土粒・ローム粒散土、しまり強 |
| 2 黒褐色土+黄褐色土 | |

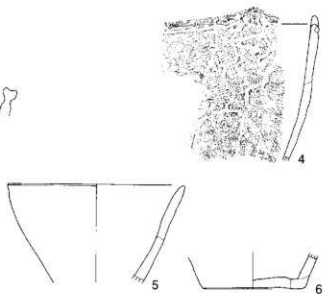


第146図 (3)SK166 ~ 172、(5)SK210土坑、(3)SH186ピット(埋設土器)

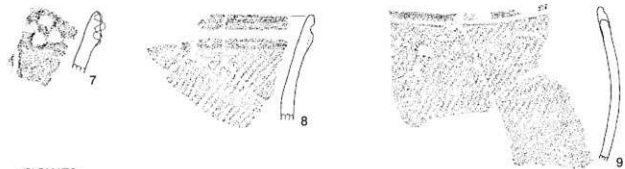
(3)SK167



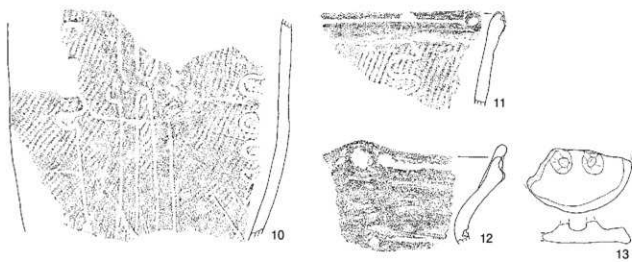
(3)SK168



(3)SK169



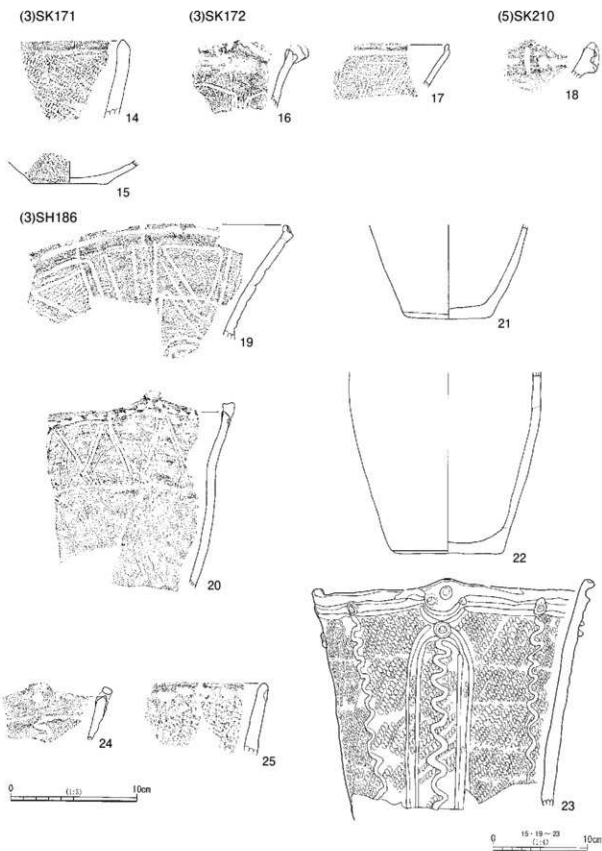
(3)SK170



0 3-6-8-11 10cm
(1:3)

0 (1:3) 10cm

第 147 图 (3)SK167 ~ 170 土坑出土遺物



第 148 図 (3)SK171・172、(5)SK210 土坑、(3)SH186 ビット出土遺物

(3)SK168がほぼ正円形、(3)SK167は不整形である。断面形状は(3)SK166～168は緩やかな椀形、(3)SK169は逆台形である。深さは(3)SK166が12cm、(3)SK167が20cm、(3)SK168が12cm、(3)SK169が30cmである。新旧関係は(3)SK167→166・168となる。(3)SK168と(3)SK169との関係は不明である。

出土遺物 (3)SK166からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK167では図示できる遺物は1点のみである。1・2は堀之内式の深鉢口縁部である。(3)SK168からは比較的多量に出土があった。3・6は堀之内式の器形復元できる深鉢である。4は深鉢口縁部である。5は器形復元ができる無文の浅鉢で、時期は判断しにくい後期であろう。(3)SK169の7～9は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 (3)SK167～169は出土遺物から堀之内式期と考えられる。(3)SK166は(3)SK167より新しいということしか分からないが、それでも大きく隔たるとは思われ、近い時期であろう。

(3)SK170 (第146・147図、図版12・71・72・93)

状況 長軸長63cm、短軸長40cmの楕円形を呈する。断面椀形で壁の立ち上がり緩やかなため遺構の範囲が分かりにくい。深さは10cmとごく浅い。

出土遺物 10は堀之内式の器形復元できる深鉢である。11・12は堀之内式の深鉢口縁部である。13は蓋形土製品である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK171・172、(5)SK210 (第146・148図、図版71)

状況 (3)SK171と(3)SK172は南北に隣接するように位置し、(5)SK210は(3)SK172に重なるように存在する。(5)SK210は上層本調査であった3次調査時に見逃され、下層調査である5次調査になって存在が確認されたものである。(3)SK171は長軸長180cm、短軸長160cmで北側は円形、南側は隅丸方形である。(3)SK172は長軸長150cm、短軸長140cmの不整形円形を呈する。(5)SK210は長軸長100cm、短軸長74cmの不整形円形を呈する。(3)SK171及び(3)SK172の断面形状は皿状であるが、床面はいずれも北西に向かって緩やかに下り傾斜する。(5)SK210は断面逆台形で床面は平坦である。深さは(3)SK171が18cm、(3)SK172が20cm、(5)SK210が40cmである。新旧関係は(5)SK210が(3)SK172より古いのは明らかであるが、(3)SK171と(3)SK172は判断できない。両者とも形状、規模など極めて相似しており、同時である可能性もある。

出土遺物 (3)SK171出土の14は、堀之内式の口縁部、15は底部である。(3)SK172出土の16・17、(5)SK210出土の18はいずれも堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 いずれも遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SH186 (第146・148図、図版12・13・71)

状況 当遺構は土器が埋設されており、土器と壁との間にほとんど隙間がなかったため、断面実測に必要な幅のサウトレンチを設定して半分掘削した上で調査を行ったものである。そのため遺構の規模や形状は推定となるが、直径約35cmの円形を呈すると思われる。断面椀形で丸底を呈し、深さは30cmである。

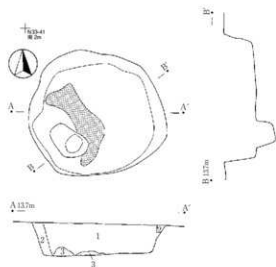
出土遺物 遺構の規模と比べると極めて多量の遺物が出土した。23は堀之内式の器形復元できる深鉢で、21・22も無文であるが同時期と思われる深鉢である。この3点が図で示した上下関係で入れ子状に埋設されていた。19・20・24・25は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(5)SK208 (第149・152図、図版13・73)

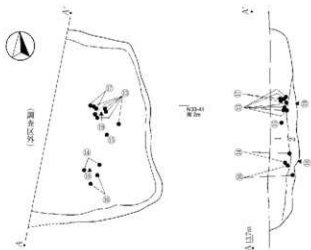
状況 径65cm～80cmの楕円形を呈する。断面椀形で、深さは20cmである。

(5)SK209



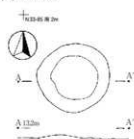
- (5)SK209
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
 2 埴明色粘質土 ロームブロック層
 3 黄褐色粘質土 焼土粒ややみ層

(5)SK213



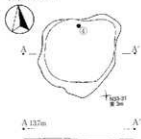
- (5)SK213
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
 2 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK208



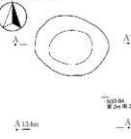
- (5)SK208
 1 埴明色土 焼土粒・黄色ロームブロック層、粘性強

(5)SK211



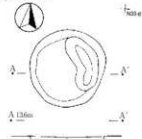
- (5)SK211
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK216



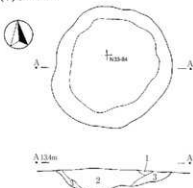
- (5)SK216
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK218



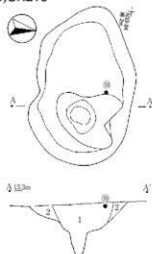
- (5)SK218
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
 2 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK214



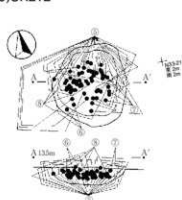
- (5)SK214
 1 プフトローム
 2 埴明色土 焼土粒・ロームブロック層
 3 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK215



- (5)SK215
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
 2 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(5)SK212

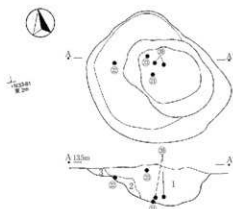


- (5)SK212
 1 埴明色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

0 (1:40) 1m

第149図 (5)SK208・209・211～216・218土坑

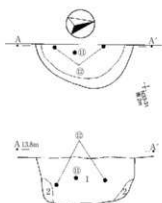
(5)SK217



(5)SK217

- 1 黒褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
- 2 黄褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
- 3 埴褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

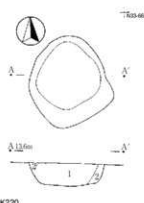
(5)SK219



(5)SK219

- 1 埴褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
- 2 埴黄褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

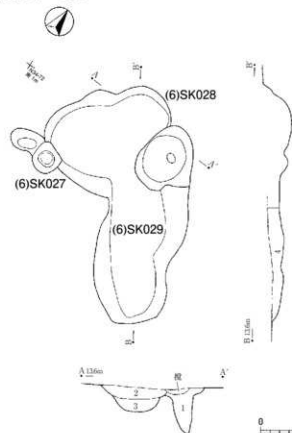
(5)SK220



(5)SK220

- 1 埴褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層
- 2 埴黄褐色粘質土 焼土粒・ロームブロック層

(6)SK027 ~ 029



(6)SK028・029

- 1 (SK029) 埴褐色土 φ1~3mmローム粒混、φ1~3mm焼土粒混、しまり・粘性强
- 2 (SK029) 埴褐色土 φ3~7mmローム粒少量、しまり弱、粘性强
- 3 (SK028) 埴褐色土 しまり・粘性强（水っぽ粘土状）
- 4 (SK028) 黒褐色土 φ5~7mmローム粒少量、下位はロームブロック多量、粘子粗、しまり弱、粘性强や強

第150図 (5)SK217・219・220、(6)SK027～029土坑

出土遺物 1は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK209 (第149・152図、図版13・73)

状況 東西長145cm、南北長130cmの不整形を呈する。断面逆台形で、深さは35cmである。南西部に径30

(5)SK208



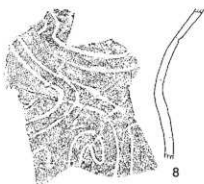
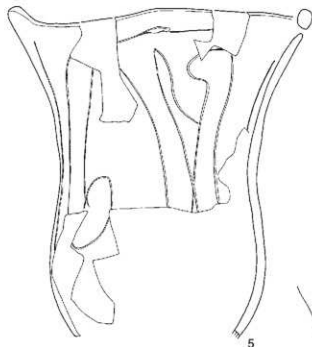
(5)SK209



(5)SK211



(5)SK212



(5)SK214



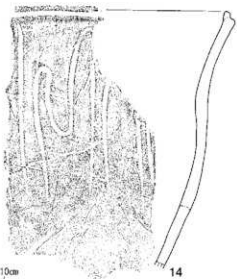
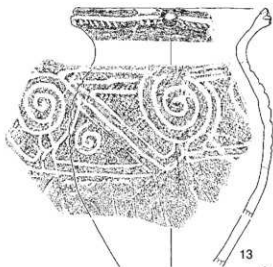
(5)SK215



(5)SK219



(5)SK213



0 1:3 10cm

0 5 6 13 14 10cm

第152圖 (5)SK208・209・211～215・219土坑出土遺物

cm～45cm、深さ22cmの柱穴状ピットが存在する。そのピット周辺に焼土が堆積している。

出土遺物 2は加曾利E式の深鉢口縁部、3は胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、加曾利E式期と思われる。

(5)SK211 (第149・152図、図版13・73)

状況 東西長85cm、南北長90cmの五角形に近い不整形を呈する。断面碗形で、深さは20cmである。

出土遺物 4は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK212 (第149・152図、図版13・71・73)

状況 東西長80cm、南北長90cmの不整形を呈する。断面碗形で、深さは18cmである。

出土遺物 5は称名寺式の器形復元できる深鉢である。器面は極めて摩耗しており文様がほとんど判別できないほどであった。6は後期土器の底部である。7は称名寺式の深鉢口縁部、8は胴部である。

時期 出土遺物から称名寺式期と考えられる。

(5)SK213 (第149・152・153図、図版13・73・97・98)

状況 西側は5次調査の範囲外となるため全容は不明である。南北長205cm、東西長は南壁沿いで150cm検出されており、隅丸方形を呈する。断面逆台形であるが、底面は不安定で凹凸が目立つ。

出土遺物 13は堀之内式の器形復元できる深鉢である。14～16は堀之内式の深鉢口縁部、17は胴部である。18は磨石である。19は軽石で、製品への加工を意図して持ち込まれたものであろう。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(5)SK214 (第149・152図、図版14・93)

状況 径125cmの不整形を呈する。断面は浅い碗形であるが中心より西寄り最も深く、底面も不安定である。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。9は土器片鏝である。素材は後期と思われる土器片である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、後期と思われる。

(5)SK215 (第149・152図、図版14・73)

状況 単一の番号しか付していないが、実際には2基の土坑が重なった状況である。長軸長168cm、短軸長106cmの不整形土坑の内部に、東西長60cm、南北長70cmの不整形土坑が掘り込まれている。外側の土坑は断面碗形で深さ20cm、内側の土坑は断面漏斗状で深さ55cmをそれぞれ測る。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。10は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK216 (第149図、図版14)

状況 長軸長80cm、短軸長65cmの楕円形を呈する。断面碗形で、深さは18cmである。

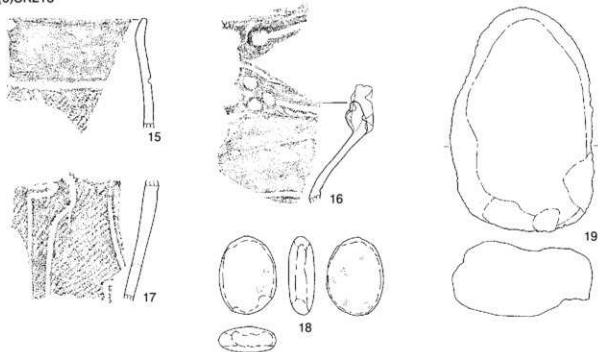
出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

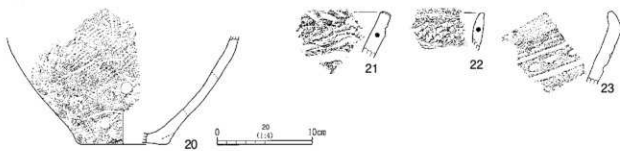
(5)SK217 (第150・153図、図版14・73)

状況 東西長155cm、南北長140cmの不整形を呈する。南東部には更に長軸長100cm、短軸長75cmの不整形の掘込みが存在する。2基の土坑が重なっている可能性がある。断面は不整形で深さは最深で40cmであ

(5)SK213



(5)SK217



(6)SH016



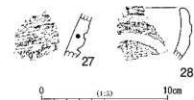
(6)SH023



(6)SH026



(6)SK029



第153図 (5)SK213・217土坑、(6)SH016・023・026・029ピット出土遺物

る。

出土遺物 21・22は黒浜式の深鉢口縁部である。23は称名寺式の深鉢口縁部である。20は堀之内式の器形復元できる深鉢底部である。

時期 遺物の時期が分散しているため判断が難しいが、最も遺存度が良く底面に近い位置から出土している20の堀之内式土器が遺構の時期を示していると考えられる。ただし2基の土坑の重複であるとすれば、もう1基は黒浜式期か称名寺式期になるかもしれない。

(5)SK218 (第149図、図版14)

状況 直径85cmのほぼ正円形を呈する。底面の東壁沿いはさらに一段深く掘り込まれている。断面皿状であるが東側はV字状になる。深さは最深で18cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(5)SK219 (第150・152図、図版14・73)

状況 西側は5次調査の範囲外となるため全容は不明である。調査した範囲内では径105cmの円形を呈している。断面逆台形であるが壁の立ち上がりは緩やかである。深さは50cmである。

出土遺物 11は称名寺式の深鉢口縁部、12は胴部である。

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(5)SK220 (第150図)

状況 東西長90cm、南北長98cmの不整円形を呈する。断面逆台形で、深さは25cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(6)SK027～029 (第150・153図、図版73)

状況 3基の土坑が重なり合った状況である。(6)SK027は西部に位置し、直径30cmの円形ピットと径25cm～35cmの楕円形ピットの2基から構成される。断面漏斗状で深さは43cmである。(6)SK028は長軸長70cm、短軸長55cmの楕円形を呈する。断面逆三角形で深さは73cmである。(6)SK029は北東-南西長150cm、北西-南東長250cmで、アルファベット「P」の字を左右反転したような形状である。断面は南東側が皿状、北西側が碗形で、深さは最深で30cmである。(6)SK029については調査時には全体が単一の遺構として把握されたが、形状を観察する限り2基の土坑と考えるのが妥当であろう。新旧関係は、(6)SK028が古く(6)SK029が新しい。(6)SK027と(6)SK029の関係は不明である。

出土遺物 (6)SK027と(6)SK028からは、図示できる遺物は出土しなかった。029出土遺物では、27は黒浜式の深鉢胴部である。28は加曾利E式の深鉢口縁部である。

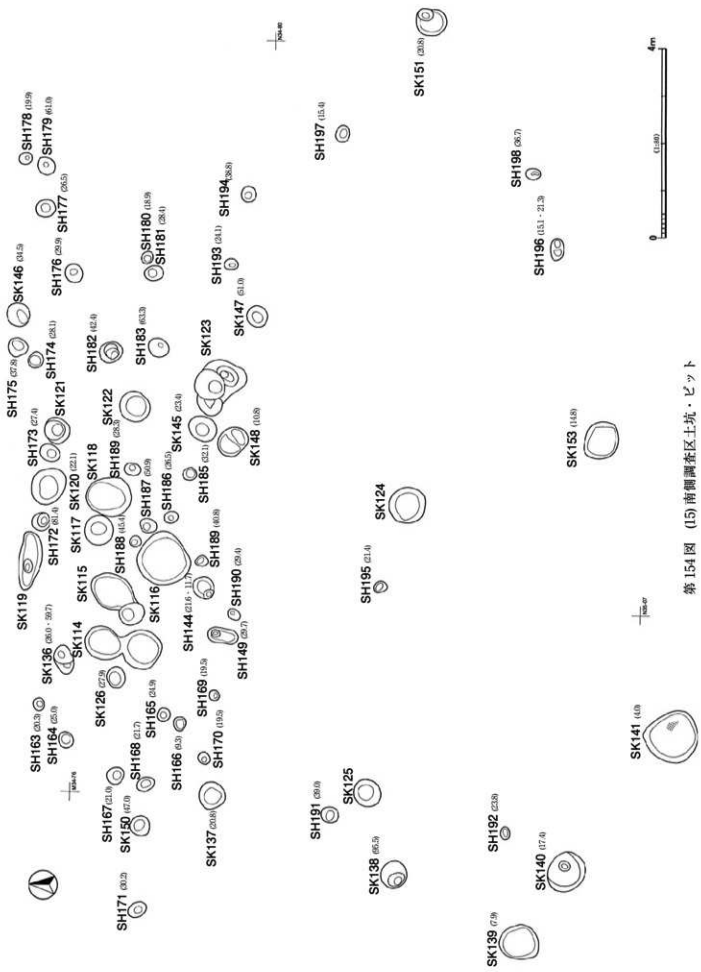
時期 黒浜式と加曾利E式それぞれはほぼ同量の出土であり、遺物から時期を判断するのは難しい。

(6)SK015・018・019・021・023、(6)SH016・017・020・022 (第151・153図、図版14・15・73)

状況 N34-71・81グリッド付近の遺構群である。(6)SK015は直径40cmの正円形で深さは25cmである。(6)SH016は長軸長35cm、短軸長20cmの不整円形で深さは60cmである。(6)SH017は径27cmの不整円形で深さは40cmである。(6)SK018は径44cmの正円に近い不整円形で深さは36cmである。(6)SK019は直径35cmの正円形で深さは16cmである。(6)SH020は長軸長22cm、短軸長16cmの不整円形で深さは24cmである。(6)SK021は開口部の径は35cm～40cmの楕円形であるが、坑底は径13cmと小さく北側が張出す。深さは18cmである。(6)SH022は径18cm～20cmの不整円形で深さは18cmである。(6)SK023は径42cm～44cmの正円に近い不整円形で深さは15cmである。これらの土坑やピットには柱穴状になるものもあり、全体で何らかの構造物であった可能性もあるが、掘立柱建物への復元は今のところ不可能である。

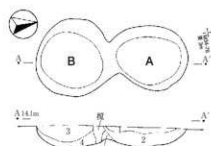
出土遺物 24は(6)SH016出土で堀之内式の深鉢胴部である。25は(6)SK023出土で堀之内式の深鉢胴部である。その他の遺構からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期 遺物の出土があった遺構については、数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。そ



第154図 (15) 南側調査区土坑・ピット

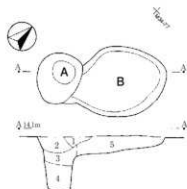
(15)SK114



(15)SK114

- 1 褐色土 しまり強
- 2 明褐色土 ローム粒多量, しまり強
- 3 暗褐色土 $\phi 8$ mmロームブロック少量, しまり強
- 4 明褐色土 ローム粒多量, しまり強
- 5 明褐色土 ローム粒多量, しまり強

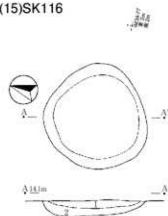
(15)SK115



(15)SK115

- 1 褐色土 粘土粗
- 2 褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 3 暗褐色土 $\phi 8$ mmロームブロック少量, しまりやや弱
- 4 褐色土 $\phi 8$ mmロームブロック少量, しまり弱
- 5 褐色土 ローム粒多量, しまり強

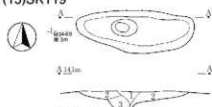
(15)SK116



(15)SK116

- 1 暗褐色土 ローム粒少量, 粘土やや粗
- 2 褐色土 $\phi 10 \sim 20$ mmロームブロック少量, 粘土やや粗

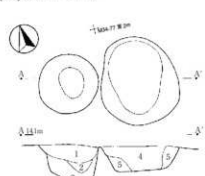
(15)SK119



(15)SK119

- 1 褐色土 粘土粗
- 2 明褐色土 ローム粒多量, しまり強
- 3 褐色土 ローム粒少量, しまり強

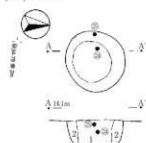
(15)SK117・118



(15)SK117・118

- 1 暗褐色土 しまり強
- 2 褐色土 ローム粒多量, しまり強
- 3 明褐色土 ローム粒多量, $\phi 5$ mmロームブロック少量, しまり強
- 4 暗褐色土 $\phi 5$ mmロームブロック多量, しまり強
- 5 褐色土 ローム粒多量, しまり強

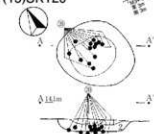
(15)SK122



(15)SK122

- 1 暗褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 2 明褐色土 ローム粒多量, ロームブロック少量, しまり強

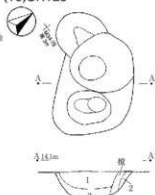
(15)SK120



(15)SK120

- 1 褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 2 明褐色土 ローム粒多量, しまり強

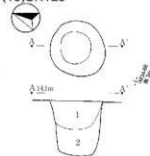
(15)SK123



(15)SK123

- 1 暗褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 2 明褐色土 ローム粒多量, しまり強

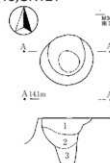
(15)SK125



(15)SK125

- 1 明褐色土 ロームブロック粒多量, 粘土粗 (人為堆積)
- 2 褐色土 ロームブロック粒多量, 粘土粗 (人為堆積)

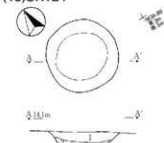
(15)SK121



(15)SK121

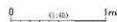
- 1 褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 2 褐色土 色調は1と同じだが粘土より粗, ローム粒少量
- 3 明褐色土 $\phi 8$ mmロームブロック多量, 粘土粗

(15)SK124



(15)SK124

- 1 褐色土 ローム粒少量, しまり強
- 2 明褐色土 ローム粒やや多量, しまりやや弱



第155図 (15)SK114～125土坑

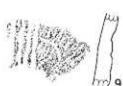
(15)SK114



(15)SK117



(15)SK115



(15)SK116



(15)SK118



(15)SK119



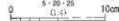
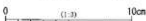
(15)SK120



(15)SK121



(15)SK122



第 156 図 (15)SK114 ~ 122 土坑出土遺物

れ以外の遺構もほぼ同じ時期と推測される。

(6)SK024・025、(6)SH026 (第151・153図、図版15・73)

状況 N34-91グリッド付近の遺構群である。(6)SK024は長軸長64cm、短軸長56cmの不整形形で深さは38cmである。(6)SK025は長軸長50cm、短軸長40cmの不整形形で深さは最深で25cmである。(6)SH026は長軸長42cm、短軸長38cmの不整形形で深さ54cmである。

出土遺物 26は(6)SH026出土で堀之内式の深鉢口縁部である。その他の遺構からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期 遺物の出土があった遺構については、数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。それ以外の遺構もほぼ同じ時期と推測される。

(15)調査区土坑・ピット (第154・155・157・158図、図版74・75)

状況 15次調査区の遺構群を第154図に掲載した。そのうち詳細図が作成されたものについては、第155図に拡大して再掲載している。これらの遺構については概ね径40cmを目安として、それより大きいものをSK、小さいものをSHとして遺構番号を付している。遺構の性格を反映したものではないことをお断りしておく。北側において特に密集している状況であるが、配列などに規則性は見せず、掘立柱建物などの存在を想定するのは困難である。

出土遺物 遺物のうち詳細図があるものについてはそれぞれの項で述べることとし、ここでは第154図にしか掲載されなかった遺構から出土した遺物について説明する。36・37は(15)SK126出土の同一個体で、堀之内式の深鉢口縁部である。38は(15)SK136出土で、堀之内式の深鉢胴部である。39・40は(15)SK137出土で、39は称名寺式の深鉢口縁部、40は堀之内式の深鉢胴部である。41は(15)SK144出土で堀之内式の深鉢胴部である。42は(15)SK145出土で堀之内式の注口土器口縁部である。46は(15)SK146出土で後期と思われる器形復元ができる深鉢口縁部である。43は(15)SK147出土で称名寺式の深鉢胴部である。44は(15)SK148出土で黒浜式の深鉢胴部である。45は(15)SK150出土で後期と考えられる深鉢底部である。47・48は(15)SH161出土で、47は堀之内式の深鉢口縁部、48は胴部である。49は(15)SH165出土で堀之内式の深鉢口縁部である。50は(15)SH168出土で堀之内式か加曾利B式の深鉢口縁部である。51は(15)SH174出土で堀之内式の深鉢胴部である。52・53は(15)SH175出土で堀之内式の深鉢胴部である。54～56は(15)SH176出土で54は堀之内式の深鉢口縁部、55は胴部、56は底部である。57は(15)SH181出土で称名寺式の深鉢胴部である。58は(15)SH183出土で後期と思われる深鉢胴部である。59は(15)SH186出土で堀之内式の深鉢口縁部(ただし口唇は欠損)である。60は(15)SH198出土で後期と思われる深鉢胴部である。

時期 遺物の出土がなかった遺構も存在するので一概には言えないが、多くの遺構が堀之内式を中心とする後期であると考えられる。

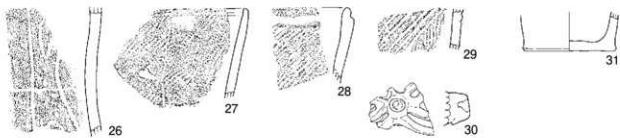
(15)SK114 (第155・156図、図版15・74)

状況 2基の土坑が重なった状況である。北側をA、南側をBとすると、Aは長軸長約85cm、短軸長68cmの不整形形を呈する。断面は浅い椀形で深さは20cmである。Bは直径82cmの正円に近い不整形形である。断面は浅い椀形で深さは25cmである。土層断面からBが古くAが新しいと判断される。

出土遺物 2点図示したが、AとBのどちらに帰属するかは明らかでない。1は堀之内式の深鉢胴部である。2は縄文施文の深鉢胴部で、おそらく後期であろう。

時期 数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。

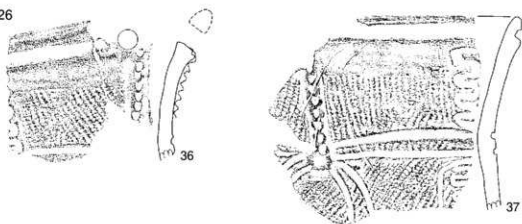
(15)SK123



(15)SK125



(15)SK126



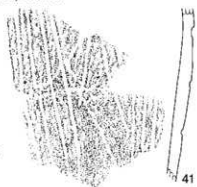
(15)SK136



(15)SK137



(15)SK144



(15)SK145



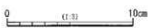
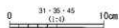
(15)SK147



(15)SK148



(15)SK150



第157圖 (15)SK123・125・126・136・137・144・145・147・148・150土坑出土遺物

(15)SK115 (第155・156図、図版15・74)

状況 これも2基の土坑が重なった状況である。南西側をA、北東側をBとすると、Aは径45cm～55cmの不整形円形を呈し、断面方形で深さは55cmである。Bは長軸長約115cm、短軸長75cmの不整形円形を呈し、断面皿状で深さは18cmである。Bが古くAが新しい。

出土遺物 5点図示したが、AとBのどちらに帰属するかは明らかでない。6～8は堀之内式の深鉢口縁部、9・10は胴部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK116 (第155・156図、図版16・74)

状況 径110cmの不整形円形を呈する。断面皿状で深さは17cmである。

出土遺物 11は黒浜式の深鉢口縁部である。12～14は堀之内式の深鉢胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK117 (第155・156図、図版16・74)

状況 開口部は直径62cmのほぼ正円形を呈する。断面は不整形形で特に西側の壁は不安定である。覆土の1層と2・3層は別遺構かもしれない。深さは44cmである。

出土遺物 3・4は堀之内式の深鉢胴部、5は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK118 (第155・156図、図版16・74)

状況 (15)SK117に隣接する。長軸長92cm、短軸長84cmの不整形円形を呈する。断面逆台形だが床面は西方向に下り傾斜する。深さは最深で26cmである。

出土遺物 15は称名寺式の深鉢胴部である。16は堀之内式の深鉢口縁部、17は深鉢胴部、18は注口土器胴部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK119 (第155・156図、図版16・74)

状況 長軸長126cm、短軸長45cmの長楕円形を呈する。断面皿状であるが中央部にピット状の掘込みが存在する。深さは最深で20cmである。

出土遺物 19は後期と思われる深鉢口縁部である。

時期 縄文施文のみの深鉢口縁部しか出土していないので判断が難しいが、後期であろう。

(15)SK120 (第155・156図、図版16・74)

状況 長軸長83cm、短軸長68cmの不整形円形を呈する。断面皿状で深さは12cmと浅い。

出土遺物 20は器形復元できる深鉢である。縄文施文のみのため型式の判断は難しいが、後期であろう。21は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK121 (第155・156図、図版74)

状況 開口部は径52cm～58cmの楕円形を呈する。壁の途中に段状の屈曲があり、それより上は断面碗形、下は逆台形を呈する。覆土の1・2層と3層は別遺構の可能性がある。深さは50cmである。

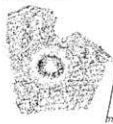
出土遺物 22は堀之内式の深鉢胴部である。23は縄文施文のみの深鉢胴部で、おそらく後期であろう。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK146



(15)SH161



(15)SH165



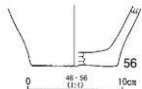
(15)SH168



(15)SH174



(15)SH176



(15)SH175



(15)SH181



(15)SH183



(15)SH186



(15)SH198



第 158 図 (15)SK146 土坑、SH161・165・168・174～176・181・183・186・198 ビット土坑出土遺物

(15)SK122 (第155・156図、図版74)

状況 径64cmのほぼ正円形を呈する。断面逆台形で深さは30cmである。

出土遺物 24は堀之内式の深鉢胴部、25は底部である。

時期 出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK123 (第155・157図、図版16・75)

状況 長軸長130cm、短軸長80cmの不整形を呈する。掘上りは土坑3基が連なったような状況である。

断面は楕形を呈する。深さは南東部が最も深く46cmである。

出土遺物 26は称名寺式の深鉢胴部である。27・28は堀之内式の深鉢口縁部、29・30は胴部である。30は円形の突起が剥落したものである。31の後期土器の底部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK124 (第155図)

状況 直径78cmのほぼ正円形を呈するが、坑底はやや不整形である。断面皿状で深さは16cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(15)SK125 (第155・157図、図版75)

状況 径60cmの正円に近い不整形である。断面逆台形で、深さは56cmである。

出土遺物 32は黒浜式の深鉢胴部である。33は堀之内式の深鉢口縁部、34は胴部、35は底部である。

時期 主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

2 南側調査区の遺構群

南側調査区の遺構は北側とは異なり、かなり散漫な検出状況である。全体としては南東側が開口した半円形の配置であるが、遺構密度は低い。ただし台地自体に浸食や後世の改変などが認められるため、当初の状態とは異なっている可能性はある。中心となる時期は前期中葉の黒浜式期である。なお、土坑については形状など不自然なものがあり、人為的な遺構ではない可能性もあるが、ここでは調査時の見解に従っている。

(21)SIO01 (第159～161図、図版16・17・76・96・98)

形状と規模 長軸は東壁5.2m、西壁が約5.6m、短軸は北壁が4.0m、南壁が約4.8mの台形に近い隅丸方形を呈する。軸方向はN-10°-Wである。全体に攪乱が多く遺存状況は悪い。

内部の状況 断面は逆台形を呈するが、遺構確認は北方向及び東方向に向かって下り傾斜しており、北及び東壁はかろうじて立ち上がりが見出できる状況である。深さは最深で20cmを測る。覆土中には貝層が堆積しており、特に東部にやや規模の大きな堆積が見られる。30cm四方のコラムサンプルを2箇所採取した。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 北東隅近くから1基検出された。長軸長63cm、短軸長55cmの不整形を呈する。断面皿状であるが南が浅く北方向へ下り傾斜する。深さは最深で13cmである。覆土に焼土が含まれるものの量は少なく、使用頻度は低かったと思われる。

ピット 9基検出されている。東西それぞれの壁に沿って並ぶような配置である。いずれも深くて規模も大きく柱穴であろう。

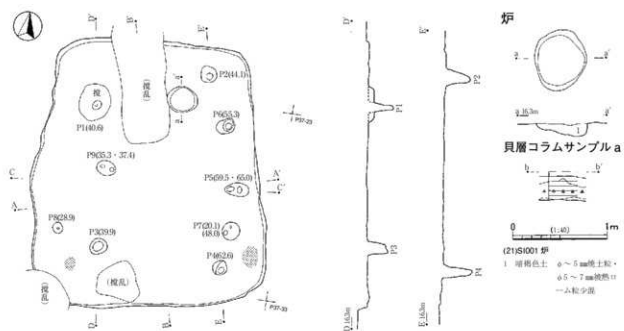
出土遺物 1～5は黒浜式の器形復元できる深鉢である。1は地文が燃糸文で、沈線で菱形の意匠を巡らせる。焼成は良好である。6～35は黒浜式の深鉢口縁部、36～46は胴部である。47は植房式とみられる。48は磨製石斧である。49・50は軽石製品である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(21)SIO03 (第162～164図、図版17・77・78・96)

形状と規模 長軸は東壁が5.3m、西壁が5.6m、短軸は北壁が4.0m、南壁が4.4mの台形に近い隅丸方形を呈する。軸方向はN-30°-Wである。

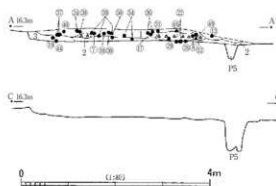
内部の状況 断面は逆台形を呈するが、遺構確認は北方向及び西方向に向かって下り傾斜しており、北及び西壁はかろうじて立ち上がりが見出できる状況である。深さは最深で36cmを測る。覆土内には貝層が堆積しており、住居全体に広がるが、中央部にはやや大きな攪乱が見られる。30cm四方のコラムサンプル



遺物出土状況



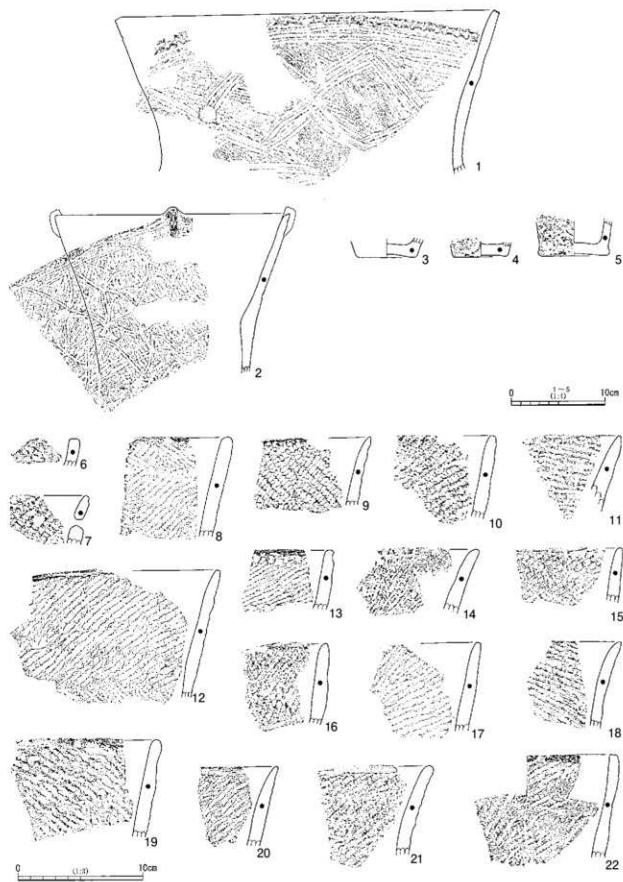
貝層検出状況



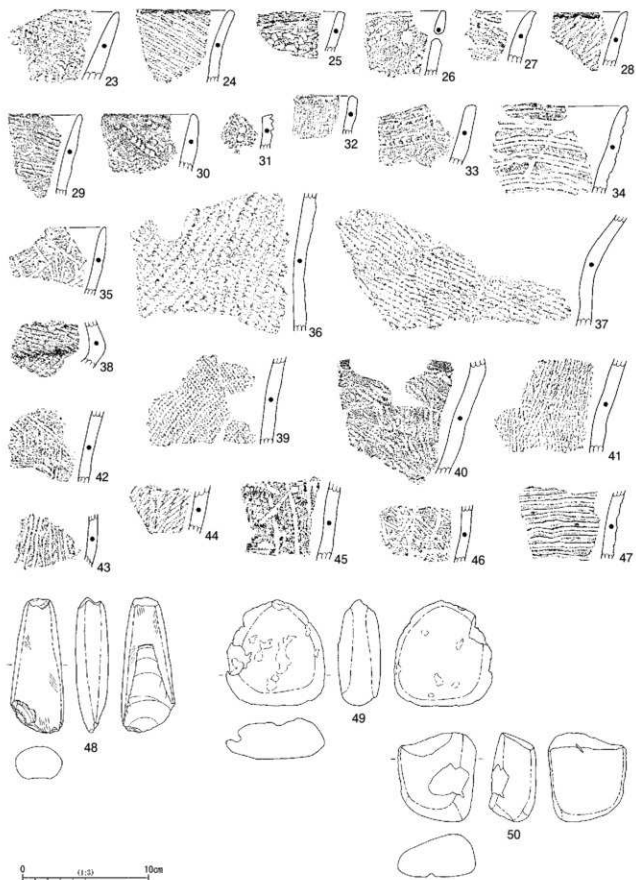
(21)SI001

- 1 母褐色土 ローム粒少量、しまりやや弱
- 2 母褐色土 ローム粒・褐色土ブロック少量、しまりやや弱(1が1より強い)
- 3 母褐色土 ローム粒少量、ロームブロック散見、しまりやや強

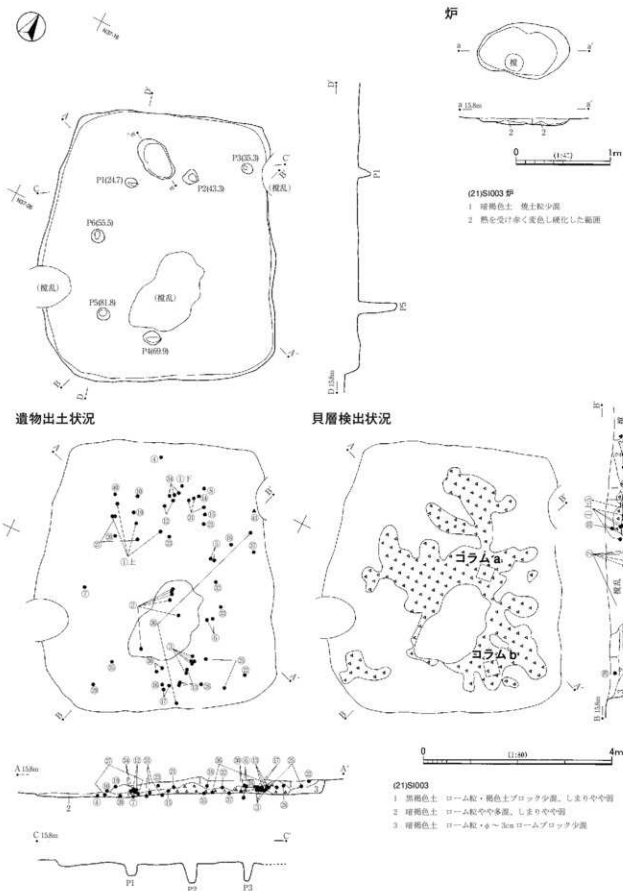
第159図 (21)SI001 住居跡



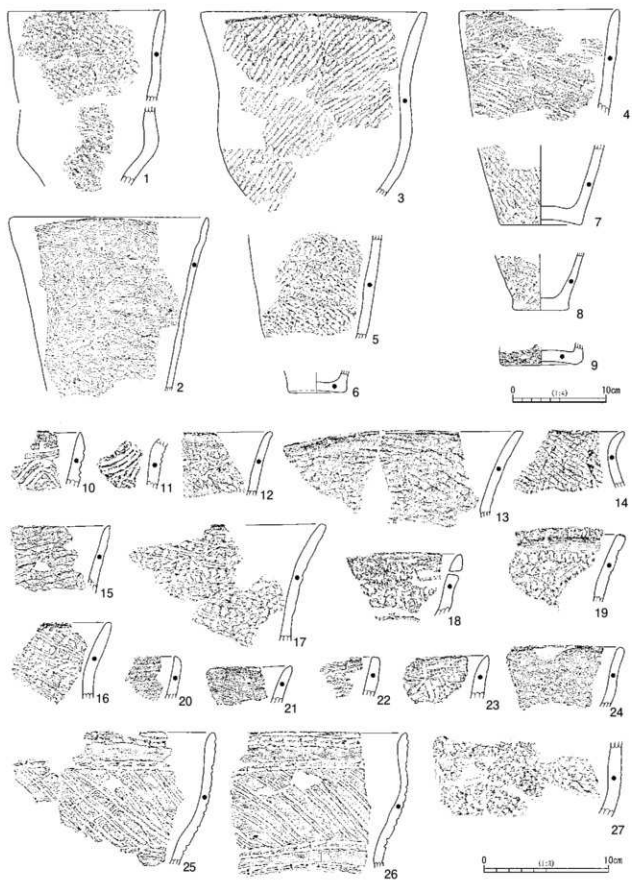
第160图 (2)SI001住居跡出土遺物(1)



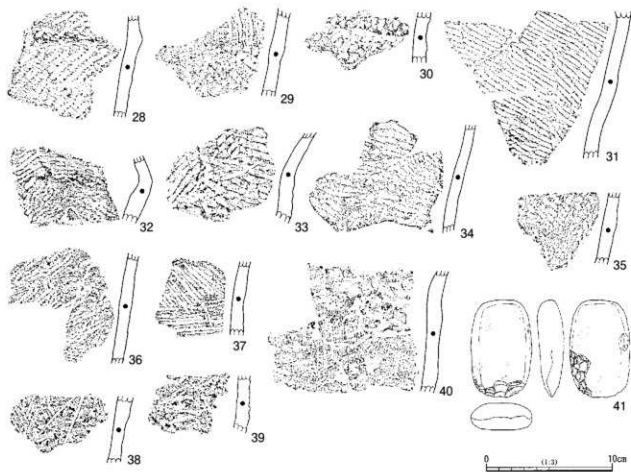
第161图 (2)SI001住居跡出土遺物(2)



第162図 (2)1S1003 住居跡



第163图 (2)SI003住居跡出土遺物(1)



第164図 (2)SI003住居跡出土遺物(2)

を2箇所で採取した。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉 北壁付近で1基検出された。長軸長98cm、短軸長58cmの不整形形を呈する。断面皿状で、深さは6cmと浅い。床面は熱を強く受けて硬化が著しく、使用頻度は高かったと考えられる。

ピット 全部で6基検出されている。半円形を描くように配置されるが、東側は検出されなかった。いずれも深くてしっかり掘り込まれており、柱穴であろう。

出土遺物 10は岡山式の深鉢口縁部、11は胴部である。1～9は黒浜式の器形復元できる深鉢である。12～26は黒浜式の深鉢口縁部、27～40は胴部である。41は片刃の礎釜である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI156 (第165図、図版17・78)

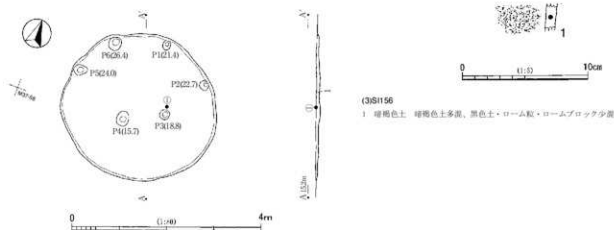
形状と規模 東西長3.3m、南北長3.1mの楕円形を呈する。

内部の状況 断面皿状で、壁の立ち上がりは緩やかである。深さは8cmとごく浅い。床面は平坦で硬化面は検出されなかった。

炉 検出されていない。

ピット 全部で6基検出されている。住居のプランより一回り小さく円弧を描くように配される。全体に浅く柱穴かどうかは疑問が残る。

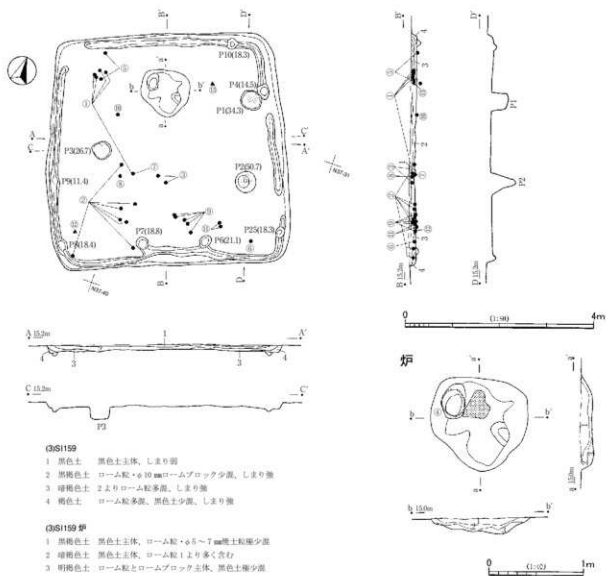
出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。1は黒浜式の深鉢胴部である。



(3)SI156

1 暗褐色土・暗褐色土多量、黒色土・ローム殻・ロームブロック少量

第165図 (3)SI156住居跡、出土遺物



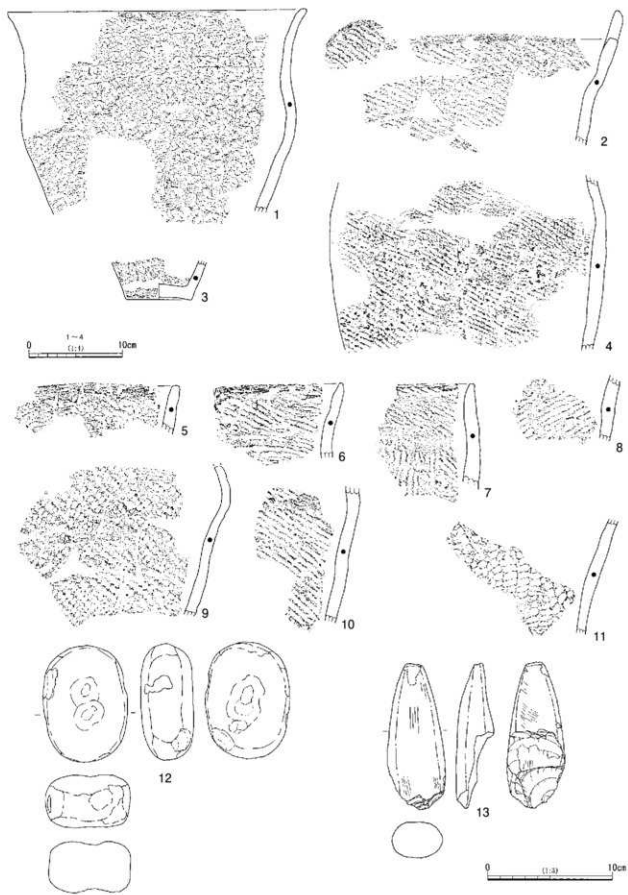
(3)SI159

- 1 黒色土 黒色土主体、しまり強
- 2 暗褐色土 ローム殻・φ10mmロームブロック少量、しまり強
- 3 暗褐色土 2よりローム殻多量、しまり強
- 4 褐色土 ローム殻多量、黒色土少量、しまり強

(3)SI159 炉

- 1 黒褐色土 黒色土主体、ローム殻・φ5~7mm焼土粒少量
- 2 暗褐色土 黒色土主体、ローム殻1より多く含む
- 3 明褐色土 ローム殻とロームブロック主体、黒色土粒少量

第166図 (3)SI159住居跡



第 167 图 (3)SI159 住居跡出土遺物

時期 遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式と考えられる。

(3)SI159 (第166・167図、図版17・78・79・96・97)

形状と規模 東西長5.1m、南北長5.0mの正方形に近い隅丸方形を呈する。南壁沿いにピットが2基存在し出入口施設と考えられ、北壁寄りに炉が存在することから、出入口の中心と炉の中心を結ぶ線を主軸と考えると、主軸方位はN-20°-Eである。

内部の状況 断面逆台形で、壁の立ち上がりは直立に近い。深さは最深でも16cmと浅い。壁に沿って周溝が掘られており、北西隅と東壁の一部を除いて全体に巡る。南側は住居のやや内側に入り込み、壁との間には20cmほどの隙間が生じている。床面はほぼ平坦であるが、中心が高く壁に向かってわずかに下り傾斜している。硬化面は検出されなかった。

炉 中央やや北寄りで1基検出された。東西長104cm、南北長98cmの不整形を呈する。断面皿状であるが床面は安定しない。深さは最深で18cmである。北西部に土器が埋設されている。覆土中には焼土が含まれるものの少量であり、床面にも熱を受けた痕跡はあまり認められず、使用頻度は低かったと思われる。

ピット 全部で10基検出されている。そのうちP1～3は径35cm～40cmと比較的大きく、支柱穴と思われる。P4～10は周溝内もしくは壁際に掘られているもので、壁柱穴と思われる。特にP6・7は炉と反対側の壁に沿って約1mの間隔を開けて配されており、出入り口である可能性が高い。

出土遺物 1・3・4は黒浜式の器形復元できる深鉢である。4は炉の中に埋設されていた。2・5～7は黒浜式の深鉢口縁部、8～11は胴部である。12は敲石である。13は磨製石斧である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI160 (第168・169図、図版17・18・79・80)

形状と規模 長軸長5.3m、短軸長4.9mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-30°-Eである。

他遺構との重複関係 西隅に(3)SK189が、南東壁際に(3)SK190が存在する。いずれも住居より新しい。

内部の状況 断面皿状で深さは最深でも10cmと浅い。中央やや西寄りに小規模な貝ブロックが存在する。床面はほぼ平坦で硬化面が検出されているが、この硬化面は住居の形状とは異なり、南北方向を軸とするような方形を呈している。覆土の観察では複数の堅穴住居が重なっている状況はうかがえないが、ピットは硬化面の境界に沿って掘られており、当初硬化面に即した形状の堅穴住居が構築され、後に拡張されて現在確認できる形状になったと推測される。

炉 住居中央やや北西へ寄った位置に存在する。長軸長65cm、短軸長60cmの不整形を呈する。断面皿状であるが、北側はピット状に掘り窪められ、土器の胴部が埋設されている。深さは最深で20cmである。覆土に含まれる焼土粒は少量であり、床面に熱を受けた痕跡も少なく、使用頻度は低かったと思われる。

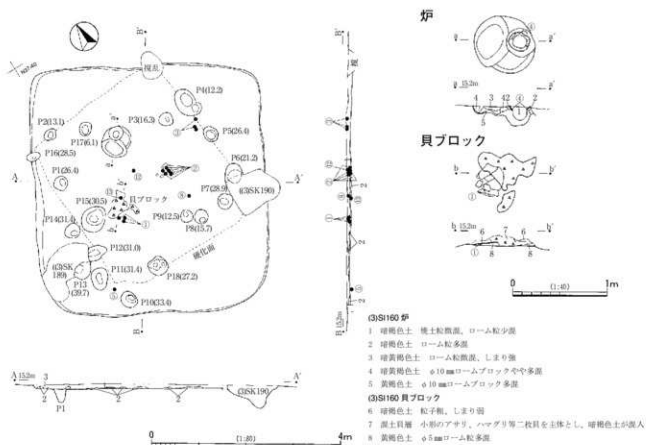
ピット 全部で17基検出されている。壁ではなく内部の硬化面に沿ったような配置となっている。P5・15・18などが支柱穴であろう。

出土遺物 1～4は黒浜式の器形復元できる深鉢である。4は炉に埋設されていた。5～11は黒浜式の深鉢口縁部、12は胴部、13は底部である。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

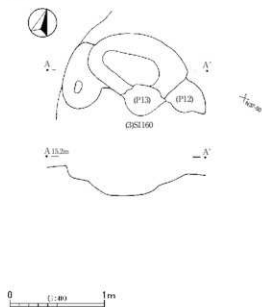
(3)SK189 (第168図、図版17)

状況 長軸長105cm、短軸長65cmの不整形円形土坑と、長軸長70cm、短軸長40cmの不整形円形土坑が2基重

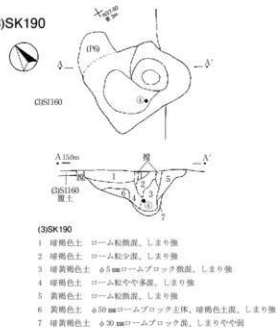


- (3)SI160**
- 1 埴輪色土 ローム粒多量、φ10mmロームブロックやや多量、プラン中心部ほど黒色土多量、しまりやや弱
 - 2 黄褐色土 φ10mmロームブロック多量、しまりやや弱
 - 3 黄褐色土 ローム粒散見、他の遺人物骨少、粒子粗、しまりやや弱

(3)SK189

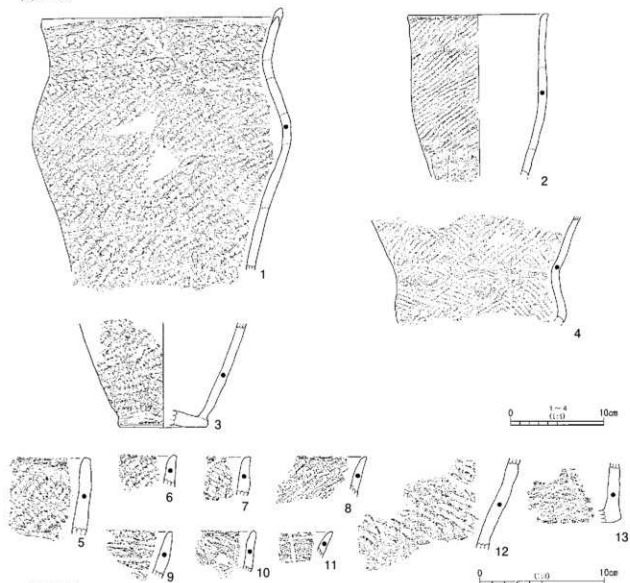


(3)SK190

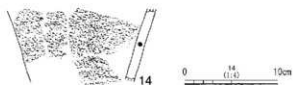


第168図 (3)SI160住居跡、(3)SK189・190土坑

(3)SI160



(3)SK190



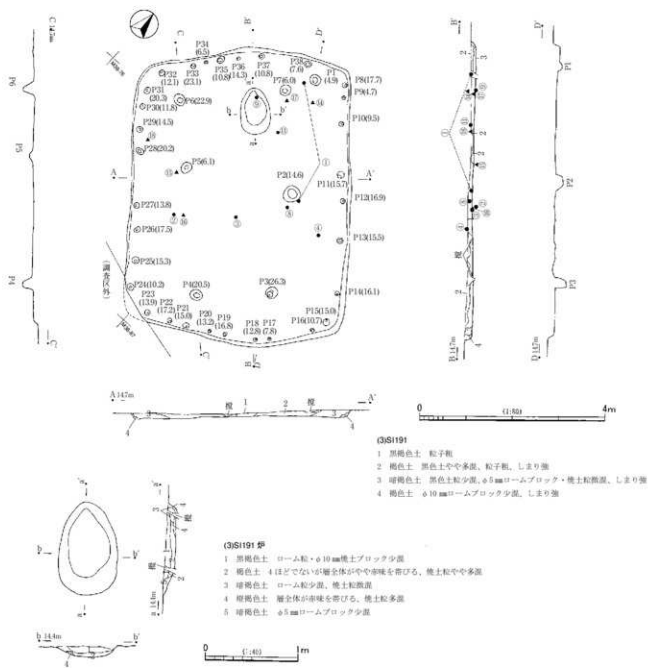
第169図 (3)SI160 住居跡、(3)SK190 土坑出土遺物

なったような状況である。断面碗形で深さは遺構確認面から30cmを測る。記録はないが住居より新しいとの現場所見がある。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 遺物から時期の判断はできないが、(3)SI160の時期から大きく下ることはないと思われる。

(3)SK190 (第168・169図、図版17・79)



第170図 (3)SI191住居跡

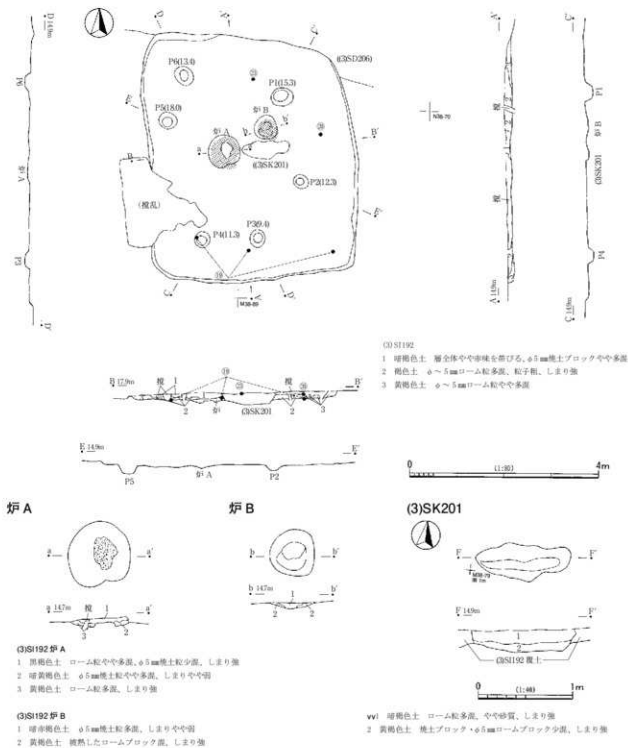
状況 東西長100cm、南北長75cmの不整形を呈する。断面碗形で、東側は柱穴状に深く掘り込まれている。深さは最深で47cmである。住居より新しい。

出土遺物 14は黒浜式の器形復元できる深鉢である。

時期 出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI191 (第170・172図、図版18・80・98)

形状と規模 長軸長6.4m、短軸長4.8mの隅丸六角形を呈する。北西壁と南東壁は直線ではなく中央がやや外側に膨らんでいる。主軸方位はN-40°-Wである。

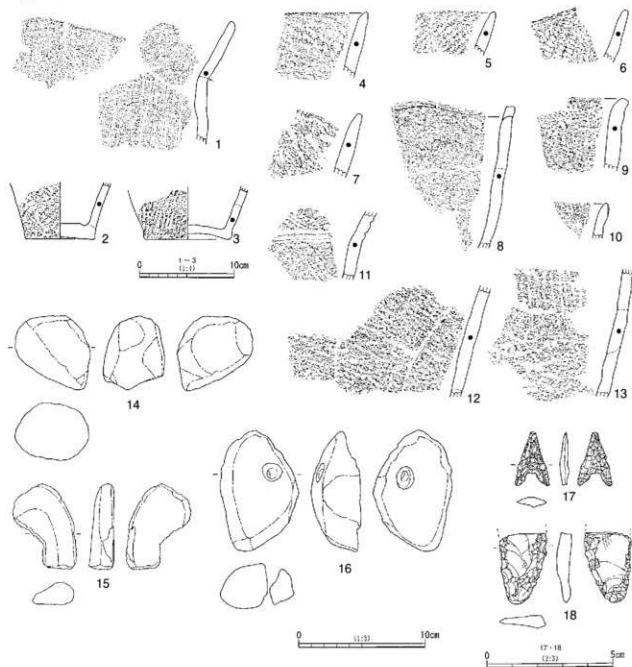


第171図 (3)SI192住居跡、(3)SK201土坑

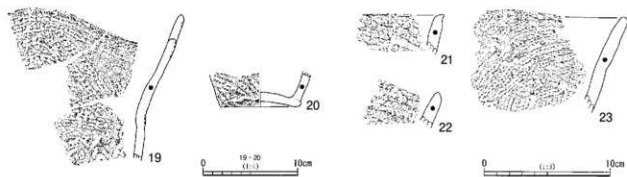
内部の状況 断面は逆台形を呈し、深さは16cmと浅い。床面は概ね平坦であるが中央部がやや高く壁に向かってわずかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉 北西壁寄りに位置する。長軸長100cm、短軸長64cmの不整形円形を呈する。断面皿状で、深さは11cmである。覆土には焼土が多量に含まれ、使用頻度は高かったと考えられる。

(3)SI191



(3)SI192



第172図 (3)SI191・192住居跡出土遺物

ピット 住居内に7基のピットが掘られるほか、壁に沿って31基の小ピットが規則正しく配される。やや浅いが内部のピットが支柱穴で、壁柱穴をもつ構造であろう。

出土遺物 2・3は黒浜式の器形復元できる深鉢底部である。1・4～9は黒浜式の深鉢口縁部、11～13は胴部である。10は浮島式の深鉢口縁部である。14・15は敲石である。16は穿孔のある軽石製品である。17はチャート製の石鏃である。18は縦長の石匙と考えられるが、つまみ部分を含む上部を欠損している。

時期 主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI192 (第171・172図、図版18・80)

形状と規模 北側を中・近世の(3)SD206溝に切られているほか、西壁に大きな攪乱が存在するため、一部推定復元している。長軸長約5.4m、短軸長4.5mの隅丸方形を呈すると思われる。主軸方位はN-10°-Wである。

他遺構との重複関係 中央部に(3)SK201土坑が存在する。土坑の方が新しい。

内部の状況 断面逆台形で深さは15cmである。床面は西へ向かって緩やかに下り傾斜する。また、微妙な凹凸がありやや不安定である。硬化面は検出されなかった。

炉 住居中央よりやや北側と西側に計2基が存在する。西側の炉Aは径65cmの不整形円形を呈する。中心に径25cm～35cmの火床面が存在し、周囲を深さ5cmのごく浅い掘込みが囲む。焼土がやや多く堆積しており、使用頻度は高かったと推測される。北側の炉Bは径50cmの不整形円形を呈する。断面皿状で深さは6cmとごく浅い。焼土が多量に堆積しており、使用頻度は高かったと推測される。

ピット 全部で6基検出されている。配置は不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物 20は黒浜式の器形復元できる深鉢底部である。19・21～23は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期 出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK201 (第171図、図版18)

状況 (3)SI192のはは中心に存在する。長軸長102cm、短軸長38cmの不整形を呈する。断面は一応逆台形であるが、底面は不安定である。深さは22cmを測り、住居より深い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 遺物の出土はなく確定できないが、時期は(3)SI192住居より大きく下ることはない判断される。

(3)SI195 (第173・174図、図版18・81・96)

形状と規模 当遺構は2基の方形プランが重なり合ったような状況を呈している。一つは北壁と西壁がそれぞれ4.4m、東壁と南壁がそれぞれ4.0mの不整形方形を呈するもので、主軸方位はN-5°-Eである（こちらをAと称する）。もう一つは長辺4.8m、短辺4.4mの長方形を呈するもので、主軸方位はN-30°-Wである（こちらをBと称する）。ただし東隅は検出されなかった。両者の新旧関係は不明である。

他遺構との重複関係 (3)SK199土坑が南西隅に存在する。土坑が新しい。

内部の状況 Aは断面逆台形ではあるが、壁の立ち上りの状況は一定でなく、西壁はかなり乱れている。深さは最深で35cmである。北東隅に壇状の高まりがある。床面は平坦で、住居外形とほぼ同じ形状の2.8m四方の硬化面が検出されている。Bは断面皿状でごく浅く、特に北側は壁の傾斜がかなり緩やかである。

炉 住居中央よりやや西寄りで検出されている。径42cmの円形を呈し、断面逆台形で深さは12cmである。南側に径25cm～30cmのピットが存在し、炉より古い。また、東側には土器が埋設されている。

ピット 全部で18基検出されている。すべてAの内部である。ただし位置は不規則で、Aのプランとも内

(3)SI195



第174図 (3)SI195住居跡、(3)SK199土坑出土遺物

時期 出土遺物から黒浜式期に位置付けられる。ただし遺物出土位置はほとんどAの範囲に限られる。

(3)SK199 (第173・174図、図版18・81)

状況 長軸長120cm、短軸長100cmの不整形形を呈する。断面碗形で、北西部の住居と接している部分にさらに深いピット状の掘込みが存在する。覆土にはこの掘込みを中心に焼土粒、炭化物粒が混入する。深さは最深で39cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。18は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期 数は少ないが出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK151 (第175図)

状況 長軸長120cm、短軸長60cmの不整形形で、数字の「8」の字に類似する。2基の土坑が重なっている可能性もある。断面は楕円形で深さは39cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK152 (第175図、図版18)

状況 東西長145cm、南北長150cmの不整形形を呈する。全体は浅い皿状であるが、西部と南東部が更に碗形に窪んでいる。深さは23cmを測る。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK153 (第175図、図版18)

状況 長軸長283cm、短軸長35cmのかなり極端な長楕円形を呈する。断面皿状で深さは8cmとごく浅い。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK154 (第175・179図、図版18・82)

状況 長軸長116cm、短軸長100cmの不整形形を呈する。断面碗形で深さは33cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。1は諸磯式の深鉢胴部である。

時期 数は少ないが出土遺物は諸磯式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK155 (第175図、図版18)

状況 東西長114cm、南北長148cmの不整形形を呈する。北西と北東の隅にピット状の掘込みが認められる。断面碗形で深さは35cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

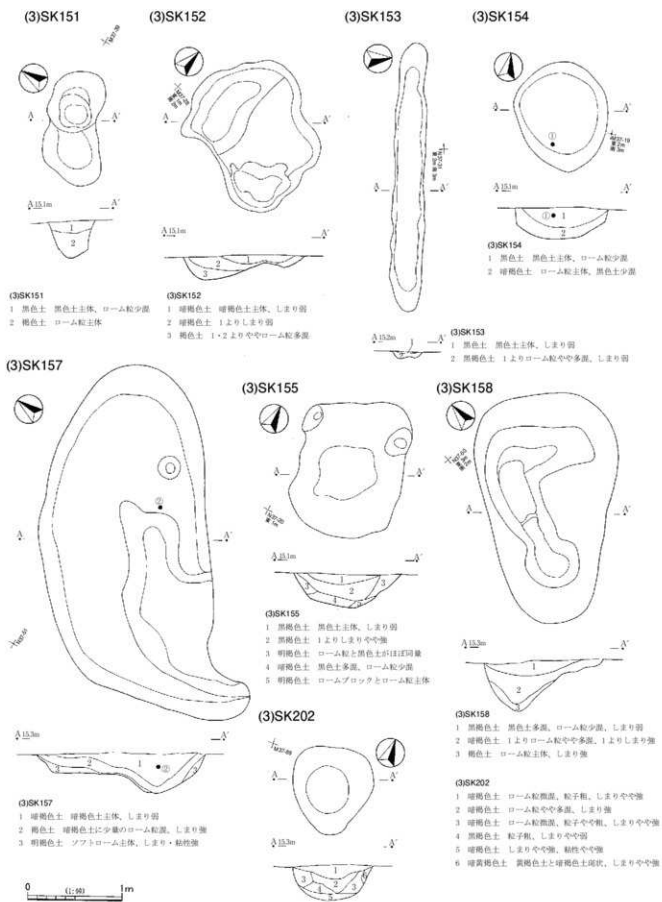
(3)SK157 (第175・179図、図版19・82)

状況 長軸長370cm、短軸長180cmの不整形形を呈する。全体としては楕円形であるが、南西部に張出しが存在する。断面皿状であるが、南西部は張出しに続くように一段低く掘り窪められている。深さは最深で40cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。2は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK158 (第175・179図、図版19・82)



第 175 図 (3)SK151 ~ 155・157・158・202 土坑

状況 長軸長242cm、短軸長153cmの不整形を呈する。内部は更に逆L字状に掘り窪められる。断面碗形で深さは50cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。3は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK188 (第177・179図、図版19・82)

状況 長軸長210cm、短軸長133cmの不整形を呈する。断面碗形で深さは55cmである。

出土遺物 5は黒浜式の深鉢口縁部、6は胴部である。7と8は同一個体で、浮島式の深鉢である。

時期 判断に迷うところであるが、下位の土層から出土しているのは黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK194 (第177・179図、図版19・82)

状況 複数の遺構が重なり合っているような形状を呈する。長軸長157cm、短軸長130cm、深さ20cmの皿状土坑を中心として、北東側に径70cm～90cm、深さ62cmの断面フラスコ状土坑、西側に径55cm、深さ15cmの皿状土坑、南西側に径30cm～35cm、深さ30cmの柱穴状土坑が観察される。これらが同一の遺構なのか、別々の遺構が重なり合っているのかは判断できない。

出土遺物 9は黒浜式の深鉢胴部である。10は無文の小形深鉢口縁部である。

時期 はっきり時期が分かる遺物は黒浜式であり、該期の可能性が強いと思われる。

(3)SK196 (第176・179図、図版19・82)

状況 長軸長132cm、短軸長115cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは22cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。4は浮島式の深鉢口縁部である。

時期 数は少ないが出土遺物は浮島式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK197 (第176・179図、図版19・82)

状況 長軸長120cm、短軸長105cmの楕円形を呈する。断面碗形で深さは24cmである。

出土遺物 11は黒浜式の深鉢胴部、12は底部である。13は浮島式の深鉢口縁部である。

時期 黒浜式と浮島式が出土しているが、どちらの時期か判断するのは難しい。

(3)SK198 (第176・179図、図版19・82)

状況 長軸長188cm、短軸長165cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは60cmである。

出土遺物 14は黒浜式の深鉢口縁部、15は底部である。16・17は諸磯式の深鉢口縁部、18は胴部である。

時期 黒浜式と諸磯式が出土しており、主体となるのは諸磯式と思われるが、確定するには決め手に欠ける。

(3)SK200 (第176図、図版19)

状況 長軸長144cm、短軸長126cmの楕円形を呈する。断面碗形であるが、壁は不安定で階段状を呈する。深さは38cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

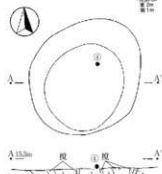
時期 細別時期は不明である。

(3)SK202 (第175図、図版20)

状況 東西長86cm、南北長90cmの隅丸三角形を呈する。断面碗形で深さは37cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

(3)SK196

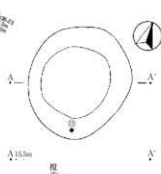


(3)SK196

1 埴輪色土 焼土粒・φ50mmロームブロック散見、
しまりやや弱

2 褐色土 黒色土粒・ローム粒散見、しまり強

(3)SK197

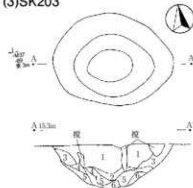


(3)SK197

1 埴輪色土 ローム粒・焼土粒散見、しまりやや弱

2 褐色土 φ5mmローム粒少量、しまり強

(3)SK203



(3)SK203

1 埴輪色土 炭化物粒少量、ローム粒・焼土粒散見、
しまりやや弱

2 黒褐色土 φ5mmロームブロック少量、褐色土少量
(炭粒)、しまりやや弱

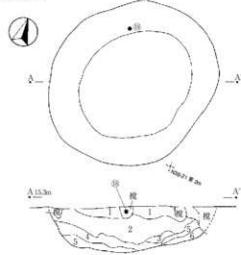
3 埴輪褐色土 ローム粒散見、粒子やや弱、しまり強

4 黒褐色土 2より炭粒を省ける、褐色土粒やや多量、
しまりやや弱

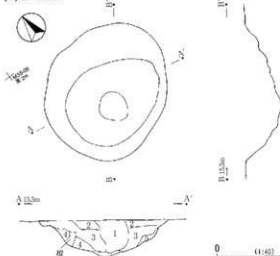
5 褐色土 φ5mmローム粒やや多量(炭粒)、しまり強

6 黄褐色土 φ10mmロームブロックやや多量、しまり
やや弱

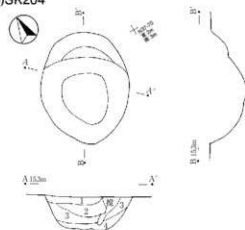
(3)SK198



(3)SK200



(3)SK204



(3)SK198

1 埴輪色土 色調最も薄い、しまりやや弱

2 褐色土 ローム粒やや多量、しまりやや弱

3 埴輪褐色土 埴輪色土・黒色土粒等散見、しまりやや弱

4 埴輪色土 黄褐色土少量(炭粒)、しまりやや弱

5 黄褐色土 埴輪色土、φ5mmロームブロック少量、しまり強

6 黄褐色土 φ10mmロームブロック少量、しまり強

(3)SK200

1 埴輪色土 ローム粒少量、粒子粗、しまりやや弱

2 埴輪色土 ローム粒多量、黒色土粒少量、粒子粗、しまり強

3 埴輪色土 φ5mmロームブロック多量、粒子粗、しまり強

4 埴輪色土 ローム粒散見、粒子粗、しまり強

5 黄褐色土 φ5mmロームブロック多量、しまり強

(3)SK204

1 褐色土 黒褐色土、粒子粗、しまりやや弱

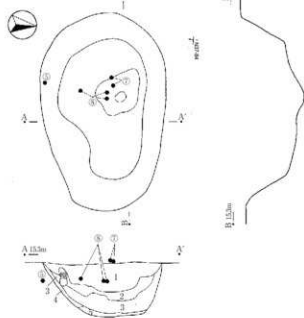
2 埴輪色土 炭化物粒少量、φ5mmローム粒散見、しまりやや弱

3 埴輪色土 φ10mmロームブロック散見、しまりやや弱

4 埴輪褐色土 φ5mmローム粒多量、しまりやや弱、粘性やや弱

第176図 (3)SK196～198・200・203・204土坑

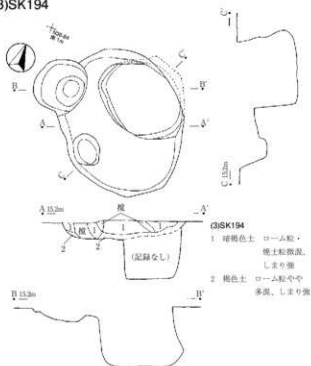
(3)SK188



(3)SK188

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、粒子粗、しまりやや弱
- 2 暗褐色土 ローム粒やや多量、黒色土粒少量、しまり強
- 3 褐色土 暗褐色土同状、ローム粒少量、しまり強
- 4 褐色土 ローム粒やや多量
- 5 暗褐色土 φ5mmロームブロック多量、しまり強

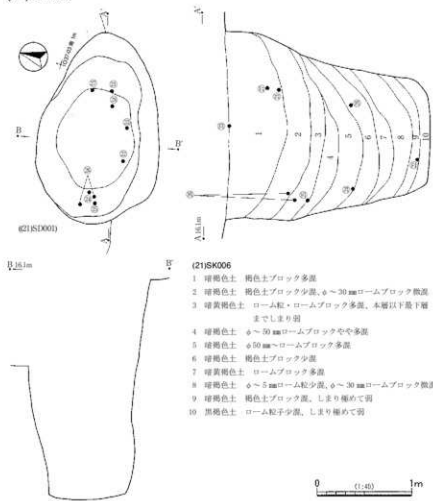
(3)SK194



(3)SK194

- 1 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒微量、しまり強
- 2 褐色土 ローム粒やや多量、しまり強

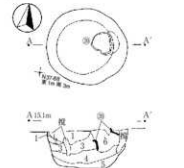
(21)SK006



(21)SK006

- 1 暗褐色土 褐色土ブロック多量
- 2 暗褐色土 褐色土ブロック少量、φ~30mmロームブロック微量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、本層以下層までしまり弱
- 4 暗褐色土 φ~50mmロームブロックやや多量
- 5 暗褐色土 φ50mm~ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 褐色土ブロック少量
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 8 暗褐色土 φ~5mmローム粒少量、φ~30mmロームブロック微量
- 9 暗褐色土 褐色土ブロック多量、しまり極めて弱
- 10 黒褐色土 ローム粒少量、しまり極めて弱

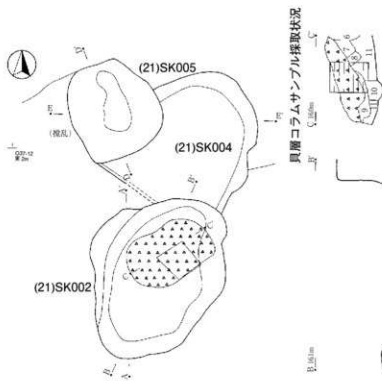
(3)SK205



(3)SK205

- 1 褐色土 ローム粒多量、黒色土粒少量、しまり強
- 2 暗黄褐色土 褐色土粒微量、しまり強
- 3 暗褐色土 ローム粒やや多量、φ5mmロームブロック少量、しまり強
- 4 暗褐色土 3より色調やや明るい、φ5mmロームブロック少量、しまりやや弱
- 5 暗褐色粘質土 ローム粒微量、粒子微細、しまり強
- 6 暗褐色土 3と類似するが色調やや暗い

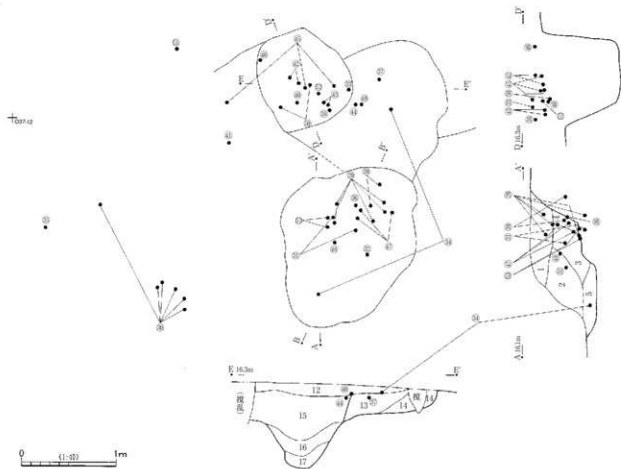
第177図 (3)SK188・194・205土坑、(21)SK006土坑



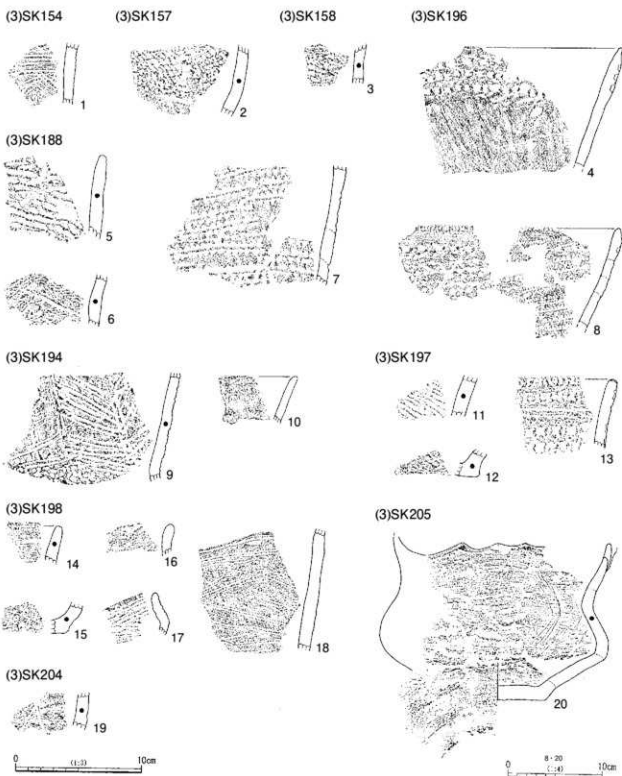
(21)SK002・004・005

- 13(SK002) 暗黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや弱
- 23(SK002) 暗褐色土 ローム粒多量、φ50mmロームブロック散見、しまりやや弱
- 33(SK002) 褐色土 ローム粒・φ~50mmロームブロック多量、しまりやや弱
- 43(SK002) 暗黄褐色土 ローム粒多量、φ50mmロームブロック散見、しまりやや弱
- 53(SK002) 暗褐色土 ローム粒少量、φ~30mmロームブロック散見
- 63(SK002) 暗褐色土 ロームブロック少量、しまりやや弱
- 73(SK002) 暗褐色土 φ30mmロームブロック少量
- 83(SK002) 暗褐色土 ローム粒少量、しまりやや弱
- 93(SK002) 暗褐色土 ローム粒や多量、しまりやや弱
- 103(SK002) 暗褐色土 φ50mm~ロームブロック多量、しまりやや弱
- 113(SK002) 暗褐色土 しまり強
- 123(SK002) 暗褐色土 褐色土ブロック多量
- 133(SK004) 暗褐色土 ローム粒や多量、φ~20mmロームブロック少量、しまりやや弱
- 143(SK004) 暗褐色土 12と比べ色調若干明るい、ローム粒少量、しまりやや弱
- 153(SK004) 暗褐色土 12と比べ色調やや暗い、φ~5mmローム粒少量、しまり・粘性強
- 163(SK005) 黄褐色土 φ30mm~ロームブロック極めて多量、ローム粒多量、しまりやや強
- 173(SK005) 暗褐色土 ローム粒散見、しまりやや強

遺物出土状況



第178図 (21)SK002・004・005土坑



第179図 (3)SK154・157・158・188・194・196～198・204・205土坑出土遺物

時期 細別時期は不明である。

(3)SK203 (第176図、図版20)

状況 長軸長130cm、短軸長98cmの不整形円形を呈する。断面碗形で深さは58cmである。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかった。

時期 細別時期は不明である。

(3)SK204 (第176・179図、図版20・82)

状況 長軸長118cm、短軸長95cmの不整形円形を呈する。断面碗形であるが北東部は段状に張り出しており、2基の土坑が重なっている可能性もある。深さは35cmである。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。19は黒浜式の深鉢胴部である。

時期 数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK205 (第177・179図、図版20・81)

状況 長軸長85cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。断面逆台形形で深さは40cmである。鉢の上半部が斜位に埋設されていた。土坑墓である可能性がある。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。20は黒浜式の器形復元ができる鉢である。

時期 出土遺物から黒浜式期と判断される。

(21)SK002・004・005 (第178・180図、図版20・82)

状況 3基が重なり合っているが、南側が中・近世溝(21)SD002によって削平されているため、形状は分かりにくい。(21)SK002は長軸長188cm、短軸長145cmの不整形円形を呈する。上層に貝ブロックが堆積する。底面は北西部が高く南東部が低くなっている。深さは最深で75cmである。(21)SK004は東西長170cm、南北長150cmで、見かけ上半円形を呈しているが、南側の壁は削平されているため正確な形状は不明である。断面皿状で深さは30cmである。(21)SK005は長軸長102cm、短軸長95cmの不整形円形を呈する。断面逆台形であるが坑底の形状は不安定である。深さは85cmである。新旧関係であるが、(21)SK004が古く(21)SK005が新しい。

出土遺物 遺構範囲内出土遺物だけでなく、溝や土壘から出土したのも関連すると思われる資料は掲載した。29～31は黒浜式の器形復元ができる深鉢である。29は多段の押し沈線を巡らせ、口縁部突起の下に弧状の押し沈線を配する。34～39は黒浜式の深鉢口縁部、40～52は胴部、32・33・53は底部である。

時期 出土遺物のほぼ全てが黒浜式であり、3基とも多少の時間差はあるにしても黒浜式期と考えられる。

(21)SK006 (第177・180図、図版20・82)

状況 長軸長210cm、短軸長130cmの不整形円形を呈する。断面逆台形形で深さは215cmを測る。いわゆる陥穴である。

出土遺物 21～25は黒浜式の深鉢口縁部、26～28は胴部である。

時期 出土遺物から黒浜式期と判断される。

(12)SK006 (第181図、図版20・81)

状況 東西長202cm、南北長205cmの不整形円形を呈する。壁、床面とも安定せず凸凹が目立つ。深さは最深で75cmである。

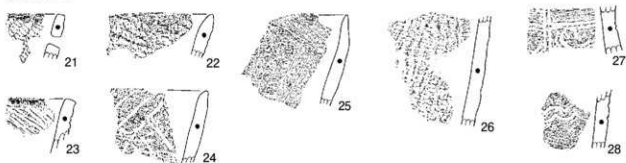
出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。5は加曾利E式の深鉢胴部である。

時期 数は少ないが出土遺物は加曾利E式であり、当遺構は該期と判断される。

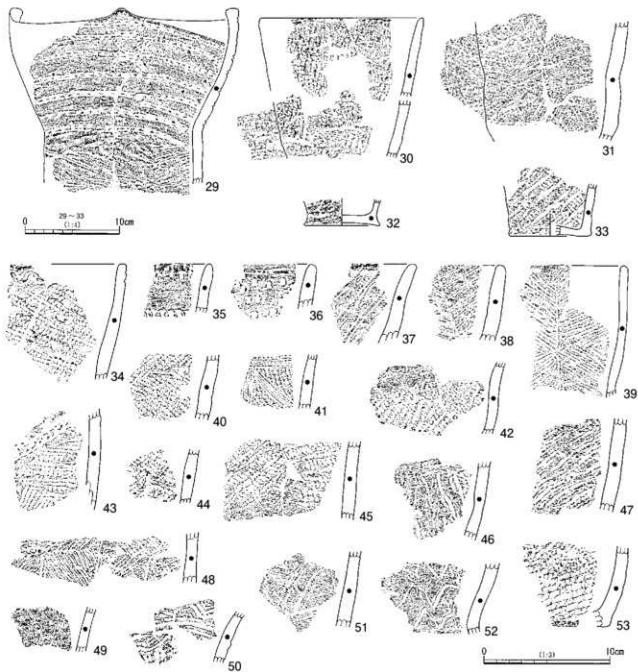
(12)SK008 (第181図、図版20・81)

状況 東西長420cm、南北長440cmの不整形円形を呈する。壁、床面とも安定せず凸凹が目立つ。深さは最深で170cmである。

(21)SK006

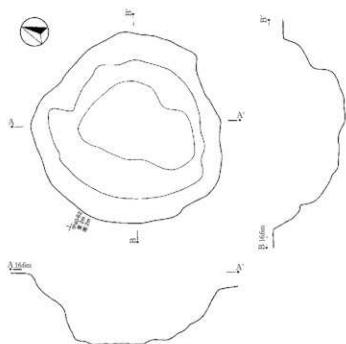


(21)SK002 · 004 · 005

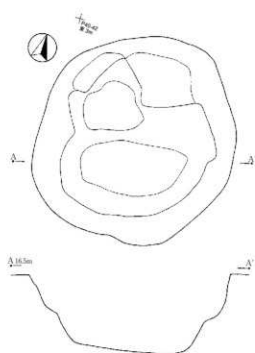


第180图 (21)SK002 · 004 ~ 006 土坑出土遺物

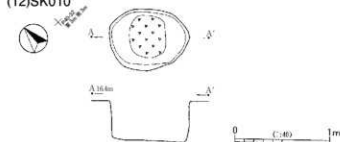
(12)SK006



(12)SK008



(12)SK010



0 1.00 2m

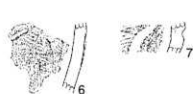
(12)SK008



(12)SK006



(12)SK010



0 1.00 10cm

第181图 (12)SK006・008・010土坑、出土遺物

出土遺物 1は黒浜式の深鉢胴部である。2は加曾利E式の深鉢口縁部、3・4は胴部である。

時期 主たる出土遺物は加曾利E式であり、当遺構は該期と判断される。

(12)SKO10 (第181図、図版81)

状況 長軸長86cm、短軸長65cmの楕円形を呈する。断面長方形で深さは45cmである。貝ブロックが堆積していたが、厚さ約20cmというメモがあるのみで土層断面が記録されておらず、詳細な状況は不明である。

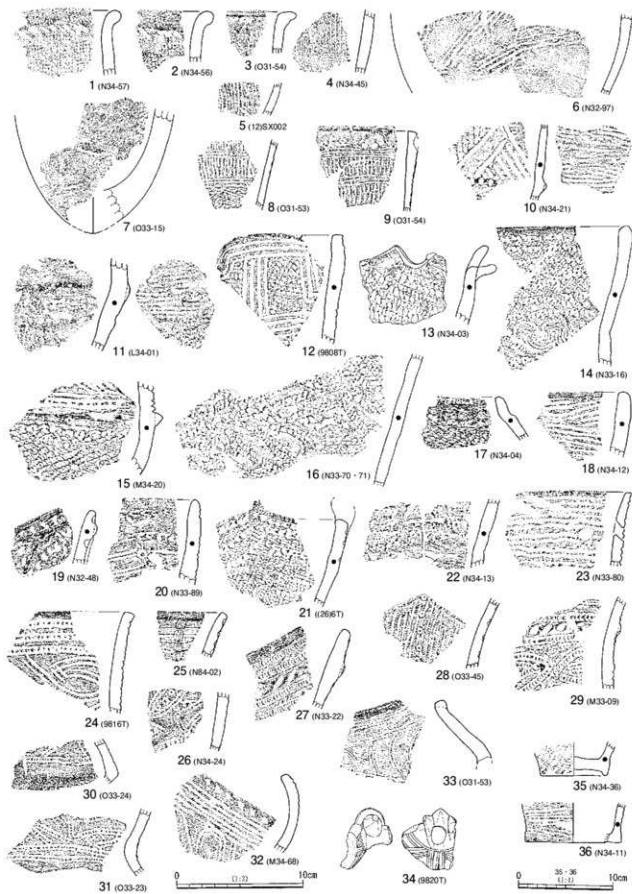
出土遺物 6は加曾利E式の深鉢胴部である。7は称名寺式の深鉢胴部である。

時期 加曾利E式と称名寺式が出土しており、中期末から後期初頭であろう。

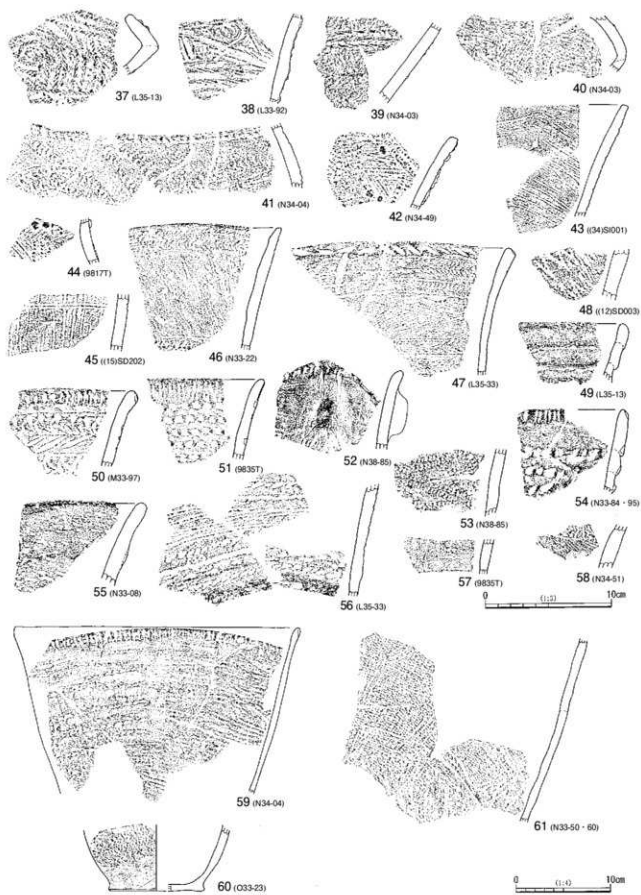
3 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (第182～200図、図版83～93)

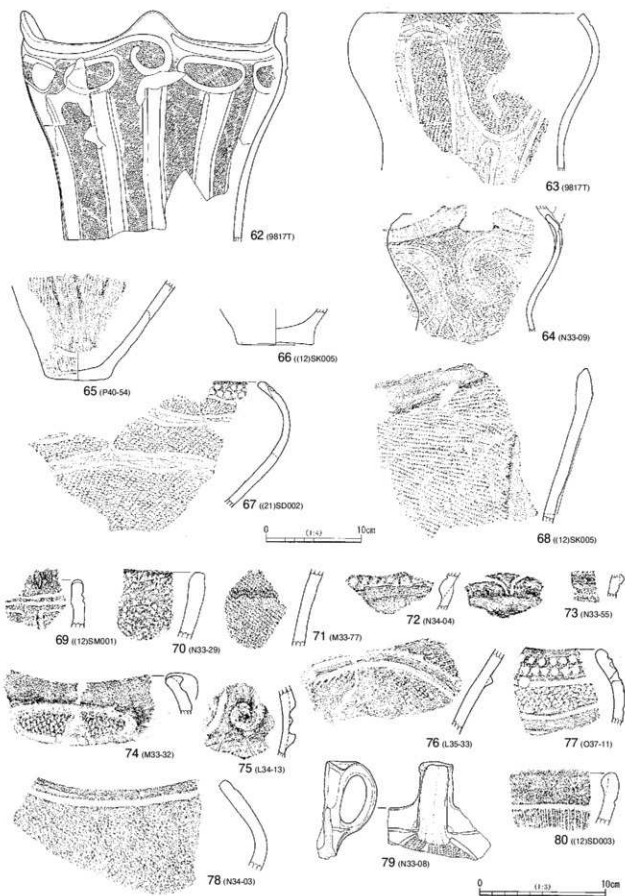
1～11は早期に属するものである。1～7は燃糸土器で、いずれも深鉢である。1～3は井草Ⅱ式の口縁部、4・5はおそらく夏島式の胴部、6は大浦山式の胴部、7はおそらく出流原式の底部である。8・9は沈線文土器の深鉢で、いずれも三戸式である。8は胴部、9は口縁部で、口唇直下が帯状に剥落している。10・11は条痕文土器の深鉢で、10は縄ガ島台式、11は茅山下層式のいずれも胴部である。12～61は前期に属するものである。12は関山Ⅱ式の深鉢口縁部で、鱗状の突起がつく。13～22・35・36は黒浜式である。13・14・18～21は深鉢口縁部で、13は片口がつく。15・16・22は胴部、35・36は底部である。17は強く内傾するもので、浅鉢もしくは鉢の口縁部と思われる。23は植房式の深鉢口縁部と考えられるもので、器面は摩滅が顕著である。24～31は諸磯a式である。24・25・27は深鉢口縁部、26・28・29・31は胴部、30は浅鉢胴部である。32～34・37～41・61は諸磯b式である。32～34・37は深鉢口縁部、38～41・61は胴部である。34は簡略化されているが獣面把手と思われる。42・44は諸磯c式で、42は深鉢口縁部、44は胴部である。43・45は燃糸施文の深鉢で43は口縁部、45は胴部である。浮島式に属するものであろう。46・47は浮島Ⅰ式の深鉢口縁部である。46は浮島Ⅰ式の深鉢口縁部、57は胴部である。47・50・52は浮島Ⅱ式の深鉢口縁部である。49・51・54・55・59は浮島Ⅲ式の深鉢口縁部、53・56は胴部である。48・60は貝殻文が施される深鉢の胴部と底部で、いずれも浮島式である。58は興津式の深鉢胴部である。69～88は中期に属するものである。69は五領ヶ台式の深鉢口縁部で、口唇上には絡糸体が圧痕されてキザミ状を呈する。70・71は縄文施文のみであるが、胎土に小礫を多量に含み、71は結節縄文が施されるなどの特徴から中期初頭と考えられる。72は阿玉台Ⅰb式の浅鉢で、内面に押引文が施される。73は阿玉台Ⅱ式の深鉢胴部である。62～68・74～88は加曾利E式である。74・75は加曾利EⅡ式の深鉢口縁部とその直下、76は胴部である。62～64・79は加曾利EⅢ式の深鉢である。68・82～85は加曾利EⅣ式の深鉢口縁部、86・87は胴部、65は底部である。84にはわずかに赤彩が認められる。67・77はいわゆる連風文土器である。89～173・175～177・179～189は後期前葉に属するものである。89～95は称名寺Ⅰ式の深鉢口縁部、96～104は胴部である。105～108・110は称名寺Ⅱ式の深鉢口縁部、109は胴部である。111～116は称名寺式の深鉢把手である。117は橋状把手を持つ鉢で、網刺Ⅰ式の影響を受けた土器と考えられる。118～173・175～177・179～189は堀之内式である。118～155は深鉢で、器形復元ができるものあるいは大形の破片である。118～124・126～128は底部から外反するように器壁が立ち上がり、頸部で一旦くびれて口縁部へ向かって外反する器形を呈する深鉢で、頸部で文様帯が上下に区画される。119は口縁直下の無文帯に、棒状工具による粗っぽいケズリ調整痕が残る。123は口縁部の4単位刺突と頸部の8字状貼付文の縦



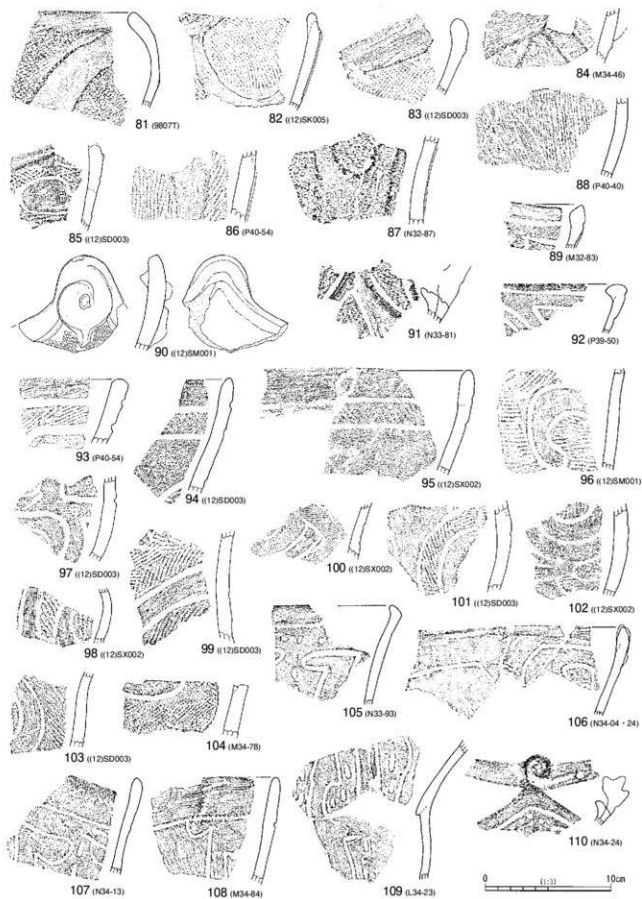
第182図 遺構外出土縄文土器(1)



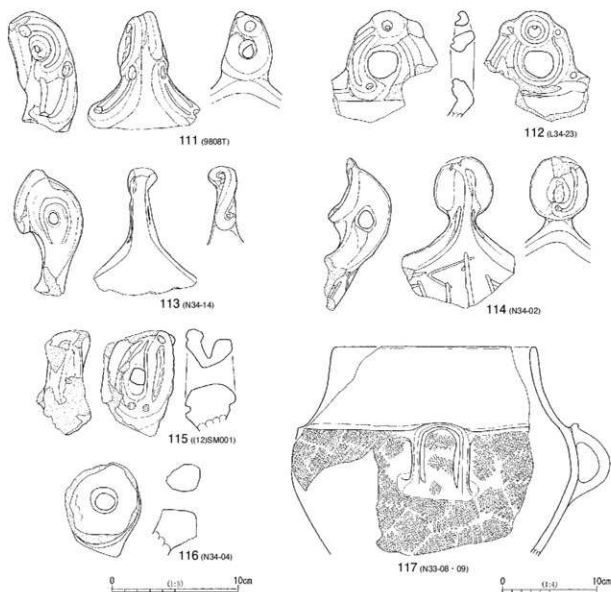
第 183 図 遺構外出土縄文土器 (2)



第184図 遺構外出土縄文土器(3)

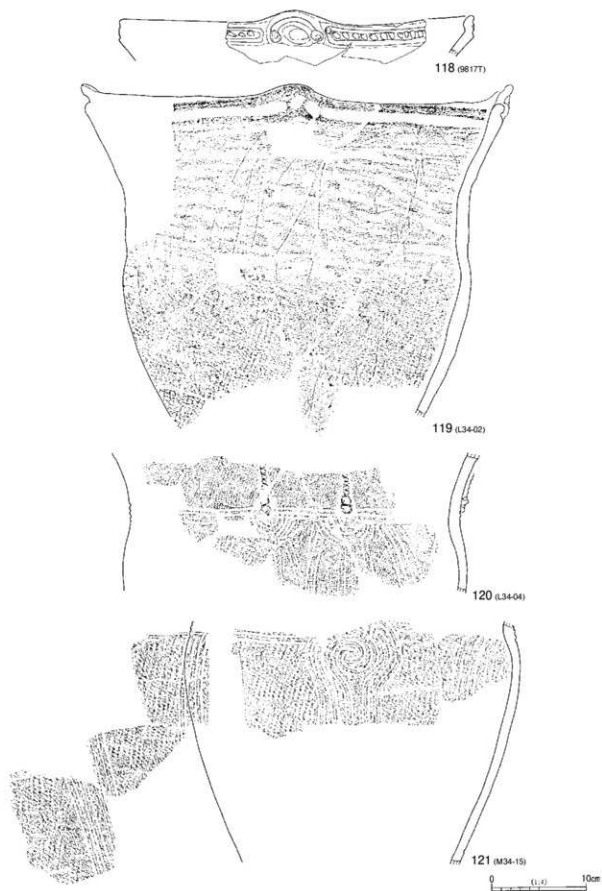


第185図 遺構外出土縄文土器(4)

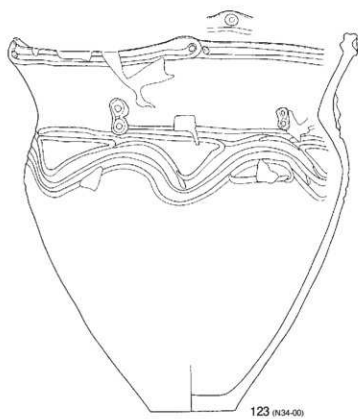
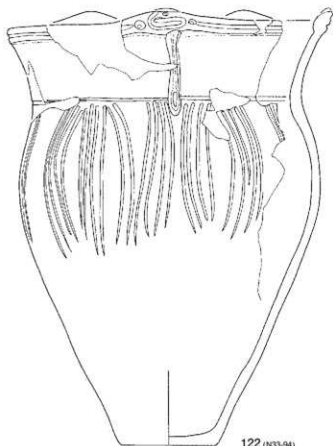


第186図 遺構外出土縄文土器(5)

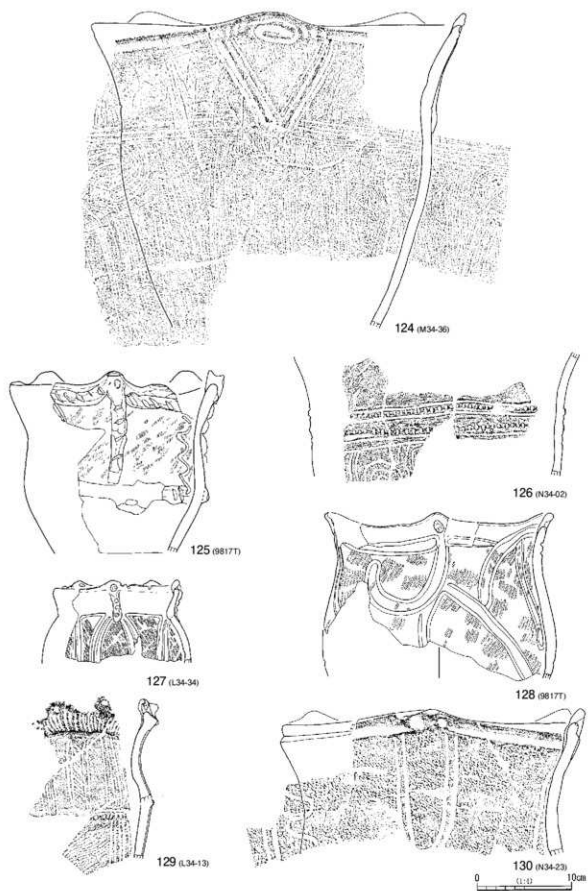
位置が全く合わず、胴部の文様も波状に横走る沈線のみで構成されるなど、かなり特異である。堀之内2式であろう。128は口縁部に幅の狭い無文帯があり、沈線で区画された頸部から下には単位的な意匠が配される。やや古相を示している。125・129は先と同器形は同じながら、文様帯の境が胴部の膨らんだ部分にある深鉢である。130～144は文様帯の区画がない深鉢で、器形は先と同様のもののほか、くびれがなく緩やかに立ち上がるものや直線的に外反するものなどがある。130・135・137は単位文を中心とした文様構成をとるもので、掲載した土器群の中では古相を示す。145・146・148は胴部上下で文様帯が区画されるもので、堀之内2式である。145は(15)SK107の上層から出土しており、この土坑に伴うものかもしれない。147は鉢で、この破片でも径の復元ができずかなり大きい。149～155は縄文施文のみの深鉢で、154・155は内面口唇直下の沈線から堀之内2式と判断される。156～178は深鉢の破片資料である。156～158・161～164は明瞭な単位文が認められるもので、堀之内1式でも古段階から中段階に位置付けられる。156・157には縄取式の影響が認められる。159は角棒状工具によるU字状もしくは逆J字状の刺突列が横



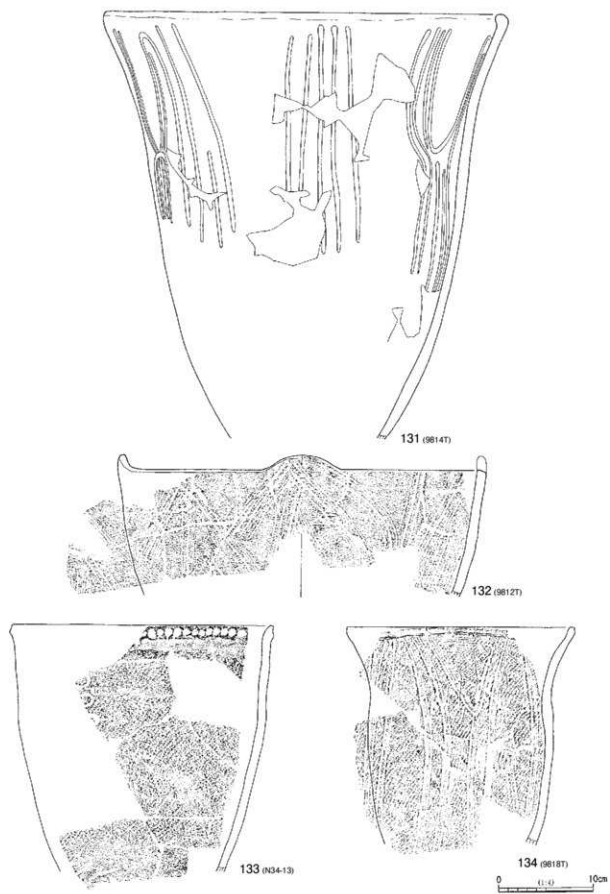
第 187 図 遺構外出土縄文土器 (6)



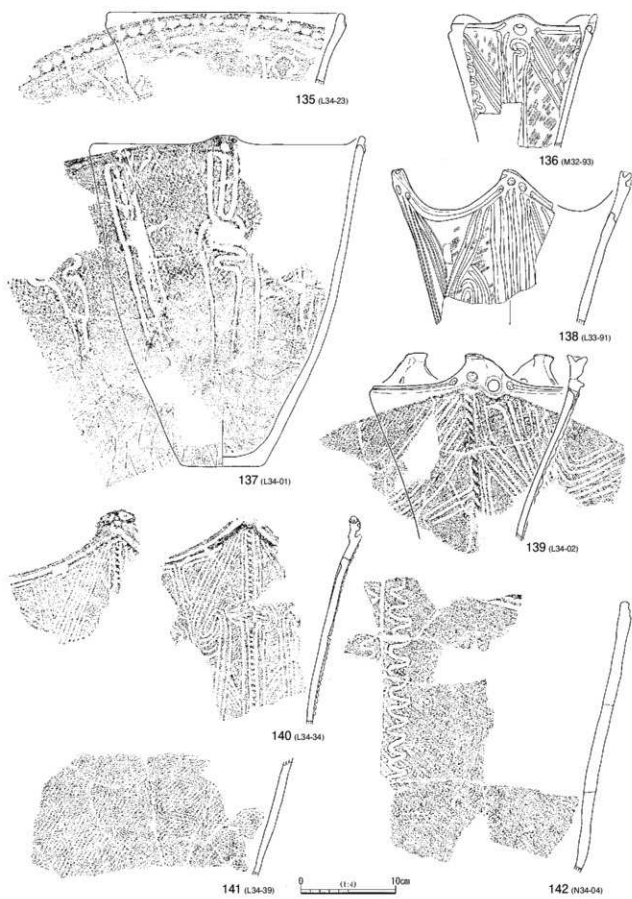
第188図 遺構外出土縄文土器(7)



第189図 遺構外出土縄文土器(8)



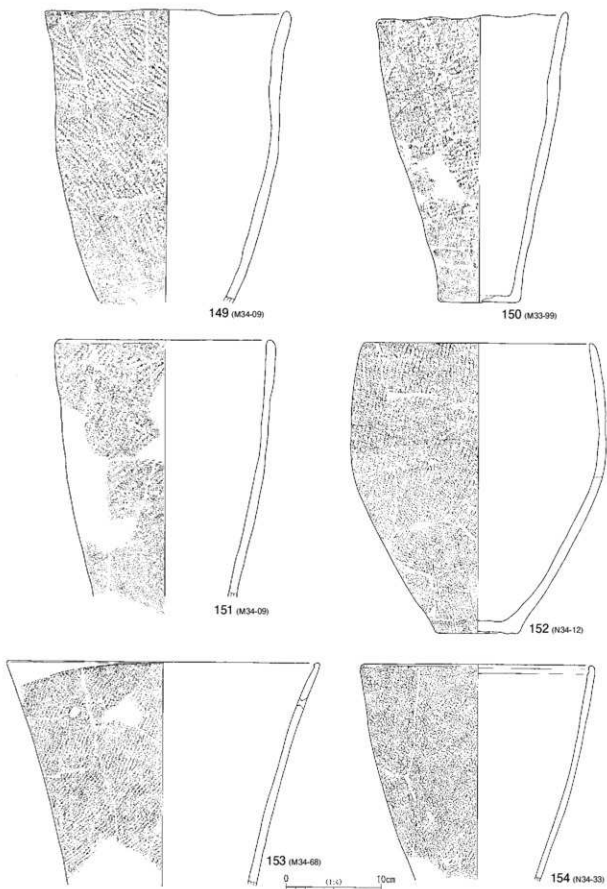
第190図 遺構外出土縄文土器（9）



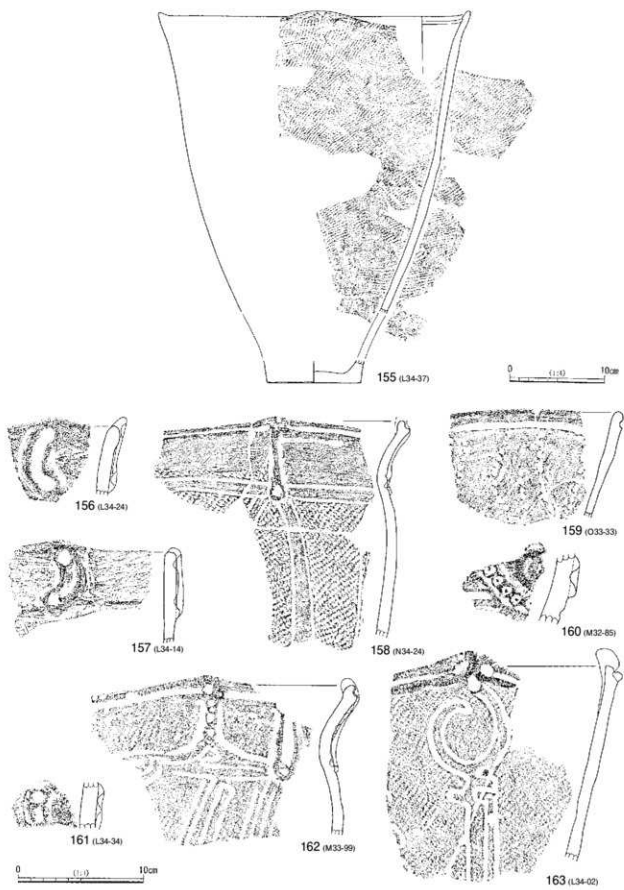
第191図 遺構外出土縄文土器 (10)



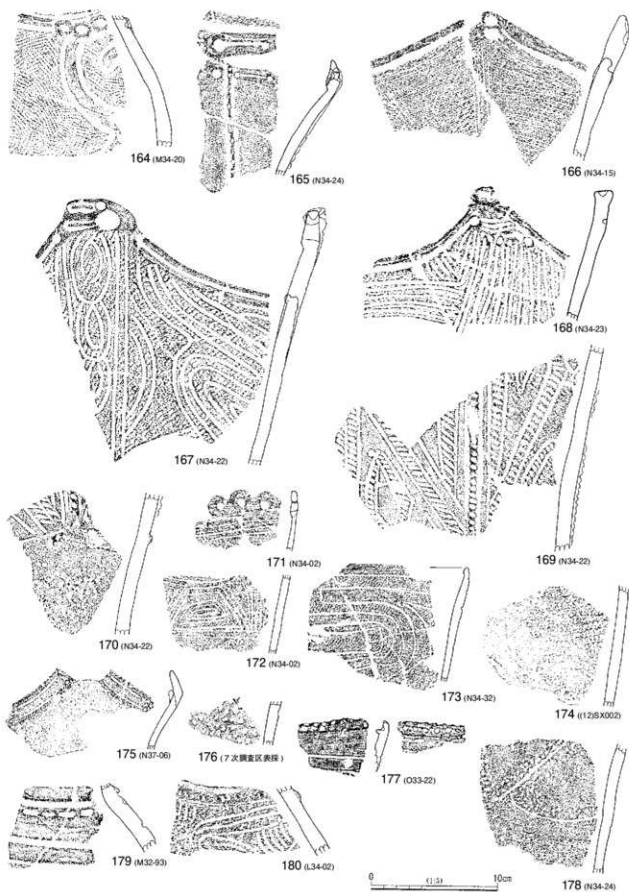
第 192 図 遺構外出土縄文土器 (11)



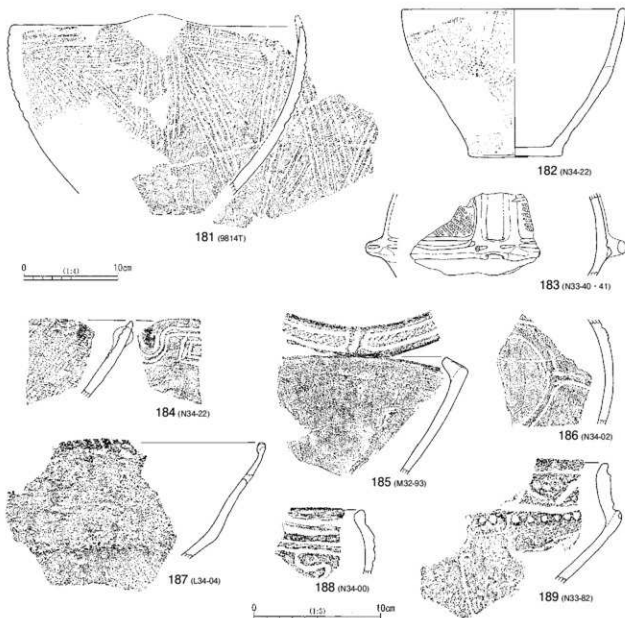
第193図 遺構外出土縄文土器 (12)



第194図 遺構外出土縄文土器 (13)

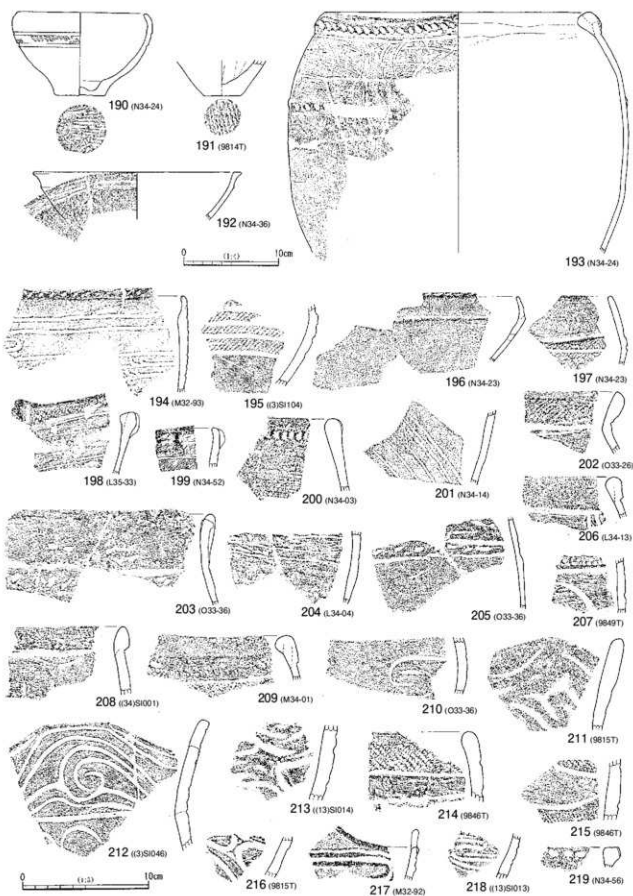


第195図 遺構外出土縄文土器 (14)

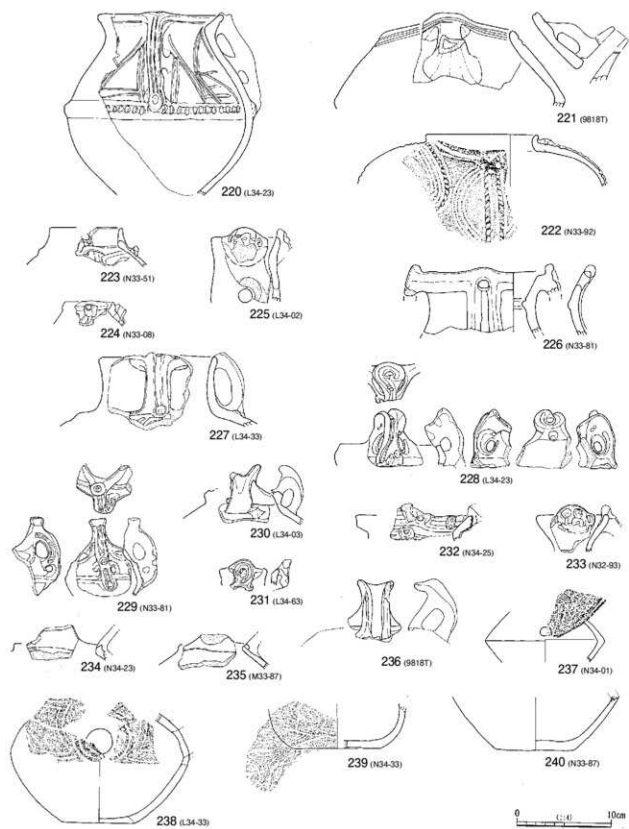


第196図 遺構外出土縄文土器 (15)

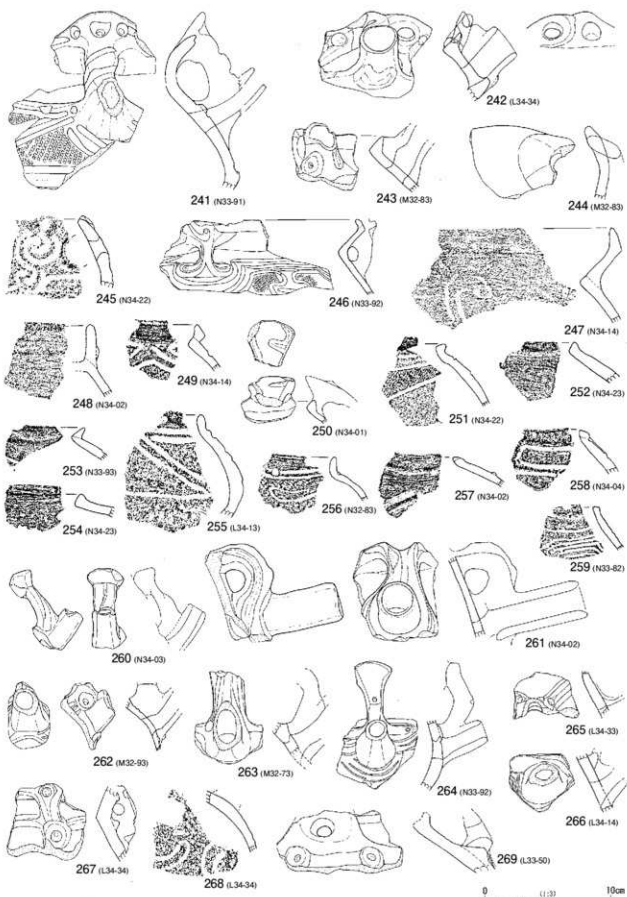
位に配される。160は隆帯が円形に貼り付けられ、周りに円形刺突が配される。161は胎土に石英・長石粒が多量に混入するなど他の土器とは大きく異なっていることや、器壁が厚く復元するとかかなりの大きさになると推測されることから、搬入された網取式土器である可能性が考えられる。165～170になると単位文的要素は薄れ、集合沈線による幾何学的な意匠が器面を覆う。堀之内1式の新段階に位置付けられるもので、遺構出土土器でも主体を占める。171～173・175・177は堀之内2式の深鉢である。176は三十稻場式の影響を受けたと思われる深鉢である。179・180・183・186は鉢で、いずれもかなり大形である。181・182・184・185・187～189は浅鉢である。174・178・190～219は後期中葉以降に属するものである。194は加曽利B1式の精製深鉢口縁部、178・195は胴部、174は粗製深鉢胴部である。178は三角形を描く沈線に沿って刺突列が配されるもので、東北地方の宝ヶ峯式の影響を受けたものと思われる。190・196・197は加曽利B2式～3式の浅鉢である。192は安行1式の浅鉢、198・199は精製深鉢の口縁部である。202・



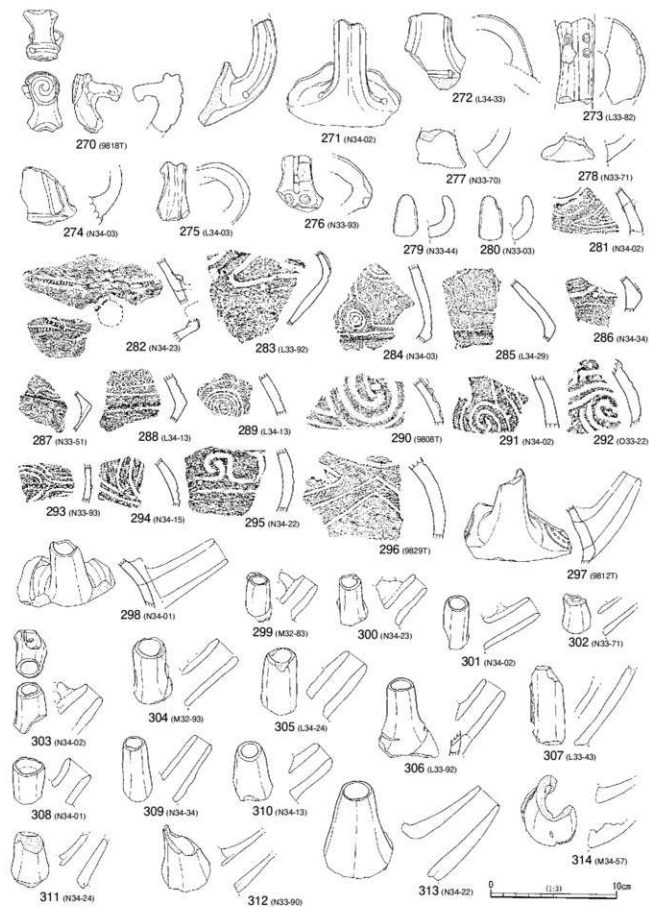
第197図 遺構外出土縄文土器 (16)



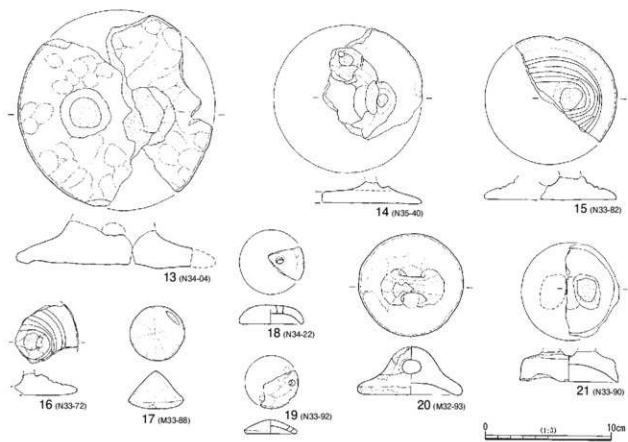
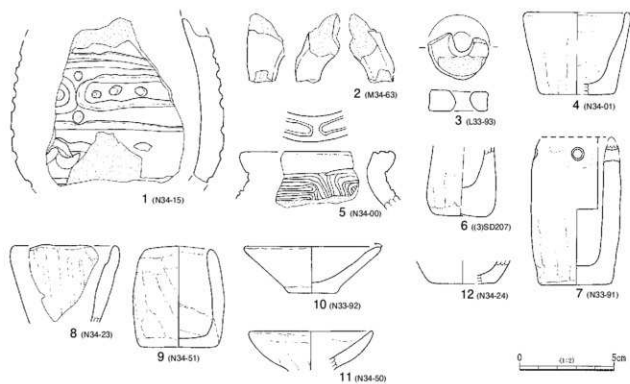
第198図 遺構外出土縄文土器（注口土器1）



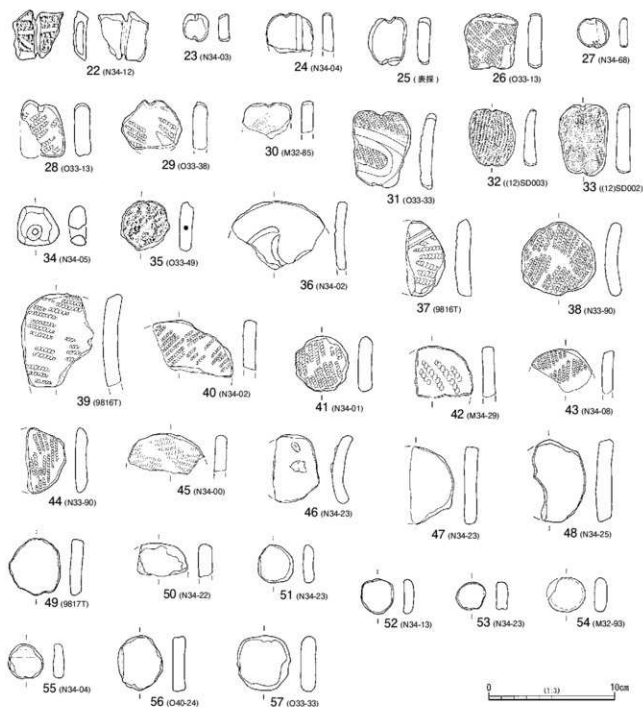
第199図 遺構外出土縄文土器（注口土器2）



第200図 遺構外出土縄文土器（注口土器3）



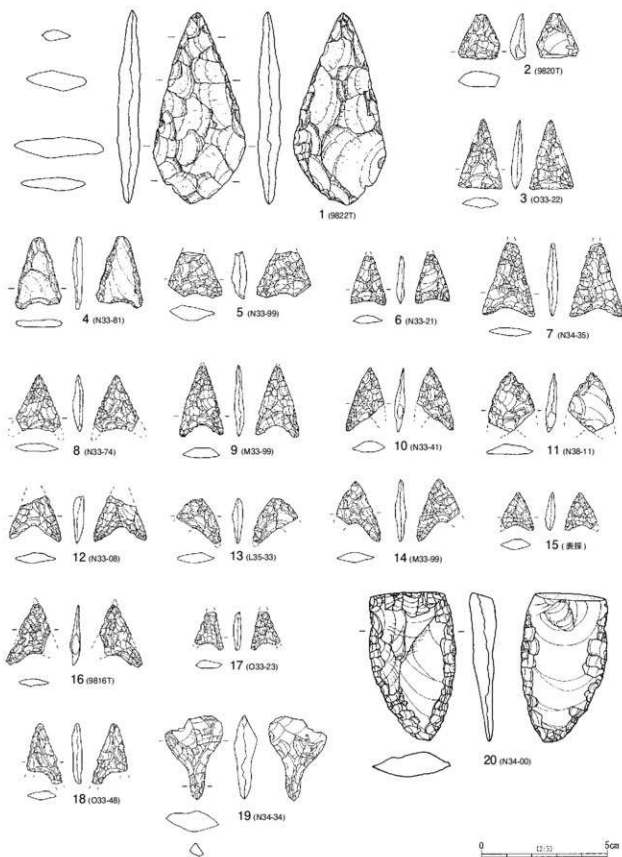
第201圖 遺構外出土縄文時代土製品(1)、石製品



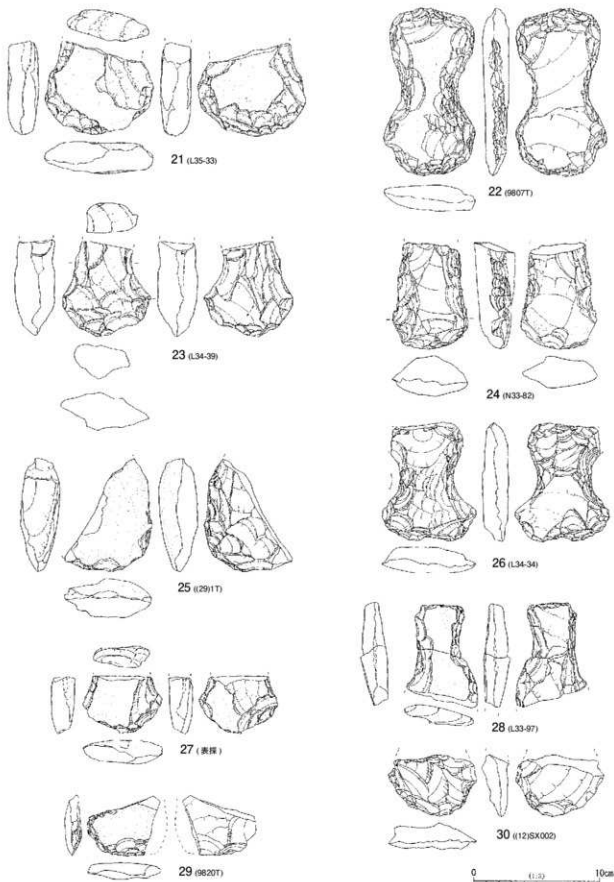
第202図 遺構外出土縄文時代土製品(2)

206は安行3 a 式の精製深鉢口縁である。193・200・201は後期末から晩期初頭の粗製深鉢である。203～205・210～213は安行3 c～3 d 式の精製深鉢、207～209は粗製深鉢である。214・215は前浦式の深鉢である。216は大洞系土器の浅鉢胴部と考えられる。217・218は晩期後葉の浮線土器で、それぞれ浅鉢の口縁部と胴部である。219は弥生土器の壺口縁部である。第198～200図は堀之内式を中心とした注口土器を抽出して掲載している。220～240は器形復元ができるもの、241～269は口縁部、270～280は把手、281～296は胴部、297～314は注口部である。

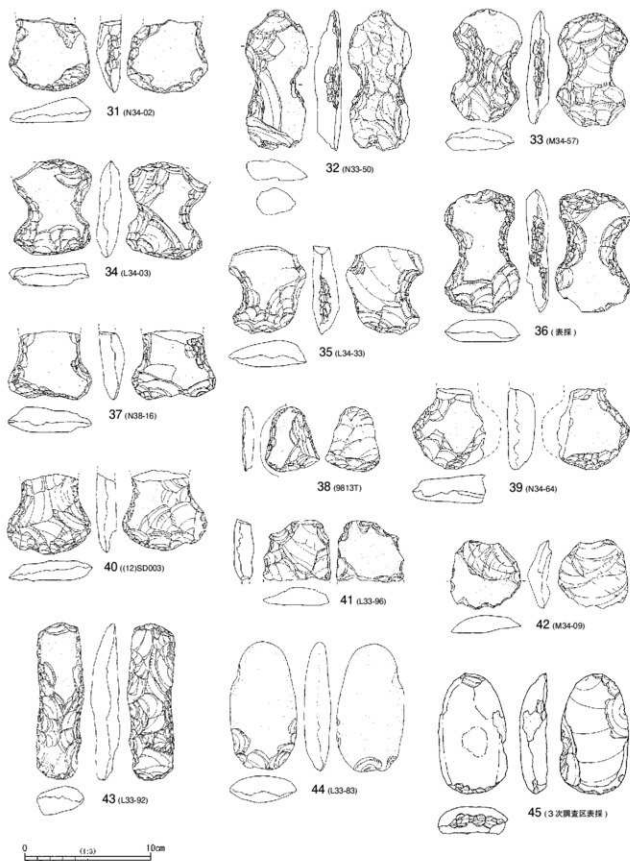
(2) 縄文時代土製品 (第201・202図、図版93・94)



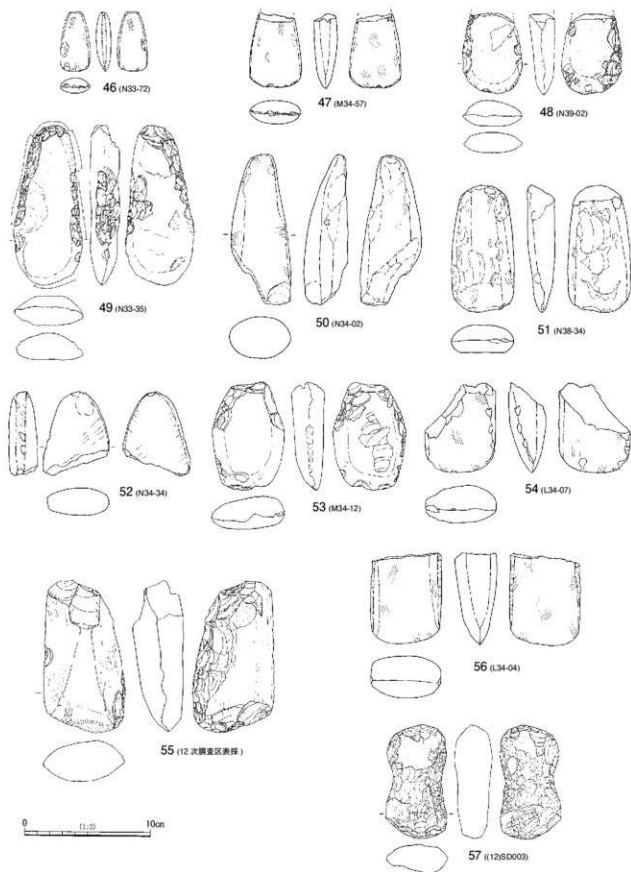
第 203 図 遺構外出土縄文時代石器 (1)



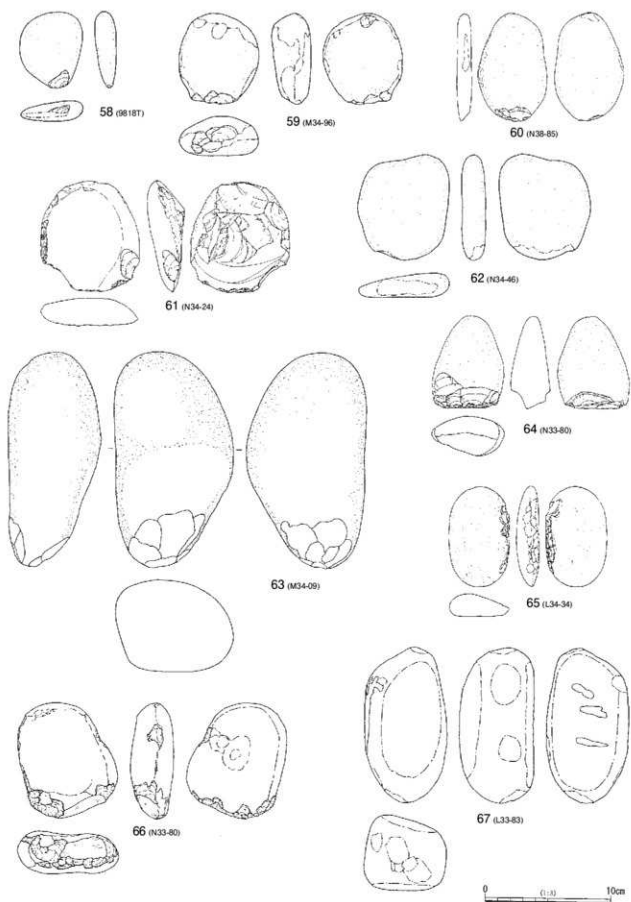
第 204 図 遺構外出土縄文時代石器 (2)



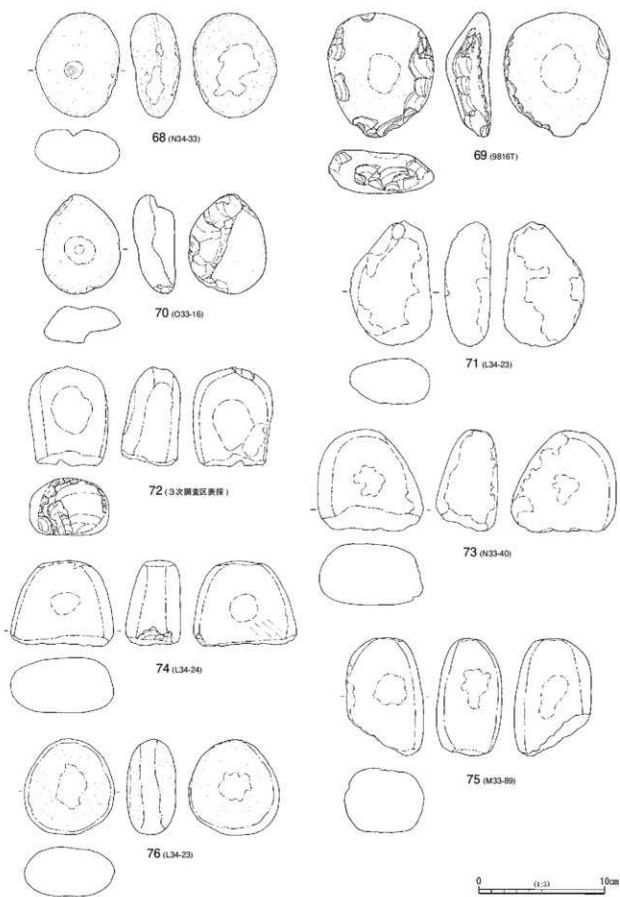
第 205 図 遺構外出土縄文時代石器 (3)



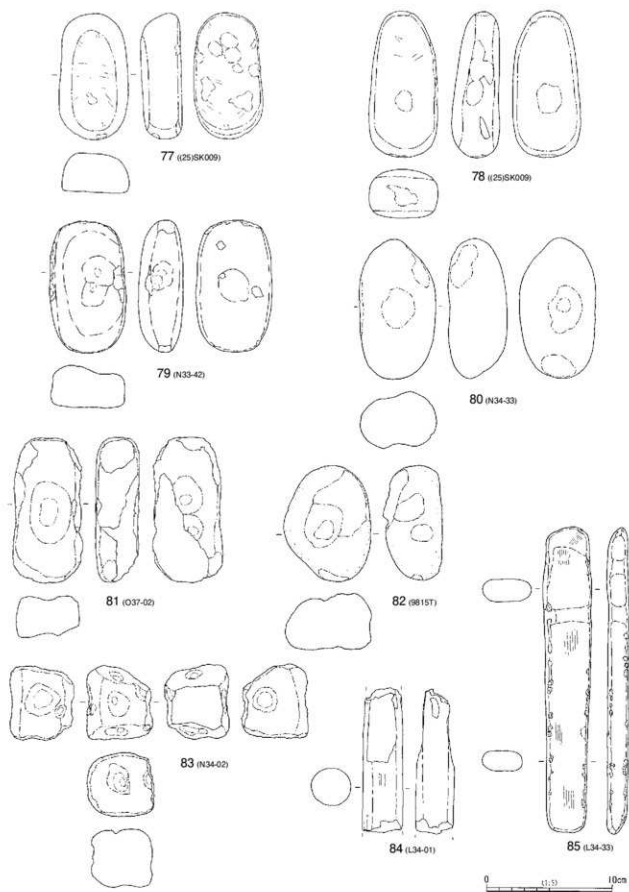
第 206 図 遺構外出土縄文時代石器 (4)



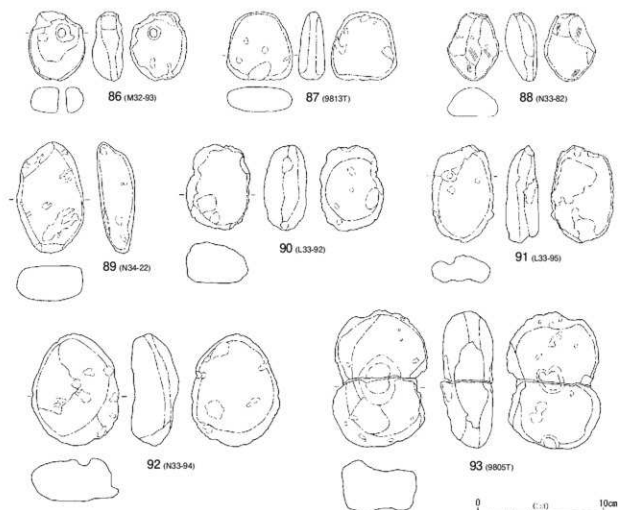
第 207 図 遺構外出土縄文時代石器 (5)



第 208 図 遺構外出土縄文時代石器 (6)



第 209 図 遺構外出土縄文時代石器 (7)

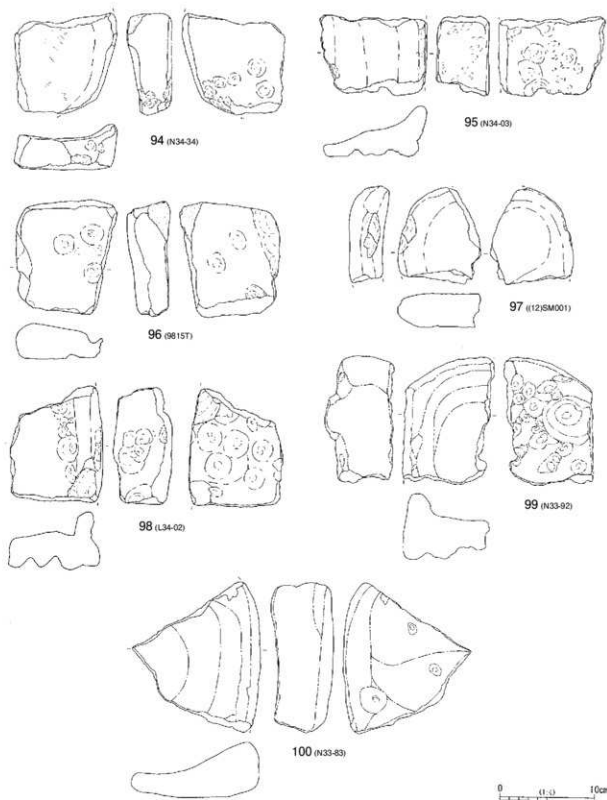


第210図 遺構外出土縄文時代石器(8)

1は筒形土偶の胴部であるが、全体に摩耗が顕著である。2は山形土偶の脚で、上端はソケット状になっている。3は有孔土製円盤で、摩耗が顕著である。4～12はミニチュア土器である。6は被熱が顕著である。7は口唇部を欠損するもののはほぼ完形で、口唇直下の前後左右4か所に焼成前穿孔が認められる。8は内面口唇直下に沈線上のナゾリが入り、堀之内2式に相当すると思われる。13～16・18～21は蓋形土製品である。13は大形品であるが全体の調整は指頭とナデで処理しており、かなり雑な印象である。14も上面に指頭成形痕が残る。15と16は同一個体の可能性がある。18・21は上・下面とも丁寧に調整されている。19は右側に2か所の焼成前穿孔が認められるが、相対する左側も同じく2か所穿孔されている可能性が高い。17は三角錐形を呈する土製品で、時期は不明である。22～33は土器片錘である。素材は中期加曽利E式の土器が多く、加工時期もほぼ同じと考えられる。34は有孔土器片円盤である。35～57は土器片円盤である。素材は前期から後期までの土器が使われているが、加工時期は後期と思われる。

(3) 縄文時代石器(第203～211図、図版95～104)

1は柳葉形尖頭器で、縄文時代草創期の所産であるが、摩耗が顕著で剥離の状況が不鮮明である。2～18は石鏃で、2・3は平基、4～18は凹基である。4は摩耗が顕著で剥離の状況が極めて不鮮明である。15は高原山産と思われる黒曜石が素材である。19は石鏃である。20は石匙であるが、緑色に発色する頁岩を素材としており、儀礼用の製品だった可能性がある。石材は北関東産か。21～45は打製石斧で、欠



第211図 遺構外出土縄文時代石器(9)

損しているものが多い。21・27・31・34・36は素材に扁平礫を使用している。28は中央で破断されているほか、両側方部も欠損している。42は石斧製作で発生した調整剥片と思われる。45は中央部に敲打痕があり、敲石としても使われていたと思われる。46～57は磨製石斧である。57は本来打製石斧だったものを研磨して転用している。58～83は磨石・敲石である。66は熱を受けている。84は石棒、85は石剣に類似する棒状製品である。84は熱を受けている。86～93は軽石製品である。94～100は石皿である。99・100は熱を受けている。

4 貝層

(1) 貝サンプルの採取地点と分析方法

当遺跡では遺構の覆土を中心に小規模な貝ブロックが検出されている。概要については遺構の説明の中で述べているが、これらのうち遺存状況が良好なものについてはサンプルを採取している。サンプルの水洗から貝類の選別、同定、計測に至る作業は文化財課森宮分室で実施した。

貝サンプルの一覧は第8表の通りである。竪穴住居跡3軒5か所、土坑2基2か所の計7か所である。調査時は竪穴住居跡2軒4か所と土坑1基はコラムサンプルを採取し、竪穴住居跡1軒1か所と土坑1基は一括取り上げとした。コラムサンプルは基本的に平面30cm四方で厚さ5cmを1カットとして、貝層の上端から下端まで採取した。時期は(12)SK010土坑が中期末～後期初頭、それ以外が前期中葉の黒浜式である。貝サンプルは9.52mm、4mm、2mm、1mm、0.5mmメッシュの試験篩による水洗分離を行った。選別したサンプルの量と水洗前の重量は第8表の通りである（一括取り上げサンプルは未計測）。貝類の選別は4mm以上を対象とした。二枚貝類は最長部の殻歯が半分以上遺存するものを左右別に集計し、多い方を最小個体数とした。巻貝類は各軸下端が遺存するものを集計した。同定した貝種一覧は第9表、個体数の集計結果は第10表の通りで、各カットの種名ごとの個体数と割合を示している。この結果から主要な貝種を抽出して構成比をグラフ化したのが第212図である。

(2) 分析結果

同定された貝は第9表の通り16科22種以上である。計測データについては遺構ごとに説明する。

(21)SI001 (第159図)

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックで、面積では住居のおよそ1/6程度を占める。住居内各所に大小様々なブロックが散在しているが、最も規模の大きい南東部のブロックは東西約2.1m、南北約3.6m、厚さは最大で約20cmを測る。そのブロック中の2か所からコラムサンプルを採取した。サンプルaは住居中央部付近に設定し、確認面から床面まで6カット採取した。サンプルbは南壁付近に設定し、同じく4カット採取した。ただしサンプルbについては、断面実測はされていない。サンプルaの貝種構成はアサリが最多で37.5%、以下イボキサゴ23.3%、シオフキ14.9%、ハマグリ13.6%となってこの4種でおおよそ9割を占める。ただしカット別の出現頻度はかなり様相が異なっており、アサリとシオフキはほぼ全カットから偏りなく出現しているのに対し、イボキサゴとハマグリは上層側4カットまでがほとんどで、下層側は皆無である。サンプルbもアサリが最多で73.5%、次いでハマグリが11.7%となりこの2種で8割以上を占める。カット別構成比はハマグリが下層側に偏っているのが目につく。また、ブロック状にヤマトジミが出現しているのが特徴的である。

(21)SI003 (第162図)

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックで、面積では住居のおよそ1/4程度を占める。中央部が攪乱されているものの当遺跡では最大規模の貝ブロックで、東西約4.4m、南北約4mの範囲に及び、厚さは最大約30cmを測る。他に南端部にも小規模な貝ブロックが存在する。床面直上から堆積しており、住居廃絶後時間をおかず形成されたものと考えられる。コラムサンプルは2か所から採取した。サンプルaは住居中央部付近に設定し、確認面から床面まで6カット採取した。サンプルbは南壁付近に設定し、同じく6カット採取した。ただしいずれも断面図が実測されていないため図示できない。サンプルaの貝種構成はマガキが最多で32.6%、次いでハマグリ28.5%、イボキサゴ10.2%と続いてこの3種で7割を占める。カット別の構成としては、上層側はハマグリが頻出し、下層側はマガキ、イボキサゴが頻出する傾向にある。特に最下層のカット6はマガキが6割近くを占める。サンプルbもマガキが最多で65.5%、次いでハイガイ15.9%、オキシジミ7.2%で、この3種で9割近くを占める。カット別の構成では、ハイガイが中間カットで出現頻度が減るのが目につく程度である。

(3)SI160 (第168図)

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックである。平面的には60cm四方とごく小規模なもので、厚さも10cm程度であったため一括取り上げた。貝種構成はアサリが最多で70.4%、次いでハマグリ16.5%、シオフキ6.4%となり、この3種で9割以上を占める。

(21)SK002 (第178図)

土坑の覆土中に形成された貝ブロックである。当遺構は中・近世溝状遺構(21)SD002に削平されているため南側の壁はほとんど残存していないが、当初から傾斜地だったらしく貝層も斜めに堆積している。コラムサンプルはブロック中央部から1か所、遺構確認面から貝ブロックの下端まで8カット採取した。貝種構成はイボキサゴが最大で31.0%を占め、次いでアサリが28.1%、ハマグリが25.6%、シオフキが9.5%と続き、この4種で全体の9割以上を占める。カット別でも概ね構成比は同じである。

(12)SK010 (第181図)

土坑の覆土中に形成された貝ブロックである。平面的には径約40cm～45cmの範囲に広がっていることが分かっているが、断面図は作成されていないため堆積状況に関する情報は一切ない。貝の総数から、(3)SI160住居跡の貝ブロックよりやや規模が大きかっただろうと想像されるのみである。貝種構成はハマグリが85.5%と圧倒的多数を占める。以下、マガキ4.5%、シオフキ3.4%、ハイガイ2.9%と続くが、いずれも5%以下である。

第6表 縄文時代土製品属性表

標頭番号	出土	種別	最大径 ●1径 ▲直径 (cm)	最大厚 ●直径 ▲厚さ (cm)	最大厚 ●直径 ▲厚さ (cm)	重量 (g)	時期	備考
第340307	38S012	ミニチュア土器	●7.1	●5.6	●1.0	91.31	縄文内	
第340308	38S012	ミニチュア土器	●4.7	●4.8	-	20.41		
第340309	38S012	ミニチュア土器	●4.5	●4.0	-	12.53		
第340314	38S020	壺形土製品	▲3.9	-	4.8	129.58	縄文内	
第340315	32S001	土器片断	5.0	3.5	0.9	15.05		復元径7.8cm
第340319	43S013	壺形土製品	▲6.9	-	4.0	54.68	縄文内	
第340327	19S002	土器片断?	2.1	1.0	0.7	1.89		
第340333	19S003	土器片断?	4.2	4.6	1.0	14.15		
第340344	19S003	土器片断?	2.9	2.8	1.1	3.62		
第340345	19S003	土器片断?	3.1	3.3	0.9	10.64		
第340323	19S004	土器片断?	4.2	2.9	1.0	12.10	後期?	
第340316	49S122	土器片断	4.5	4.1	0.9	20.74		
第340322	38S120	土鍋	3.6	3.0	4.2	30.76	縄文内	フット型
第340313	38S120	壺形土製品	▲8.0	-	1.8	41.15	縄文内	
第340319	38S211	土器片断	4.1	3.5	0.9	11.29	後期	
第340311	N34-15	土鍋	断面径11.2	8.7	-	84.88	縄文内	
第340312	M34-63	土鍋	3.6	2.4	2.0	13.05	加賀料土	口部
第340313	L33-93	土器片断?	▲3.2	-	1.1	7.52		
第340314	N34-09	ミニチュア土器	●6.5	●6.0	●4.3	18.90		
第340315	N34-03	ミニチュア土器	●8.2	●8.0	-	21.92	縄文内	
第340316	48S002	ミニチュア土器	●3.7	●2.8	●3.61			
第340317	N33-91	ミニチュア土器	-	●5.8	●7.4	129.03		中・近世遺構出土
第340318	N34-23	ミニチュア土器	●5.8	●4.0	-	9.62	縄文内	
第340319	N34-51	ミニチュア土器	●3.4	●5.4	●4.0	45.66		
第340320	N33-02	ミニチュア土器	●7.2	●2.5	●2.4	21.54		
第340311	N34-50	ミニチュア土器	●6.4	●2.1	-	7.57		
第340312	N34-24	ミニチュア土器	-	●1.2	●3.4	4.73		
第340313	N34-04	壺形土製品	▲15.6	-	3.4	326.04	縄文内	
第340314	N30-89	壺形土製品	▲11.8	-	-	81.15	縄文内	
第340315	N33-82	壺形土製品	▲10.4	-	1.8	59.95	縄文内	
第340316	N33-72	壺形土製品	4.8	3.0	1.7	28.47	縄文内	
第340317	M33-88	不明	4.4	-	3.0	38.79		
第340318	N34-22	壺形土製品	▲3.1	-	1.5	5.88	縄文内	
第340319	N33-92	壺形土製品	▲4.2	-	1.1	4.69	縄文内	
第340320	M32-93	壺形土製品	▲5.2	-	3.8	81.64	縄文内	
第340321	N33-90	壺形土製品?	▲2.9	-	2.4	32.25	縄文内	
第340322	N34-12	土器片断	3.9	4.0	1.1	13.20	加賀料土	
第340323	N34-03	土器片断	2.1	2.0	0.8	4.13	加賀料土?	
第340324	N34-04	土器片断	3.0	3.7	0.8	11.50	加賀料土	
第340325	表様	土器片断	3.7	2.8	1.0	12.43	加賀料土?	
第340326	O33-13	土器片断	4.3	4.1	1.0	25.13	加賀料土	
第340327	N34-08	土器片断	2.3	2.3	0.6	4.01	加賀料土?	
第340328	O33-13	土器片断	4.3	3.0	1.2	16.96	加賀料土	
第340329	O33-38	土器片断	3.8	4.7	1.1	20.71	加賀料土	
第340330	M32-85	土器片断	2.8	3.8	0.9	10.92	加賀料土	
第340331	O33-33	土器片断	6.0	4.5	0.9	30.13	加賀料土	
第340332	42S003	土器片断	4.5	3.7	0.9	18.40	加賀料土	
第340333	42S002	土器片断	5.6	3.9	1.1	25.40	加賀料土	
第340334	N34-05	瓶状土器片断	3.0	3.3	3.1	14.07		中・近世遺構出土
第340335	O33-89	土器片断	3.9	3.8	1.0	16.34	表土	加工時期は後期?
第340336	N34-02	土器片断	5.4	7.3	0.8	32.52	粘土	
第340337	8816T	土器片断	6.0	3.0	1.1	25.14	縄文内	
第340338	N33-90	土器片断	5.8	5.8	1.2	47.96	後期	
第340339	8816T	土器片断	7.8	5.6	1.2	59.42	後期	
第340340	N34-02	土器片断	4.5	5.1	1.0	29.20	後期	
第340341	N34-01	土器片断	4.4	4.2	1.0	23.17	後期	
第340342	M34-29	土器片断	4.0	4.5	1.0	23.96	後期	
第340343	M34-08	土器片断	2.3	4.5	0.8	13.84	後期	
第340344	N33-90	土器片断	5.1	5.1	0.9	17.07	後期	
第340345	N34-00	土器片断	3.0	6.0	0.9	18.21	後期	
第340346	N34-23	土器片断	5.4	3.6	1.0	19.48	後期	
第340347	N34-23	土器片断	6.0	3.5	1.0	24.40		
第340348	N34-25	土器片断	6.5	4.1	1.2	24.82		
第340349	8817T	土器片断	4.5	4.0	1.0	13.68		
第340350	N34-22	土器片断	2.6	4.0	1.1	13.52		
第340351	N34-23	土器片断	3.0	2.7	0.8	8.39		
第340352	N34-13	土器片断	2.8	2.5	0.7	6.16		
第340353	N34-23	土器片断	2.2	2.2	0.9	5.14		
第340354	M32-93	土器片断	2.7	2.9	1.0	7.90		
第340355	N34-04	土器片断	2.7	2.7	0.8	6.72		
第340356	O40-24	土器片断	4.3	3.5	1.0	19.48		
第340357	O33-33	土器片断	4.3	4.1	1.1	22.96		

●ミニチュア土器の計測項目 ▲壺形土製品・耳器の計測項目

第7表 縄文時代石器属性表

採集番号	調査次	報告時遺構名	遺物番号	器種	石材	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第43827	3	G8S012	006-2	石鏃	チャート	25.5	13.8	2.8	0.79	
第48429	3	G8S032	032-3	磨製石斧	滑石質	44.4	27.6	10.3	20.22	
第48431	3	G8S032	032-13	棒	燧石	25.9	18.7	11.6	6.86	
第50011	3	G8S035	035-2	磨製石斧	燧石質	158.8	28.5	32.3	167.13	
第5505	3	G8S073	M34-06-2	磨石	滑石質	39.8	13.9	6.4	4.26	
第60455	3	G8S079	079-20	石鏃	チャート	22.6	15.2	3.5	0.79	
第60780	3	G8S080	080-5	石鏃	磨製石	13.8	13.4	2.9	0.39	
第64453	3	G8S104	N34-10-29、 表層-4	打製石斧	火山岩	135.3	81.4	19.6	298.89	
第64454	3	G8S104	N34-11-24	打製石斧	ホルンフェルス	11.7	68.1	19.3	166.60	
第64455	3	G8S104	N34-11-94	石鏃	火山岩	198.0	142.0	74.5	1,215.49	
第72011	3	G8S139	139-107	石鏃	火山岩	256.0	125.0	70.5	1,321.79	
第72012	3	G8S138	138-5	磨石	火山岩	39.0	51.2	31.5	102.79	
第76061	3	G8S140	140-130	石鏃	火山岩	219.0	164.0	53.0	1,475.29	
第78010	3	G8S147	147-115	磨製石斧	緑色頁	30.7	24.8	11.7	27.96	
第78011	3	G8S147	147-34	磨製石斧	磨製玄武岩	30.4	48.4	24.0	192.96	
第78012	3	G8S147	147-95	石鏃	緑色片岩	168.0	31.1	24.9	255.54	
第78013	3	G8S147	147-83-106	石鏃	緑色片岩	184.2	25.3	21.6	164.25	
第78014	3	G8S147	147-118	磨石	磨石	99.3	81.3	52.3	489.36	
第78015	3	G8S147	147-93	磨石製品	磨石	134.2	77.6	21.1	34.76	
第80012	3	G8S161	161-(不明)	磨石製品	磨石	50.0	53.5	19.5	14.17	
第80013	3	G8S161	161-59	打製石斧	ホルンフェルス	100.5	59.3	23.3	154.29	
第80014	3	G8S161	161-52	石鏃	火山岩	125.0	71.5	38.5	264.11	
第83023	3	G8S163	163-25	磨製石斧	緑色燧石質	127.7	37.7	31.3	159.21	
第83024	3	G8S163	163-49	磨製石斧	緑色頁	56.5	41.5	25.3	63.85	
第83025	3	G8S163	163-81	磨石	火山岩	118.5	67.0	34.0	396.79	
第83026	3	G8S163	163-51	磨石製品	磨石	39.9	44.5	26.7	7.96	
第85023	3	G8S130	130-5	磨製石斧	滑石質	62.2	24.4	7.7	13.67	
第100409	13	G13S040	407-82	石鏃	火山岩	201.0	154.0	63.0	1,564.69	
第100444	13	G13S012	L33-94-1	打製石斧	磨製石	82.1	26.7	18.5	56.10	
第100445	13	G13S012	012-73	磨石	磨石	124.5	88.5	35.0	339.53	
第110040	13	G13S013	013-475	打製石斧	緑頁片岩	50.7	88.9	19.7	107.00	
第110041	13	G13S013	013-98	磨製石斧	緑色片岩	60.0	43.4	25.6	67.09	
第1100283	13	G13S014	014-196	打製石斧	火山岩	102.6	62.2	25.7	195.96	
第1100284	13	G13S014	014-104	磨石	ホルンフェルス	122.8	59.8	34.9	329.69	
第1100285	13	G13S014	014-108	スタンプ形石鏃	石鏃製品	90.0	61.0	45.0	256.14	
第120251	15	G15S015	015-142	スタンプ形石鏃	石鏃製品	105.0	89.0	45.0	309.47	
第130011	15	G15S016	M33-88-21	打製石斧	砂岩	119.4	80.8	28.7	332.80	
第130019	3	G8S113	113-2	磨石	火山岩	96.3	93.6	36.8	802.69	
第140011	3	G8S112	112-13	石鏃	チャート	23.5	18.8	4.7	1.28	
第150018	5	G5S0213	213-37	磨製石	磨石	62.0	45.5	30.5	79.35	
第150019	5	G5S0213	213-44	磨石	磨石	179.0	112.3	58.6	278.47	
第160048	21	G16S001	001-73	磨製石斧	磨製石	106.9	42.5	26.6	182.32	
第160049	21	G16S001	001-436	磨石製品	磨石	84.5	77.9	33.1	56.48	
第160020	21	G16S001	001-40	磨石製品	磨石	216.8	62.1	35.1	201.13	
第160041	21	G16S001	001-294	磨製石斧	磨製石	175.6	49.9	19.3	126.64	
第160012	3	G8S159	159-61	磨石	火山岩	94.0	68.5	42.0	412.26	
第160013	3	G8S159	159-5	磨製石斧	緑色片岩	117.6	46.7	29.3	183.79	
第172014	3	G8S191	191-42	磨石製品	磨石	39.0	60.8	49.8	31.67	
第172015	3	G8S191	191-28	磨石製品	磨石	66.1	47.4	19.4	8.76	
第172016	3	G8S191	191-26	磨石製品	磨石	86.8	60.2	39.7	34.78	
第172017	3	G8S191	191-34	石鏃	チャート	30.9	13.9	3.9	0.75	
第172018	3	G8S191	191-30	石鏃	チャート	27.2	18.6	4.3	3.00	
第170017	3	G8S195	195-70	磨製石斧	緑色頁	80.0	44.4	22.3	166.79	
第20001	2	遺構95	96C27-1	木彫刻尖頭器	ホルンフェルス	75.9	37.0	9.8	25.39	
第20002	2	遺構95	96C07-1	石鏃	チャート	17.8	16.1	5.8	1.80	
第20003	2	遺構95	O33-22-3	石鏃	流紋岩	27.9	17.9	6.7	1.28	
第20004	3	遺構95	N33-81-366	石鏃	ホルンフェルス	52.8	17.5	4.3	2.28	
第20005	3	遺構95	N32-99-7	石鏃	磨製石	17.2	17.1	5.4	1.90	
第20006	3	遺構95	N33-21-2	石鏃	チャート	18.8	13.7	2.6	0.79	
第20007	3	遺構95	N34-35-19	石鏃	チャート	26.3	26.2	3.9	1.70	
第20008	3	遺構95	N33-74-2	石鏃	チャート	17.8	17.8	3.3	1.28	
第20009	3	遺構95	N33-99-72	石鏃	チャート	36.7	17.1	4.0	1.80	
第20010	3	遺構95	N33-41	石鏃	チャート	25.1	14.7	3.4	0.90	
第20011	3	遺構95	N38-11-1	石鏃	チャート	22.4	18.6	4.0	1.80	
第20012	3	遺構95	N33-08-38	石鏃	チャート	18.4	20.5	3.8	1.30	
第20013	13	遺構95	L35-23-1	石鏃	チャート	17.6	17.6	3.3	0.90	
第20014	15	遺構95	M33-99-3	石鏃	チャート	25.7	18.7	3.1	0.80	
第20015	22	遺構95	表層	磨製石	14.1	13.1	3.9	0.50	高塚山跡小	
第20016	3	遺構95	96B167-1	石鏃	チャート	28.7	17.1	3.7	1.60	
第20017	26	遺構95	O33-23-2	石鏃	チャート	14.2	11.3	2.9	0.80	
第20018	26	遺構95	O33-48-1	石鏃	チャート	23.7	13.8	3.8	1.60	
第20019	3	遺構95	N34-34-9	石鏃	チャート	32.1	22.7	5.1	4.54	
第20020	3	遺構95	N34-00-3	石鏃	緑頁片岩	39.5	38.2	9.2	18.80	北沢東遺小
第20021	13	遺構95	L35-33-1	打製石斧	火山岩	66.1	83.2	22.8	205.79	
第20022	3	遺構95	96077-1	打製石斧	ホルンフェルス	131.2	70.5	30.7	244.20	

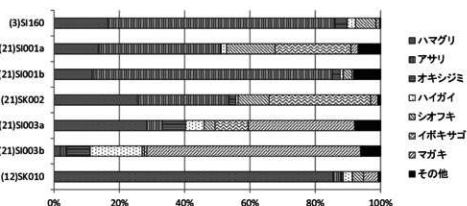
採出番号	調査区	掘削時遺構名	遺物番号	図様	石材	最大径 [mm]	最大幅 [mm]	最大厚 [mm]	重量 [g]	備考
00200223	13	遺構Ⅱ	L34-39-1	打撃石斧	ホルンフェルス	71.4	69.0	31.8	164.0	
00200224	3	遺構Ⅱ	N33-82-38	打撃石斧	ホルンフェルス	84.7	59.0	33.1	184.9	
00200225	29	遺構Ⅱ	11ドノン-1	打撃石斧	珪石	96.0	72.1	28.3	170.0	
00200226	13	遺構Ⅱ	L34-34-1	打撃石斧	ホルンフェルス	95.4	72.4	30.2	159.0	多量産
00200227	16	遺構Ⅱ	現場-植-1	打撃石斧	火山岩	65.5	61.8	17.8	65.0	
00200228	15	遺構Ⅱ	L33-97-1	打撃石斧	珪石	80.8	56.8	19.7	91.10	
00200229	2	遺構Ⅱ	8602T-1	打撃石斧	ホルンフェルス	49.4	59.7	12.5	36.20	
00200230	12	遺構Ⅱ	002-2	打撃石斧	ホルンフェルス	68.1	68.8	16.1	96.70	中・近世遺構Ⅱ出土
00200231	3	遺構Ⅱ	N34-02-120	磨石	珪石	86.7	62.9	16.7	82.20	
00200232	3	遺構Ⅱ	N33-50-19	打撃石斧	ホルンフェルス	110.2	49.3	23.7	121.0	
00200233	3	遺構Ⅱ	M34-07-2	打撃石斧	ホルンフェルス	89.5	54.9	16.0	88.40	
00200234	13	遺構Ⅱ	L34-03-1	打撃石斧	火山岩	75.8	62.1	15.8	92.00	
00200235	13	遺構Ⅱ	L34-33-1	打撃石斧	珪石	67.2	58.7	18.9	93.30	
00200236	3	遺構Ⅱ	表層-3	打撃石斧	火山岩	97.2	68.4	16.4	119.00	
00200237	3	遺構Ⅱ	N38-16-1	打撃石斧	火山岩	33.2	65.5	17.4	86.70	
00200238	13	遺構Ⅱ	8613T-1	打撃石斧	ホルンフェルス	49.4	42.6	8.8	22.00	
00200239	3	遺構Ⅱ	N34-64-5	打撃石斧	火山岩	64.6	38.2	21.5	93.80	
00200240	12	遺構Ⅱ	003-7	打撃石斧	ホルンフェルス	61.5	65.9	14.5	71.00	中・近世遺構Ⅱ出土
00200241	13	遺構Ⅱ	L33-96-1	打撃石斧	片麻岩	65.2	53.1	13.9	43.40	
00200242	3	遺構Ⅱ	M34-09-2	磨石	ホルンフェルス	53.6	54.4	13.3	42.60	
00200243	13	遺構Ⅱ	N34-92-1	打撃石斧	燧石	123.8	35.2	21.1	110.0	
00200244	13	遺構Ⅱ	L33-83-1	打撃石斧	片麻岩	100.2	52.8	20.6	152.80	青鉄鉱が顕大
00200245	3	遺構Ⅱ	表層	打撃石斧	緑色岩	96.5	55.2	22.1	179.50	
00200246	4	遺構Ⅱ	N33-72-12	磨石	燧石玄武岩	86.3	23.0	12.0	17.70	
00200247	3	遺構Ⅱ	M34-07-3	磨石	燧石片岩	99.7	41.5	18.9	22.94	
00200248	3	遺構Ⅱ	N38-12-26	磨石	珪石	49.4	49.4	19.4	82.70	
00200249	3	遺構Ⅱ	N33-35-2	磨石	緑色岩	125.7	54.2	23.8	242.90	
00200250	3	遺構Ⅱ	N34-02-124	磨石	緑色燧石	130.2	45.9	33.7	243.41	
00200251	3	遺構Ⅱ	N38-34-1	磨石	緑色燧石	101.2	50.1	22.9	204.15	
00200252	3	遺構Ⅱ	N34-34-7	磨石	火山岩	57.5	52.0	22.5	117.16	
00200253	3	遺構Ⅱ	N38-12-27	磨石	珪石	65.3	33.2	24.6	194.28	
00200254	15	遺構Ⅱ	L34-07-1	磨石	燧石玄武岩	71.7	56.4	26.6	147.28	
00200255	12	遺構Ⅱ	表層	磨石	燧石	138.8	64.5	40.2	370.08	
00200256	13	遺構Ⅱ	L34-04-1	磨石	緑色岩	70.5	56.5	33.4	234.22	
00200257	12	遺構Ⅱ	003-1	磨石	燧石	89.1	47.7	29.8	198.90	中・近世遺構Ⅱ出土
00200258	3	遺構Ⅱ	8618T-1	磨石	燧石	61.1	50.6	16.7	62.87	
00200259	13	遺構Ⅱ	N34-96-1	磨石	緑色岩	72.8	64.0	31.5	202.08	
00200260	3	遺構Ⅱ	N38-85-1	磨石	珪石	84.3	54.1	11.1	89.80	
00200261	3	遺構Ⅱ	N34-24-116	磨石	燧石	97.2	78.5	29.0	270.90	
00200262	3	遺構Ⅱ	N34-46-26	磨石	珪石	83.9	73.4	33.1	186.61	
00200263	3	遺構Ⅱ	M34-09-18	磨石	珪石	171.5	94.5	74.5	1632.80	
00200264	3	遺構Ⅱ	N33-80-56	磨石	ホルンフェルス	72.9	54.3	29.3	147.00	
00200265	13	遺構Ⅱ	L34-34-1	磨石	火山岩	88.9	47.2	18.6	104.30	
00200266	3	遺構Ⅱ	N33-80-183	磨石	流紋岩	94.0	80.0	34.0	281.81	
00200267	13	遺構Ⅱ	L38-83-1	磨石	火山岩	124.6	66.3	59.7	735.49	
00200268	3	遺構Ⅱ	N33-33-25	磨石	燧石	83.4	63.8	37.4	283.28	
00200269	3	遺構Ⅱ	8616T-1	磨石	珪石	99.8	84.3	35.3	347.89	
00200270	38	遺構Ⅱ	C33-16-2	磨石	珪石	79.0	62.5	33.5	178.82	
00200271	13	遺構Ⅱ	L34-23-1	磨石	火山岩	99.5	63.5	36.0	333.58	
00200272	3	遺構Ⅱ	表層	スタンプ磨石	火山岩	89.0	63.2	45.0	338.43	
00200273	3	遺構Ⅱ	N33-40-58	磨石	火山岩	81.2	83.0	48.3	473.56	
00200274	13	遺構Ⅱ	L34-24-1	磨石	燧石	66.5	81.6	43.8	383.91	
00200275	3	遺構Ⅱ	M33-09-63	磨石	火山岩	84.7	61.2	52.1	424.43	
00200276	13	遺構Ⅱ	L34-23-1	磨石	石炭連岩	26.1	72.9	39.0	304.00	
00200277	25	遺構Ⅱ	SR-009-1	磨石	燧石玄武岩	100.5	56.0	32.3	320.00	中・近世遺構Ⅱ出土
00200278	25	遺構Ⅱ	SR-009-1	磨石	珪石	117.0	53.0	39.0	388.75	中・近世遺構Ⅱ出土
00200279	3	遺構Ⅱ	N33-42-20	磨石	火山岩	105.5	61.5	35.5	374.61	
00200280	3	遺構Ⅱ	N34-20-23	磨石	火山岩	111.9	61.1	46.0	424.43	
00200281	21	遺構Ⅱ	C37-02-02	磨石	珪石	136.5	66.0	39.3	311.29	
00200282	2	遺構Ⅱ	8615T-1	磨石	珪石	92.0	69.5	47.0	388.07	
00200283	3	遺構Ⅱ	N34-02-123	磨石	火山岩	39.5	52.5	30.4	206.76	
00200284	13	遺構Ⅱ	L34-01-1	石棒	燧石片岩	116.0	32.4	29.7	180.37	
00200285	13	遺構Ⅱ	L34-33-1	棒状石製品	燧石	244.2	38.4	17.2	307.89	
00210286	21	遺構Ⅱ	N33-82-283	棒状石製品	燧石	85.1	44.1	24.4	120.61	
00210287	3	遺構Ⅱ	8613T-1	棒状石製品	燧石	53.4	51.3	20.8	17.47	
00210288	3	遺構Ⅱ	N33-82-9	棒状石製品	燧石	53.3	24.9	24.9	9.37	
00210289	3	遺構Ⅱ	N34-22-233	棒状石製品	燧石	89.9	52.8	28.6	25.60	
00210290	13	遺構Ⅱ	L33-92-1	棒状石製品	燧石	67.6	50.1	33.8	39.02	
00210291	13	遺構Ⅱ	L33-92-1	棒状石製品	燧石	27.6	49.1	26.8	28.52	
00210292	3	遺構Ⅱ	N33-94-2	棒状石製品	燧石	86.3	37.5	32.6	37.10	
00210293	2	遺構Ⅱ	8602T-1	棒状石製品	燧石	109.5	73.2	42.0	158.42	
00210294	3	遺構Ⅱ	N34-34-2	石皿	火山岩	146.0	190.0	48.0	536.50	
00210295	3	遺構Ⅱ	N34-03-37	石皿	火山岩	84.5	113.0	55.5	318.21	
00210296	3	遺構Ⅱ	8611T-1	石皿	燧石片岩	121.5	100.0	46.0	800.30	
00210297	12	遺構Ⅱ	8918A-6	石皿	火山岩	102.0	98.0	42.0	470.03	中・近世遺構Ⅱ出土
00210298	13	遺構Ⅱ	L34-02-1	石皿	火山岩	124.0	98.2	62.0	644.00	
00210299	3	遺構Ⅱ	N33-92-105	石皿	火山岩	135.5	96.0	72.5	703.90	
00210300	3	遺構Ⅱ	N33-83-7	石皿	火山岩	140.0	130.0	86.0	1015.30	

第8表 縄文時代貝サンプル一覧

No.	遺構名	遺構種別	時期	採取法	cut	採取量 (g)	分析量 (g)	備考
1	(21)S001a	住居跡	黒浜	コラム	6	17940	24.9	
2	(21)S001b	住居跡	黒浜	コラム	4	10,180	12.3	
3	(21)S003a	住居跡	黒浜	コラム	6	23020	30.3	
4	(21)S003b	住居跡	黒浜	コラム	6	23030	32.4	
5	(3)SI160	住居跡	黒浜	一括	-	-	-	
6	(21)SK002	土坑	黒浜	コラム	8	17590	23.8	
7	(12)SK010	土坑	中期末~後期 初頭	一括	-	-	-	
合計						91,760	123.7	

第9表 出土貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Sachium) molliferrum</i>
	中腹足目	ウミナナ科	ウミナナ	<i>Batillaria multiformis</i>
		ウミナナ科	ウミナナ属	<i>Batillaria</i> sp.
	新腹足目	タマガイ科	フメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>
		アタキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>
閉足綱	ツノガイ目	ツノガイ科	ツノガイ	<i>Antalis weinkonffii</i>
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	<i>Tagillarca granulata</i>
			サルボウガイ	<i>Scapharca subcrenata</i>
	ウダイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
			イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	<i>Maetra quadrangularis</i>
			バカガイ	<i>Maetra chinensis</i>
		ニッコウガイ科	イチョウシラトリ	<i>Merica capoides</i>
		マテガイ科	マテガイ	<i>Solen strictus</i>
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapesium litatum</i>
		シジミ科	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
	マルスダレガイ科	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	
		アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	
ハマグリ		<i>Meretrix lusoria</i>		
オキシジミ		<i>Cyclina sinensis</i>		
オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya arenaria onogai</i>	
計		16科	22種	



第212図 貝種組成グラフ

第10表 出土具類同定結果

1 (21)SI001a

種 名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合 計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキヤゴ	20	41.1	174	48.7	79	21.8	2	1.1	0.0	0.0	1	5.0	278	23.1
ウニニナリ	1	1.8	3	0.8	0.0	0.0	1	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	5	0.4
ツメタガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1
アカニシ	0.0	0.0	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1
アラムシロコヤ	0.0	0.0	1	0.3	1	0.3	0.0	0.0	1	0.4	0.0	0.0	3	0.3
ツノガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.4	0.0	1	0.1	0.1
ハイガヤ	1	1.8	5	1.4	3	0.8	4	2.3	5	2.2	1	5.0	19	1.6
サルスガヤ	1	1.8	1	0.3	1	0.3	1	0.6	1	0.4	0.0	0.0	5	0.4
マダガ	3	5.4	7	2.0	12	3.4	1	0.6	3	1.3	0.0	0.0	26	2.2
イタガヤ年輪	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
シオフネ	6	10.7	33	4.2	78	21.8	42	23.9	33	15.3	2	10.0	179	14.9
バカガヤ	1	1.8	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2	0.2
イナウシクワトリガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	5.0	1	0.1
マダガヤ	0.0	2	0.6	1	0.3	2	1.1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	5	0.4
ウネキントマヤガヤ	0.0	3	0.8	6	1.7	2	1.1	1	0.4	0.0	0.0	0.0	12	1.0
ササミガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
ヤマトシジミ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
アザリ	9	16.1	29	22.1	122	34.2	93	52.8	130	66.8	13	75.0	448	37.5
ハマダリ	11	19.6	65	18.2	54	15.1	28	15.9	4	1.7	0.0	0.0	162	13.6
サキシジミ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2	0.9	0.0	0.0	2	0.2	
オオノガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
合 計	90	100	357	100	357	100	176	100	259	100	30	100	1105	100

2 (21)SI001b

種 名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		合 計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキヤゴ	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.3	3	2.0	2	0.3
ウニニナリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ツメタガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アカニシ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アラムシロコヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ツノガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ハイガヤ	0.0	0.0	3	1.6	1	2.0	4	1.0	0.0	0.0
サルスガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
マダガ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イタガヤ年輪	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
シオフネ	0.0	6	3.4	4	2.2	1	2.0	11	2.7	0.0
バカガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イナウシクワトリガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
マダガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ウネキントマヤガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ササミガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ヤマトシジミ	0.0	34	19.3	0.0	0.0	34	8.3	0.0	0.0	0.0
アザリ	5	71.4	129	74.1	139	76.4	30	61.2	303	73.3
ハマダリ	2	28.6	3	1.7	33	18.1	10	20.4	48	11.7
サキシジミ	0.0	2	1.1	2	1.1	6	12.2	10	2.4	0.0
オオノガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合 計	7	10.0	174	100	182	100	49	100	412	100

3 (21)SI003a

種 名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合 計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキヤゴ	0.0	0.0	0.0	0.0	13	7.9	6	1.9	77	21.2	21	9.9	127	10.2
ウニニナリ	0.0	8	5.4	0.0	0.0	0.0	2	0.6	1	0.3	1	0.5	4	0.3
ツメタガヤ	0.0	0.0	0.0	1	0.5	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1	
アカニシ	0.0	1	0.7	1	0.5	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4	0.3
アラムシロコヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
ツノガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
ハイガヤ	2	9.5	9	6.1	6	3.1	36	11.7	1	0.3	16	7.5	70	5.6
サルスガヤ	0.0	1	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1	
マダガ	4	19.0	28	18.9	25	13.0	62	20.1	162	44.4	125	58.7	400	32.6
イタガヤ年輪	0.0	0.0	2	1.0	3	1.0	1	0.3	1	0.5	7	0.6	13	1.0
シオフネ	1	4.8	8	5.4	7	3.6	11	3.6	12	3.3	3	1.4	42	3.4
バカガヤ	0.0	0.0	0.0	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1	
イナウシクワトリガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
マダガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	7	2.3	16	4.4	8	3.8	31	2.5	62	5.0
ウネキントマヤガヤ	0.0	0.0	0.0	0.0	4	1.3	7	1.9	4	1.0	15	1.2	30	2.4
ササミガヤ	0.0	0.0	1	0.5	1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2	0.2
ヤマトシジミ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
アザリ	1	4.8	12	8.1	14	7.3	11	3.6	7	1.9	13	6.1	58	4.7
ハマダリ	8	38.1	36	27.8	50	48.2	132	42.7	54	14.9	12	5.6	355	28.5
サキシジミ	5	23.8	18	12.2	20	11.9	25	7.1	15	4.1	7	3.3	90	7.2
オオノガヤ	0.0	7	4.7	4	2.1	11	3.6	9	2.5	2	0.9	33	2.6	
合 計	23	100	148	100	193	100	309	100	363	100	253	100	1247	100

4 (2)SI003b

種 名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキヤゴ	00	3	32	1	03	00	1	04	1	07	6	07		
ウミニナ科	00	1	11	1	05	5	28	00	00	00	7	09		
フメヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
アカニシ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
アラムシロヤゴ	00	00	00	2	10	00	00	00	00	00	2	02		
ソノヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
ハイヤゴ	00	13	137	32	251	11	62	18	101	37	250	131	159	
ヤルガセ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
マダキ	14	779	60	963	119	575	140	791	130	739	73	493	509	655
イボヤゴ年輪	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
シオヤク	00	1	11	00	00	1	06	00	00	4	27	6	07	
バカヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
イチョウシクリヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	1	07	1	01		
マダヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
ウネキントマヤゴ	3	367	4	43	9	43	4	36	10	56	9	61	39	47
カサミヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	07	1	01	
ヤマトンジ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
アサリ	1	56	5	53	7	34	2	11	00	1	07	16	19	
ハマダリ	00	4	42	5	24	1	06	1	06	5	34	16	19	
ネキシジミ	00	1	11	11	53	13	73	18	101	16	108	99	72	
オオノヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00		
合 計	18	109	90	100	207	100	177	100	178	100	160	100	823	100

5 (3)SI160

種 名	一 括	
	個体数	(%)
イボキヤゴ	00	
ウミニナ科	00	
フメヤゴ	00	
アカニシ	00	
アラムシロヤゴ	00	
ソノヤゴ	00	
ハイヤゴ	7	17
ヤルガセ	00	
マダキ	5	12
イボヤゴ年輪	00	
シオヤク	27	64
バカヤゴ	00	
イチョウシクリヤゴ	00	
マダヤゴ	1	02
ウネキントマヤゴ	00	
カサミヤゴ	00	
ヤマトンジ	00	
アサリ	206	704
ハマダリ	70	163
ネキシジミ	15	35
オオノヤゴ	00	
合 計	420	100

7 (12)SK1010

種 名	一 括	
	個体数	(%)
イボキヤゴ	00	
ウミニナ科	00	
フメヤゴ	00	
アカニシ	00	
アラムシロヤゴ	00	
ソノヤゴ	00	
ハイヤゴ	16	29
ヤルガセ	00	
マダキ	25	45
イボヤゴ年輪	00	
シオヤク	19	34
バカヤゴ	00	
イチョウシクリヤゴ	2	04
マダヤゴ	00	
ウネキントマヤゴ	1	02
カサミヤゴ	00	
ヤマトンジ	00	
アサリ	14	25
ハマダリ	477	855
ネキシジミ	3	05
オオノヤゴ	1	02
合 計	506	100

6 (2)1SK002

種 名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		合計		
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	
イボキヤゴ	19	267	00	00	120	320	135	297	122	311	32	284	29	00	3	453	541	310	
ウミニナ科	00	00	2	10	1	03	00	00	1	03	00	00	00	00	00	00	00	4	02
フメヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
アカニシ	00	00	00	00	1	03	00	00	00	00	00	00	00	00	1	01	00	1	01
アラムシロヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	1	03	1	09	00	00	00	0	00	00	2	01
ソノヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	01	00	1	01
ハイヤゴ	00	3	13	2	05	4	09	1	03	1	09	1	07	00	00	00	12	07	
ヤルガセ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
マダキ	4	63	4	29	5	13	10	22	5	13	3	28	8	56	00	39	22	00	
イボヤゴ年輪	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
シオヤク	8	125	15	75	22	58	45	99	30	90	9	83	30	258	1	143	165	95	
バカヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	09	00	00	00	00	1	01	
イチョウシクリヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
マダヤゴ	00	00	00	1	03	2	04	1	03	00	00	1	07	00	00	00	5	03	
ウネキントマヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
カサミヤゴ	00	1	03	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	01	00	1	01
ヤマトンジ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
アサリ	15	234	53	366	116	307	136	278	107	276	27	284	45	269	2	264	469	281	
ハマダリ	00	00	39	196	105	278	124	273	106	273	31	284	25	174	1	143	446	256	
ネキシジミ	3	47	2	10	4	11	8	18	9	23	4	37	6	42	00	36	21	00	
オオノヤゴ	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0	00
合 計	64	109	190	100	328	100	454	100	388	100	109	100	144	100	7	100	1743	100	

第4章 奈良・平安時代の遺構と遺物

第1節 概要 (第213図)

奈良・平安時代の遺構の内訳は、竪穴住居跡4軒、土坑1基、埋設土器1基である。そのうち竪穴住居跡3軒、土坑1基、埋設土器1基が東へ舌状に突出する台地の北側先端部に立地する。調査次としては3・6・7・26次調査区が主に該当する。ただし全体に地山の削平が著しく、遺構が失われてしまった可能性も考えられる。西端部の34次調査区には1軒のみ竪穴住居跡が検出されているが、これは西側に隣接する前平井遺跡の集落の一部をなすものと考えられる。

図面の縮尺は、竪穴住居跡の全体図が1/80、竪穴住居跡のカマドと土坑類は1/40である。遺物の実測図は、器形復元ができる土器は1/4、土器の破片及び土製品は1/3である。出土土器に関する観察所見は第11表に掲載した。出土遺物の時期については、(財)千葉県教育振興財団『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器時代~奈良・平安時代編)-』(2010)における、栗田則久氏による奈良・平安時代の土器編年を参考としている。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

(26)S001 (第214・215図、図版105)

形状・規模 長軸は4.48m、短軸は4.4mである。平面形は方形を呈する。主軸方位はN-30°-Wである。確認面からの深さは32cm~38cmである。確認面の面積は14.74㎡、床面積は11.35㎡である。

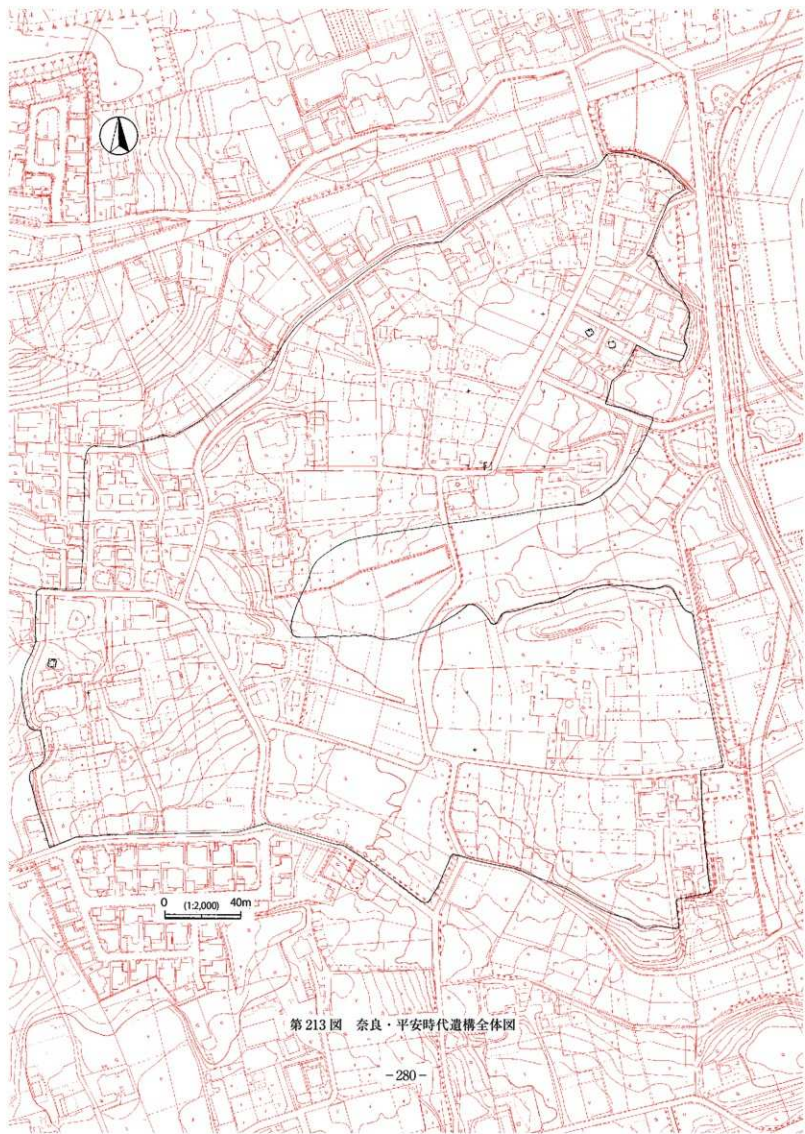
床面・壁溝 床面は概ね平坦であるが、踏み固められてはいない。壁溝は東西壁で検出され、一部南北壁まで巡っている。

覆土 上層は炭化物粒・焼土粒を含む黒色土、黒褐色土が主体である。下層は炭化材や黒灰色土の堆積がみられる。土層中に、炭化物粒・焼土粒、炭化材が含まれ、焼土範囲が遺構内全体に広がっていることから、焼失住居の可能性がある。

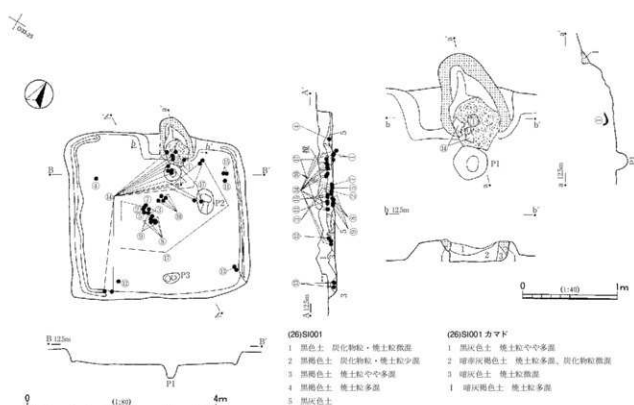
柱穴・ピット 柱穴は、カマドの手前で1基(P1)、東壁側で1基(P2)、南壁側で1基(P3)が検出されている。P1は、径36cm×32cm、深さ28.5cmである。P2は、径52cm×36cm、深さ20cmである。P3は径20cm×32cmで、2箇所の変径がみられ、深さは西側が11.8cm、東側が7cmである。P2は主柱穴の可能性があるが、これに伴うものが検出されていないため明確ではない。

カマド 北東辺 北壁や東寄りで1基が検出された。遺存は比較的良好である。火床部は床面とほぼ同じ高さで窪みは浅い。上部に焼土主体の土層の堆積がみられる。

出土遺物 1~8はロクロ土器器坏、9・10は内面に炭素吸着による黒色処理・ミガキが施されたロクロ土器器坏、11はロクロ土器器碗である。1~8は回転糸切未調整で、ロクロ目が明瞭に残り、体部下端のヘラケズリが施されていない。2~7は内外面が黒く炭化しているが、黒色処理によるものではなく、住居焼失時に土器が一括廃棄された際に付着したものである。4は底部が高台状になるものである。11は高台が付いている。12は須恵器甕の口縁部の破片で、横位の櫛描き波状文が施文されている。13は須恵



第213図 奈良・平安時代遺構全体図



第214図 (26)SI001住居跡

器壁胴部の破片である。外面にタタキ目後ナデの調整、内面に指圧痕がみえる。いずれも胎土中に小石を多く含む。色調は12が黒灰色、13が暗灰色を呈する。14はカマド内で出土した土師器の甕である。2/3程度遺存するもので、口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面上半から下半にかけて縦位のヘラケズリ、胴部外面下半から底部にかけて横位のヘラケズリ、胴部内面に横位のヘラケズリ、底面にヘラケズリの後、ヘラナデが施されており、丁寧に成形されている。胎土には雲母粒、砂粒を含んでいる。15は小型の土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部よりも胴部の径が大きい。内外面ともに胴部に横位のヘラケズリが施されている。16・17は土師器甕の底部の破片である。16は外面に縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。胎土中に雲母粒を少量含んでいる。17は外面にヘラナデ、内面にユビナデがみられる。胎土中に少量の長石粒、輝石粒を含んでいる。18は土師器甕の底部の破片である。内外面にヘラナデがみられる。胎土中に砂粒、少量の雲母粒を含んでいる。

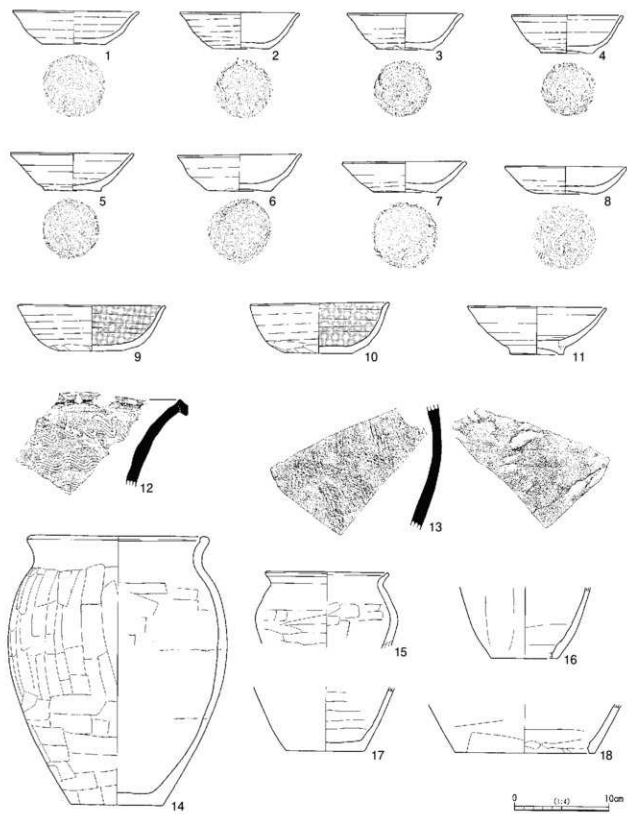
1～10、13が床面に近い位置から出土している。9、10は出土遺物の中でも若干古く、これら以外が本遺構の時期を示す遺物であると考えられる。

(26)SI002 (第216図、図版106)

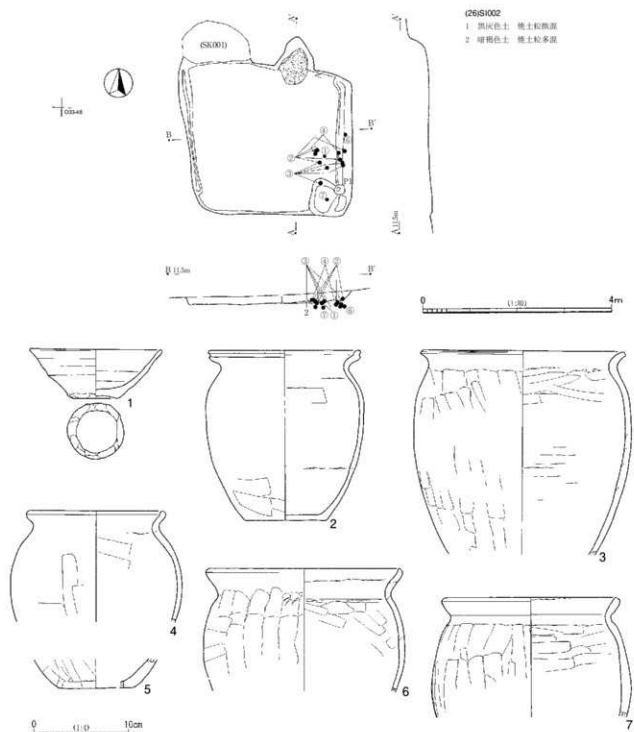
形状・規模 長軸は3.8m、短軸は3.6mである。平面形は方形を呈する。確認面からの深さは16cm～20cmである。主軸方位はN-5°-Wである。確認面の面積は13.68㎡、床面積は9.48㎡である。縄文時代の土坑である(26)SK001が北壁隅に重複して検出されている。

床面・壁溝 床面は概ね平坦であるが、東側から西側にかけて緩やかに傾斜している。壁溝は、東西壁のみ検出されている。

覆土 上層で焼土粒を微量に含む黒灰色土、床面に近い下層で焼土粒を多量に含む暗茶褐色土の堆積がみ



第 215 図 (26)SI001 住居跡出土遺物



第216図 (26)SI002住居跡、出土遺物

られる。

柱穴・ピット 主柱穴は検出されなかった。P1が南東隅の浅い窪みと壁溝内に重複して検出されている。径20cm、深さは18cmで、位置関係から壁柱穴の可能性はある。

カマド 北壁北東寄りに位置する。袖は遺存せず、火床部がカマド内に確認されている。カマドの手前付近に焼土塊が固まって検出されており、カマドから流失した可能性がある。

出土遺物 1はロクロ土師器杯、2～7は土師器甕である。1は底部が低い高台状を呈しているもので、ほぼ破損のない完形の坏である。底部回転ヘラ切り後に、高台状を呈する部分を粗雑にヘラナデ調整している。色調は外面が黄褐色で、内面は褐色である。胎土中には多量の白色粒、少量の輝石粒、雲母粒が含まれる。2は口縁部から底部まで1/2程度遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、胴部外面下半に横位のヘラケズリ、底部外面及び胴部内面にヘラナデが施されている。色調は内外面ともに赤褐色である。胎土中には少量の輝石粒、多量の小石を含む。3は口縁部から胴部にかけて全体の2/3程度が遺存する。口縁部内外面はナデ、外面の口縁部から胴部上半にかけては上から下方向への縦位のヘラケズリ、胴部下半は下から上への縦位のヘラケズリ、頸部内面には横位のヘラナデがみえる。色調は内外面ともに明赤褐色である。胎土中には少量の雲母粒、輝石粒、多量の白色砂粒が含まれる。4は口縁部から胴部にかけて1/4程度が遺存する。内外面ともに器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、胴部内外面にヘラケズリがみえる。色調は外面が黄褐色、内面が褐色である。胎土中には多量の砂粒が含まれる。5は底部の破片である。外面にヘラケズリ、内面にヘラナデがみえる。色調は外面が黄褐色、内面は黄灰褐色である。胎土中には雲母粒、砂粒が含まれる。6は口縁部から胴部にかけて全体の1/5程度が遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、口縁部の内外面にヨコナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリ、胴部内面にヘラナデが施されている。色調は外面が暗褐色、内面は明赤褐色である。胎土中には輝石粒、多量の白色砂粒が含まれる。7は口縁部から胴部にかけて全体の1/5程度が遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、口縁部の内外面ヨコナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリ、胴部内面にヘラナデが施されている。色調は外面が明褐色、内面はにぶい黄褐色である。胎土中に輝石粒、雲母粒、多量の砂粒が含まれる。

1～4が床面に近い位置から出土している。これらの遺物が本遺構の時期を示す遺物であろう。

(6)SIO30 (第217図、図版21・106)

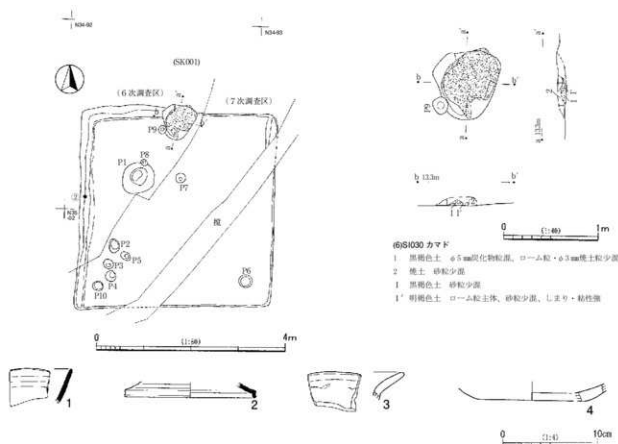
形状・規模 長軸は4.28m、短軸は4.16mである。平面形は方形を呈する。確認面からの深さは37cm～40cmである。主軸方位はほぼ北である。確認面の面積は約17.8㎡、床面積は15.2㎡である。検出遺構内の北東から南西にかけて斜め方向に近世の溝による攪乱があり、一部の規模は推定である。

床面・壁溝 遺存部分は概ね平坦である。壁溝は北側カマド部分から西側で検出されている。また、北東隅の一部でも検出されているが、この箇所については遺存状況が悪く不明確である。

柱穴・ピット ピットは10基検出されている。このうち、主柱穴の可能性があるものは北西側で検出されたP1である。P1の規模は径62cm、深さ32cmである。径16cm×12cm、深さ8cmの規模のP8が重複し、P1の方が古い。このほか、西壁端部で5基、南東側で1基検出されている。西壁端部で検出されたP2～P5、P10は、径20cm前後、深さ10cm前後の同規模のもので、主柱穴の可能性は低い。また、南東側で検出されたP6の規模は、径28cm、深さ8cmであり、これについても主柱穴の可能性は低い。このほか、P9がカマドの南西部に重複して検出されている。深さ10cmと浅く、カマドよりも新しいものとみられるが、機能は不明である。

カマド 北壁中央に位置する。煙道部の突出は小さい。構築材の山砂は崩落・流失により一つにまとまっており、形状をとどめていない。底面は浅い窪みがみられるが、赤化した範囲はみられない。

出土遺物 1は須恵器杯、2は須恵器蓋、3・4は土師器甕である。1は口縁部の小破片である。内面は磨耗していて調整が不明であるが、外面にはロクロナデがみえる。色調は外面が暗灰色、内面は白灰色で



第217図 (6)SI030住居跡、出土遺物

ある。胎土中には砂粒が含まれる。2は口縁部の小破片である。内外面ともにロクロナデがみえる。色調は内外面ともに灰白色である。胎土中には白色砂粒が含まれる。出土位置は東側の壁溝内である。3は東側の壁溝内から出土した口縁部の小破片で、内外面ともに摩耗している。調整がみえるところでは、口縁部外面にナデが施されている。胎土中には多量の雲母粒、砂粒が含まれる。4は底部の小破片で内外面ともに摩耗し、調整は不明である。色調は内外面ともに灰黄褐色である。胎土中には少量の礫石粒、砂粒が含まれる。

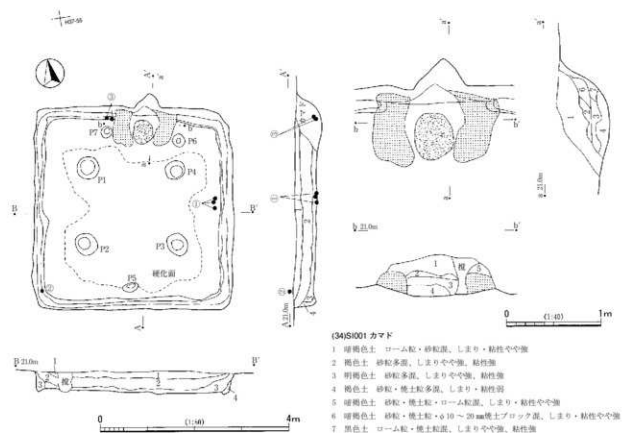
(34)SI001 (第218図、図版21・106)

形状・規模 長軸は4.6m、短軸は4.28mである。平面形はほぼ方形を呈する。確認面からの深さは36cm～44cmである。主軸方位はN-7°-Eである。確認面の面積は19.32㎡、床面積は14.74㎡である。

床面・壁溝 床面は概ね平坦である。壁際を除いた範囲で広く硬化している。壁溝は全周する。

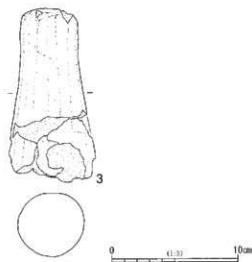
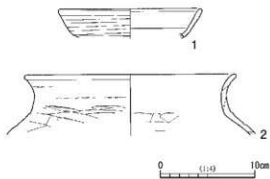
覆土 上層は、ローム粒・ロームブロックを含む黒色土主体、下層は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が主体である。

柱穴・ピット 柱穴は7基検出されている。このうち主柱穴となる4基は、P1が深さ50cm、P2が深さ55cm、P3が深さ41cm、P4が深さ48cmである。南壁寄りの中央部で検出されたP5は、径30cm×35cm、深さ50cmのピットである。カマドに対向する位置であり、出入口ピットの可能性が考えられる。P6・7はカマドの脇で検出された小ピットで、西側が40cm、東側が40cmの深さのものである。この位置からみて、カマドの上屋構造に伴う柱穴になる可能性がある。



(34)SI001

- 1 黒色土 ローム粘少量、しまり・粘性弱
- 2 黒色土 ローム粘・ $\phi 5 \sim 10$ mmロームブロック混、しまり・粘性やや強
- 3 暗褐色土 ローム粘・ $\phi 5 \sim 10$ mmロームブロック混、しまり・粘性やや強
- 4 褐色土 ローム粘・ $\phi 10 \sim 20$ mmロームブロック多量、しまり・粘性弱



第218図 (34)SI001住居跡、出土遺物

カマド 北壁は中央に位置する。両袖は山砂を主体として構築されている。カマド内に確認された火床部は、床面とほぼ同じ高さで窪みは浅い。カマド袖部分にも壁溝が走り、カマドはその上部に構築されている。カマド内堆積土は、上層はしまりの強い褐色土が主体であり、下層は焼土粒を含む土層がみられる。

出土遺物 1は須恵器坏、2は土師器甕、3は土製支脚である。1は底面のみ欠損しているが、口縁部から底部までほぼ遺存している。色調は外面が暗灰色、内面は暗灰白色である。胎土中には細砂粒が含まれる。出土位置は床面近くである。2は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部内外面にナデ、頸部外面にヘラケズリ、頸部内面にヘラナデがみえる。色調は内外面ともに暗黒褐色である。胎土中には少量の輝石粒、多量の砂粒が含まれる。3はカマドの西側で、北側の壁溝から出土した。使用による被熱等によるものと考えられるが、遺存状態は悪く下端部を欠いている。胎土中には白色砂粒が多く含まれる。

2 土坑・埋設土器

(3)SK193 (第219図、図版21)

状況 平面形はやや不整な長楕円形である。長径は1.2m、短径は0.94m、確認面からの深さは10cm～15cmである。底面の平面形態はやや不整形であり、南西側に最底面がある。断面で見ると多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦な底面をしている。長軸方位はN-79°-Wである。覆土は、上層はローム粒を多く含む暗褐色土、下層はローム粒を少量含むしまりの強い褐色土が主体である。

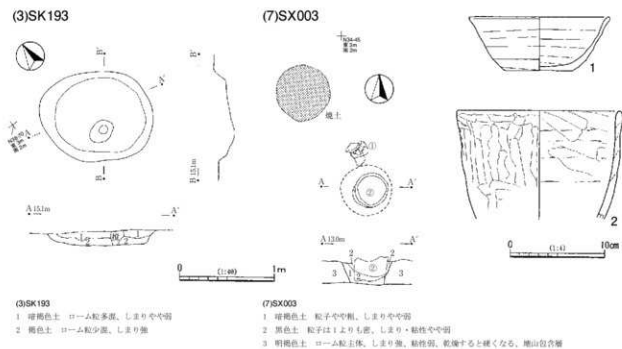
出土遺物 土師器の小破片のみで図示できるものはない。

(7)SX003 (第219図、図版21・106)

状況 北西側に円形の焼土溜まりを伴う土器埋設遺構である。円形の焼土溜まりは径58cm×56cmで、炉跡のような形状をしている。土器埋設箇所は径55cmの円形プランの掘込み内に2の土器が埋設されている。埋設土器が検出された確認面からの深さは30cmである。この付近から炭化物が検出されている。堆積土層で見ると、埋設土器を含む上層はしまりの弱い黒色土を主体とし、下層は上層より粒子の粗い暗褐色土を主体とする。堆積土に焼土は含まれていない。人為的な埋め戻しであったと判断される。

埋設されたと推定される2の土器の向きは、底部を上方向にする逆位であった。この埋設土器の北側で、1の坏が出土している。

出土遺物 1はロクロ土師器坏、2は土師器鉢である。1は口縁部から底面にかけて全体の2/3程度遺存し、全体的に摩耗している。底面には回転糸切離し後、回転ヘラケズリが施されている。また底部外面にはヘラケズリがみえる。色調は外面が明褐色、内面は褐色である。胎土中には赤色粒、少量の輝石粒、砂粒が含まれる。2は口縁部から胴部にかけて全体の2/3程度が遺存する。粘土紐の巻き上げによる成形がみえる。口縁部内外面及び胴部内面にナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリが施されている。色調は内外面ともに明褐色である。胎土中には少量の輝石粒、砂粒が含まれている。



第219図 (3)SK193土坑、(7)SX003埋設土器、出土遺物

第11表 奈良・平安時代遺物観察表

種目番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存度	計測値	調整	胎土	色調 外面 内面	焼成	時期	備考
					口径 器高 底径						
第215図 1	C6S1001	土師器	坏	ほぼ完成	13.2cm 3.5cm 6.8cm	体部内外面 ナデ	輝石粒少量、 砂粒	明褐色 明赤褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 2	C6S1001	土師器	坏	ほぼ完成	12.5cm 4.9cm 5.9cm	体部内外面 ナデ	輝石粒多量、 砂粒	黒褐色 黒褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 3	C6S1001	土師器	坏	8/9	12.0cm 4.0cm 6.0cm	体部内外面 ナデ	輝石粒少量、 砂粒	黒褐色 にぶい棕色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 4	C6S1001	土師器	坏	1/4	11.9cm 4.1cm 5.6cm	体部内外面 ナデ	雲母粒少量、 輝石粒少量、 砂粒	にぶい棕色 褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整、底部高台 状
第215図 5	C6S1001	土師器	坏	ほぼ完成	13.0cm 4.0cm 6.0cm	体部内外面 ナデ	輝石粒多量、 砂粒	黒褐色 黒褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 6	C6S1001	土師器	坏	8/9	13.1cm 4.0cm 6.8cm	体部外面ナ デ、内面底 部ナデ	輝石粒、砂粒	黒褐色 黒褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 7	C6S1001	土師器	坏	完成	12.9cm 3.3cm 6.6cm	体部内外面 ナデ	輝石粒多量、 砂粒	黒褐色 黒褐色	良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整
第215図 8	C6S1001	土師器	坏	ほぼ完成	12.7cm 2.9cm 6.3cm	体部外面ナ デ	輝石粒多量、 砂粒	灰黄褐色 灰黄褐色	やや良	V期	ロクロ、回転糸切 未調整、内面厚托
第215図 9	C6S1001	土師器	坏	8/9	15.3cm 4.9cm 6.7cm	内面黒色基 理、ミガキ、 底部ヘラケズ リ	輝石粒少量、 小石少量、砂 粒	明黄褐色 黒褐色	良	Ⅲ期	ロクロ
第215図 10	C6S1001	土師器	坏	8/9	14.3cm 5.5cm 7.2cm	口縁部外 面、内面黒 色処理、ミ ガキ、底部 ヘラケズリ	輝石粒少量、 雲母粒少量、 砂粒	黒色 黒褐色	やや良	Ⅲ期	ロクロ
第215図 11	C6S1001	土師器	碗	1/3	14.5cm 5.1cm 5.8cm	内外面体部 ナデ	輝石粒少量、 赤色粒少量、 砂粒	にぶい棕色	良	V期	ロクロ、底部高台
第215図 12	C6S1001	須恵器	甕	口縁部破片	— — —	内面ナデ	小石	黒灰色 黒灰色	良	—	磨き波伏文
第215図 13	C6S1001	須恵器	甕	体部破片	— — —	内面附庄 痕、外面タ タキ目ナデ	小石	暗灰色 暗灰色	良	—	
第215図 14	C6S1001	土師器	甕	2/3	18.2cm 28.5cm 9.6cm	口縁部内外 面ヨコナ デ、胴部内 外面、底部 外面ヘラケ ズリ	雲母粒、砂粒	赤褐色 赤褐色	良	V期	底面ヘラケズリ後、 ヘラナデ
第215図 15	C6S1001	土師器	甕	破片	(12.8cm (8.0cm)	胴部内外面 ヘラケズリ	輝石粒少量、 砂粒	棕色 赤褐色	良	V期	
第215図 16	C6S1001	土師器	甕	底部破片	(7.6cm (7.0cm)	外面ヘラケ ズリ、内面 ヘラナデ	雲母粒少量	にぶい棕色 にぶい黄褐色	良	V期	
第215図 17	C6S1001	土師器	甕	底部破片	— (6.8cm) 8.4cm	外面ヘラナ デ、内面ユ ビナデ	長石粒、輝石 粒少量	棕色 棕色	良	V期	底面ヘラケズリ
第215図 18	C6S1001	土師器	瓶	底部破片	— (5.2cm) 14.9cm	内外面ナ デ	砂粒、雲母粒 少量	にぶい黄褐色 にぶい棕色	良	V期	
第216図 1	C6S1002	土師器	坏	ほぼ完成	13.8cm 5.2cm 6.0cm	体部内外面 ナデ	白色粒多量、 輝石粒少量、 雲母粒少量	黄褐色 褐色	良	V期	ロクロ、底部高台 状、回転ヘラ切り 後、ヘラナデ
第216図 2	C6S1002	土師器	甕	1/2	(15.8cm 18.0cm (8.6cm)	胴部外面ヘ ラケズリ、 胴部内面ヘ ラナデ	輝石粒少量、 小石多量	赤褐色 赤褐色	やや良	Ⅳ～V期	器面一部厚托、底 面ヘラナデ

押出番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存度	計測値 口径 器高 底径	調整	胎土	色調 外面 内面	焼成	時期	備考
第216図 3	G6S002	土師器	甕	2/3	(21.2cm) [21.6cm] —	口縁部内外 面ヨコナ デ、胴部外 面ヘラケ ズリ、頸部 内面ヘラ ナデ、胴部 内面ヨコ ナデ	輝石、雲母粒 少量、白色砂 粒多量	明赤褐色 明赤褐色	良	V期	
第216図 4	G6S002	土師器	甕	1/4	(14.2cm) [11.8cm] —	胴部内外面 ヘラケズリ	砂粒多量	黄褐色 褐色	やや良	V期	器面一部摩耗
第216図 5	G6S002	土師器	甕	底部破片	— [11cm] [7.8cm]	外面ヘラケ ズリ、内面 ヘラナデ	砂粒、 雲母粒	黄褐色 黄灰色	良	V期	
第216図 6	G6S002	土師器	甕	1/5	(20.0cm) [13.0cm] —	口縁部内外 面ヨコナ デ、胴部外 面ヘラケ ズリ、胴部 内面ヘラ ナデ	輝石粒、白色 砂粒多量	暗褐色 明赤褐色	良	IV～V期	器面一部摩耗
第216図 7	G6S002	土師器	甕	1/5	(18.0cm) [12.6cm] —	口縁部内外 面ヨコナ デ、胴部外 面ヘラケ ズリ、胴部 内面ヘラ ナデ	輝石粒、雲母 粒、砂粒多量	明褐色 にぶい黄褐色	良	V期	器面一部摩耗
第217図 1	G6S030	須恵器	坏	口縁部破片	— — —	内面摩耗し 調整不明、 外面ウケ ロナデ	砂粒	暗灰色 白灰色	良	—	器面一部摩耗
第217図 2	G6S030	須恵器	蓋	口縁部破片	(13.6cm) (1.6cm) — —	内外面ロケ ロナデ	白色砂粒	灰白色 灰白色	良	—	
第217図 3	G6S030	土師器	甕	口縁部破片	— — —	口縁部外面 ナデ	雲母粒多量、 砂粒	明赤褐色 明赤褐色	やや良	—	器面一部摩耗
第217図 4	G6S030	土師器	甕	底部破片	— (2.0cm) (11.6cm)	内外面とも に摩耗し調 整不明	輝石粒少量、 砂粒	灰青褐色 灰青褐色	やや不良	—	
第218図 1	G4S001	須恵器	坏	底面のみ欠 損	15.0cm — —	内外面ロケ ロナデ	細砂粒	暗灰色 暗灰白色	良	—	
第218図 2	G4S001	土師器	甕	破片	22.0cm — —	口縁部内外 面ナデ、頸 部外面ヘ ラケズリ、 頸部内面 ヘラナ デ	輝石粒少量、 砂粒多量	暗黒褐色 暗黒褐色	良	V期	
第218図 3	G4S001	土製品	支脚	—	最大長 (18.4cm) 現存最大 幅7.8cm	—	輝石粒少量、 砂粒多量	全体赤褐色	やや不良	—	全体焼熟、下半部 欠損
第219図 1	G7SX003	土師器	坏	2/3	14.7cm 5.7cm 7.1cm	底部外面ヘ ラケズリ	赤色粒、輝石 粒少量、砂粒	明褐色 褐色	やや良	Ⅲ期	底面回転車切後、 回転ヘラケズリ、 外面にスス付着、 器面摩耗
第219図 2	G7SX003	土師器	鉢	2/3	17.0cm 11.5cm —	口縁部内外 面、胴部 内面ナデ、 胴部外面 ヘラケ ズリ	輝石粒少量、 砂粒	明褐色 明褐色	やや良	—	

●時期凡例：Ⅰ期(8世紀後半)、Ⅱ期(9世紀前半)、Ⅲ期(9世紀中葉)、Ⅳ期(9世紀後半)、Ⅴ期(9世紀末～10世紀初)
(備考：(財)千葉県教育振興財団|成山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-成山市思井瀬ノ内遺跡(旧石器時代～奈良・平安時代編)-J20108)

第5章 中・近世の遺構と遺物

第1節 概要(第220図)

中・近世の遺構の内訳は、台地整形区画1基、建物跡1基、方形竪穴状遺構1基、地下式坑3基、土坑・ピット33基、ピット群1か所、井戸1基、塚1基、土塁4基、溝状遺構32条である。東へ突出する2つの舌状地のうち、南側台地と台地奥の西側に集中して分布する区域があり、他に調査地全体から溝状遺構が検出されている。

南側調査区として記載した(12)調査区は南側台地の南東端に位置し、塚、土塁及びそれらに伴う溝状遺構や土坑、井戸などが検出されている。(21)調査区は南側台地の北側、小支谷の開口部に位置し、土塁とそれに伴う溝状遺構が検出されている。西側調査区として記載した(25)調査区東側は台地に陥入する小支谷の奥に位置し、小規模な台地区画整形と方形竪穴状遺構、地下式坑、粘土貼り土坑、小ピットなどが検出されている。(25)調査区西側と(30)調査区はひとまとまりの遺構群を2次に分けて調査したものである。東西及び南北に延びる溝状遺構を中心として、地下式坑、土坑が検出されている。それ以外の調査区では全体に散漫な分布である。

図面の縮尺は、掘立柱建物跡、遺構群などは1/80、地下式坑、土坑、井戸は1/40、溝状遺構、塚、土塁の平面図は1/200、断面図は1/100である。確認調査で終了した遺構については、検出された範囲のみの実測にとどめているものや、離れた地点で検出された遺構を推定線で繋げたものがある。遺物の実測図は、板碑、石臼は1/4、土器・陶磁器類、石製品は1/3、金属製品は1/2である。土製品は土製円盤など特に小さなものは1/2、それ以外は1/3である。銭貨は出土遺構や各地区の遺物挿図に表面のみ2/3で掲載し、第253・254図に1/1で表裏の拓影図をまとめて再掲載した。各遺物については遺構別ではなく調査区別に記載した。第12～14表に属性をまとめてある。

第2節 遺構と遺物

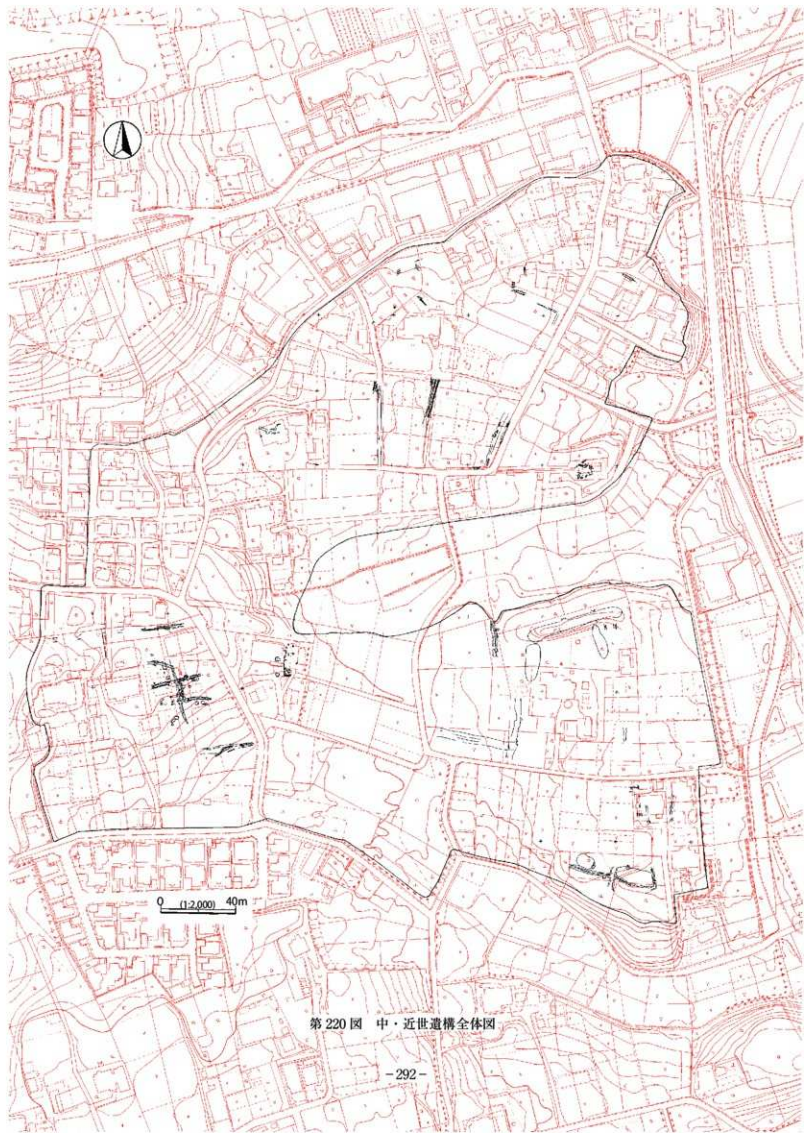
1 南側調査区の遺構群

(1) (12)調査区

南側台地の南東端部に当たる調査区である。塚1基、土塁1基、溝状遺構2条、井戸1基、土坑群1基、土坑2基が検出されている。

(12)SM001 (第221・222図、図版22)

調査区西部に存在する塚である。東西長約13m、南北長約7.5m、高さ最大約1.3mの不整形円形を呈する。東側は当遺構より低くなっているものの、土塁が続いていると思われる。当遺構の築造にあたって、土塁の一部を利用した可能性が考えられる。頂部は2か所見られ、塚2基の可能性もあるが、土層観察では明瞭な重複関係はつかめておらず、あるいは同時に築かれたものかもしれない。南側で(12)SD003Aと接するが、重複関係は認められない。また東側裾部には(12)SK004土坑があるが、これは盛土下で検出されており、当遺構に先行する遺構である。出土遺物として板碑、瀬戸鉢皿、播針転用砥石、石臼、寛永通寶がある。板碑は破片であり、また砥石として再利用されたと思われるものもあり、当遺構に伴うものかは判



第220図 中・近世遺構全体図

然としない。ただ今回の調査区で板碑が出土したのは当遺構とその周辺のみである。(12)SK004から16世紀中頃と考えられる内耳土器が出土しており、重複関係や出土遺物から見ると当遺構は16世紀後半から17世紀のものと思われる。

(12)SX002 (第221・222図、図版22)

調査区東側に存在する土塁である。東西方向に延びており、長さ約37m、幅約10m～15m、高さ最大約1.4mを測る。南側に沿って(12)SD003A溝が作られるが、当遺構より新しいと思われる。当遺構の土層観察で明確なロームブロックが見られないことから、これが裏付けられよう。ただ溝の方向は当遺構と同じであることから、土塁を意識して作られたものであり、大きな時期差はないものと思われる。土塁裾から南側は更に比高差約1.3mの谷地形となっており、谷底から土塁頂部まで3m近い比高差となる。東端部で北へ折れ曲がっており、形状としてはL字状である。西側の(12)SM001との間は南北に延びる(12)SD003B溝に切られており、地形図上でもその痕跡が認められる。この部分は入口にあたり、溝は道跡となる可能性も考えられる。なお、(12)SM001の堆積土12層、当遺構の堆積土3・10～12層は溝のように見え、地形図にも溝らしい窪みが認められるが、調査では捉えられなかったようである。当遺構からは15世紀代と思われる内耳土器が、(12)SD003からは15世紀後半の播鉢や古瀬戸平碗が出土しているので、中世の所産として間違いなからう。

(12)SD003A (第221・222図、図版22)

(12)SX002を取り囲むようにL字状に延びる溝状遺構である。台地の南縁辺部の傾斜変換線に沿って東西に構築され、東端部で北側に向きを変えている。総延長約57m、幅約1.3m～2.6mであるが、P40-51・62・63グリッド付近は斜面側の壁が流出している。土層観察や地形図から土塁より新しいものと思われる。(12)SM001とは同時期、もしくはやや先行する遺構と考えられる。溝の断面は一部を除いてV字形を呈する。

(12)SD003B (第221・222図、図版22)

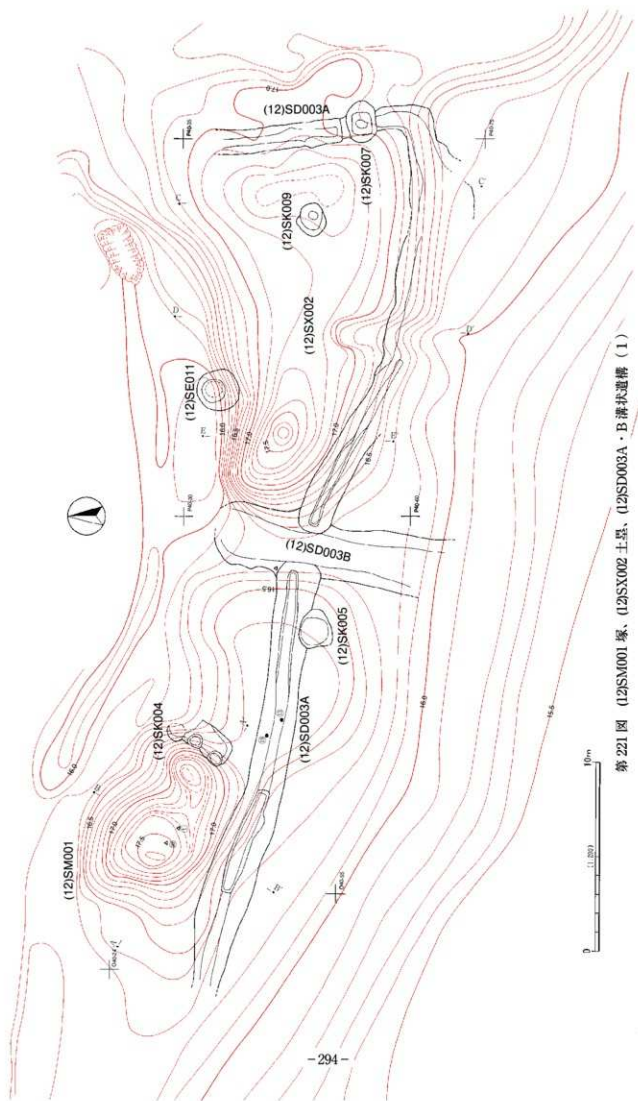
調査区中央部で(12)SD003Aと(12)SX002を直交する南北方向の溝状遺構である。総延長約12m、幅約3.0m～3.5mであるが、南端部は斜面にかかって消失している。この溝の断面形は箱形を呈しており、土塁内に入るための道跡の可能性が考えられ、(12)SD003Aとは性格が違うものと思われる。出土遺物は(12)SD003Aも含め一部近世のものが見られるが、土器播鉢や内耳土器等15世紀後半から16世紀にかけてのものが主体を占めるので、中世の所産と考えて差し支えないと思われる。

(12)SK004 (第224図)

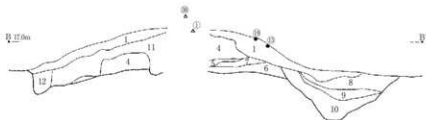
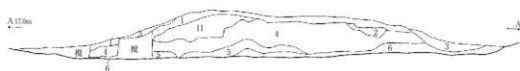
(12)SM001の東側に位置する土坑群である。(12)SM001の盛土下で検出されたことから、これより古いものと思われる。径約80cm～100cmの円形土坑が3基掘られ、それらをつなぐように方形の平場が設けられるが、北東側は流出しているため全体規模は不明である。4基の土坑の重複と考えられるが、新旧関係は不明である。16世紀中ほどの内耳土器が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

(12)SK005 (第223図)

調査区はほぼ中央、(12)SM001の東側に位置する土坑である。開口部は東西長210cm、南北長170cmの不整形を呈するが、坑底は140cm四方の隅丸方形に近い。断面は逆台形を呈すると思われ、深さは80cmを測る。北側は(12)SD003Aと重複しているが、新旧関係は不明である。遺構内からは砥石が出土しているが、時期を特定できる遺物は出土していない。



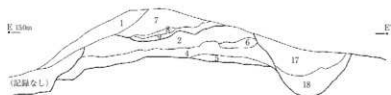
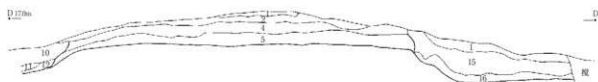
第 221 図 (12)SM001 塚、(12)SX002 土塁、(12)SD003A、(12)SD003B・B 溝状遺構 (1)



(12)SM001, SD003

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、草根多く含む、しまり弱、表土層
- 2 (SD003) 暗褐色土 ローム小ブロック少量、しまり弱
- 3 黒褐色土 ローム粒やや多量、草根多く含む、しまり極めて弱、表土層
- 4 (SD001) 暗黄褐色土 ローム小ブロック少量、しまり弱
- 5 (SD001) 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまりやや弱
- 6 暗褐色土 黒色土粒やや多量、ローム粒多量、腐葉への腐移層 (旧表土)

- 7 (SD001) 暗黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロックやや多量、しまりやや強
- 8 (SD003) 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまりやや強
- 9 (SD003) 暗黄褐色土 ローム粒多量、しまりやや強
- 10 (SD003) 暗褐色土 ローム粒やや多量、しまり弱
- 11 (SD001) 暗褐色土 ローム粒少量、しまりやや弱
- 12 暗褐色土 ローム粒多量、しまり弱



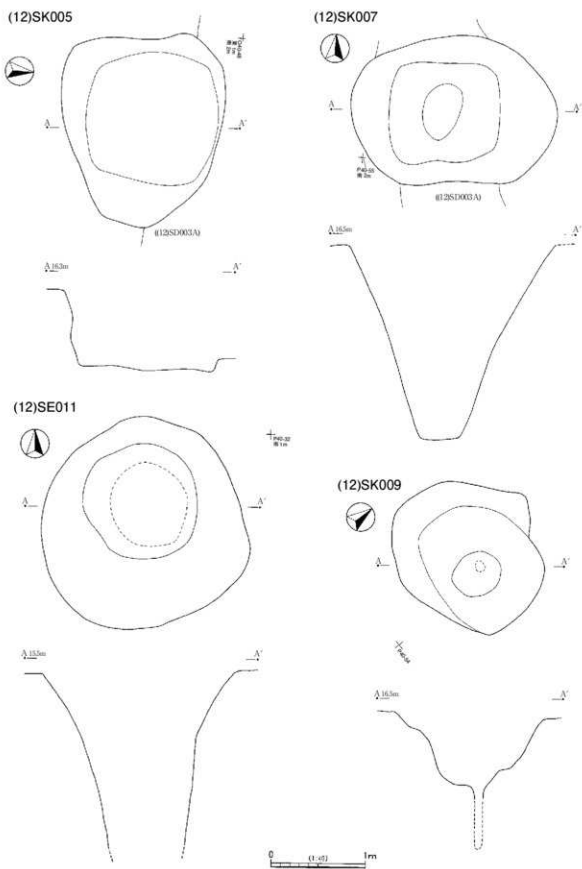
(12)SX002, SD003

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量、草本根多く含む、しまり弱、表土層
- 2 (SD002) 暗黄褐色土 ローム小ブロック・ローム粒主体、しまり弱
- 3 暗黄褐色土 ローム粒やや多量
- 4 (SD002) 暗褐色土 中や強味を帯びる、ローム粒・焼土粒少量
- 5 暗黄褐色土 腐葉への腐移層 (旧表土)
- 6 (SD002) 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量、しまり強
- 7 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、しまり弱、本底がからみ分離できない
- 8 暗褐色土 白色粘性土多量、しまり極めて強
- 9 暗黄褐色土 白色粘性土少量、ローム小ブロックやや多量、しまり強

- 10 暗褐色土 ローム小ブロック少量、しまり弱
- 11 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量
- 12 暗褐色土 ローム小ブロック少量、しまり弱
- 13 (SD003) 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、しまり弱
- 14 (SD003) 暗黄褐色土 ローム小ブロック極めて多量、しまり弱
- 15 (SD003) 暗褐色土 ローム粒多量、しまり弱
- 16 (SD003) 暗黄褐色土 ローム小ブロックやや多量、しまり弱
- 17 (SD003) 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量、しまり極めて弱
- 18 (SD003) 暗褐色土 ローム粒少量、しまりやや強

0 1:100 3m

第 222 図 (12)SM001 塚、(12)SX002 土塁、(12)SD003A・B 溝状遺構 (2)



第 223 図 (12)SK005・007・009 土坑、(12)SE011 井戸状遺構

(12)SK007 (第223図、図版22)

調査区東端に位置する土坑で、(12)SD003Aと重複する。溝は当土坑の北側で壁が立ち上がって仕切り状を呈しており、両者一体の施設であると判断される。開口部は東西長220cm、南北長155cmの楕円形を呈するが、途中は隅丸方形、坑底は径40cm～60cmの南北に長い楕円形を呈する。断面は逆台形を呈し壁は一段稜をもって立ち上がる。深さは205cmを測る。砥石、石臼、陶器転用砥石が出土しており、砥石に転用された瀬戸播鉢は17世紀代のものと思われる。

(12)SK009 (第223図、図版22)

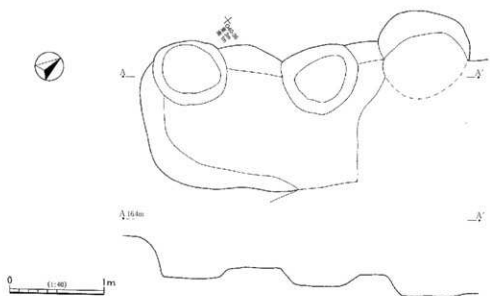
調査区東端付近、(12)SX002の下に位置する土坑である。東西長170cm、南北長160cmの不整形を呈するが、壁上部に崩落した痕跡が認められ、本来の規模は135cm×110cm程度であったと考えられる。断面は椀形で深さは80cmを測るが、中央部に径10cmの細い掘込みがあり、深さは70cm弱である。当遺構から出土した常滑片口鉢片が(12)SD003A出土のものと同接合している。

(12)SE011 (第223図、図版22)

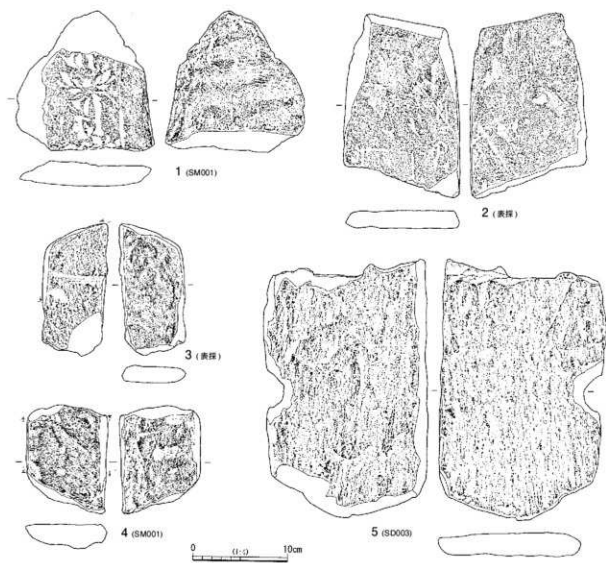
調査区東側北部に位置する井戸状遺構。径210cm～220cmの正円に近い不整形を呈するが、上部の壁は崩落したものと思われる。深さ約180cmまで掘り進めたところで掘削を断念した。時期の特定できる遺物は出土していないが、(12)SX002の等高線は(12)SE011付近で乱れており、土塁より後出するものと思われる。

出土遺物 (第225～227図、図版107・108・110～112)

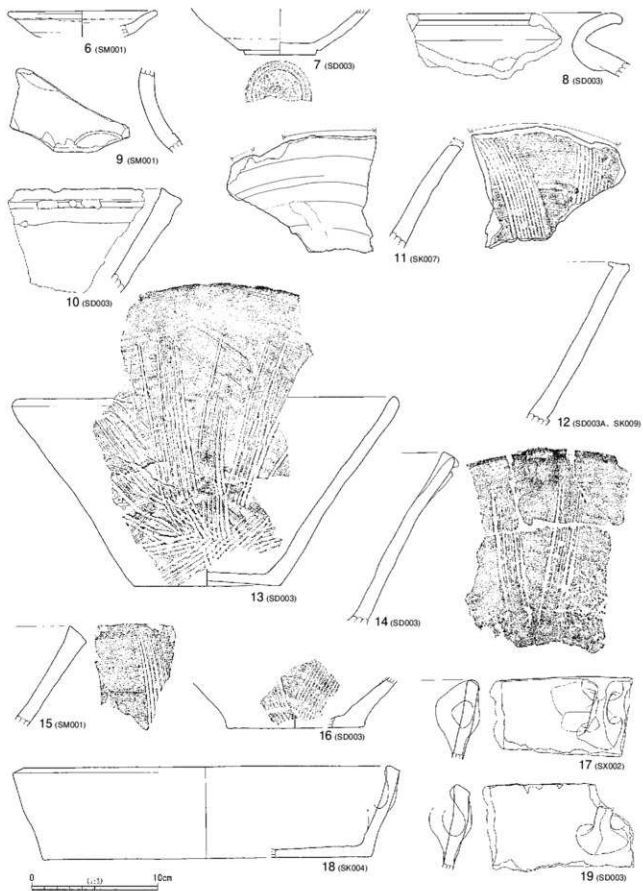
1～5は板碑である。1は(12)SM001出土で、塔身部の右側面が遺存する。連座と月輪、種子(ア 大日如來?)が見られるが、判然としなない。この上にも連座が見られ、左側にも月輪が見られるので、多尊板碑の可能性が高い。2は表探で、頭部及び右側面は外縁部が遺存する。表裏共2次的に磨かれており、砥石に転用している。そのため区画線とその右側に2文字みられるが判読できない。3も表探で頭部及び左側面は外縁部が遺存するが、他は欠損している。4は(12)SM001出土で右側面が遺存するが、他は欠損している。表面は磨いて整えられているが、裏面には製作時の整痕が残る。また左側面は磨かれており、砥石に転用された可能性がある。5は(12)SD003出土で塔身部下端と基部が遺存する。表面は整えられているが、裏面は敲打痕が残る。右側面は半円形に打ち欠かされている。打欠きは表裏から行われており、意図的に行われたものであるが、その理由は不明である。6～12、15、16は中世陶器である。6は(12)SM001出土の瀬戸鉢皿で、体部から口縁部にかけて約40%遺存する。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部でやや屈曲する。口縁部の内外面に灰軸が施される。16世紀代の所産である。7は(12)SD003出土の古瀬戸の平碗で、底部から体部下端にかけて約35%遺存する。底部は削り出し高台で、体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。内外面に灰軸が施され、体部下端は露胎である。15世紀代の所産であろう。8は(12)SD003出土の渾美大甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部内面及び肩部に自然軸がかかる。12世紀代のものであろう。9は(12)SM001出土で、常滑大甕の頭部片を利用した転用砥石である。左及び上部の断面を利用しているが、上部断面の使用が顕著である。10・12は常滑片口鉢の口縁部片である。共に片口鉢2類で、10は(12)SD003出土、12は(12)SK009と(12)SD003A出土のものが接合している。10は15世紀代、12は14世紀代の所産と思われる。11は(12)SK007出土で、瀬戸播鉢の体部下端片を利用した転用砥石である。上部の断面を使用している。播鉢は17世紀代のものなので近世の所産である。15は(12)SM001出土の備前播鉢で、口縁部が約5%遺存しており、内面には6本を単位とするすり目が施される。内面



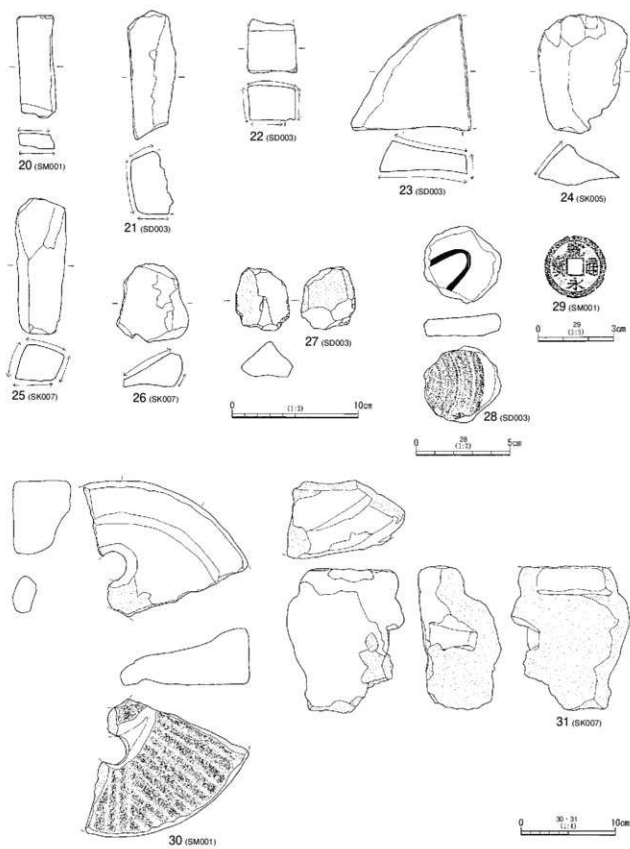
第224图 (12)SK004 土坑群



第225图 (12) 調査区出土中・近世遺物 (1)



第226図 (12) 調査区出土中・近世遺物(2)



第 227 图 (12) 調査区出土中・近世遺物 (3)

はよく磨られている。15世紀代の所産である。16は(12)SD003出土の瀬戸播鉢で、底部が約7%遺存する。内外面に銅軸が施される。内面は磨られておらず、顕著な使用は認められない。13・14は土器播鉢で、共に(12)SD003出土である。13は底部50%、体部から口縁部にかけ約15%遺存する。体部はハの字状に立ち上がり、底部は上げ底状になる。内面には6本を単位としたすり目が施されるが、雑な感じである。内面はあまり磨れておらず、播鉢としてあまり使用されていないようである。色調は内外面とも褐灰色だが、胎土は赤褐色を示す。胎土は砂粒を含み、比較的硬質である。14は体部下端から口縁部にかけ約20%遺存する。底部は抜け落ちている。口縁部には片口がつけられ、内面には5本を単位とするすり目が施される。内面はよく磨れており、すり目の一部は消えている。色調は内外面とも灰褐色で、胎土は赤褐色を示す。胎土は砂粒を含み、比較的硬質である。15世紀後半の所産と思われる。17～19は内耳土器である。全て焙烙形で、内耳が底部まで達しないものである。17は(12)SX002出土で内耳部のみ遺存する。18は(12)SK004出土で、底部から口縁部にかけ約20%遺存するが、内耳部は欠損している。19は(12)SD003出土で、内耳部のみ遺存するが、耳が欠損する。これらは胎土に雲母を多く含んでおり、筑波周辺で製作されたものであろう。16世紀代と思われる。20～26は砥石である。20は(12)SM001、21～23は(12)SD003、24は(12)SK005、25・26は(12)SK007の出土である。27は(12)SD003出土の火打石で、下面に敲打痕が認められる。28は(12)SD003出土の陶器片円盤で、陶器皿の底部片周縁を打ち欠いて作っている。表面には墨書が認められる。近世の所産であろう。29(第252図1)は(12)SM001出土の寛永通寶で、古寛永である。30・31は石臼で、共に上臼である。30は(12)SM001出土で、もの入れが穿たれ、白面は摩耗している。31は(12)SK007出土で、側面にひき手を取り付けるための穴が見られる。また側面は磨かれており、砥石に転用された可能性がある。

(2) (21)調査区

南側台地の北側に位置する調査区である。土塁3基、溝状遺構4条が検出された。

(21)SX001 (第228・229図、図版23)

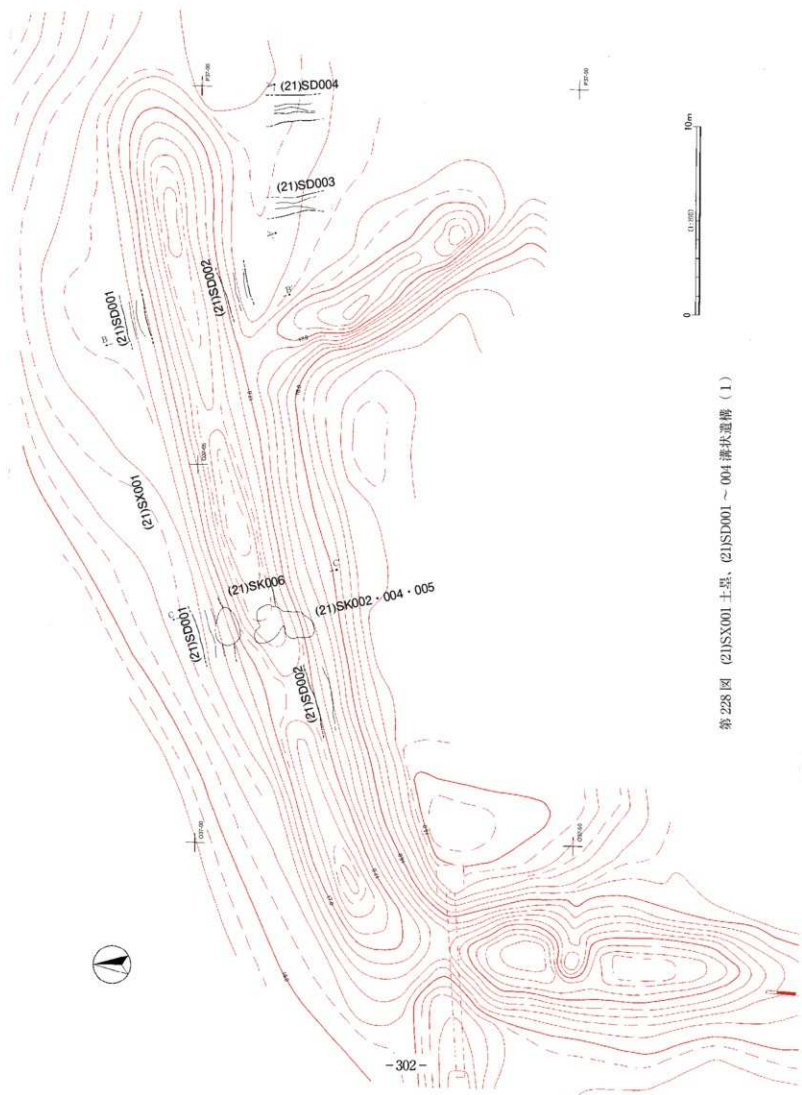
調査区内を東西方向に延びる土塁である。等高線を基にした全長は約52m、幅最大約10m、高さ最大約2.5mである。土塁脇に(21)SD001・002が掘られる。土層観察によればこの溝は土塁に伴うものと考えられる。土塁の構築土はロームブロックを主体とする黄褐色土層が認められるので、(21)SD001の掘削土が使われたものと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していない。なお、西端部とO37-16グリッド付近から南側へ土塁が延びているが、トレンチ調査を行っていないため詳細は不明である。

(21)SD001・002 (第228・229図)

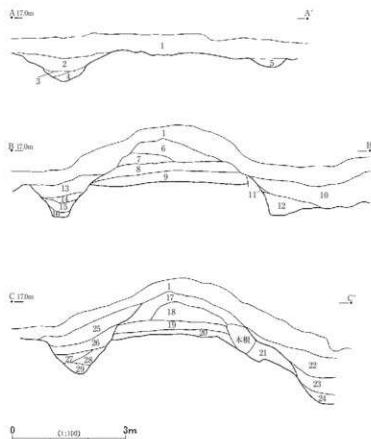
(21)SX001土塁に伴う溝状遺構で、いずれも確認調査で終了したため全長は不明である。土塁の北側から検出されたのが(21)SD001で、幅は最大1.8m、深さは最大1.0mを測る。土塁の南側から検出されたのが(21)SD002で、幅は最大1.0m、深さは0.4mを測る。断面は共にV字形を呈する。ただし土塁で区画された部分は外側より標高が1mほど低くなっており、(21)SD002も土塁中段を通る形になっているため、南側の壁は検出されなかった。時期を特定できる遺物は共に出土していない。

(21)SD003・004 (第228・229図)

調査区東端部に位置し、南北に延びている溝状遺構であるが、これらも確認調査のみのため全長は不明である。(21)SD003は幅2.0m、深さ0.2m、(21)SD004は幅3.0m、深さ0.6mを測る。両者の配置をみると土塁に伴う溝のように見えるが、調査時には土塁らしいものは存在しなかった。

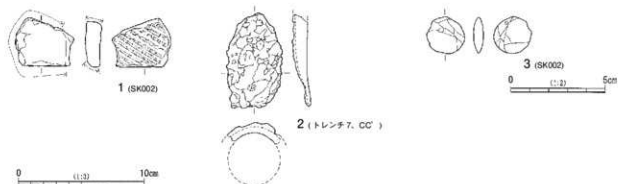


第 228 图 (21)SK001 土塁、(21)SD001 ~ 004 溝状遺構 (1)



(2)SX001, SD001~004

- 1 埴縄色土 表土層
- 2(SD003) 埴縄色土 褐色土ブロック少量, しまりやや弱
- 3(SD003) 埴縄色土 ロームブロック多量, しまりやや弱
- 4(SD003) 埴縄色土 しまり弱
- 5(SD004) 埴縄色土 しまり弱
- 6(SD001) 黄褐色土 ロームブロック主体, しまりやや弱
- 7(SD001) 埴縄色土 しまりやや弱, 粘性弱
- 8(SD001) 黄褐色土 褐色土ブロック多量, しまりやや強
- 9(SD001) 埴縄色土 褐色土ブロックやや多量, ロームブロック少量, しまりやや強
- 10(SD002) 埴縄色土 しまりやや弱
- 11(SD002) 黄褐色土 ロームブロック主体, しまりやや弱
- 12(SD002) 黄褐色土 褐色土ブロック微量, しまりやや弱
- 13(SD001) 埴縄色土 しまりやや弱
- 14(SD001) 埴縄色土 ローム和微量, しまりやや弱
- 15(SD001) 埴縄色土 褐色土ブロックやや多量, φ~10mm
ローム粒子少量, しまりやや弱
- 16(SD001) 埴縄色土 15に比へや黄色味を帯びる,
ロームブロック多量, しまりやや弱
- 17(SD001) 埴縄色土
- 18(SD001) 黄褐色土 ローム和主体, しまりやや弱
- 19(SD001) 黄褐色土 褐色土ブロック少量, 石灰土?
- 20(SD001) 埴縄色土 ローム和少量, しまりやや強
- 21(SD001) 埴縄色土 ロームブロック多量, しまりやや弱
- 22(SD002) 埴縄色土 ローム和微量, しまりやや弱
- 23(SD002) 埴縄色土 褐色土ブロック少量, ローム和微量,
しまりやや弱
- 24(SD002) 埴縄色土 ロームブロック微量, しまりやや弱
- 25(SD001) 埴縄色土 しまり弱
- 26(SD001) 埴縄色土 褐色土ブロック少量, しまりやや弱
- 27(SD001) 埴縄色土 25・26と比へ若干黄色味を帯びる,
ローム和少量, しまりやや弱
- 28(SD001) 黄褐色土 ローム和少量, しまりやや弱
- 29(SD001) 埴縄色土 ロームブロックやや多量, しまりやや弱



第229図 (2)SX001 土累、(2)SD001~004 溝状遺構(2)、出土土物

出土遺物 (第229図、図版108・111)

1は縄文土坑の(21)SK002に混入していた転用砥石で、瀬戸・美濃の播鉢片の断面を砥石として使用している。近世の所産であろう。2は(21)SX001のCCトレンチから出土した鑿引口で、下端の一部が遺存し、表面には発泡滓が付着する。3は土製円盤で、礫石の可能性も考えられる。表面には製作時の指紋が見られる。近世の所産であろう。

(3)(3)南側・(8)調査区

南側台地の中央部に当たり、21次調査区に隣接する。溝状遺構4条が検出されている。

(3)SD206・207 (第230図、図版23)

(3)SD206は3次調査区南部を東西方向に延びる溝状遺構で、検出部分の総延長約39m、幅約4.2m～5.0m、深さ約0.6m～0.7mである。溝底はほぼ平坦で、2か所で小ピットが見られる。断面は箱形を呈する。常滑片口鉢片を再利用した砥石が出土しているが、時期を特定することはできない。(3)SD207は調査区東部を南北に走る溝で、検出部分の総延長約32m、幅約2.0m～3.3mである。深さや断面形状はトレンチを設定していないため不明である。近世の陶器が出土している。両者の新旧関係は不明である。また(3)SD207の北側には(21)調査区の土塁が位置するが、当遺構と関係は不明である。

(8)SD001・002 (第231図)

8次調査区は三角形を呈する狭い調査区であるが、(8)SD001はその中央部を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約19.5m、深さ約0.6m～0.8mである。溝底は丸みを帯び、断面はU字形を呈する。調査前の地形では北側の谷津に向かうように開削されたような痕跡が認められ、道路もしくは水路であった可能性がある。(8)SD002はN37-13グリッド付近を東西方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約2.0m、深さ約0.2mである。両者は重複するが、新旧関係は不明である。両遺構とも遺物は出土していない。

出土遺物 (第232図、図版109・111・112)

1は(3)SD207出土の志野丸皿で、底部外面には墨書が見られる。2は香炉の脚部、3は瀬戸播鉢胴部片である。4は土器播鉢の口縁部片で、片口が作られる。15世紀代のものであろう。5は土器の口縁部片で、焙烙であろうか。近世の所産である。6は常滑片口鉢の口縁部片、7は土器播鉢の胴部片である。共に15世紀代のものであろう。8は転用砥石で、常滑片口鉢底部片を砥石に転用している。片口鉢自体は中世のものだが、砥石として利用した時期は不明である。10・11は砥石である。11は自然石の全面が磨かれている。12・13は陶器片を利用した円盤で、播鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型している。近世の所産であろう。14は土製の球で45%程遺存する。近世の所産と思われる。15(第252図2)は寛永通寶で、新寛永である。

(4)(16)・(17)・(29)調査区

南側台地のその他の調査区をまとめて報告する。

(16)SD001 (第231図)

調査区西側のトレンチ内を南北に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約16m、深さ約0.3mである。断面はV字形で、底面はやや凹凸が見られる。南端部には交差する別の溝が検出されているが、トレンチ調査のみで範囲が狭いため詳細は不明である。時期を特定できる遺物は出土していない。

(17)SD001・002 (第231図)

(17)SD001は調査区内を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約17m、深さ約0.8mである。北

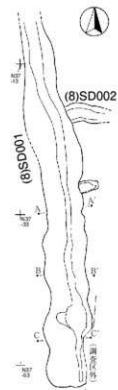


(3)SD206

- 1 暗褐色土 焼土配やや多量、ローム粒・φ10mmロームブロック少量、松子粗、しまりやや弱
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量、φ30mm褐色土ブロック少量、松子粗、しまりやや弱
- 3 黒色土 やや湿った感じの粘質土（宝永火山区に類似する松子多）、しまりやや弱
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒微量、しまりやや弱
- 5 暗褐色土 褐色土ブロックやや多量、しまりやや弱
- 6 暗褐色土 炭化物粒微量、松子粗、しまりやや弱、粘性やや強
- 7 黒褐色土 6より色調やや明るい、ローム粒・焼土粒微量、松子粗、しまりやや弱、粘性やや強
- 8 暗褐色土 7に類似するが松子粗、焼土粒含まない、しまりやや弱
- 9 褐色粘質土 暗褐色土底状、φ10mm焼土ブロック・φ20～50mmロームブロック少量、しまり強
- 10 白色粘土 埋山の青灰色土ブロックがほぼ水平に堆積
- 11 暗褐色土 青灰（白）色粘土粒少量
- 12 明褐色粘質土 白色粘土粒少量、しまり弱、軟質
- 13 明褐色粘質土 12より粘質土ブロックの径が大きく、隙間に暗褐色土が混ざる、しまり弱

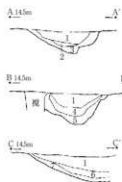
第220図 (3)SD206・207 溝状遺構

(8)SD001・002

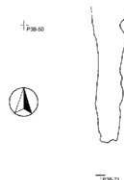


(8)SD001

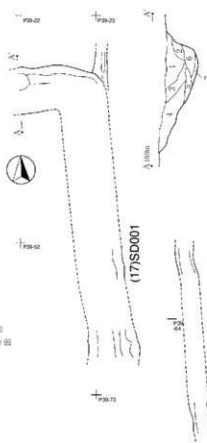
- 1 暗褐色土 粘土質、しまり・粘性弱
- 2 暗褐色土 乾燥すると2〜3mmのブロックに割れる、しまり強
- 3 明褐色土 ローム粒質、粘土質、しまり強、粘性弱
- 4 暗褐色土 φ1mm粒土少量、粘土質、しまりやや弱、粘性弱
- 5 明褐色土 ロームブロック質、しまりやや弱、粘性弱
- 6 暗褐色土 塊土粒質、しまり強、粘性やや弱
- 7 暗褐色土 φ10〜15mmロームブロック質、粘土質、しまりやや弱、粘性弱



(29)SD001



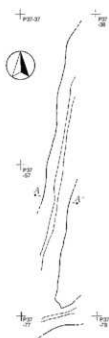
(17)SD001・002



(17)SD001

- 1 黒褐色土 ローム粒多量
- 2 黄褐色土 ローム粒質
- 3 黒褐色土 ローム粒微量
- 4 黒褐色土 ローム粒多量
- 5 黒褐色土 φ20mmロームブロック少量
- 6 黒色土 φ100〜150mmロームブロック微量
- 7 黒褐色土 φ50〜80mmロームブロック少量

(16)SD001



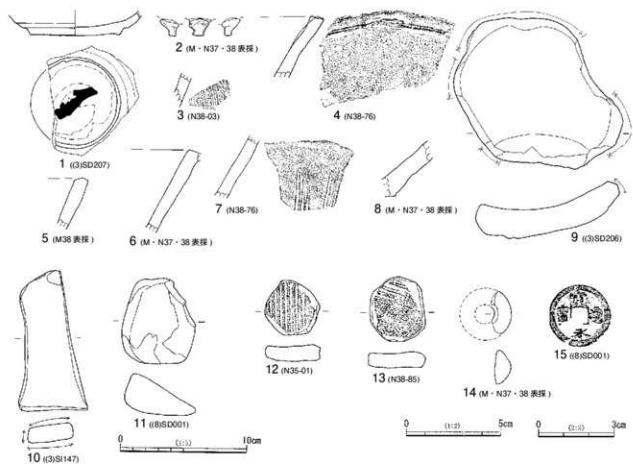
1.165m

(16)SD001

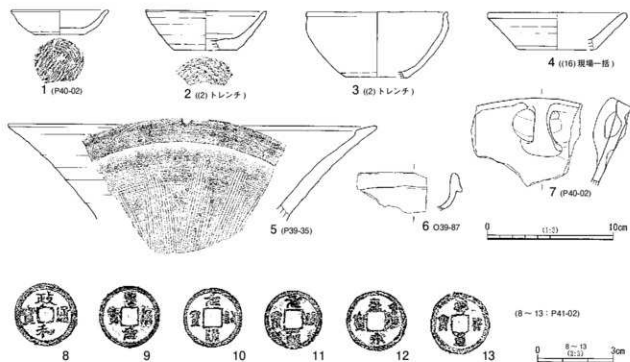
- 1 暗褐色土 ローム粒・塊土粒
やや多量、しまり弱



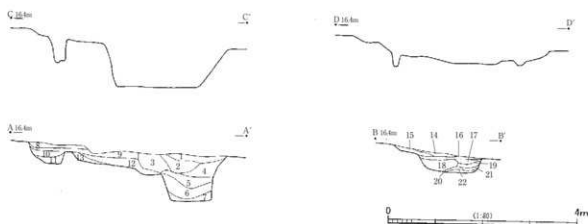
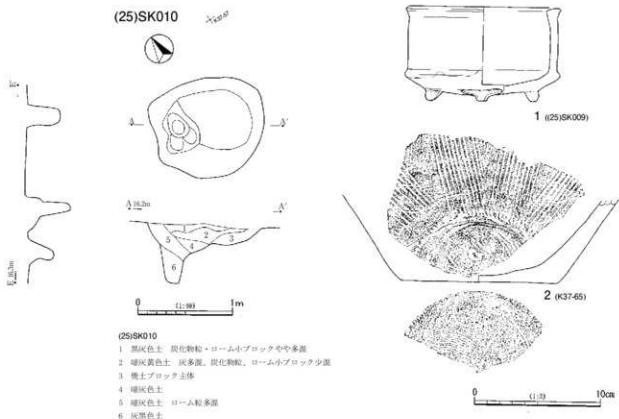
第231図 (8)SD001・002、(16)SD001、(17)SD001・002、(29)SD001 溝状遺構



第 232 図 (3)(8) 調査区出土中・近世遺物



第 233 図 (3)(8)(12)(21) 以外の南側調査区出土中・近世遺物



(25)SK009・SK011

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------|
| 1)SK009 灰黑色土 | 12 暗灰色土 |
| 2)SK009 灰黑色土 ローム粘・ロームブロック多量 | 13 黒灰色土 |
| 3)SK009 暗灰黄色土 ローム粘、ロームブロック多量、しまり骨 | 14 暗灰色土 ロームブロック多量、硬質 |
| 4)SK009 暗灰黄色土 ローム粘・ロームブロック多量、しまり骨 | 15 暗灰色土 硬化層 |
| 5)SK009 明灰黄色土 ロームブロック多量 | 16 暗褐色土 ロームブロック多量、硬質 |
| 6)SK009 暗褐色土 | 17 明灰黄色土 ロームブロック多量、硬質 |
| 7)SK009 暗褐色土 灰白色粘土ブロック少量 | 18 褐色土 ロームブロック、灰白色粘土粘多量 |
| 8 灰褐色土 硬質 | 19 灰白色粘土ブロック |
| 9 暗褐色土 硬質 | 20 暗灰色土 灰白色粘土粘多量 |
| 10 灰黑色土 | 21 暗灰色土 |
| 11 灰黑色土 ロームブロック多量 | |

第235図 (25)SX001 柱穴群、(25)SX011 台地整形、(25)SK009 土坑(2)、出土遺物、(25)SK010 土坑

側は西に向かって90度屈曲し、幅約0.8mの細い溝がそこから分岐して北へ延びる。断面はU字形を呈する。(17SD002は(17SD001の東側約2.5mの位置を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約10m、深さ約0.2m～0.3mである。検出範囲を見る限り両者は平行しており、一体のものである可能性がある。また(17SD002の南方には(12SD003Aが存在するが、繋がっているかは不明である。両者とも時期を特定できる遺物は出土していない。

(29)SD001 (第231図)

P38-51・61グリッド付近を南北に走る溝状遺構である。検出部分の総延長約7.0m、幅約1.5mであるが、遺存状態は悪く範囲を確定できただけである。時期を特定できる遺物は出土していない。

出土遺物 (第233図、図版109・110・112)

1・2・4はかわらけである。1は小ぶりのもので、近世の所産であろう。2・4は16世紀代のものと思われる。3は瀬戸天目茶碗で、16世紀後半のものであろう。5・6は瀬戸・美濃の播鉢で、共に内外面に鉄軸が施される。近世の所産である。7は内耳土器で、鍋形になるものと思われる。胎土には雲母が含まれ、筑波山周辺で製作されたものであろうか。15世紀後半の所産であろう。8～15 (第252図3～8)は銭貨ですべて北宋銭である。これらは同じP41-02グリッドから吸着した状態で出土しており、本遺跡出土の他の銭貨が近世銭なのに対し、この一群だけが北宋銭で組成されることから六道銭であった可能性が強く、土坑墓が存在したものと考えられる。

2 西側調査区の遺構群

(1) (25)調査区東側

遺跡地中央の小さい谷津の頭に位置する。台地整形区画とそれに伴う土坑・ピット群、方形竪穴状遺構1基、地下式坑1基が検出された。

(25)SX011 (第234・235図)

調査区南部に位置する台地整形区画であるが、南側は調査区境となるため完掘できなかった。規模は南北約9.2m、東西約4.4mである。整形された区画内には土坑やピットが存在するが、明確な規則性はみいだせない。南端部の長方形土坑の覆土には粘土が含まれており、粘土貼り土坑であった可能性が強いが、平面図には粘土の範囲が記録されていないため断定できない。

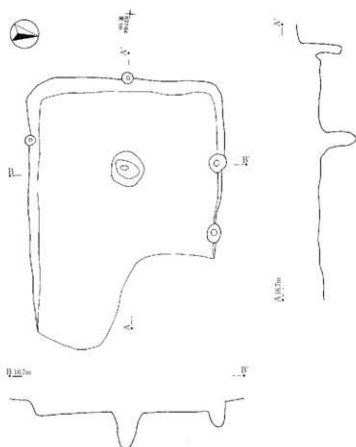
(25)SK007 (第234・236図)

調査区南西部に位置する地下式坑であるが、南側は調査区境となるため完掘できなかった。主軸長は検出範囲で210cm、横軸長は212cm、深さは最深で112cmを測る。竪坑の平面は円形で、竪坑底面は地下室床面より下る。地下室の平面は横長の長方形である。土層観察では竪坑からの流れ込みが確認でき、廃絶後しばらく竪坑が開いた状態であった後、天井部が崩落したものである。時期を特定できる遺物は出土していない。

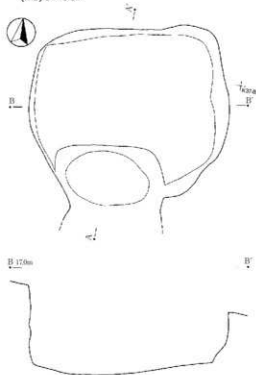
(25)SK008 (第234・236図)

遺構群の西部に位置する方形竪穴遺構である。遺構の東側は地山が傾斜しており床面が流出しているが、平面は長方形を呈するものと思われる。東西残存長288cm、南北長208cm、深さ最深で25cmを測る。底面はやや凹凸が見られる。中央および壁に5か所のピットが見られ、中央のもの規模が大きい。時期を特定できる遺物は出土していない。

(25)SK008



(25)SK007



(25)SK007

- 1 灰褐色土 ロームブロックや中多量
- 2 黒色土
- 3 黒色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 4 明灰褐色土 ローム粒多量
- 5 灰褐色土 ローム粒やや多量
- 6 明灰褐色土 ローム粒主体、天井崩落土
- 7 暗灰色土
- 8 灰黒褐色土
- 9 暗灰黄色土 ローム粒主体
- 10 褐色土
- 11 褐色土 しまり極めて弱
- 12 黒灰色土
- 13 暗褐色土
- 14 明褐色土 白色粘土粒少量、縦密に硬くしまっている、黏床状
- 15 黒灰色土 縦密に硬くしまっている、黏床状
- 16 暗灰褐色土 白色粘土粒少量、縦密に硬くしまっている、黏床状



第 236 図 (25)SK007 地下式坑、(25)SK008 方形竪穴遺構

(25)SK009 (第234・235図)

台地区画整形(25)SX011内に位置する土坑である。長軸長260cm、短軸長164cm、深さは最深で95cmを測る。平面は長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。土層観察では(25)SX011より新しいものと思われる。近世の香炉が出土している。

(25)SX001・SK010 (第234・235図)

(25)SX001は調査区北側に所在するピット群である。南北方向に連なるピットが検出されたが、建物に組むことはできなかった。櫛列の可能性も考えられる。径は30cm～50cmで、ピット間の距離は30cm～100cm程と一定ではない。(25)SK010は(25)SX001の南東側に位置しており、独立した遺構番号が付されているもののピット群と一体のものである可能性が強いと考えた。平面は楕円形で東西長127cm、南北長105cmを測る。西端にピットが見られるが、土層観察から先にピットが構築され、後から皿状の土坑が構築された可能性が考えられる。深さはピット部が62cm、皿状の部分が20cm～30cmである。

出土遺物 (第235図、図版109)

1は(25)SK009出土の瀬戸・美濃の香炉である。2は瀬戸・美濃の播鉢で、内面はよく使用されている。共に近世の所産である。

(2) (25)西側・(30)・(34)・(24)調査区

西側台地中央部に位置する。地下式坑2基、土坑18基、溝状遺構6条などが検出されている。このうち溝2条については25次と30次をまたいでいるが、同一の遺構であるためまとめて報告する。また、(30)SD003については34次調査区で検出された溝状遺構と同一である可能性が強いため、合わせて報告する。

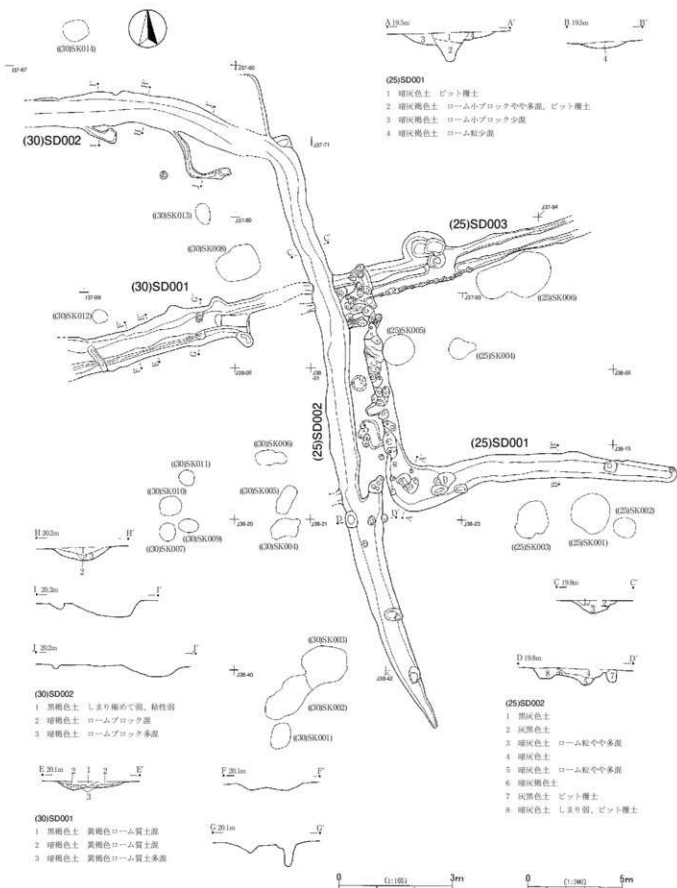
(25)SD001～003、(30)SD001・002 (第237図、図版24)

(25)SD001は調査区東部から西に向かって延びる溝状遺構で、J38-12グリッド付近で北に90度屈曲し、(25)SD003と重複するまで延びる。総延長約26m、幅約0.8m～3.0m、深さ最深で約0.3mである。(25)SD003との新旧関係は不明である。断面皿状で、南北に走る部分では多くのピットが見られるが、土層観察から溝とは時期差があるピットもある。時期を特定できる遺物は出土していない。(25)SD002は調査区中央部を南北に縦断する溝状遺構で、J37-70グリッド付近で西側へ向きを変えて、(30)SD002として続く。両者を合わせた総延長約44m、幅約0.5m～2.0m、深さ最深で約0.4mである。(25)SD003と重複するが、新旧関係は不明である。溝の断面はU字形で、溝底はほぼ平坦だが南側ではピットが見られる。時期を特定できる遺物は出土していない。(25)SD003は調査区中央部を東西に走る溝状遺構で、平行する2本の溝により構成されている。(25)SD002と交差して更に西へ延び(30)SD001として続いており、両者合わせて総延長約28m、幅約1.2m～2.2m、深さは最深で約0.4mである。(25)SD001・002と重複するが、新旧関係は不明である。J37～90グリッド付近のみ南側の溝が確認できない。断面皿状で溝底はやや凹凸が見られる。J37-82グリッド付近では櫛列状の小ピットが多数検出されている。近世の瀬戸香炉が出土している。

(25)SK001 (第238図)

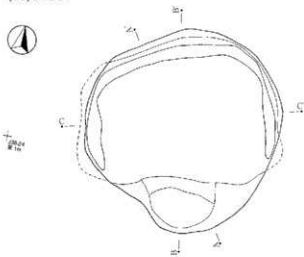
調査区南東部、(25)SD001の南側に位置する地下式坑である。主軸長215cm、横軸長210cm、深さ120cmを測る。竪坑の平面形は円形で、地下室床面とは60cmの段が作られる。地下室の平面は横長の長方形である。東西北壁に沿って浅い周溝が掘り込まれる。土層観察から竪坑からの土の流入がほとんど認められず、廃絶後時間を置かず天井部が崩落したものと思われる。

(25)SK003 (第238図)



第 237 図 (25)SD001～003、(30)SD001・002 溝状遺構

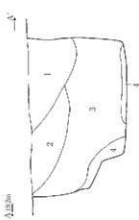
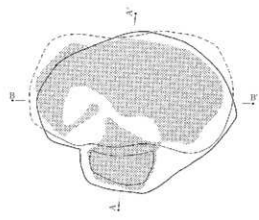
(25)SK001



(25)SK001

- 1 黒灰色土
- 2 ローム粒主体
- 3 黒灰色土 ロームブロック多数
- 4 暗灰褐色土 ローム粒や塊多数
- 5 黒灰色土
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
- 7 黒灰色土 ローム粒少量
- 8 黒色土
- 9 暗灰褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
- 12 暗灰褐色土 ロームブロック多数
- 13 暗褐色土 10よりしまり面
- 14 暗灰褐色土 しまり層の弱
- 15 粘土粒・炭化物粒主体

(25)SK003



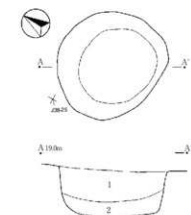
(25)SK003

- 1 黒灰色土 ローム小ブロック少量
- 2 灰褐色土 ローム粒主体
- 3 暗灰褐色土 ローム粒主体、しまり層の弱
- 4 粘土粒・炭化物粒主体



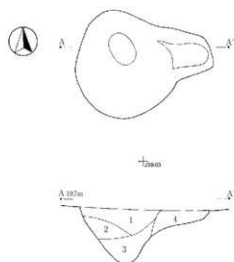
第238図 (25)SK001・003地下式坑

(25)SK002



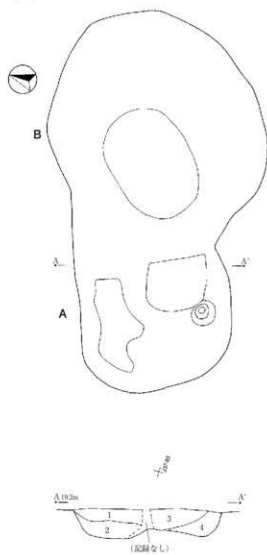
- (25)SK002
 1 埴原色土 しまり強
 2 埴原色土 しまり弱

(25)SK004

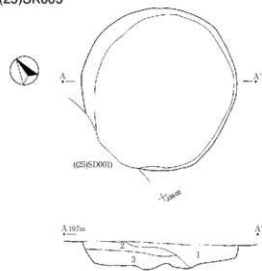


- (25)SK004
 1 灰原色土 ローム粒・ローム小ブロックやや多数
 2 灰原色土 ローム粒やや多数
 3 灰原色土
 4 埴原色土 ローム粒やや多数

(25)SK006A・B



(25)SK005



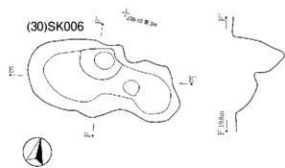
- (25)SK005
 1 埴原色土 ローム小ブロックやや多数
 2 ローム粒・ロームブロック主体
 3 埴原色土 ローム小ブロック散見

- (25)SK006A・B
 1 灰原色土
 2 埴原色土 ローム粒やや多数
 3 灰原色土 ローム粒多数
 4 埴原色土

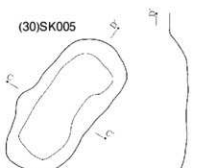


第 239 図 (25)SK002・004～006 土坑

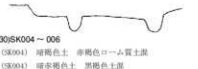
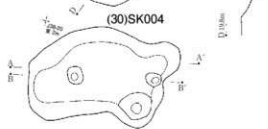
(30)SK004 ~ 006



(30)SK005



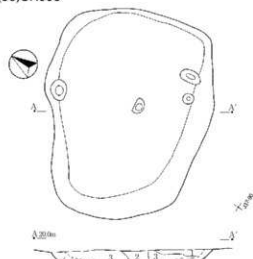
(30)SK004



(30)SK004 ~ 006

- 1 (30)004 埴粉色土 赤褐色ローム質土
- 2 (30)004 埴粉褐色土 赤褐色土層
- 3 (30)005 埴粉色土 黄褐色ローム質土層
- 4 (30)005 埴粉色土 黄褐色ローム質土層
- 5 (30)005 黄褐色ロームブロック
- 6 (30)005 黄褐色土 ロームブロック
- 7 (30)006 埴粉色土 黄褐色ローム質土層
- 8 (30)006 埴粉色土 ロームブロック

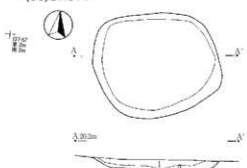
(30)SK008



(30)SK008

- 1 赤褐色土 黄褐色ローム質土少量
- 2 埴粉色土 粘性强
- 3 埴粉褐色土 ローム質土、粘性强

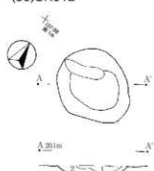
(30)SK014



(30)SK014

- 1 赤褐色土 ローム粘層
- 2 埴粉色土 ローム粘層、粘性强

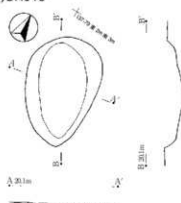
(30)SK012



(30)SK012

- 1 埴粉色土 ローム質土
- 2 埴黄褐色土 ローム質土

(30)SK013



(30)SK013

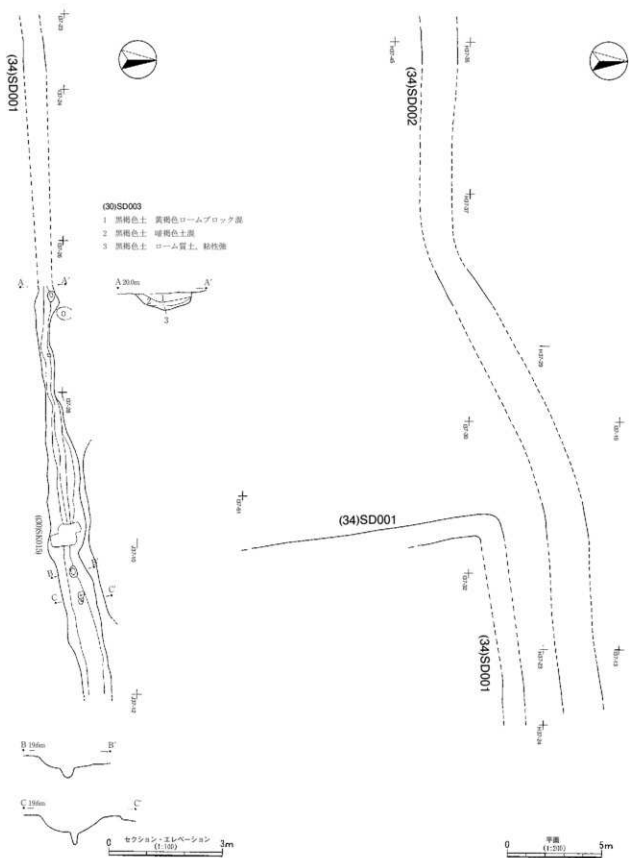
- 1 埴粉色土 黄褐色ローム粘層、しまり強
- 2 埴黄褐色土 ローム質土



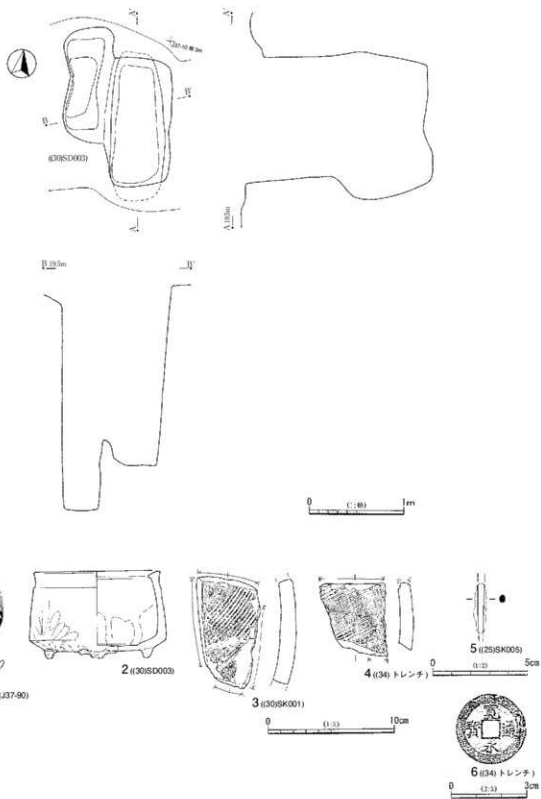
第 241 図 (30)SK004 ~ 006 · 008 · 012 ~ 014 土坑

(30)SD003+(34)SD001

(34)SD001・002



第242図 (30)SD003、(34)SD001・002 溝状遺構



第243図 (30)SK015土坑、(25)(30)調査区出土遺物

調査区南東部、(25)SD001の南側、(25)SK001の西側に位置する地下式坑である。主軸長170cm、横軸長210cm、深さ105cmを測る。堅坑の平面は方形で、地下室床面とは約60cmの段が作られる。地下室の平面は胴の張る横長の長方形である。最下層に炭化物と焼土が見られ、他の堆積土も自然堆積の状況を示していない。

(25)SK002 (第239図)

調査区南東部、(25)SD001の南側、(25)SK001の東側に位置する土坑である。東西長118cm、南北長106cm、深さ48cmを測る。平面は楕円形で、断面は箱形である。

(25)SK004 (第239図)

調査区中央部、(25)SD001の北側、(25)SD003の南側に位置する土坑である。不整形を呈し、東西長148cm、南北長115cm、深さ58cmを測る。2基の土坑の重複と考えられ、西側の円形で深さのある土坑が新しい。

(25)SK005 (第239図)

調査区中央部に位置する土坑で、西側が(25)SD001に接する。平面は径170cmの円形で、深さは最深28cmである。皿状の断面で、底面は凹凸が見られる。鉄線の茎部が出土している。

(25)SK006 (第239図)

調査区中央部、(25)SD003の南側に位置する。2基の土坑の重複で西側をA、東側をBとする。A・Bの新旧関係はつかめなかった。両者を合わせた長軸長は405cm、短軸長はAが160cm、Bが232cmである。(25)SK006Aは丸みを持った方形を呈するが、底面に段差が見られ、重複の可能性も考えられる。深さは最深48cmである。径30cm程のビットが穿たれる。(25)SK006Bは楕円形の平面形を呈する。深さは最深93cmである。

(30)SK001 (第240図、図版23)

調査区南部、(25)SD002の西側に位置する土坑である。平面は隅丸の長方形で、断面は皿状を呈する。長軸長130cm、短軸長105cm、深さ15cmを測る。近世の瀬戸掻鉢を転用した砥石が出土している。

(30)SK002・003 (第240図、図版23)

重複している2基の土坑をまとめて記述する。調査区南部、(25)SD002の西側に位置し、(30)SK001に近接する。(30)SK002の平面は楕円形を呈し、断面は皿状である。底面は凹凸が見られる。(30)SK003の平面は不整形形で、底面はほぼ平坦である。長軸長は両者合わせて532cm、短軸長と深さは(30)SK002が147cmと45cm、(30)SK003が210cmと39cmである。土層観察では(30)SK002の覆土上層と(30)SK003の覆土が同一とされており、両者の新旧関係は不明である。

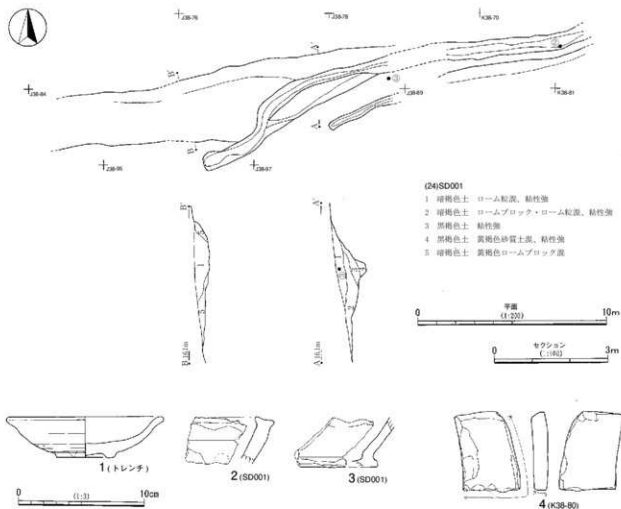
(30)SK004 (第241図)

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑である。長軸長160cm、短軸長110cm、深さ12cmを測る。平面は不整形を呈し、断面は碗形で底面は凹凸が見られる。底面には3か所ビットが存在するが、土坑とは時期差があるかも知れない。

(30)SK005 (第241図)

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑で、(30)SK004に近接する。長軸長160cm、短軸長80cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形である。断面は皿状で、底面はやや凹凸が見られる。

(30)SK006 (第241図)



第244図 (24)SD001溝状遺構、(24)調査区出土遺物

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑で、(30)SK005に近接する。平面は不整形で、長軸長168cm、短軸長80cmを測る。底面には2か所のビットが存在する。土坑とは重複している可能性もある。深さはビット部で56cmである。

(30)SK008 (第241図、図版23)

調査区北西部、(25)SD002の西側、(30)SD001の北側に位置する土坑である。長軸長223cm、短軸長180cm、深さ15cmを測る。平面は不整形長方形、断面は皿状である。底面に4基の小ビットが認められるが、これらが当遺構に伴うかは不明である。

(30)SK012 (第241図)

調査区西部、(30)SD001の北側に位置する土坑である。東西長85cm、南北長75cm、深さ10cmを測る。平面は楕円形で、底面は段差が見られる。

(30)SK013 (第241図)

調査区西部、(30)SD002の南側に位置する土坑で、(30)SK008に近接する。長軸長116cm、短軸長80cm、深さ20cmを測る。平面は楕円形で、断面皿状である。底面にはやや凹凸が見られる。

(30)SK014 (第241図、図版23)

調査区北西部、(30)SD002の北側に位置する土坑である。東西長140cm、南北長110cm、深さ14cmを測る。平面は隅丸長方形である。断面皿状で、底面にはやや凹凸が見られる。

(30)SD003、(34)SD001・002 (第242図、図版24)

(30)SD003は30次調査区北部を東西に走る溝状遺構である。西側は(34)SD001につながるものと思われ、その場合総延長約54mの逆し字状になる。幅は約0.6m～1.8m、深さは約0.4mを測る。断面はU字形で、溝底はやや凹凸が見られる。溝中に(30)SK015が存在するが、新旧関係は不明である。また4か所でピットが確認された。(34)SD002は34次調査区北部を東西に走る溝で、I37-13グリッド付近では(34)SD001の北側約2.0mの位置を平行するように位置する。西側は屈曲せずそのまま西方へ延びており、検出部分の総延長約36m、幅約1.6m～2.2mである。掘削は行っていないため深さや断面形状は不明である。

(30)SK015 (第243図、図版24)

調査区北部、(30)SD003溝状遺構の内部に位置する土坑である。溝との新旧関係は不明である。また当遺構は2基の土坑の重複と思われるが、掘込みが3m近くあり、新旧関係等を明らかにすることはできなかった。共に平面は長方形を呈し、壁の一部はオーバーハングする。底面は凹凸が見られる。

(24)SD001 (第244図、図版24)

西側台地遺構群の南端部を東西に延びる溝状遺構である。検出部分の総延長は約28mである。3条の溝が重複していると思われる、幅は最も細い南の溝が約0.5m、中央から東側の溝が約1.0m、西側の溝が約2.5m～4.0mである。土層観察では同時に埋没していることが確認され、溝の作り替えが行われたと推測される。出土遺物として常滑片口鉢片2点を図化した。

出土遺物 (第243・244図、図版109・110・111)

第243図1はかわらけで、燈明皿として使用されている。近世の所産である。2は(30)SD003出土の瀬戸・美濃の香炉で、体部に印花文が見られる。内外面に鉄軸が施される。近世の所産である。3・4は転用砥石で、播鉢胴部片の断面を砥石として使用している。近世の所産であろう。5は(25)SK005出土の鉄鏝で茎のみ遺存している。6(第253図9)は34次確認トレンチで出土した寛永通宝である。第244図1は陶器皿で、内外面に灰軸が施される。近世の所産である。2・3は(24)SD001出土の常滑の片口鉢で、共に中世の所産である。4は転用砥石で、常滑大甕の胴部片の断面を砥石として使用している。大甕自体は中世の所産だが、砥石として使用された時期は不明である。

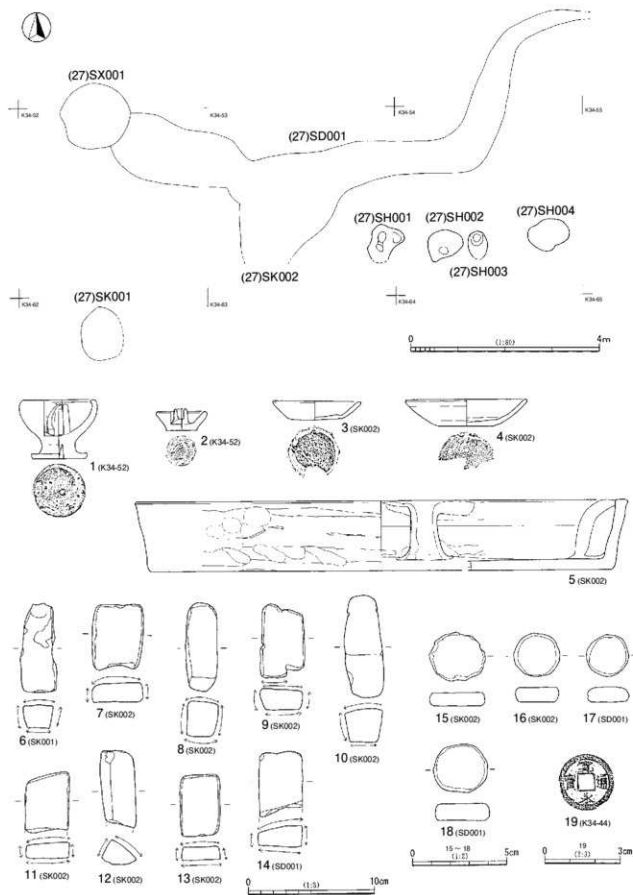
3 北側調査区の遺構

(1) (27)調査区 (第245図)

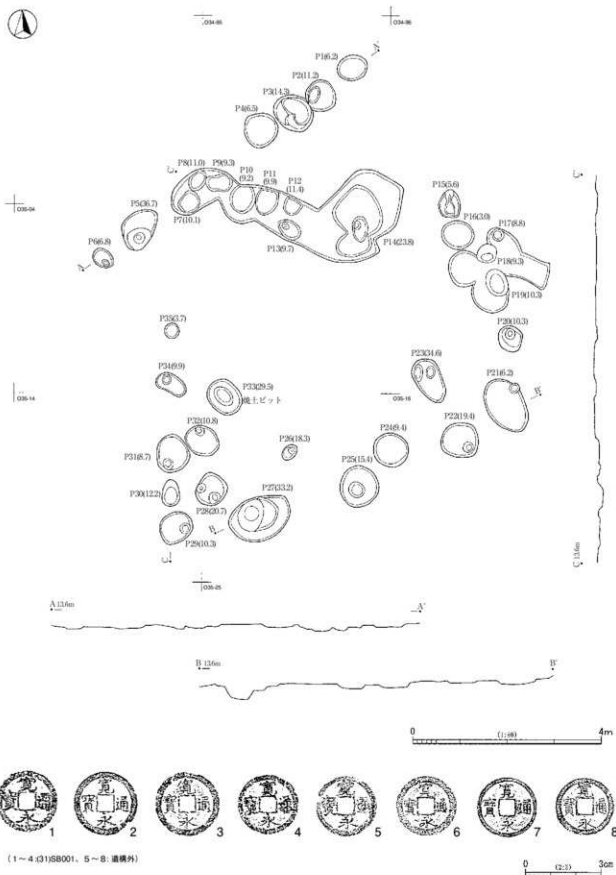
北側台地北西部に位置する。確認調査の時点で多数の近世遺物が出土したため、検出された遺構も近世のものとして推測された。部分的な掘削を実施したところそのことが裏付けられたため、本調査対象とはせず遺構輪郭線の実測と遺物の回収を行って終了した。完掘したのはピット3基 (SH001～003)のみである。各遺構の性格や重複している遺構の新旧関係などは不明である。

出土遺物 (第245図、図版110・111・112)

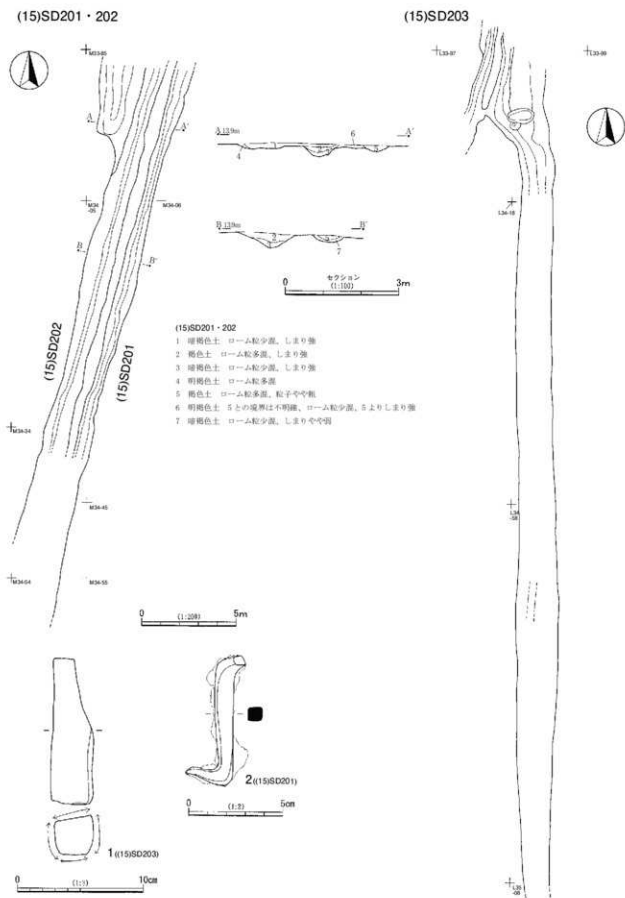
1は瀬戸・美濃の乗燭(ひょうそく)で、内外面に鉄軸が施される。底面裏には提灯などに取り付けるための釘穴がつけられる。2は土器製の乗燭である。3・4はかわらけで、薄手に作られている。共に近世の所産である。5は内耳土器で、焙烙形のものである。体部は直線的に立ち上がり、耳は底部について



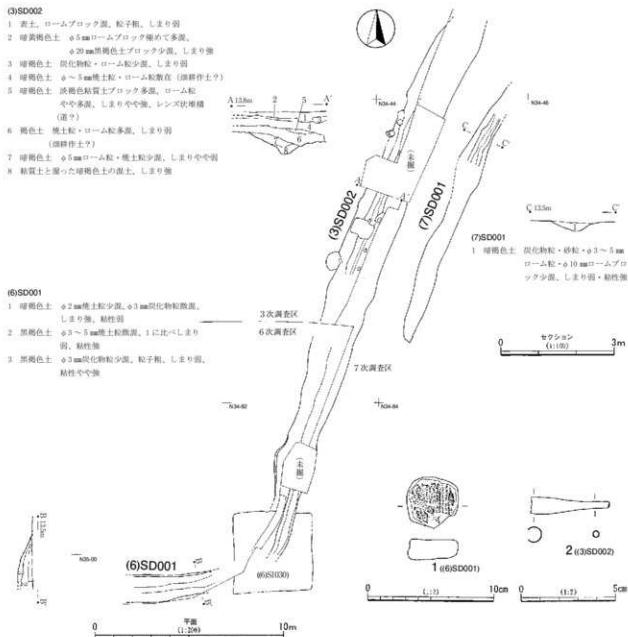
第 245 図 (27) 調査区遺構群、出土遺物



第246図 (31)調査区遺構群、出土物



第247図 (15)SD201～203 溝状遺構、出土遺物



第248図 (3)SD002、(6)SD001、(7)SD001 溝状遺構、出土遺物

いるもので、19世紀代のもと思われる。6～14は砥石である。15～18は土器片を加工した円盤である。全て周縁を磨き、成形している。17・18は中・近世の土器片を加工しているが、15・16は土師器片を加工している。19 (第252図10) は寛永通寶である。

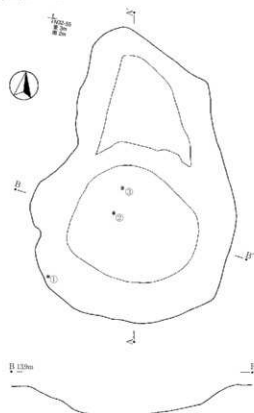
(2) (31)調査区

北側台地の南西部に位置する。柱穴と思われるピット群が検出された。

(31)SB001 (第246図、図版24)

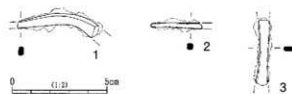
調査区中央部、12m四方の範囲から35基のピットがまとめて検出された。数棟の建物が所在するものと思われるが、明確な建物として組むことはできなかった。恐らく3間4間程の建物であろう。ピットの掘込みはすべて浅く、礎石建物だった可能性もある。ピット内から寛永通寶が出土しており、地鎮に関わ

(10)SK222

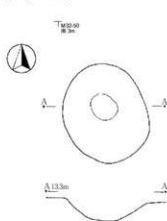


(10)SK222

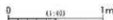
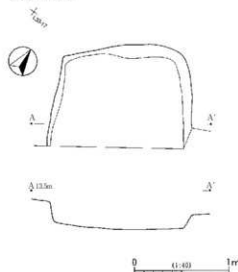
- 1 暗褐色土 ロームブロック層
- 2 黒褐色土 炭人物はほとんどなし、しまり強



(22)SK003



(22)SK004



第249図 (10)SK222、(22)SK003・004土坑、出土遺物

るものだろう。また焼土ビットも見られた。

出土遺物 (第246図、図版112・113)

1～8 (第252図11～15、第253図16～18) は出土銭貨で、全て寛永通寶である。1～4は(31)SB001から出土しているが、どのビットから出土したかは不明である。

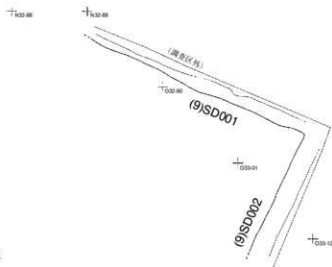
(3) その他の調査区

その他の調査区では単独で検出されたものがほとんどなので、調査区の区別なく記載する。

(15)SD201・202 (第247図、図版24)

北側台地中央部を南北に並走する2本の溝状遺構である。(15)SD201は総延長約30m、幅約0.6m～1.0m、深さは最深約0.4m、(15)SD202は総延長約26m、幅約1.0m～1.5m、深さは最深約0.2mである。M33-85グ

(9)SD001・002
(10)SK221



(10)SD220



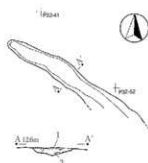
(19)SD001 ~ 003



(10)SD220

- 1 堆積色土 しまり強
- 2 黒褐色土 混合物ほとんどなし、しまり強

(35)SD001



(35)SD001

- 1 堆積色土 白色粘・黒色粘少量
- 2 堆積色土 炭化物粒・ローム粒少量、しまり強、粘性弱
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量、しまり・粘性強

(トレンチ外)



(19)SD002

- 1 堆積色土 砂粘混濁
- 2 堆積色土 褐色土ブロック少量
- 3 堆積色土 2より色調濃い、砂粘混濁
- 4 堆積色土 灰色粘土粘やや多量



第 250 図 (9)SD001・002、(10)SD220・221、(19)SD001 ~ 003、(35)SD001 溝状遺構

リッドから北側ではもう1本溝が存在するが、詳細は不明である。(15SD201より鉄釘が出土している。

(15)SD203 (第247図、図版24)

(15SD202の約20m西側に位置する南北に延びる溝状遺構である。総延長約45m、幅約1.8m～2.4m、深さ約0.4mである。北端部で別な溝が分岐しているが、詳細は不明である。また、北側中央に長さ約1.5m、深さ約0.7mの楕円形土坑が存在するが、当遺構に伴うものかは不明である。砥石を1点図化した。

(3)SD002、(6)SD001 (第248図)

調査区が異なるため別の遺構番号が付されているが、両者は同一の溝状遺構である。N34-34グリッド付近からN35-02グリッド付近まで南北方向に延び、そこから西へ向きを変えてN35-00グリッド付近まで延びる。調査区境であることや、現道の下だったため遺存状況は悪いが、総延長約36m、幅約1.3m～2.5m、深さ最深で約0.6mを測る。陶器摺鉢を加工した円盤、煙管の吸い口が出土している。

(7)SD001 (第248図)

(3)SD002の東側約2mの位置を、(3)SD002と平行するように延びる溝状遺構であるが、N34-74グリッド付近が末端となっている。総延長約14m、幅約0.8m～1.4m、深さ最深で約0.2mを測る。

(10)SK222 (第249図)

北側台地北東部に位置する土坑である。長軸長310cm、短軸長220cm、深さ28cmを測る。平面は不整形で断面は皿状を呈する。2基の土坑の重複の可能性も考えられる。刀子の柄と鉄鍔の茎部が出土している。

(22)SK003 (第249図)

北側台地北西部に位置する土坑である。長軸長104cm、短軸長92cm、深さ25cmを測る。平面は楕円形で断面は皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

(22)SK004 (第249図)

北側台地北西部に位置する。平面は長方形を呈するものと思われるが、南側は調査区外で調査できなかった。検出長110cm、幅152cm、深さ22cmを測る。断面は箱形で底面はほぼ平坦である。

(9)SD001・002、(10)SD221 (第250図)

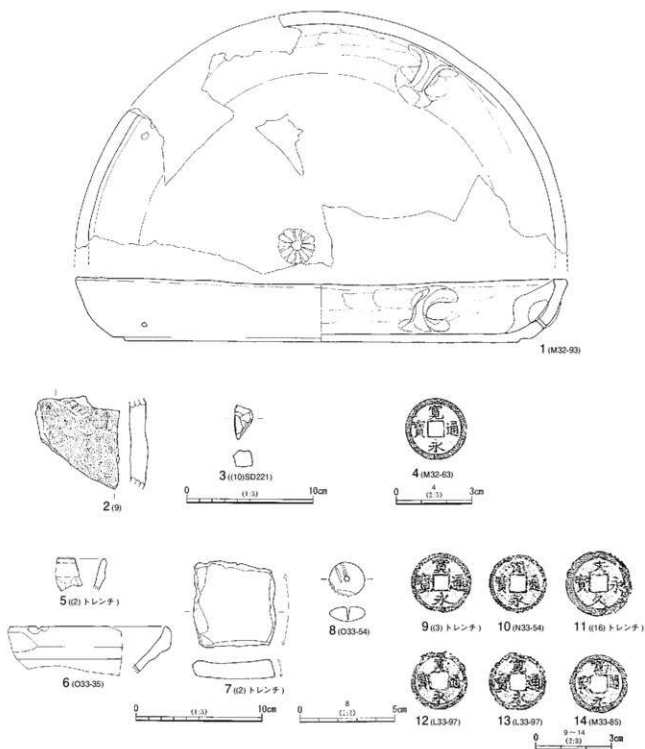
(9)SD002は北側台地北部に位置する溝状遺構で、O33-11グリッド付近から北東方向に延び、O32-92グリッド付近で90度屈曲して、(9)SD001として北西方向N32-89グリッド付近まで延びる。調査区外で未掘の場所を隔てて約8m先、(10)SD021が同じ方向に延びる。両遺構は同一遺構の可能性も考えられ、そう想定した場合総延長は約35mとなる。深さは最深約0.5m、幅は不明である。(10)SD221から火打石が出土している。

(10)SD220 (第250図)

(10)SD221の北方約10mに位置する溝状遺構である。ほぼ南北方向に延びており、検出部分の総延長約5.0m、幅約0.8m、深さ約0.2mである。

(19)SD001～003 (第250図)

19次調査区から検出された溝状遺構はいずれもトレンチ部分の調査のみであり、またいずれも別なトレンチへ続く状況が認められなかったため、総延長などは不明である。(19)SD001は調査区南東部で検出され、総延長約6.5m、幅約1.1m、深さ0.3mである。(19)SD002は調査区北東部で検出され、幅約1.5m、深さ約0.3mである。(19)SD003は調査区北西部で検出され、幅約1.7m、深さ約0.4mである。この溝は断面V字形と箱形の2本の溝が重複している状況で、(19)SD002の北側に存在する落込みまで続いている可能性

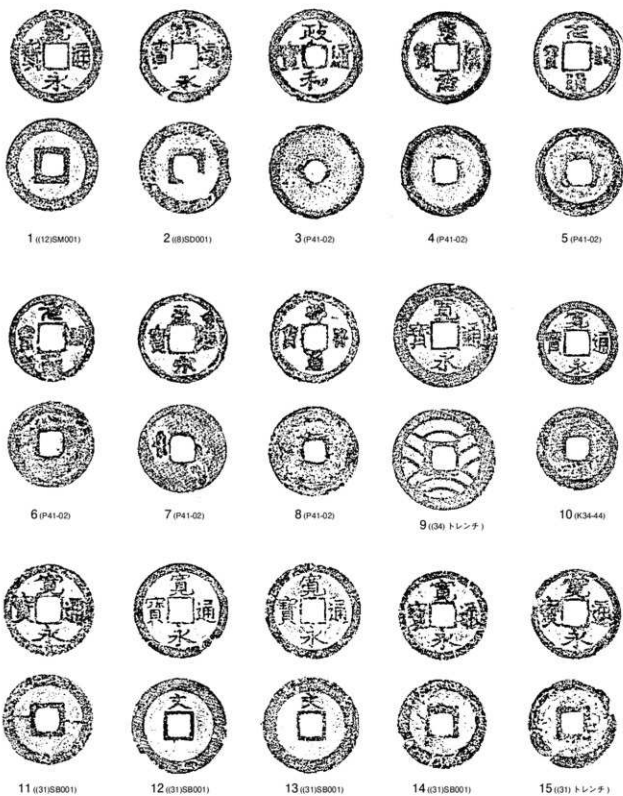


第 251 図 北側調査区出土中・近世遺物

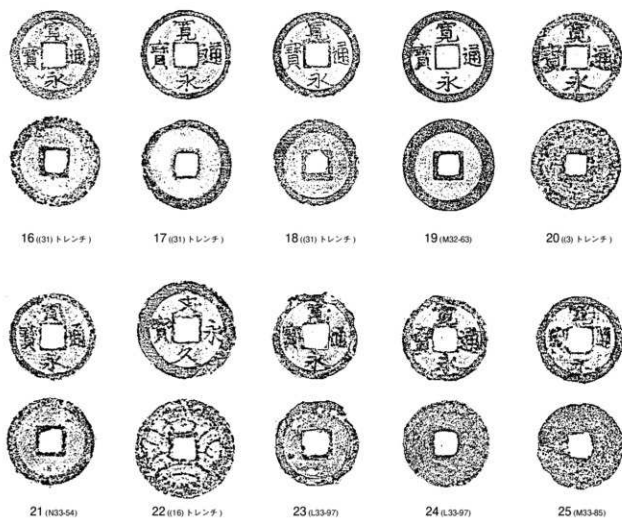
がある。

(35)SD001 (第250図)

北側台地北東端部に位置する溝状遺構である。総延長約8.0m、幅約1.1m、深さ約0.2mを測る。覆土3層の上面が硬化しており、道路の可能性がある。



第 252 図 出土銭貨 (1)



第 253 図 出土銭貨 (2)

出土遺物 (第247～249・251図、図版109～111・113)

第247図1は砥石で(15)SD203、2は鉄釘で(15)SD201出土である。第248図1は(6)SD001出土の陶器片を加工した円盤で、播鉢の胴部片の周縁を打ち欠き成形している。2は(3)SD002出土の煙管の吸い口で、ほぼ完形品である。共に近世の所産である。第249図1～3は(10)SK222出土の鉄製品である。1・3は刀子で、柄の部分であろうか。2は鉄鏝で、茎部のみ遺存している。第251図1は内耳土器で、焙烙形のものである。約40%遺存する。体部は丸みを持って立ち上がり、内耳は1耳残るので、3耳になろうか。底部内面に印花文が施され、胴部には焼成後の穿孔が1か所見られる。18世紀代の所産と思われる。2は常滑大甕の胴部片である。3は(10)SD221出土の火打ち石である。4(第253図19)は銭貨で、新寛永である。5は古瀬戸製品で、小片なので不明な点があるが、灰釉の施された碗であろう。6は転用砥石で、瀬戸播鉢の口縁部片を転用している。口唇部のみ磨られており、使用頻度は多くない。7も陶器転用砥石で、常滑大甕の胴部片を再利用している。6・7とも中世の陶器だが、砥石として使われた時期は不明である。8は土製円盤で、未貫通の孔が見られる。9～14(第253図20～25)は銭貨で、11は文久永寶、他は寛永通寶である。

第12表 中・近世土器・陶磁器観察表

採出番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第226106	I2SM001	陶器	瀬戸 鉢皿	全体40% 口径40% 底部0%	(13.6)cm — (2.0)cm	ロクロ成型 口径部内外面に 灰釉	砂粒、黒色粒	釉：灰オリーブ 胎土：白灰色	良好	16世紀後半
第226107	I2SD003	陶器	古瀬戸 平碗	全体35% 口径7% 底部50%	— 5.6cm (5.6)cm	ロクロ成型 底 部削り出し高台	砂粒有り	内面：褐色 外面：明褐色+ス ス	良好	15世紀代
第226108	I2SD003	陶器	瀬美 大甕	口径部片	—	口径部ナデ	砂粒、黒色粒	内面：黄灰色 外面：黄灰色+灰 白色の自然釉	良好	12世紀代
第226110	I2SD003	陶器	常滑 片口鉢	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒、小石	内外面褐色	良好	2期 15世紀代
第226112	I2SD003 I2SK009	陶器	常滑 片口鉢	口径8% 胴部8%	— —	内外面ナデ	砂粒、小石	内面：褐色 外面：褐色	良好	2期 内面磨ら れる I2SD003 と I2SK009の 破片が接合 14 世紀代
第226113	I2SD003	土器	襷鉢	口径15% 胴部15% 底部50%	(29.7)cm 11.5cm 14.8cm	内外面ナデ 6 本単位のすり目 が施される	砂粒	内外面黒褐色	良好	15世紀後半
第226114	I2SD003	土器	襷鉢	口径20% 胴部20%	— —	内外面ナデ 5 本単位のすり目 が施される	砂粒	内面：灰褐色 外面：黒褐色	良好	片口あり 内面 磨られる 15世 紀後半
第226115	I2SD003	陶器	備前 襷鉢	口径5%	—	内外面ナデ 6 本のすり目が施 される	砂粒、小石	内面：暗褐色 外面：極黄褐色	良好	15世紀代
第226116	I2SD003	陶器	瀬戸 襷鉢	底部7%	— (11.0)cm	内外面ナデ 10 本単位のすり目 が施される	砂粒	釉：暗赤灰色 胎土：浅黄色	良好	
第226117	I2SX002	土器	内耳土器	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐 色 外面：黒褐色	良好	焙烙形 外面ス ス付着 16世紀 代
第226118	I2SK004	土器	内耳土器	口径20% 胴部15% 底部20%	(28.8)cm (26.0)cm 7.2cm	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐 色 外面：黒褐色	良好	焙烙形 内耳欠 損 外面スス付 着 16世紀代
第226119	I2SD003	土器	内耳土器	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐 色 外面：黒褐色	良好	焙烙形 内耳欠 損 外面スス付 着 16世紀代
第232101	G3SD207	陶器	志野 丸皿	底部80%	— (7.1)cm (1.9)cm	ロクロ成型 削り出し高台	砂粒	釉：白灰色 胎土：浅黄色	良好	底部外面に黒書
第232102	3次調査区 表採	陶器	香印(脚部)	脚部	高1.4cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm	粘土を底部に張り 付後ヘラと指 頭で調整する	砂粒	淡黄色	良好	近世
第232103	N38-03 グリッド	陶器	瀬戸 襷鉢	胴部片	—	—	砂粒	釉：暗赤灰色 胎土：浅黄色	良好	
第232104	N38-76 グリッド	土器	襷鉢	口径部 10%	—	内外面ナデ	砂粒、小石	内面：にぶい赤褐 色 外面：黒褐色	良好	15世紀代
第232105	3次調査区 表採	土器	焙烙?	口径部 10%	—	内外面ナデ	砂粒やや多	内面：灰褐色 外面：にぶい赤褐 色	良好	近世
第232106	3次調査区 表採	陶器	常滑 片口鉢	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒、長石粒	内面：灰褐色 外面：にぶい褐色	良好	
第232107	N38-76 グリッド	土器	襷鉢	胴部片	—	内外面ナデ	砂粒	内外面黒褐色	良好	
第232108	3次調査区 表採	土器	鉢	底部片	—	内面ナデ	砂粒多	内面：褐色 外面：にぶい褐色	良好	近世

碑番号	遺構番号 出土位置	種類	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第233101	P40-02 グリッド	土器	かわらけ	口径40% 底部90%	(7.5) 4.0cm 1.9cm	ロクロ成型 回 転糸切	砂粒、赤色粒	内面：褐色色 外面：褐色色	良好	近世
第233102	2次調査区 確認トレン チ	土器	かわらけ	口径20% 底部15%	(9.6) (5.0) 3.1cm	ロクロ成型 回 転糸切	砂粒、赤色粒	内面：浅黄褐色 外面：浅黄褐色	良好	16世紀代
第233103	2次調査区 確認トレン チ	陶器	瀬戸・美濃 天目茶碗	口径25%	(11.0) (5.0) 5.1cm	内外面鉄軸 部下露露胎	体 砂粒	輪：黒褐色 胎土：灰白色	良好	16世紀後半
第233104	16次調査区 現場一括	土器	かわらけ	口径40%	(10.8) (6.0) 2.9cm	ロクロ成型 回 転糸切	砂粒、赤色粒 黄粟	内面：浅黄褐色 外面：浅黄褐色	良好	16世紀代
第233105	P39-35 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 露鉢	口径25%	(29.0) — (7.5)cm	内外面鉄軸	砂粒多	輪：赤灰色 胎土：浅黄褐色	良好	近世
第233106	O39-87 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 露鉢	口径部片	—	内外面鉄軸	砂粒	輪：暗赤灰色 胎土：にぶい橙色	良好	近世
第233107	P40-02 グリッド	土器	内耳土器	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒多、雲母 粒	内面：にぶい橙色 外面：黒褐色	良好	15世紀後半
第235101	G25SK009	陶器	瀬戸・美濃 香印	口径20% 底部30%	(11.2) (8.7) 7.4cm	ロクロ成型 切 り廻し後脚を繋 り付け 底部露 胎 体部内外面 鉄軸	砂粒	輪：褐色 胎土：灰褐色	良好	近世
第235102	K37-65 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 露鉢	底部35%	— (6.6) (12.4)cm	ロクロ成型 内 外面鉄軸10本半 位のナリ目が施 される	砂粒、黒色粒	輪：赤褐色 胎土：明褐色	良好	近世
第243101	J37-90 グリッド	土器	かわらけ	口径80% 底部100%	(6.4) 3.3cm 2.0cm	ロクロ成型	砂粒、雲母粒	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	口径部にスス付 着 燈明皿とし て使用 近世
第243102	O05D003	陶器	瀬戸・美濃 香印	口径20% 底部40%	(9.7) 8.0cm 6.8cm	ロクロ成型 切 り廻し後脚を繋 り付け 底部露 胎 体部内外面 鉄軸	砂粒	輪：褐色 胎土：浅黄褐色	良好	近世
第244101	24次調査区 確認トレン チ	陶器	皿	口径20% 底部40%	(9.7) 8.0cm 6.8cm	ロクロ成型 内 外面灰輪	砂粒	輪：灰白色 胎土：灰褐色	良好	近世
第244102	G48SD001	陶器	常滑 片口鉢	口径部片	—	内外面ナデ	砂粒多	内外面にぶい赤褐 色	良好	
第244103	G48SD001	陶器	常滑 片口鉢	底部片	—	内外面ナデ	砂粒多	内外面褐色	良好	内面磨られる
第245101	K34-52 グリッド	陶器	香櫃(ひよ うそく)	100%	5.7cm 4.2cm 4.7cm	ロクロ成型 体 部内外面鉄軸 台は露胎	砂粒多	輪：暗褐色 胎土：灰白色	良好	底部に穿孔 近 世
第245102	K34-52 グリッド	土器	香櫃(ひよ うそく)	100%	4.0cm 2.4cm 1.7cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	近世
第245103	G27SK002	土器	かわらけ	口径70% 底部100%	7.0cm 3.7cm 1.5cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	近世
第245104	G27SK002	土器	かわらけ	口径40% 底部50%	(9.4) 4.3cm 2.3cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：灰褐色 外面：灰褐色	良好	近世
第245105	G27SK002	土器	内耳土器	口径15% 底部10%	(38.6) 5.5cm (36.4)cm	体部内面ナデ 体部外面下端へ ナリ付 口径部 ナデ	砂粒多、黒色 粒、雲母粒	内面：褐色色 外面：明褐色	良好	培胎形 19世紀 代

種別番号	遺跡番号 出土位置	種別	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第25181	M32-93 グリッド	土器	内耳土器	口縁40% 底部40%	(38.5)cm 5.0cm (30.0)cm	体部外面ナデ、 体部内面ヘラナ デ	砂粒多、黒色 粒、雲母粒	内面：褐灰色 外面：にぶい褐色	良好	楕球形 体部に 補修孔 底部内 面に印花文 18 世紀代
第25182	9次調査区 表採	陶器	常滑 壺	胴部片	— — —	内面に自然釉	砂粒多	内面：褐灰色 外面：にぶい黄橙 色	良好	
第25185	2次調査区 確認トレン チ	陶器	古瀬戸 灰輪碗	口縁部片	— — —	内外面に灰釉	砂粒	釉：灰オリーブ 胎土：灰白色	良好	平碗？ 15世紀 代

第13表 中・近世遺物(石製品等)観察表

神田番号	遺構番号 出土位置	類別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 高さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 225 図 1	(I2SM001)	石製品	板碑	月輪 種子 蓮座	破片 塔身部右側遺 存	(145) cm (140) cm 2.7698g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	暗緑灰色	裏面に僅かに鑿痕残る 種子は3尊以上
第 225 図 2	12次調査 区表採	石製品	板碑	□□	破片 山形及び左側 面遺存	(194) cm (122) cm 1.8cm 918.5g	切り出し後 表裏、側面 を磨く	緑泥片岩	緑灰色	沈廊による区画あり 裏面磨かれる 砥石に 転用か
第 225 図 3	12次調査 区表採	石製品	板碑		破片 頂部及び左側 面遺存	(142) cm (66) cm 1.7cm 313.8g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	黄灰色	
第 225 図 4	(I2SM001)	石製品	板碑		破片 右側面遺存	(112) cm (84) cm 1.6cm 444.1g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	オリーブ灰 色	左断面は磨られてお り、砥石に転用か
第 225 図 5	(I2SD003)	石製品	板碑		30% 基部及び塔身 部下端遺存	(27.3) cm (17.2) cm 2.5cm 1.9629g	切り出し後 表及び側面 を磨く	緑泥片岩	オリーブ灰 色	裏面は敲打痕残る 右 側面に打ち欠きあり
第 226 図 9	(I2SM001)	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.6cm 9.4cm 1.2cm 72.3g	常滑大甕型 部片を転用		内外面褐色	頸部片 断面を砥石と して使用
第 226 図 11	(I2SK007)	土製品	陶器 転用砥石		100%	9.2cm 11.1cm 1.1cm 158.4g	瀬戸窯鉢形 部片を転用		内外面暗赤 褐色	断面を砥石として使用 17世紀代
第 227 図 20	(I2SM001)	石製品	砥石	両端及び右側 欠損		8.2cm 2.8cm (1.8) cm 59.3g		砂岩	暗灰黄色	
第 227 図 21	(I2SD003)	石製品	砥石	両端及び右側 欠損		10.1cm (3.4) cm (4.9) cm 236.4g		砂岩	暗灰黄色	
第 227 図 22	(I2SD003)	石製品	砥石	両端を欠損		(4.1) cm 3.8cm 2.8cm 80.8g		凝灰岩	灰黄色	
第 227 図 23	(I2SD003)	石製品	砥石			9.0cm 9.5cm 2.3cm 260.2g		砂岩	灰黄色	
第 227 図 24	(I2SK005)	石製品	砥石	左側面のみ遺 存		(9.0) cm (6.7) cm (3.1) cm 168.2g		凝灰岩	灰黄色	
第 227 図 25	(I2SK007)	石製品	砥石			10.7cm 3.7cm 2.8cm 154.9g		凝灰岩	灰白色	
第 227 図 26	(I2SK007)	石製品	砥石	表面のみ遺存 両端、左右側 欠		(6.0) cm (5.7) cm (2.6) cm 78.2g		砂岩	灰黄褐色	
第 227 図 27	(I2SD003)	石製品	火打石			4.4cm 4.1cm 2.6cm 57.3g		チャート	青黑色	

神国番号	遺構番号 出土位置	類別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 高さ 重量	技法	石材	色調	備考
第227図 28	(I2SK003)	土製品	陶器片円盤		100%	36cm 35cm 10cm 19.2g	皿底部の周縁を打ち欠き加工	瓶底部を転用	浅黄褐色	表面に黒書 近世
第227図 30	(I2SM001)	石製品	石臼 上臼		20%	[168] [144] cm 6.2cm 1,765.6g		花崗岩	にぶい黄褐色	
第227図 31	(I2SK007)	石製品	石臼 上臼		10%	[81] cm [122] cm [15.2] cm 1,635.8g		砂岩	灰黄褐色	側面が磨かれており、砥石に転用か。
第229図1	(I2ISK002)	土製品	陶器 転用砥石		100%	3.8cm 4.6cm 1.2cm 27.0g		瀬戸羅鉢胴部を転用	褐色	断面を砥石として使用 近世
第229図2	21次調査 区確認トレンチ	土製品	輪郭口		10%	(7.5) cm (4.3) cm (0.5) cm 32.3g		砂粒を多く含む粘土	灰黄褐色	表面発泡浮付着 洋の厚さは0.4cm
第229図3	(I2ISK002)	土製品	土製円盤		100%	1.8cm 2.0cm 0.5cm 1.8g	表裏ナデ指紋残る	雲母微量含む粘土	褐色	墓石?近世
第232図9	(I2SD206)	土製品	陶器 転用砥石		100%	11.5cm 12.8cm 2.2cm 288.6g	常滑片口跡を転用		内面:褐色 外面:褐色	断面を砥石として使用
第232図 10	(I2SI147)	石製品	砥石		100%	10.9cm 5.2cm 1.2cm 107.8g		砂岩	灰褐色	
第232図 11	(I2SD001)	石製品	砥石?		100%	6.1cm 5.9cm 3.0cm 146.8g			灰黄褐色	全面磨かれる
第232図 12	(I2N35-01 グリッド)	土製品	土器片円盤		100%	2.8cm 2.8cm 0.8cm 8.8g	羅鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型		軸:褐色 粘土:にぶい黄褐色	近世
第232図 13	(I2N38-85 グリッド)	土製品	土器片円盤		100%	3.3cm 2.9cm 0.8cm 10.0g	羅鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型		軸:暗褐色 粘土:にぶい褐色	近世
第232図 14	3次調査区 表採	土製品	土玉		45%	[14] cm [23] cm 0.9cm 3.8g			にぶい褐色	近世
第243図3	(I2G06K001)	土製品	陶器 転用砥石		100%	8.8cm 4.8cm 1.2cm 65.8g		瀬戸羅鉢を転用	褐灰色	断面を砥石として使用 近世
第243図4	34次調査 区	土製品	陶器 転用砥石		100%	5.5cm 5.2cm 1.8cm 41.6g		瀬戸羅鉢を転用	にぶい褐色	断面を砥石として使用 近世
第243図5	(I25SK005)	鉄製品	鉄鎌	茎部		2.1cm 0.8cm 0.4cm 1.18g				
第244図4	(I2K38-80 グリッド)	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.2cm 4.7cm 1.2cm 56.2g	常滑製胴部を転用		褐灰色	断面を砥石として使用

種別番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 高さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 245 図 6	G7SK001	石製品	砥石			68cm 23cm 18cm 62.7g		凝灰岩	灰褐色	
第 245 図 7	G7SK002	石製品	砥石			5.1cm 35cm 15cm 57.4g		凝灰岩	灰褐色	
第 245 図 8	G7SK002	石製品	砥石			7.0cm 23cm 28cm 79.1g		凝灰岩	にぶい黄褐色	
第 245 図 9	G7SK002	石製品	砥石			5.3cm 34cm 17cm 53.0g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 10	G7SK002	石製品	砥石			8.0cm 29cm 26cm 80.3g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 11	G7SK002	石製品	砥石		下端欠	[4.5] cm 3.4cm 1.2cm 35.0g		凝灰岩	灰黄色	
第 245 図 12	G7SK002	石製品	砥石		下端欠	[6.0] cm 2.7cm 2.0cm 43.3g		凝灰岩	にぶい褐色	
第 245 図 13	G7SK002	石製品	砥石			4.8cm 3.1cm 1.0cm 33.4g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 14	G7SK002	石製品	砥石		下端欠	[4.5] cm 3.5cm 1.7cm 53.5g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 15	G7SK002	土製品	土器片円盤		100%	3.0cm 2.5cm 0.8cm 5.5g	周縁を打ち 欠き成型		灰黄褐色	土器器片を利用
第 245 図 16	G7SK002	土製品	土器片円盤		100%	2.3cm 2.2cm 0.7cm 4.7g	周縁を磨き 成型		褐色	土器器片を利用
第 245 図 17	G7SD001	土製品	土器片円盤		100%	2.2cm 2.2cm 0.8cm 4.1g	周縁を磨き 成型		褐色	
第 245 図 18	G7SD001	土製品	土器片円盤		100%	2.8cm 2.5cm 0.9cm 7.8g	周縁を磨き 成型		にぶい褐色	
第 247 図 1	(15)SD233	石製品	砥石			11.6cm 23cm 3.1cm 186.5g		凝灰岩	灰黄色	
第 247 図 2	(15)SD291	金属製品	釘			[7.2] cm 1.1cm 0.8cm 19.45g				
第 248 図 1	6SD001	土製品	陶器片円盤		100%	2.7cm 2.8cm 1.1cm 9.6g	縁部割部片 の周縁を磨 き成型		軸：暗赤黒 胎土：明褐 灰色	近世

種別番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 高さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 248 図 2	GSD002	金属製 品	煙管（吸 い口）		111%定形	4.2cm（長） 0.8cm（幅） 0.8cm（径） 1.77g				
第 249 図 1	(10)SK222	金属製 品	刀子？		柄	(4.2) cm （長） 0.7cm（幅） 0.4cm（厚） 4.79g				
第 249 図 2	(10)SK222	金属製 品	鉄鏝		莖部	[2.6] cm （長） 0.3cm（幅） 0.3cm（厚） 0.88g				
第 249 図 3	(10)SK222	金属製 品	刀子？		柄	[3.5] cm （長） 0.6cm（幅） 0.3cm（厚） 2.56g				
第 251 図 3	(10)SD221	石製品	火打石			2.7cm 1.4cm 1.3cm 5.9g		石英	灰白色	
第 251 図 6	O33-35 グリッド	土製品	陶器 転用砥石		100%	3.8cm 8.9cm 1.1cm 43.1g	砂粒		釉：暗褐色 胎土：にぶ い黄褐色	瀬戸窯鉢の口唇部を磨 る。16世紀代
第 251 図 7	2次調査区 トレンチ	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.6cm 6.5cm 1.5cm 85.8g	常滑焼割部 片を使用		褐灰色	断面を砥石として使用 近世
第 251 図 8	O33-54 グリッド	土製品	土製円盤		100%	1.8cm 20cm 0.7cm 2.2g	中央に木貫 透の孔		にぶい褐色	

第14表 中・近世銭貨一覧表

種別番号	遺構番号 出土位置	銭種	製造年	書体	計測値 径 内径 厚さ 重量	背文	備考
第2270029 第252001	02SM001	寛永通寶	1626～1659年鑄		24cm 0.7cm 1.4mm 2.86g		古寛永
第2320015 第252002	08SD001	寛永通寶(新寛永)	1697年初鑄		25cm 0.65cm 0.95mm 1.57g		新寛永、一部破損
第2330008 第252003	P41-02グリッド	政和通寶	1111年鑄(北宋)		24cm 0.6cm 1.0mm 3.67g		
第2330009 第252004	P41-02グリッド	熙寧元寶(篆書)	1068年初鑄(北宋)	篆書	24cm 0.7cm 1.12mm 3.30g		
第2330010 第252005	P41-02グリッド	元祐通寶	1086年初鑄(北宋)	篆書	24cm 0.7cm 1.12mm 2.87g		
第2330011 第252006	P41-02グリッド	元祐通寶	1086年初鑄(北宋)	篆書	24cm 0.8cm 0.61mm 1.71g		
第2330012 第252007	P41-02グリッド	皇宋通寶	1038年初鑄(北宋)	真書	24cm 0.8cm 0.9mm 2.41g		
第2330013 第252008	P41-02グリッド	祥符通寶	1009年初鑄(北宋)	真書	24cm 0.7cm 1.2mm 3.37g		
第2430006 第252009	34次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1769年初鑄		28cm 0.8cm 1.1mm 3.56g	11銭	波銭 四文銭
第2450019 第252010	K34-44グリッド	寛永通寶	1697年初鑄		22cm 0.7cm 1.0mm 1.99g		新寛永
第2460001 第252011	031SD001	寛永通寶	1626～1659年鑄		24cm 0.7cm 1.0mm 2.0g		古寛永
第2460002 第252012	031SD001	寛永通寶	1668～1683年鑄		25cm 0.7cm 1.2mm 2.32g	文	新寛永 文銭
第2460003 第252013	031SD001	寛永通寶	1667年初鑄		25cm 0.7cm 1.2mm 2.01g		新寛永
第2460004 第252014	031SD001	寛永通寶	1667年初鑄		24cm 0.7cm 1.22mm 2.04g		新寛永?
第2460005 第252015	31次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1626～1659年鑄		24cm 0.8cm 1.3mm 2.25g		古寛永

押印番号	遺物番号 出土位置	銭種	鑄造年	書体	計測値 径 内径 厚さ 重量	背文	備考
第246106 第2531016	31次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1667年初鑄		24cm 0.8cm 1.0mm 2.20g		新寛永
第246107 第2531017	31次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1667年初鑄		24cm 0.8cm 0.9mm 2.07g		新寛永
第243108 第2531018	31次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1667年初鑄		23cm 0.8cm 1.12mm 2.47g		新寛永
第251104 第2531019	M32-63グリッド	寛永通寶	1667年初鑄		25cm 0.7cm 1.21mm 3.35g		新寛永
第251109 第2531020	3次調査区確認ト レンチ	寛永通寶	1636～1659年鑄		24cm 0.7cm 1.2mm 2.55g		古寛永
第2511010 第2531021	N33-54グリッド	寛永通寶	1667年初鑄		23cm 0.7cm 1.2mm 2.23g		新寛永?
第2511011 第2531022	16次調査区確認ト レンチ	文久永寶	1863年鑄	真文	24cm 0.7cm 1.2mm 3.02g		
第2511012 第2531023	L33-97グリッド	寛永通寶	1667年初鑄		22cm 0.7cm 1.0mm 1.66g		新寛永
第2511013 第2531024	L33-97グリッド	寛永通寶	1636～1659年鑄		23cm 0.7cm 0.7mm 1.51g		古寛永?
第2511014 第2531025	M33-85グリッド	寛永通寶	1667年初鑄		23cm 0.7cm 1.3mm 2.72g		新寛永?
-	G48SD001	不明			0.15g		破片
-	G78SD001	不明			5.13g		鉄銭
-	K34-53グリッド	□永□□			0.51g		破片

第6章 まとめ

第1節 旧石器時代

後平井中通遺跡の調査では、5地点の石器集中地点を検出した。各々石器組成、石器製作技術に相違が認められ、5か所の石器集中地点が異なる文化層に属すると考えられる。ここでは5か所の石器集中地点を文化層に分類し、まとめたい。

第1文化層（Ⅲ層下部）

第2ブロックが該当する。定型的な石器の出土は認められないが、縦長剥片を作出する技術基盤を持つ文化層である。石材は北関東系の黒色頁岩・流紋岩が使用される。

第2文化層（Ⅳ層上部）

第1ブロックが該当する。小型不定形剥片のみ出土しているため、技術基盤を明確に提示できないが、信州系の黒曜石、埼玉県荒川上流のチャートを使用する。

第3文化層（Ⅳ層）

第5ブロックが該当する。縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器を有する。素材剥片の縦長剥片は黒色頁岩の資料にみられるように連続的に作出されたものであり、同一方向に設定された面から連続的に剥片剥離を行っていることが理解できる。黒色安山岩についても同様であり、小型ながら1点出土する石核にその痕跡が認められる。石材は黒色頁岩が主体となり、またホルンフェルス・黒色安山岩を有することから、北関東産の石材を多用する傾向が認められる。また、定型的な石器は認められないが頁岩製の石器を石材組成に含み、北陸方面との繋がりもうかがえる。

第4文化層（Ⅳ層～Ⅵ層）

第4ブロックが該当する。定型的な石器の出土が無く、小型不定形剥片のみ出土するため技術基盤を明確に提示できない。黒色安山岩・チャート・凝灰岩といった北関東産の石材が多用される。礫群を伴い、砂岩・安山岩・チャート・石英斑岩の利根川・荒川流域にみられる石材からも北関東の様相が強く感じられる。

第5文化層（Ⅴ層）

第3ブロックが該当する。定型的な石器は認められないが、黒色安山岩製の剥片・接合資料があり、大型の不定形剥片を作出する技術基盤が明瞭にうかがえる。出土地点のローム層の層序が不明なため、周辺の層序と出土標高を対比させⅤ層としたが、Ⅴ層の中でも上部（Ⅴa層）に所属すると考えられる。拳大の転石を素材とし、面を頻繁に転移し剥片を作出する剥片剥離技術である。石材は黒色安山岩が主体となるが、石材産地の特定には難がある。唯一出土する黒曜石は不純物を多く含み、おそらく高原産のものと考えられる。

以上、各文化層について触れたが、定型的な石器が少ないことから各文化層の定義付けが非常に困難であるため、第2章第2節の記載と重複する説明となった。各文化層の枠を越え指摘できる点は、下総台地のなかでも西端に位置する立地のためか、北関東系の石材が多用される傾向が強いことである。

第2節 縄文時代

1 時期ごとの様相について（第254・255図）

第3章で掲載したが、縄文時代の遺構について改めて述べると、堅穴住居跡もしくは堅穴状遺構54軒、炉跡の可能性が高い焼土遺構1基、土坑123基、柱穴状ピット7基、ピット群4群、陥穴4基である。そして遺物が出土しなかったものの縄文時代の可能性が高いと判断される遺構は、堅穴状遺構3基、土坑101基、ピット47基、ピット群1群を数える。その他包含層からも多量の遺物が出土した。時期も草創期から晩期まで及び、数多くの視点を与える良好な集落遺跡といえる。今後の分析のための視座を提示すべく、当遺跡の縄文時代の様相について簡単ではあるが改めて確認したい。

最も古い時期の遺物としては草創期の柳葉形尖頭器の出土があり、燃糸文土器から沈線文土器・条痕文土器までの出土も認められることから、縄文時代初頭から当地は縄文人の活動の場であったことが推察される。ただし草創期、早期の出土遺物は本書に掲載したものがほぼ全てであり、散漫な状況であると言わざるを得ない。一方でより奥東京湾に近接した思井堀之内遺跡、思井上ノ内遺跡、中屋敷遺跡などでは条痕文期から多数の炉穴が構築されるなど、より積極的な活動状況がうかがえる。当地は海進前には生業の場としてあまり魅力的ではなかったのであろうと推察される。

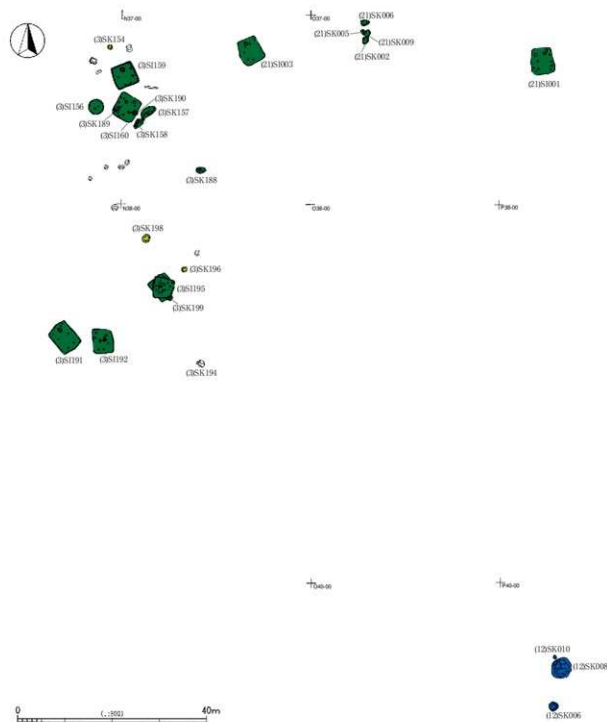
本格的な集落の形成が始まるのは前期中葉の黒浜式期に至ってからである。堅穴住居跡は主として南側台地上に展開する。坂川の低地は遺跡地南側に広がっており、奥東京湾へのアクセスも良好であることから古地されたものと思われる。北側台地を含めても住居跡の数は多いとは言えないが、各住居の使用頻度は高かった状況が見て取れ、拠点集落とは言えないまでも安定した居住空間であったと推測される。出土遺物を見ると、古段階を特徴付けるループ文、組紐文などは少数で、単節縄文もしくは無節縄文によるものが主体となっている。前段階の関山式期には、坂川の対岸にあたる松戸市の幸田貝塚で大規模な集落が形成されるが、周辺には同時期の集落は少ない。黒浜式期以降環境が安定し、居住地が台地の奥まで広がっていった様相が推測される。なお、当遺跡で検出された貝ブロックは1か所を除いて全て黒浜式に属するものである。貝種は大多数が内湾砂底種もしくは内湾泥底種であり、当時の環境を物語っていると言える。

前期後葉の諸磯式期には集落の規模が縮小し、堅穴住居は北側台地のごく一角に形成されるのみとなる。遺物も諸磯a式からb式にかけては比較的安定した出土状況であるが、諸磯c式以降は激減する。周辺でも坂川流域の長崎遺跡の他、三輪野山地区で住居の検出が報告されているが、前期末はほとんど遺構が見られなくなる。

中期も前半はほぼ皆無であるが、後半の加曽利E式になると遺物の出土が認められるようになる。しかしはっきりとした遺構が出現するのは中期末になってからで、北側台地、南側台地とも先端部のごく限定された区域のみ土坑が構築される。堅穴住居はなく、安定した生活の場といった状況はうかがえない。

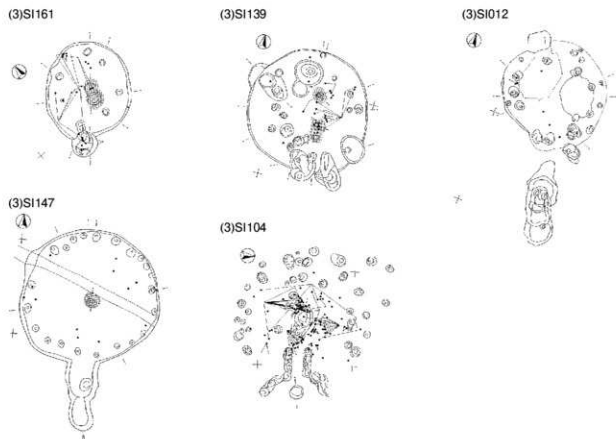
後期初頭になると、ようやく堅穴住居が出現するようになる。北側台地の先端部に3軒の堅穴住居と数基の土坑が構築される。一方で時期は称名寺2式であり、中期から継続して営まれているとは言えない状況である。当該期はより台地奥側に当たる市野谷向山遺跡で中期後半から比較的規模の大きな集落が構築されており、分村のようなものだったのかもしれない。

これが堀之内1式期になると飛躍的に遺構が増加する。第254図で示したとおり、直径約100mの環状集落を構成する。南東部は緩やかな谷状の下り傾斜となっており、遺物を多量に含んだ土が堆積していた。



第 255 図 南朝調査区縄文時代遺構

従ってそこに構築された住居はプランが確認できなかった可能性が強く、実際にはもっと多くの住居が存在したと思われる。遺物の時期から考えると、堀之内 1 式でも明瞭な単位文をもつ古段階のものは少なく、多重沈線と横帯化した文様帯をもつ新段階が圧倒的多数である。一方で堀之内 2 式は縦帯区画をもつ古段階がある程度認められるものの、内文が発達し横帯区画化が進行する新段階はほとんどない。堀之内 1 式新段階から堀之内 2 式古段階の、限定された時期に構築された集落と言える。これだけの遺構が検出



第 256 図 出入口施設を持つ竪穴住居 (S=1/160)

されていないが貝ブロックが全く形成されないのも特徴的で、漁撈の中心は思井上ノ内遺跡に移っていったのかもしれない。

加曽利B式期になると一転して遺構は少なくなる。明瞭なものは土坑1基のみであり、遺物量も激減する。後期中葉から晩期に至る遺物は掲載したもの以外は小破片であり、生活の場として利用された痕跡はほぼなくなる。奥東京湾沿いの三輪野山貝塚などに生活の拠点が移っていったと考えられる。

2 竪穴住居跡について

前期の竪穴住居は円形、楕円形、隅丸方形の各プランが認められるが、時期において大きな差はなく、機能差の可能性が強い。円形プランの(3)SI156・(3)SI179は使用頻度が低く、遺物量も少ないのに対し、隅丸方形プランの住居は床に硬化面が発達し炉の使用頻度も高いなど、明白な違いが認められる。一方で方形プランを呈する(3)SI159は壁際に周溝が巡り、出入口と思われるピットが認められるなど、他の住居とは異なる特徴を示しており、炉の使用頻度は低かったと調査所見で報告されている。特殊な用途の建物だった可能性がある。また、(3)SI160・(3)SI195のように、2軒の切合いであるが主軸を約45度振って重複する住居が存在する。位置から考えて両者無関係とは思われず、建替えの可能性が強いが、いかなる理由で主軸を振ったかは不明である。

後期の竪穴住居において、出入口施設をもつと思われるものを第256図にまとめた。ただし調査において出入口施設とされたものは(3)SI104のみであり、明白に柄鏡形住居と言える(3)SI147さえも、調査時は土

坑との切合いと認識されていた。それ以外の3軒については筆者が可能性ありと判断してまとめたものである。以下、その根拠について少し述べておく。(3)SI161は円形プランの竪穴住居に土坑状の出入り口施設がつくとと思われるもので、当遺跡では唯一、称名寺2式に属する。炉の長軸方向から出入り口に相当するものと考えた。当該期の柄鏡形住居についてはまだ不明点が多いが、可能性の一つとして提示しておく。(3)SI139は円形プランに2基の土坑状出入り口施設がつくとと思われるもので、これも炉の長軸方向とほぼ一致する。(3)SI104との形態上のつながりをうかがわせるものである。(3)SI102は円形プランに柄状の出入口施設がつくとと思われるものである。本来ならつながっていたものが、床面に近いレベルまで削平されてしまったため分離された状態で検出されたと思われる。竪穴本体側にはこの柄状の施設はさむ位置にピットが2基構築されており、柄鏡形住居であることは間違いのないと思われる。(3)SI147は円形プランに柄状の出入口施設がつくもので、先の(3)SI102と系統を同じくする柄鏡形住居と判断される。(3)SI104は円形もしくはD字形のプランにハの字状の出入口施設がつくもので、この形態の住居は後期中葉以降も県内各地の集落で構築されている。以上、調査所見に反する形となったが、思い違いや事実誤認があるかもしれない。ご批判賜れば幸いである。

3 出土遺物について

遺物については多くの問題を孕んでいると考えるが、残念ながら詳しく述べることはここではできない。後期堀之内式の遺物について少し述べておく。前項で大多数が堀之内1式新段階に属すると考えられると述べたが、主体となるのは頭部にびれを持ち口縁部と胴部の文様帯が区画されるものである。東関東の堀之内式に主体的な器種であり、東北地方の綱取式の影響によることはすでに多く述べられている。この点については当遺跡でも変わりなく、称名寺式に由来する沈線を主体とする西関東系の土器が少数であるのも同様である。一方で日本海側由来の三十稲場式や南三十稲場式に影響を受けたと思われる資料も認められる。第112図168などは良好な例であるが、文様は在地のものながら同様の器形をもつ土器も散見される。そして当遺跡で特徴的なのは注口土器の多さで、遺構外出土土器については分類している最中にその点に気づき、意識して抽出するよう努めたが、遺構出土分については破片資料など抽出できていないものがあるものと思われる。遺構外出土土器種目の最後を注口土器でまとめたのは数の多さを強調する意図があったためだが、こうした状況も三十稲場式土器文化圏の影響かもしれない。ただし、そもそも一集落遺跡あたりどれほどの量の注口土器が存在するののかという点について不明なため、主観的な物言いに終始している可能性はある。この点についてもご批判賜れば幸いである。

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡4軒、土坑1基、埋設土器1基という内容で、遺跡地の面積を考慮すると極めて散漫な状況である。この時代の当遺跡の性格を考えるには材料に乏しいが、周辺遺跡の成果と照らし合わせて少しだけまとめておきたい。

各遺構の時期をみると、埋設土器(7)SX003が9世紀中葉、竪穴住居跡(26)SI001・002、(34)SI001が9世紀末～10世紀初頭と判断される。竪穴住居跡(6)SI030と土坑(3)SK193は判断できない。このうち最初に出現する遺構は埋設土器(7)SX003である。埋設された鉢の傍らから坏が出土しており、状況を見る限り蔵骨器である可能性が高い。おそらく坏は本来2点存在し、1点に火葬骨を取ってもう1点を蓋とし、土中に

埋納した上で外側を覆うように鉢を逆位で埋設したものであろう。この鉢は日常生活で使われるものでなく、専用器として製作された可能性が高い。遺跡地内には同時期の住居跡は皆無であり、被葬者が居住していた集落は外にあることは明白である。その候補としては西側に隣接する前平井遺跡がまず挙げられるが、この遺跡は現在整理作業中であり、現段階で判断することはできない。ただ、官道に面していたと思われる大規模な集落である前平井遺跡に対し、この埋設土器は集落から外れてかなり奥まった場所に位置している。1基のみの検出ではあるが、当地が墓塚となっていた可能性は指摘できよう。

9世紀末～10世紀初頭には竪穴住居が3軒出現する。そのうち西端部に位置する(34)SI001は、実質的には前平井集落の一部とっていいだろう。北東部に位置する(26)SI001・002の2軒については、遺構の構造や出土遺物などに特異な点は認められず、これだけで性格を判断するのは難しい。周辺遺跡の成果をみると、小支谷を隔てて南側に位置する前平井堀米遺跡では、7世紀後葉に竪穴住居が出現し8世紀代にピークを迎えるが、9世紀に入ると急速に規模を縮小し9世紀後葉には居住の痕跡がなくなる。坂川に面した南側の台地上に位置する思井上ノ内遺跡では、8世紀前半に竪穴住居や掘立柱建物が出現し、9世紀代にピークを迎えるが、9世紀末になると急速に遺構が消滅していく。台地南端部の思井堀ノ内遺跡では、8世紀後半に竪穴住居や掘立柱建物が出現し、9世紀前半にピークを迎えるが、9世紀後半から規模を縮小し、10世紀初頭になると遺構もなくなる。これらの遺跡の動向をみると、古墳時代後期に前平井堀米において村落の形成が始まり、8世紀になると思井上ノ内、次いで思井堀ノ内において、掘立柱建物を伴う規格性の強い村落が誕生する。同時期の前平井堀米には掘立柱建物は存在せず、両者の性格は異なっていたと考えられる。第1章でも述べたが、葛飾郡桑原郷の中核に近いのは思井上ノ内・思井堀ノ内、周縁に当たるのが前平井堀米という位置付けかもしれない。それらの集落も早くは9世紀前半から、遅くとも10世紀初頭で消滅していく。社会の変容と人口の流動を示している。そうした中で、後平井中通において出現する9世紀末から10世紀初頭の住居は、こうした変容・流動の過程で生まれた居住の一形態と理解されよう。ただし、中心的な集落である前平井遺跡の成果によっては、見解が変わることも予想される。あくまで現段階での知見に即した理解であることをお断りしておく。

第4節 中・近世

検出された遺構のうち中世の所産と思われるのは、土壘(12)SX002・(21)SX001、塚(12)SM001、台地整形(25)SX011、土坑(12)SK004・(12)SK009・(25)SK008、地下式坑(25)SK001・(25)SK003・(25)SK007、井戸(12)SE011、溝(21)SD001・(21)SD002・(12)SD003である。この他の土坑、溝状遺構は近世の所産と考えられる。

土壘は2基調査したが、(21)SX001は溝を掘り、その掘削土を利用し築いたのに対し、(12)SX002は溝を掘らずに築いており、築造方法に違いがある。同時に築かれたものではなく、時間差があるものと思われる。ただ、大きな時間差は考えられず、どちらも15～16世紀のものであろう。(21)SX001と(12)SX002に挟まれた地区を土壘内部と仮定すると、内部には明瞭な中世遺構は認められない。後述する出土遺物と併せて考えると、屋敷や館に伴うものではなく別の用途を考えるべきであろう。

溝状遺構の(21)SD001、(21)SD002は土壘に伴うものと考えられる。(12)SD003は(12)SX002を築いた後に作られているが、(12)SX002を意識しているのは間違いなく、(12)SX002とともに機能したと思われる。

塚(12)SM001は、土壘(12)SX002の一部を利用して築かれたものと思われる。(12)SX002の裾を壊して掘

られた(12)SD003はこの塚を壊していないので、溝が掘られた後に築かれたものであろう。

土坑(12)SK004は16世紀中頃の内耳土器が出土しており、中世の所産と考えられるが、その性格は不明である。(12)SK009も出土遺物から中世の所産と思われるが、性格は不明である。(25)SK008からは時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の方形竪穴遺構になるものと思われる。

地下式坑は(25)SK001・(25)SK003・(25)SK007の3基が検出された。時期を特定できる遺物は出土していないが、中世に築かれたものであろう。これらは地下室、竪坑の形態は同じだが、竪坑の掘り方に違いが見られる。また(25)SK003は底面に焼土や炭化物が堆積し、遺構の堆積状況も自然に埋没した状況でなく、意図的に埋め戻した様子がうかがえる。また(25)SK001は廃絶後、時間を置かず天井が崩落しており、人為的に壊された可能性も考えられる。これに対して(25)SK007は廃絶後、ある程度時間が経過してから天井部が崩落しており、しばらく放置されていたようで、構築や廃絶の方法にも変化が見られる。

ピット群(25)SX001は、台地整形(25)SX011の北側で検出された。建物を構成する柱穴と思われるが、建物として復元することはできなかった。

台地整形(25)SX011の周辺では、土坑、ピット群、地下式坑が検出されている。周辺の遺構からは遺物は出土していないが、ピット群(25)SX001や地下式坑(25)SK007、方形竪穴遺構(25)SK008などが関連し形作っている中世遺構群であろう。

溝状遺構は(21)SD001・(21)SD002・(12)SD003以外は近世の所産と思われる。近世の溝の方向等に規則性は認められず、その性格は不明であるが、L字に曲がり何らかの区画を意図したと思われるものも見られる。

土坑に関しても前述のもの以外は近世の所産と考えるが、その性格は不明である。

調査区遺構群(31)SB001は明確な建物跡に復元できなかったが、ピット内から寛永通寶が出土しており、近世の建物跡であろう。多くのピットが見られるので、建て替え或いは補修が行われたのであろう。

次に遺物を見ていきたい。中・近世の遺物として、土器、陶磁器、石製品、土製品、鉄製品が出土した。古いものでは12世紀代の渾美甕や、14世紀代の常滑片口鉢が出土しているが、他は15世紀代から近世にかけてのものが主体を占める。中世の遺物では15世紀後半から、16世紀中頃の遺物が多いが、16世紀後半のものも見られる。また遺物の組成も日常雑器が主体で、貿易陶磁等の良品や特殊な器種は認められない。検出された遺物や遺構から見ると、15世紀後半以降に築かれた村落と考えるのが妥当であろう。

報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいせうぶんかざいちゅうさほうこくしよ							
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市後平井中通遺跡							
巻次	6							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	安井健一 落合章雄 齋藤修佑							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2021年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
後平井中通	流山市後平井 字中通	12220	032	35度 51分 16秒	139度 55分 08秒	19980216 ～20161104	77.412㎡	土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
後平井中通	包蔵地	旧石器	石器集中地点 5か所		ナイフ形石器、槍先形尖頭器、剥片、RF、UF、石核、接合資料、礫			
	集落跡	縄文	竪穴住居跡 57軒 焼土遺構 1基 土坑・ピット 278基 ビット群 5群 陥穴 4基 貝ブロック 5地点		縄文土器(早期～晩期)、縄文時代石器(石鏃、石匙、石錐、削器、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿)、土製品(土偶、ミニチュア土器、土器片鏃、土器片円盤)、石製品(垂飾)			
	包蔵地	弥生			弥生土器(後期)			
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 4軒 土坑 1基 埋設土器 1基		土師器、須恵器、支脚			
	集落跡	中・近世	台地整形区画 1基 地下式坑 3基 方形竪穴状遺構 1基 土坑・ピット 33基 井戸 1基 溝状遺構 32条 塚 1基 土塁 3基 建物跡 1棟 ビット群 1箇所		陶磁器、カワラケ、焙烙、土製品(土製円盤・転用砥石)、石製品(板碑、石臼、瓦石、火打ち石)、金属製品(刀子・煙管・釘・鋤)、銭貨			
要約	<p>旧石器時代の遺物は5文化層から検出され、定型的な石器は乏しいものの、北関東産の石材を多用する傾向が認められた。縄文時代の遺構は前期中葉、後葉、後期初頭、前葉の4時期に分かれる。前期中葉は南側台地を中心に小規模な集落が形成される。前期後葉と後期初頭は小規模な遺構群が局所的に構築されるが、後期前葉になると環状集落が展開する。奈良・平安時代の遺構はごく散漫な分布である。中・近世の遺構は15～16世紀を中心とする塚、土塁、台地区画整形を中心とする遺構群が検出された。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第37集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書6

－流山市後平井中通遺跡－

令和3年3月25日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町1-1
印刷 三陽メディア株式会社
千葉県中央区浜野町1397
